

# 黒の魔剣

暁 焯

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

平和なはぐれたちの島に一人の青年が召喚される。

彼は未知の世界で謎の睡魔に襲われつつも、次第に島の住民たちと心を通わせていく。

やがて島に訪れたのは海賊一家と一組の師弟。

彼らと青年との出会いから物語は加速し始める。

過去の負の遺産に翻弄される青年たち。

やがて澱みは大きくなり、世界へと牙をむく。

彼らは世界を守るため、過去へと向き合う!!

※自サイト閉鎖に伴い転載

## 目次

始まりは突然に	1
静かな攻防（笑）	12
初めまして！そしてお休みなさい……zzz	19
初めての出会い	26
錯綜する想い	34
海賊との遭遇	45
夜会話くアテイく	53
昼会話くマルルウく	59
日常話く風雷の郷く	61
そして彼は遂に出会う	65
開かれる扉	82
変化	92
結ばれる絆	102
なわばりww	113
己の居場所	123
戦闘開始	130
明暗	141
振るわれた刃	151
日常話くアキラ・ミユく	165
初めてのお休み	179
乱れた振り子	190
蠢き出す過去	200
日常話く青空相談室く	209
それぞれの悩み	221

呼びかけ	231
一難去ってまた一難	244
収束と変化と	252
告げられた言葉	267
動き出した影	279
虐殺	293
残されたモノ	302
魔剣	312
告白	329
無色の派閥	344
暴威	359
閑話くヴィサイアスく	369
喚び声	374
イスラ	391
救い	398
再び立ち上がる	410
撤退と終戦	424
閑話くパツフェルく	442
戦うのは	455
ラストバトル	464
終わりは穏かに	469

## 始まりは突然に

その日、空は青く晴れ渡り、雲は緩やかに流れていた。

風は穏やかで、日差しの暖かな日だった。

島はいつものように平和そのものだった。

誰もが平穏を享受していた。

今まで続いてきた日常がこれからも続いていくと、何の疑問も無く信じていた。

彼が喚ばれるその時までには……。

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼▼△

「シマシマさくん、朝なのですよ。起きて下さる、シマシマさくん。」

今日も気持ちいい晴れですよ。」

爽やかな朝に可愛らしい声が木霊する。

ここは森を住処とするメイトルパのはぐれ達が暮らす集落、ユクレス村。

先程聞こえた可愛らしい声の主は、花の妖精マルルウ。

他の木より一回り大きな木の洞うろに向かって話しかけている。

軽やかに飛びながらかけられるその呼び声に、洞の中から男の声が応えが返ってくる。

「……ふああ。そーか、そりや良かったな。だから……寝かせてくれ。」

マルルウの呼び掛けに面倒くさそうに答えたのは、この村の護人もりびと、シマシマさんことヤツア。

彼は寢床に転がったまま返事を返すと、ごろりと寝返りを打った。

その様子からは起きる気が全く感じられない。

慌てたマルルウは洞の中まで入り込むとヤツファアの周りを飛び回る。

「ダ・ダメですよ！お仕事はどうするんですか!?起きてください、シマシマさくん。」

再び眠ろうとするヤツファアを起こそうと、マルルウはヤツファアの髪を引っ張ったり、

お腹の上で跳ねたりと大忙しだ。

騒がしいこの光景も、この村ではいつもの朝の始まりである。



水晶が朝日を反射して、辺りを煌びやかに照らす場所。

大小さまざまな水晶に囲まれたここは、サプレスのはぐれ達の暮らす集落、狭間の領域。

夜は賑やかなこの集落も、朝になるとその住人達はどこかへ姿を消して静まり返る。

そんな中、広場の一角で大きな全身鎧と天使の青年が話をしている。

「お疲れ様です、フェアリエル様。少しお休み下さい。」

青年が声をかけると、全身鎧は光を発して姿を消し、その場所には儂い少女が一人残されていた。

その少女は全身鎧を着ていたにしてはあまりに小柄で、宙に浮いていている点を除けば普通の少女のように見える。

彼女が朗らかに微笑んで青年に返事を返したことから、

やはり先程フェアリエルと呼ばれた全身鎧はこの少女なのだろう。

「ありがとう、フレイズ。でも、村の周りを見回っただけだから、たいして疲れてないよ?」

誰かに頼まれた訳ではないが、フェアリエルは毎夜狭間の領域周辺を

見回りをしていた。

長く続けていれば苦も無くできるようになってくる。

しかしファリエルの応えに、青年、フレイズは声を厳しくする。

「いけません！我々は体を維持するだけでも魔力を消費しているのですよ。」

休める時に休まずにいて、肝心な時に動けなかったらどうするのです!?!」

フレイズの叱咤に、一瞬言い返そうとしたファリエルだが、すぐに俯き謝る。

「……うん、そうだね。フレイズの言う通りだね。ごめんなさい。」

それを聞いてフレイズは厳しい顔を緩め、優しい声で応える。

「さあ、ファリエル様。どうぞお休み下さい。その間は私が見回りを致しますので。」

ファリエルは先程の悲しげな表情を消し、明るい笑顔を見せる。

「うん、ありがとうフレイズ。それじゃ、お休みなさい。」

「はい。お休み下さい。」

互いを思いやる言葉を交わし、見回りを引き継ぐ。

これが、この集落ではいつもの平和な朝。



広い水田と、和風の家屋が点在するここは、シルターンのはぐれ達  
が住む集落、風雷の郷。

中でも一際大きい屋敷で、今日も賑やかな朝が始まっている。

その中心にいるのは、やんちゃ盛り少年の少年。

そしてその少年を取り巻くように、少年の若き母親と、青年が一人。

「これ、スバル！箸の持ち方はそうではないと言うに。」

母に叱られ、スバルと呼ばれた少年が頬を膨らませて応える。

「こっちの方が、おいらには持ちやすいんだよ。」

「そういう問題ではない！キュウマ、そなたからも言うてやれ。」

少年の母にキュウマと呼ばれた青年が、厳しい表情を浮かべながらスバルに口を開く。

「ミスミ様の言う通りです。スバル様はいずれこの郷を率いていかれる身。」

そのような御方が箸も禄に扱えぬとあれば、周りに示しがつきません。」

キュウマのお説教にもめげず、スバルはご飯を食べながら言い返す。

「ふん！キュウマはいつだって母上の味方ばかりじゃないか！」

「なっ!?……そ・そんな事は！」

スバルの指摘に、激しく動揺するキュウマ。

それを見てスバルは悪戯な笑みを浮かべ、追い討ちをかけた。

「あゝ、キュウマ赤くなつてら。」

「ス・スバル様！」

「ごちそうさま！それじゃ、おいら遊んでくるから！」

キュウマが怯んでいる隙に、スバルはご飯を食べ終え、走り去ってしまう。

後に残されたのは、呆気にとられたキュウマと呆れ顔のミスミ。

そしてミスミが溜息とともに一言呟いた。

「やれやれ……。スバルにしてやられるようでは、まだまだじゃな。」

これもまた、ここではいつもの朝。



全てが鋼で出来ている、ロレイラルの機械達が暮らす集落、ラトリクス。

機械達は与えられた命令に従い、誰も居なくなってしまった街の



中、

いつまでも壊れた所を捜しては修理をしている。

そんな中、この島でたった一人の融機人<sup>ベイガー</sup>と、たった一体のアンドロイドの朝が始まる。

「おはようございませす、アルデイラ様。お飲物をお持ちしました。」

少女の姿をしたアンドロイドが、融機人、アルデイラと呼ばれた方に話しかける。

「ああ、ありがとうクノン。おはよう。」

アルデイラは飲物を受け取り、少女、クノンにお礼と挨拶を返す。

「……アルデイラ様。若干の体温の上昇と、眼球の充血が見られます。

また——徹夜なさいましたね？」

クノンが抑揚の少ない声で、アルデイラに尋ねる。

ビクリと肩を震わせ、目を泳がせるアルデイラ。

「……あ・あのね……えくと……そう！

どうしても昨日の内におかないとイケナイ事が——」

「ア・ル・デイ・ラ・様。」

言い訳しようとするアルデイラに、クノンが一言ずつ区切るようにして名前を呼ぶ。

クノンの声の中に、滅多に表されない感情が込められていた事で、アルデイラも観念したように頭を下げる。

「うっ……ごめんなさい。」

それで許したのか、クノンはいつもの抑揚の少ない声で注意を促す。

「ただでさえ、融機人は抗体を持たず、体調を崩しやすいのですから……。」

もつと御自分の事をお考え下さい。」

最後にまた、少しだけ心の籠められた音色で告げ、クノンは黙ってアルデイラを見つめる。

その感情に気付いたのか、アルデイラは真剣な顔でクノンに応える。

「ええ、解っているわ。心配をかけてごめんなさいね、クノン。」

アルデイラが真剣に聞いてくれた事を感じ、クノンの顔に少し、ほんの少し笑顔が浮かぶ。

これもまた、ここではいつもの朝の風景。



それぞれの村で、いつものように穏やかな朝が訪れていた。しかし異変はそんな日常の中、突然に舞い降りるもの。

それはここ、はぐれ者たちの島でも変わらない。

最初に異変に気付いたのは、果たしてどの護人だったのか。

あるいは皆が同時に気づいたのかもしれない。

しかし今、そんな事に意味は無く、また異常の方もそんな事は気にも留めはしない。



風が木の葉を揺らし、駆け抜けていく。

その風にもいつもと違う何かを感じ取ったのか、ヤツファアが空を仰ぎ見る。

「……何だ？これは……「門」の方か！」

言うが早いか駆け出すヤツファアの後を、小さな影が追いかけてくる。

「どこに行くのですか、シマシマさーん？」

声を掛けながら、走る自分の周りを飛び回るマルルウに、珍しくヤツファアは厳しく言い捨てる。

「付いて来るんじゃないねえ！お前は村で留守番してろ！」

いつもと様子の違うヤツファアに、マルルウはビクリと体を震わせ

る。

しかし怯みつつも、彼女は自分の役目である“ヤツファの見張り”を果たそうと食い下がる。

「怖い顔しても駄目ですよ！ちゃんとお仕事してください！」

「だから！その“お仕事”をしに行くんだよ！」

木々を掻き分け、走る速度を上げつつ言い返すヤツファに、

マルルウは必死で付いて行きながらも言い募る。

「そんな事言つて、またサボルつもりですね〜！」

「ちっ！なら勝手にしやがれ！」

さすがに相手をしている余裕がなくなったのか、

ヤツファはそう言い捨てると更にスピードを上げた。

異常に対して少しでも早く対処する為に。

そしてマルルウを危険から遠ざける為に。

「ああ！待ってくださいよ〜。」

既に風は木の葉を揺らすだけに止まらず、木々を吹き倒すほどに激しくなり、

朝の快晴と打って変わって空は暗雲に包まれている。



同時刻、見回りを終えたフレイズがフェアエルに報告している時。

「特に異常はありませんでした、フェアエル様。」

「ご苦労様、フレイ、ズ……!?!」

会話の途中で不自然に言葉が途切れる。

しかし2人ともそんな事は気にも留めず、辺りを鋭く見渡している。

何かを探しているのではなく、何かを必死に感じ取ろうとしているようだ。

先に口を開いたのはフレイズ。

「フェアリエル様……これは？」

「ええ、マナが何処かに集まっている。でも一体どうして……？」

2人が感じ取ったのはマナの流れ。

最初こそは霊界の住人だからこそ気付いたような微弱なものだったが、

今や島中のマナが一点を指し凄まじい勢いで集まっていた。

「どうやら『門』の方へと流れているようですね。」

「とにかく行ってみましょう。」

急激なマナの流れによるものなのか、

いつもは淡い光を発している紫水晶が不気味な明滅を繰り返していた。



同じく風雷の郷、鬼の御殿。

キュウマが帰ってきたスバルに剣の型を中庭で教え、ミスミが縁側でそれを眺めていた時。

「えい！えい！えい！」

「スバル様、もう少し肩の力を抜いて——これは!？」

指導の途中で急に辺りを警戒しだしたキュウマに、スバルがどうしたのかと視線を向ける。

そこにはいつも以上に顔を厳しくして辺りを見渡しているキュウマと、

いつの間にか槍を携え並び立つミスミの姿があった。

「妖気……じゃな。」

「御意。おそらく『門』の辺りかと。」

傍に立つミスミの言葉にキュウマは片膝を付き、臣下の礼をとって答える。

いつもと様子の違う2人に、スバルは躊躇いがちに声を掛けた。

「は・母上?・キュウマ?」

その小さい声に硬い声が返ってくる。

「スバル、そなたは屋敷に居れ。行くぞキュウマ!」

言うなり疾風のように駆け出してしまい、

制止の声を掛けることも出来ず慌ててキュウマが追いかける。

「くっ!お待ちください、ミスミ様!」

あっという間に影も見えなくなってしまった2人に、

置いていかれる形になったスバルの眩きが零れる。

「ちえっ……なんだよ。」

△▼△△▼△△▼△△▼△▼△

そして最後にラトリクスの中央管制施設。

アルデイラがディスプレイの前で集落の機械群の様子をチェック

していると、

少し急いだようにクノンが部屋に入ってきた。

「あら、どうしたのクノン?」

「アルデイラ様、これをご覧下さい。」

そういうとクノンはコンソールの一部を素早く操作し、グラフや数字を表示する。

「これは……!?!」

「この島の至る所で水脈の乱れ・地盤の揺れ・異常な風速・気温の上昇低下などが見られます。」

原因は現在不明。」

ディスプレイの数値を見て驚くアルデイラに、クノンが概略を説明する。

「どうやら島の各所で異常が観測されているようだ。」

「原因不明?……一体どうして?」

眩きを漏らしながらもコンソールを叩き、状況を詳しく調べ始める

アルテイラ。

その横でクノンもコンソールに指を走らせる。

「アルテイラ様、原因は依然不明ですが、この異常現象の中心地が判明いたしました。」

「門」の周辺です。」

「何ですって!?!行くわよ、クノン!」

「門」という言葉に弾かれるように走り出すアルテイラ。

そしてクノンも、表情こそ何も浮かべていなかったが、

それでもどこか焦った様にその後を追った。



かくして全ての集落の護人とそのパートナーが「門」へと集まる事となった。

そして幾ばくかの後、全員がほとんど同時に「門」へと辿り着いた。

それこそ計られたように……。

目の前に広がる光景に、全員が一表情《かお》を強張らせる。

そこに在ったのは、空に渦巻く暗雲と、揺れる大地、

異様な妖気を放ちながら周囲のマナを無尽蔵に吸い込む「喚起の門」。

今や「喚起の門」はその身に光の水面を現し、辺りの様子と呼応するように波打たせている。

誰もが今まで見たことも無い「喚起の門」の様相に息を呑み、何が呼ばれるのかと固唾を呑んで見守る中、光の水面に変化が生じた。

それまで激しく波打っていた水面が、まるで鏡のように静まり返り、一際輝きを増す。

そして水面から何かを掴む様に出てきたのは人の腕、  
次いで銀の髪を靡かせた頭が、  
黒いパーカーに包まれた体が、  
最後に、ジーンズと丈夫そうなブーツを履いた2本の足が、  
光る水面から吐き出される。

皆が啞然と“彼”を見守る中、その体は光に包まれ、羽毛のように  
ゆつくりと地面へと降りてきた。

……気が付いた時には既に雲も風も揺れも無く、辺りはいつも通り  
静まり返っていた。

まるで夢でも見ていたかのような変わり様で、護人たちは辺りを見  
回すが、

いつもと違うのは目の前に横たわる“彼”だけ。

このままにしておく事も出来ず、用心しながら“彼”の周りに集ま  
る護人たち。

ヤツファが皆を代表するように“彼”に声を掛ける。

「おい、大丈夫か兄ちゃん？」

「……………」

“彼”からの返事は無く、その瞼は閉ざされたままだ。

次いでキュウマが声を掛けようとした時、“彼”に動きがあった。  
瞼を震わせ、口から吐息を漏らす。

そして、ゆつくりと開かれた瞼から覗くのは深い蒼。

皆が注目する中、声が漏れる。

「——ねむい……………」

皆の緊張をぶち壊し、“彼”は再び目を閉じ眠りに落ちた。

後に残されたのは、間の抜けた顔を見合わせる護人たちばかり。

まるで彼らを笑うように涼やかな風が走りぬけた。

## 静かな攻防（笑）

どこまでも青く澄み渡る空の下、穏やかな風が吹き抜ける森で、喚起の門を前にして護人たちが間の抜けた顔でお互いを見つめていた。

目の前にはいつも通りの喚起の門。

目の下には喚ばれたばかりの横たえられた青年。

偶にあるように、ただ召喚されただけなら問題なかった。

知性があれば迎え入れ、そうでなければ自然に野生へと帰った。

しかし、今回の召喚は異常の一言に尽きる。

どんな召喚をすれば、あのような事態が起きると言うのか。

皆が何を言えればいいのか分からず口を閉ざしていたが、

やがてヤツファが溜息の様に一言声を出す。

「……おい、どうするよ?」

「どうするって言われても、ね……。」

当然誰も問い掛けに答える事は出来ず、その心情をアルデイラが代弁する。

声には力が無く、途方にくれているのがありありと分かった。

そこへ忍びとしての自制心でも働いたのか、キュウマが提案を出す。

「とりあえず、現状の把握から行いませんか?」

「……ソウダナ。」

ファルゼンの言葉と共に他の者が肯くのを見て、キュウマが切り出す。

「まず、我々が何故都合良くここに揃っているかですが……おそらく同じような理由でしょう。」

「そうね、みんな何かしらの異変を感知した、という処でしょうね。」

キュウマの後をアルデイラが続け、ヤツファが引き取る。



「お次はあのニイちゃんか、どこの世界から召喚されたかだが……まあ、亜人ではなさそうだな。」

「……融機人、でもないわね。」

「あすとらるぼでいデモ、ナイ。」

「シルターンの人間にしては着ている物が妙ですし……。」

四人が四人とも否定した為、場が一瞬沈黙に包まれるが、不意に四人の声が揃う。

「『名も無き世界』」

その一言の後、再び沈黙が場を支配する。

他の四つの世界と違い、名も無き世界はリインバウムとの関わりが無いに等しい。

その為、名も無き世界の人間は『召喚』という概念を知らない。

いきなり自分は召喚されたのだと言われても納得できず、

ここが別の世界だという事も、そう簡単には受け入れられない。

それが『還れない』となれば、尚更だろう。

幾度となく繰り返される召喚で、ヒトは皆、悲嘆に暮れた。

突然の愛しい人達との別れに。

思いつの残る故郷との別れに。

召喚のある四つの世界ならば、『はぐれ』になってしまったのだといくらかの理解はできた。

時間はかかっても四つの集落のいずれかに落ち着いていた。

しかし名も無き世界の者には分からない。

現実に召喚なんて事が起きる事が理解できない。

はぐれという存在を知らない。

還れないという事が納得できない。

結果的に、名も無き世界からの召喚者は悲しい結末を迎えることが多い。

その為、護人達の雰囲気は重い物になる。

やがてヤツファアが気を取り直したように軽く話を振る。

「で、どこの集落で引き取るんだ？」

その言葉に敏感に反応したのは、今まで会話に加わっていなかった護人のパートナーたち四人。

互いの反応を見て、同じ事を考えているのが判ったのか、目線で牽制し合う。

その一瞬の拮抗を崩しにかかったのは鬼姫ミスミ。

「オホンー……この者は風雷の郷で預かろう。」

当然それに反発したのは残りの三人。

「だめですよ！ねむねむさんは、マルルウと一緒に行くのです！」

「そうです！ユクレスに行くかどうかはともかく、私も反対です！」

「拒否いたします。」

マルルウ、フレイズ、果てはクノンにまで強硬に反対され、

流星のミスミもたじろいて一歩引いてしまう。

そこへ、パートナーたちのあまりの気合の入り方に固まっていた護人たちが我に返り、

口を挟む。

\*\*\*

「お・おい、マルルウ？」

「シマシマさんは黙ってて下さいなのです！」

「お・おう……。」

ヤツファはマルルウのかつてない迫力に押され

\*\*\*

「ドウシタノダ、ふれいず？」

「どうもこうも在りませんよ、ファルゼンさま。彼の魂の輝きを見て

下さいー！

……ああ、何て美しいんだ！」

「……。」

ファルゼンはフレイズの暴走っぷりについて行けず

\*\*\*

「ミ・ミスミさま……どうされたのです？」

「いや、その……何じゃ……。」

「……？」

キュウマは珍しく狼狽えるミスミに首を傾げ

\*\*\*

「貴方までどうしたの、クノン？」

「………分かりません。」

「………ふう。」

アルデイラはクノンの要領を得ない回答に、溜息を吐く事しかできない。



一向に進展しないパートナー同士の会話で、風雷組に変化が訪れる。

「そ・そうじゃ！郷にはご老体が居られるではないか。」

名案とばかりに喜ぶミスミに尚も首を傾げつつ、キュウマも相づちを打つ。

「そう言われれば、あの方も『名も無き世界』から喚ばれたのでしたね。」

キュウマの言葉を受け、俄然ミスミが勢いづく。

「うむ、その通りじゃ！であれば、同郷の者が居った方がこの者も安心というものじゃ。」

そう言い放つと、周りの者をぐるりと眺めてからミスミが宣言する。

「そういう訳で、この者は風雷の郷で預かる事とする。よいな？」

勝ったとばかりに満面の笑顔で宣言するミスミに、またもクノンが食い下がる。

「賛成しかねます。」

「な・何故じゃ!？」

一番あり得そうにない者からの反対に、ミスミが問い返す。

「……この方は現在、原因不明の昏睡状態にあります。」

万一の為に、設備の整っているラトリクスで検査する必要があると、判断します。」

理由を述べるのに少し間が空いたが、クノンの説明に反論する点も見当たらず、全員が沈黙する。

それを確認し、クノンは青年をラトリクスに運ぶ為抱き上げようとするが、

ミスミが間に入り邪魔をする。

「そなたには重かるう？ わらわがラトリクスまで運ぶでしょう。」

そう言つて青年に近づくのを、今度はフレイズが邪魔をする。

「レディにそんな事をさせる訳にはいきません。ここは私が。」

そこにマルルウが飛んでくるが――

「マルルウが……」

「『あなた（そなた）には無理です（じゃ）！』」

「あう……。」

三人に切り捨てられてしまう。

そして尚も言い募ろうとしていたフレイズとミスミを尻目に、

クノンが青年を抱き上げ、二人に向かって淡々と述べる。

「私は従軍看護用フラーゼンです。成年男性二人までなら何の問題もなく運べます。」

クノンが運べるのであれば、他の者が運ぶのはかえって二度手間になつてしまう。

二人は悔しそうな表情を浮かべながらも、渋々引き下がった。

そこでクノンは、アルデイラにラトリクスに帰る事を提案する。  
「アルデイラ様、検査は早急に執り行う必要があります。」  
「え……ああ、そうね。とりあえずこの人はラトリクスで預かるわ。  
目が覚めたらまた連絡するから。それじゃ。」  
一瞬、呆然としたアルデイラだったが、  
直ぐに気を取り直し言うべき事を言うのとクノンと歩き去った。  
そしてその場に残された三組は

\*\*\*

「……ふれいず？」  
「申し訳ありません、ファルゼンさま。私の力が至らぬばかりに彼を  
奪われてしまい……。」  
「……。」  
「……。」

フレイズの考えに最早ぐうの音も出ないファルゼン。

\*\*\*

「ミスミさま、あの者が何か？」  
「ええい、何でも無いわ！」  
「……？」

謂われのないミスミの怒りに首を傾げるキユウマ。

\*\*\*

「ねむねむさくん……。」  
「……マルルウ、さつきから何だ？その‘ねむねむさん’ってのは  
……。」  
「さつきあの人間さん言ってたじゃないですか、‘眠い’って。」  
「……そんだけか？」  
「はいですよ。」



初めまして！そしてお休みなさい……………ZZZ

青年が召喚されてから数時間。

既に日も落ち辺りが闇に包まれる中、人工の光が灯る機械たちの集落で

一組の主従が話をしていた。

「彼の様子はどうか？」

「心拍・呼吸・脳波、いずれも異常は見当たりませんでした。

目が覚めない他はいたって健康です。」

「……………そう。それにしても今日は驚いたわ。貴方があんなにも人に逆らうなんてね？」

アルデイラはクノンの検査結果に一瞬考える素振りを見せた後、場を軽くする様にからかいかいの声を掛ける。

しかし、そんなからかいかいにもクノンは反応を示さず、いつもの抑揚の無い声で謝罪する。

「申し訳ありません。」

「ああ、勘違いしないで。責めてる訳じゃないのよ。

ただ……………そうね、貴方があんなにも感情をはっきり出したのは初めてだったから。」

クノンがすっかりいつもの調子に戻っているのを少し残念に感じながら、アルデイラは答える。

しかし、その何気ない一言にクノンが反応を示した。

「……………感情？」

まるで聞き間違ったことを問い直すように呟くクノンに、アルデイラが優しげに答える。

「ええ、そうよ。元々貴方には感情回路があるのだから不思議ではないけど、

あの時の貴方は感情的だったわ。」

「……解りません。」

「そう、ならゆつくり考えればいいわ。時間はたくさんあるんだもの。」

「はい。——それでは失礼します。」

「ええ、おやすみなさい。」

挨拶を交わし、クノンは部屋を出ていくと、

残されたアルデイラはクノンの今日の態度に思いを巡らせた。

そして慈しみの笑顔の中、どこか楽しそうなものを浮かべ呟いた。

「……一目惚れ、かしらね？」



アルデイラの部屋を出たクノンは自分の部屋には戻らず、リペアセンターの青年の眠る部屋に来ていた。

そつと眠る青年の顔を見る。

絹糸のような銀の髪に、今は閉じられている深い蒼の瞳、長いまつ毛、すつと通った鼻、淡く色づいた唇。

そんな青年の顔を見つめたまま、クノンは考える。

(私はあの時、この人の側に寄り、見て触れる事を考えた。

……理由は、ある。外傷等の有無を確認する為。)

そこで一端考えるのを止め、手を伸ばし指で青年の髪に触れる。少し掬い上げると、サラサラとした髪が指から零れ落ちる。流れる髪を見ながら再び考え始める。

(でも、それは後から考えた事。本当はあの時、何か考える前に

この人の側に寄りたい、見つめたい、触れたいと『思った』。

これが感情——なのだろうか?)

掬い上げていた髪が無くなった手を戻し、青年の顔を見つめたまま、ぽつりと呟く。

「貴方なら……答えて下さるのでしょうか？」



それっきり一言も喋らずに、クノンは青年の顔を見つめたまま、先程までと同じ事を考え続ける。

機械たちの集落の夜は、静かに更けていった。

△▼△△▼△△▼△△▼△▼△▼△

太陽が昇り、暖かな光が島に降りそそぐ。

それは常に人工の光が灯っている機械たちの集落も例外ではない。

密室である部屋で陽の光を感じた訳でもないだろうが、

まるで朝になったのが分かったかのようになり、一人の青年が目覚ま  
す。

△▼△△▼△△▼△△▼△▼△▼△

何だか眩しいと思いつつ目をゆっくり開けていくと、見た事のない天井が目に入った。

金属製の天井に、まるで手術用の照明のような電灯が付いている。  
こんなのに照らされてれば、眩しいのも当たり前——って、はい

？

一瞬、頭が真っ白になって思わず眩いた。

「……は……？」

「ここは機界ロレイラルの集落、ラトリクスのリペアセンターです。」

驚いた。

冗談抜きで心臓が止まるかと思った。

バクバク鳴ってる心臓を押さえながら、恐る恐る声のした方に顔を  
向けると、

無表情な女の子が一人立っていた。

せつかく可愛い顔をしてるんだから笑えばいいのに、  
なんて場違いな事を考えながら観察してみる。

頭に乗せてる物や着てる服からすると看護師みたいだけど、  
年は12〜14位だから見習いなのかな？

体を起こそうとして鈍い痛み顔に顔をしかめた。

何故だか全身筋肉痛みたいだ。

仕方なく寝たまま部屋を見渡してみると、見た事のない機械でいっ  
ぱいだけど、

何となく病室っぽく感じる。

さつき女の子が言ってた事と合わせて考えれば、

俺はどうやらリペアセンターって名前の病院に居るみたいだ。

……どうしてだろう？

「えくと、あの——？」  
しまった。

そう言えばこの子の名前も聞いてない。

どうしよう？いきなり『君の名前は？』なんて聞いたらナンパみた  
いかな？

どうやって名前を聞こうか考えてると、女の子の方から教えてくれ  
た。

「私は従軍看護用フラーゼン型式番号AMN-7H、どうぞクノンと  
お呼び下さい。」

俺が困ってるって分かったのかな？

女の子、クノンさんが自己紹介してくれた。

クノンさんの自己紹介には、

いくつか引つかかる点があった(従軍とかフラーゼンとか型式番号  
とか)けど、

あれだけ丁寧にご自己紹介されたら、こっちも名乗らないと失礼って  
モノだ。

社会において礼儀は大事だからね。

「私は晁、矢崎 晁と言います。よろしくクノンさん。」  
にっこり笑顔付きで名乗ったけど、

返って来たのは無表情なままの顔と抑揚の無い「はい。」の一言。  
うう、ちよつとへこむ。

何か気に障る事でもしたかな？

まあ、へこんでても仕方ないし、気を取り直して現状把握に移ろう。  
「えと、クノンさん。どうして私はここに居るんでしょう？」

「アキラ様は15時間43分前に召喚されましたが、  
原因不明の昏睡状態でしたので検査の為、こちらにお運びしまし  
た。」

何だかサラツと凄い事を言われたけど……どこから聞こう？

「えと、運んだって……貴女が？」

「はい。」

また無表情と抑揚の無い声で返された。

もつと他に聞く事あるやろ!?!とか、突っ込んでくれる事までは期待  
してなかったけど、

まさか一言しか返って来ないとは……。

うくん、何がいけなかったんだろ？

……顔とか？

って、そんなのどうしようも無いしなあ。

俺がそんな事を考えてると、クノンさんの方から質問された。

「ご気分はいかがですか？どこか痛い所は有りますか？」

そう言えばクノンさんは看護師見習い（推測）だったな。

見習いとはいえ、仕事はちゃんとしないな。

「気分は悪くありません。全身筋肉痛みたいですが、特に問題は無い  
と思います。」

俺がそう答えると、クノンさんは「失礼します。」と言って俺の額と  
右手に触れた。

——た、多分、熱と脈を計ってるんだろう／／／  
そんなに違いない。

「……。」

「……。」

俺もクノンさんも無言のまま数秒が経つ。

何か気まずいな……。

「体温36.5℃、脈拍84/分。正常値内です。問題無いようですね。」

そうやって初めてクノンさんは微笑みを浮かべた。

それは俺が思った通り、可愛い笑顔だった。

それにしても、クノンさんって優秀なんだなあ。

触っただけで体温計れるなんて。

そんな事に感心しながら、さつき気になった事を聞こうとしたら、急に眠気が襲ってきた。

俺は何とか眠らないように声を出そうとしたけど、音に成らずに息が漏れただけで終わった。

目の前が暗くなる。

凄く——眠い。



アキラが突然目を閉じ黙ってしまった為に、クノンはもう一度額と右手に触れた。

体温・脈拍・呼吸ともに異常は診られない。

どうやらまた眠ってしまったらしい。

その事を確認したクノンは、本来ならアキラが目覚めた時にすべきだった行動をとる事にした。

壁に近づき何かのボタンを押す。

「アルデイラさま、あの方が目を覚まされました。」

「そう。すぐにそっちに行くわ。」

何処からかアルデイラの声が聞こえ、その返事を聞いたクノンは壁から離れる。

そして、アルデイラが来るまでの間、タベと同じようにアキラの側にただ、静かに立ち続けた。



## 初めての出会い

「——どうしてすぐに私を呼ばなかったの、クノン？」

まさかりペアセンターでの私の第一声がこれになるなんて……。

クノンから昨日召喚された彼が目覚めたと聞かされて、

みんなに連絡してから急いでリペアセンターに来てみれば、彼は何の変化もなく眠ってる。

クノンに聞けばついさつき再び眠ってしまったと言うし。

まあ、それはいいわ。

眠ってしまったのは仕方ない事で、クノンにはどうする事もできなかっただろうし。

問題なのは、目覚めたとの連絡を受けた時には既に彼が眠っていたという事よ。

理由を聞いてみれば「申し訳ありません。」と謝るだけだし……。

いったいクノンに何があったのかしら？

……。

……。

こうしていても仕方ないわね。

彼が目覚めた時の状況でも尋ねてみましょう。

「それで、彼について何か分かった？」

「アキラ様はやザキ・アキラ様と名乗られました。

依然原因不明の昏睡状態です。その他全身に軽微の筋肉疲労が診られます。」

筋肉痛？

……喚ばれる前に激しい運動でもしたのかしら？

「原因は判ってるの？」

「そちらも原因は不明です。」

「そう、他に彼について判明した事は？」

「覚醒時は意識もはっきりしており、

ここが何処か、自分が何故ここに居るのかをお尋ねになりました。」  
——それだけ時間があつたのに、私に報告があつたのは彼が眠つた後。

これは……本当に惚れたのかしら？

「分かつたわ、クノン。ありがとう。当面の問題は——」

そこまで言った時、私の耳に通路を走る騒々しい音が聞こえてきた。

まったく……マナーつてモノを知らないんだから。

「——彼女たちに何て説明するか、ね。」



大きな足音がドアの前で急停止すると、ドアが完全に開く前に小さい隙間を押し広げるように3つの人影が部屋に飛び込んでくる。

そのまま掴みかかるようにアルテイラに駆け寄ってくると、それぞれが大きな声で問いかける。

「あやつが起きたとは本当か!?!」

「彼が起きたとは本当ですか!?!」

「ねむねむさんが起きたって本当ですかー!?!」

……出たわね、こぶ付き鬼女に、変態天使に、バカ妖精。

昨日の様子からこいつらが彼を狙っているのは明白だけど、

優しい姉（自分）としては可愛い妹（クノン）の為に、ここは一肌脱がないとね。

ニヤリと心の中で笑いながら、表面上はいつも通りに言葉を返してやる。

「あら、ヤッフアたちはどうしたの?」

「シマシマさんたちなら後から来るですよ。」

「そんな事より、あやつはどうしたのじゃ!?!」

「そうです!隠すと為になりませんよ!!」

私が連絡したのは「護人に」であって、あなた達じゃないのよ！  
頬がひくひくと引き攣るのを感じながら、彼に近づこうとする三人  
の前に立ちはだかり、

追い返す為に屁理屈を言ってるよ。

「生憎と彼はまた眠っちゃったのよ。」

未だに昏睡状態の原因は不明だし、

もしかしたら伝染性のモノかもしれないから近づいちゃ駄目よ。」

わざと伝染性という部分を強調してやると、流石の彼女たちも怯んだわ。

……一瞬だけどね。

「ならば、そなたたちはどうなのじゃー！」

「そうですよー！」

まったくしつこいんだから。

クノンと彼の様子をもう少し見ていたかったけど、仕方ないわね。

「そうね。私も危ないかもしれないから一緒に出るわ。」

クノン、ここは任せるわね？」

「承知致しました。」

さあ、後は若い二人に任せてって感じで三人を追い出そうとしたら

……

「何故クノンは良いのじゃ!？」

「そうですよー。独り占めはダメなのです!」

くっ、この馬鹿共は!」

……駄目よ、ここで怒ったらクールビューティな私のイメージが崩れるわ!

落ち着いてく落ち着いてく。

……。

……。

よし。

「あのねえ、いくらクノンが私たちと変わらないように見えたって、

この子の体は機械なのよ? 伝染する訳ないじゃない。」

溜息とともに、いかにも呆れたという口調で説明してあげると、



さすがの二人も諦めた様に顔を俯け静かになったわ。  
はあ、やつと静かになったわね。

さあ出ましよう二人を促せば、

変態天使が彼の側で無駄に爽やかに笑いながら私たちに手を振っている。

「……何を、しているのかしら?」

怒りを抑えながら冷たい声で聞いてやる。

「私も生身ではありませんから、ここに居て彼についていようかと。」

「原因が霊的なモノだったら貴方も同じよ!? さっさと来なさい!」

流星の私も我慢の限界。

変態天使の首根っこを捕まえて部屋から引きずり出してやったわ。

△▼△△▼▼△△▼▼△△▼▼△

アルデイラたちが部屋から出ると、

ちようど通路の向こうから護人たちが歩いて来たところだった。

向こうもアルデイラたちに気が付いたのか、少し歩を速めた。

「よお、あの兄ちゃん目が覚めたって?」

ヤツファが軽く手を挙げて挨拶と共に尋ねるが、

アルデイラの周りにいるがっかりした三人を見て苦笑しながら付

け加える。

「……でもねえみたいだな。」

はーつと大きな溜息を吐いてアルデイラが答える。

「実は一度起きたんだけど、またすぐ眠っちゃったのよ。」

それにしても貴方たち?

パートナーの躰ぐらいしっかりしておいて欲しかったわね。」

何の事だと首を傾げる護人たちに、アルデイラは先程の騒動につい

て愚痴をこぼしながら、

彼について判った事を説明すべく、皆をミーティングルームへと連

れて行くのだった。

その時、また例の三人がリペアセンターに行こうとして、アルデイラの召喚術を喰らったのは、また別のお話。

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△▼△

朝、緩やかに時の流れるこの島でも、特にのんびりした時間。各集落でいつもの朝が始まり、

今日も穏やかな一日が、いつものように過ぎていくと誰もが思っていた。

異変が起きたのは丁度、昼頃。

食後に少しゆっくり休みもうかという時間帯。

昼夜を問わず働き続ける機械たちの集落で、突然警戒を報せる音が鳴り響く。

「何が起きたの!?!」

「D-37地区に侵入者です。」

アルデイラが問い、即座にクノンが答える。

そして二人は走り出す。

己に課した役目の為に、主の身を守る為に。

出会ったのは偶然か必然か。

彼女たちの、そしてこの島の運命を大きく変える鮮烈な紅に。

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△▼△

私はその時、少し怒っていたのかも知れません。

だってお互いの事情を説明し合っただけで、もう話す事は無いだな

んて悲しいじゃないですか。

だから私は必死に追いかけてました。

彼女を追いかける事にしたのは、最初に出会ったヒトだから……うん、違います。

本当はただ、何となく……何となく彼女の帰る方に大事なモノがあると思っただんです。

機械たちの集落と森の狭間でやっと彼女に追いつきました。

「待って下さい！」と彼女を呼び止め、思うままに言葉をぶち撒けました。

後から考えると無茶苦茶だったように思いますけど、その時は必死だったんです。

そして彼女がほんの少しの譲歩を見せてくれた時、彼が森の中から現れたんです。

夕陽を浴びて紅く輝く銀の髪、こちらに向けられた深い蒼の瞳。

その人はとても綺麗で、一瞬自分が何をしていたのか忘れてしまいました。

彼は私から彼女に視線を移し、柔らかな笑みを浮かべ話しかけました。

声は聞こえませんでしたでしたが、そのまま二人で楽しそうに帰って行ったので、

彼女を迎えに来たのかもしれない。

その時さり気なく彼女の腕が彼の背中に伸ばされた様子が、

二人の関係を表しているようで、何故か私の気持ちは暗くなりました。

あの二人は恋人、なのででしょうか……



今日は驚いた。

何と、この島に俺とゲンじい以外の人間が居たんだ。

こつちの世界、ラインバウムに召喚されてから、

俺はほとんど眠りっぱなしでずっとラトリクスで世話になってた。

初めは俺の髪と瞳が黒から銀と蒼になってた事や、

物語の中にしか出て来ないような住人たちに驚いたが、

慣れてしまえばどうでもいい事だった。

ただ、元の世界に帰れない事だけが、少し……辛かった。

最近になって、なんとか一日の内四時間くらい起きていられるようになり、

その時間を使って集落から集落へと渡り、そこでしばらく世話になるという暮らしをした。

でもゲンじい以外の人間に会ったのは、今日が初めてだ。

もしかしたら人間たちの集落なんてのが何処かにあるのかもしれない。

今度行ってみよう。

……そこには今日会ったあの女性ひともいるだろう。

夕陽の中にあつてなお紅い髪をしたあの女性ひとが。



まったく油断も隙もあつたもんじゃないわ。

珍しいタイプの人間だったから少し気を許してやれば、

アキラを見た途端目の色を変えるんだから。

そこで優しく綺麗で妹（クノン）思いの私は、可愛く健気な妹の為に一肌脱ぐ事にしたの。

「アルディイラ、久しぶり。今からラトリクスに帰るトコ？」

アキラが私に笑顔で挨拶してきたところで、これが恋人同士でなくて何なんだ、

というくらいサービス満点の笑顔で応える。

「ええ、そうよ。ちょうどいいから一緒に帰りましょう?」

そしてアキラの背中に手を伸ばし、そつと押す事で並んで歩くように促す。

もちろん彼女、アテイの方にちらりと牽制の視線を送る事も忘れずにね。

案の定、彼女は表情を暗くしてうな垂れたわ。

ふふっ、これでまた一人クノンの邪魔をする娘が消えたわね。

## 錯綜する想い

初めて護人たちに会った夜。

アテイたちは海賊船で夕食を食べながら、今日の出来事について談笑していた。

「しっかし、先生には驚かされてばっかりだな！」

酒を片手に豪快に笑っているのは、この船の船長、カイル。

「ホントだよね。はぐれたちをあつと言う間におつ払ったり……」

「護人サンたちに話を付けてきたり、ね。」

カイルの後を砲手にして、ムードメイカーであるソノラが続け、女言葉を使う派手な男、この船の相談役であるスカーレルが引き取る。

「そんな。私は大した事はしてませんよ。」

「そんな事はありませんよ。貴女がした事は、我々にはとても出来ない事です。」

感謝しています、アテイさん。」

頬を赤らめ謙遜するアテイに、柔らかな物腰の召喚士、ヤードが感謝の言葉を述べた。

しかし、皆が笑顔を浮かべ食事をしている中、一人だけ不機嫌そうにしている少年が居た。

いつも被っている緑の帽子を横に置き、彼は出された食事を黙々と食べていた。

元より海賊たちの会話になど一切加わる気はなかったが、

彼らと賑やかに談笑している己の家庭教師が気に食わなかった。

だから、いつも以上に眉をしかめ、心持ち速めに食事を口に運んでいた。

そんな彼の耳に飛び込んできた言葉が一つ。

『人に会った』

そこで彼は食事を口に運ぶ手を止めると、

少し会話に注意を向け、自分の家庭教師の話に耳を澄ませた。

「……で、アルディラさんに話をした後、その人に会ったんですよ。」

どうやら彼の家庭教師は機界の集落付近で人に出会ったらしい。

それだけ聞ければ十分だった。

彼は置いてあつた帽子を被り、小さく「ごちそうさま」と呟いて部

屋を出た。

中ではまだ、家庭教師と海賊たちが「その人はとても綺麗だった」とか

「年はいくつ位だった？」などと話をしていたが、彼にはそんな事はどうでもいい事だった。

肝心なのは、この島に他に人が居るといふ事だった。

もし、この島に人の町なり村があるのなら、彼はすぐにでもそこに行きたかつた。

少なくとも、この船に居るよりはマシな筈だ。

自分たちの船を襲つた海賊船などよりは。

どうやってその人の所まで行こうか考えながら、

彼は割り当てられた部屋まで歩き、扉を開け中に入る。

そのままベッドに倒れ込み、毛布をかき寄せると、彼のこの島でのたった一匹の友達、

眼鏡を掛けたメイトルパの召喚獣、テコがすり寄つて来た。

彼はその小さな体を抱きしめると、か細い声で呟いた。

「どうして……どうして、あの人は海賊なんかを信用できるんだろう？」

「ミャー？」

「僕には解らない……解らないよっ。」

「ミャー……。」

そして彼は小さな友人を抱きしめるたまま、ゆっくりと眠りに落ちていった。

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△

幾人かが紅き女性ひとに出会った翌日。

緑の少年が小さな友人を抱きしめ、眠りに就いた次の日の朝。

陽が高くなり始めた頃、機械たちの集落では目を覚ましたアキラがクノンを探し、

リペアセンター内を歩き廻っていた。

「……クノンさん、どこに居るんだろう？」

聞きたい事もあるし、何より腹が減ったんだけどなく。」

アキラはリインバウムに喚ばれて以来、食事はいつも誰かの世話になっっている。

簡単な物なら作れるのだが、何しろ起きていられる時間が短い。

今でこそ二時間程起きていられるようになったが、喚ばれた当初は30分も保たなかったのだ。

とても料理をしている余裕は無かった。

その結果、今ではすっかり人に頼りきりになっている。

「居ないなく。アルデイラの所かな？」

リペアセンターを粗方探し終えたアキラは、クノンを探して中央管制施設へと足を向けた。

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△

中央管制施設ではアルデイラとクノンがタベの事件について話しかけていた。

帝国軍が行った破壊活動、それによって出た被害、これからの対応。そして、アテイたちの行動。



「……では、あの方たちを新たな仲間としてお迎えになるのですか？」  
「まだ、そう判断するのは早いわ。」

帝国軍とは通じていないようだけど、  
少し前から鬼妖界と幻獣界で出だした野盗との関係も分からない  
し……。」

帝国軍に向かつて行ったアテイたちの行動は、信ずるに足るものだとアルデイラは感じたが、

それだけで全面的に信用できると判断する事はできない。

何よりアキラが喚ばれた少し後ぐらいから、

ユクレスと風雷の里で作物の盗難が発生しているのだ。

何も関係ないと分かるまでは、用心するに越した事はない。

そこまで話した時に、部屋の呼び出し音が鳴り響いた。

「はい？」

アルデイラが通話ボタンを押し、返事をする。

返ってきたのはアキラの力の無い声だった。

「アルデイラく、クノンさんがどこに居るか知らない？」

「クノンならここに居るわよ？」

「ほんと!? やつと見つけた。入ってもいいかな？」

「ええ、どうぞ。」

アルデイラ返事と共に部屋のロックを外すと、

小さく空気の抜ける音がしてドアが開き、アキラがふらふらと中に入ってきた。

「おはよう、アルデイラ。おはようございます、クノンさん。」

二人から同じように挨拶を返してもらったアキラは、

へなへなと力無くしゃがみ込むと、情けない声でクノンに泣きついた。

「クノンさくん、お腹が空いて死にそうです。」

その姿は部屋に立ち込めていた重い空気を吹き飛ばし、

アルデイラを苦笑させ、クノンにすら淡い笑みを浮かべせた。

「すぐに食事を用意いたします。アルデイラ様は、如何いたしますか？」

「ああ、もうお昼なのね。じゃあ私も一緒に食べようかしら？」  
言いつつアキラの方に問うように目を向けると、軽い承諾と共に笑顔が返ってくる。

そしてクノンを先頭に三人は場を食堂へと移した。



食堂ではアキラがクノンに作ってもらった料理を頬張りながら、昨日の夜起きた事件について聞いていた。

勿論、その過程でアテイたち漂流者の事も聞いた。

アキラは話を全て聞き終わると同時に料理を平らげ、それからゆつくりと紅茶を飲み、

心底残念そうに呟いた。

「……なんだ、人間の集落がある訳じゃないのか。」

「……は？」

絶句。

正にアルデイラは、この言葉の示すような状態に陥った。

何を言われたのか解らない、そんな状態で彼女が口に出来たのは先の一言だけだった。

その一言を問い直す物だと判断したアキラが、もう一度言い直そうとするが、

それより早くクノンの声が発せられた。

「この島には人間たちの集落に該当するモノは存在しません。」

律儀にアキラの呟きを肯定するクノンに、更なる脱力を感じつつアルデイラは二人に突っ込んだ。

「そう言う問題じゃ無いでしょう!?!どうして今の話聞いてさっきの発言になるのよ!」

普通、敵の事とか対策とか考えるでしょう!?!」

アキラを睨みながらここまで一息で言い切り、クノンに視線を移し

て更に言い募る。

「貴女もよ、クノン！アキラの非常識に一々付き合わなくていいの！」  
言い切ってから肩を大きく上下させ息を整えるアルディラに、アキラが恐る恐る声をかける。

「あゝ、アルディラ？いくら何でも『付き合わなくていい』てのは酷いんじゃない？」

「だったら馬鹿な事を言うのを止めなさい！」

「……はい。」

問いかけに返ってきた再度の怒声に、アキラは小さく返事をする  
体を縮こませ沈黙した。

そこにタイミング良く来客を知らせる呼び出し音が鳴り、クノンが  
応対に出たが、

すぐにアルディラに伺いを立てに戻ってきた。

「アルディラ様、アテイ様がいらっしゃいました。」

「ああ、そう言えば集落を廻るって言っていたわね。」

……いいわ、中に入れてあげて。」

来客についてアルディラは少し考える仕草をしたが、すぐに入室を  
許可すると伝える。

そして、小さく空気の抜ける音と共にドアが開き、  
紅い髪を揺らしながら全ての鍵を握る人物が入って来た。



昨日の彼女、アテイが来たと聞いて、俺はドアの方をじっと見つめていた。

夕陽の中で見た彼女の紅が、まだ目に焼き付いている。

もう一度見たいと思ったソレが今、ドアの向こうにある。

小さく空気の抜ける音と共にドアが開く。

昨日見た時と、まったく変わらない綺麗な紅が目に映る。

彼女はその紅い髪を揺らしながら、俺たちの方にゆつくりと歩いて来た。

そして軽く頭を下げ、笑顔で挨拶してくる。

「こんにちはアルデイラさん。」

……あれ？ひよつとしてお食事中でした？」

俺たちの前に食器が置いてあるのを見て、彼女は申し訳なさそうにする。

アルデイラが軽く構わないと答えると、

彼女はもう一度頭を下げ、俺とクノンさんの方に向き直る。

「そちらのお二人に挨拶するのは初めてですよ？」

初めまして、アテイと言います。」

その時、初めてアテイの顔をよく見たと思う。

昨日は遠目に見ただけだし、さっきまでは髪に目が行ってた。

近くで見る彼女は綺麗と言うより、可愛い人だった。

そんな事を考えながら、俺は椅子から立ち上がり挨拶を返した。

丁寧な挨拶には丁寧な挨拶を、だ。

余談だが最近名字を名乗ってない。

こつちの世界では、家名を持つているのは貴族だけだと聞いたからだ。

俺は貴族なんて立派なものじゃないし、別に名字を名乗らなくても困る事も無かった。

お互い相手の名前が分かり、雑談でも始めようかという時、急に目の前が暗くなるのを感じた。

どうやら時間切れみたいだ。

もう少し話をしていたかったな、とか、またクノンさんに迷惑掛けちゃうな、

なんて考えつつ俺の意識は深い闇に落ちていった。



私はドアを前にしてちよつと緊張していました。  
ひよつとしたら昨日の人も、この向こうに居るかもしれません。  
あの夕日に輝く銀髪の彼が。  
小さく空気の抜ける音と共にドアが開きます。  
心臓が飛び出るかと思いました。  
ドアが開いた瞬間、私の目に飛び込んできたのは深くて蒼い二つの瞳。

昨日のあの人が、私をじつと見ていました。  
緊張で手と足が同時に出そうになるのを何とか抑えながら、  
出来るだけ自然に見えるようにゆっくり歩きました。  
それからアルデイラさんに挨拶して、机に食器があるのに気が付き  
ました。

食事の邪魔をしてしまったのかもしれない。  
ちよつと落ち込んで頭を下げると、アルデイラさんが構わないと  
言ってくれました。

そこでちよつとあの人の方に向き直りました。  
綺麗な銀の髪と深い蒼の瞳。  
間近で見ても綺麗な人でした。

何故かその蒼い瞳がじつと私を見つめていて、少し焦りながら挨拶  
をしました。

すると、彼は柔らかな笑顔で挨拶を返してくれたんです。

「初めまして、アテイさん。」

私はアキラと言います。どうぞよろしく。」

……アキラ、さん。

ちよつと名前が判りました。

もつとアキラさんの事が知りたくて、何から聞こうか考えている  
と、

突然アキラさんが椅子から崩れ落ちるように倒れました。

「アキラさん!!!」

叫んで手を伸ばしましたが、私の手より早く、

側にいた女の子がアキラさんを床にぶつかる前に抱き止めました。ほっとして側に近寄ると、女の子が話しかけてきました。

「ご心配いりません。お眠りになっただけです。」

いつも突然、気を失うように寝てしまうのだと聞かされ、

とりあえず安心した私は、彼女の名前を聞いていない事に気付きました。

「そうですか……えと、貴女は？」

「私は従軍看護用フラーゼン型式番号AMN-7H、クノンと申します。以後お見知りおきを。」

……失礼します。」

そう言うと彼女、クノンさんはアキラさんを抱きかかえて部屋から出ていきました。

その時にちらりと見えた彼女の表情は、どこか嬉しそうでした。

クノンさんも、アキラさんが好きなのでしょうか……。



「アルデイラ様、アテイ様がいらっしやいました。」

戻ってきたクノンに伝えられた内容を少し考える。

さて、どうしようかしら？

あの女を部屋に入れずに追い返すか、それとも入れて何か手を打つか……。

中に入れてあの女をやっつけければ、クノンの私に対する評価がUPするかしら？

そうなれば……うふふ。

「いいわ、入れてあげて。」

さて、どうやってやっつけようかしら……あら？まずいわね。

アキラがドアの方を熱心に見てる。

もしかしてアテイに興味でもあるのかしら？

だとしたら入れたのは失敗ね……。

何とかしないと。

小さく空気の抜ける音と共にドアが開いてしまう。

来たわね……。

とりあえずは二人がいい雰囲気になったら邪魔をして、

私かクノンがアキラの恋人だと思わせるのがいいわね。

そんな事を考えながらアテイに生返事を返していたら、

いつの間にか二人はにこにこ笑い合っていたわ。

まずいわ！このままじゃ私の可愛くて優しくて——以下略——

—クノンが！

そう思つて二人の間に割り込もうとしたら、突然アキラが椅子から

崩れ落ちてしまった。

そういえばアキラが起きてからそろそろ四時間ね。

とつさにアキラを抱きとめたクノンの健気さに感動しながら、

私は頭の隅でそんな事を考えていたわ。

その後クノンは正々堂々と名乗りを上げて宣戦布告したの。

「私は従軍看護用フラージェン型式番号AMN—7H、クノンと申しま

す。以後お見知りおきを。

……失礼します。」

立派よ、クノン！

それからクノンはアキラを抱いて二人の仲を見せつけたの。

アテイは圧倒されたように呆然としていたわ。

ふふ、どうやらあの二人の間には入れないと気付いたようね。



部屋の呼び出し音を聞いて対応に出てみると、そこには一人の人間  
がいました。

長く紅い髪。

昨日ラトリクスに侵入し、また護つてくれた人。  
アテイ様。

彼女にアルデイラ様に会いたいと言われ、私は許可を頂きに戻りました。

アルデイラ様は少しお考えになった後、許可をお出しになったので、

私はドアのロックを外してアテイ様を迎え入れました。

小さく空気の抜ける音と共にドアが開きます。

ドアの向こうにいたアテイ様は、何故か体を強ばらせ、驚いておられるようでした。

顔を赤くして何かを凝視していらっしやっただので確認してみると、そこにはアキラ様がいました。

……アキラ様も、アテイ様を、見て、いました。

……………。

アテイ様がこちらに近付き、軽く頭を下げアキラ様に挨拶をなさいました。

そしてアキラ様も。

本来なら私もアテイ様にご挨拶をしなくてはならないのに、

微笑み合うお二人を見ていると何故か声をかけられなくて、ただじつとしていました。

そうするうちに、アキラ様に若干の体温上昇と呼吸数の低下を感知しました。

いつもの昏睡だと判断して側に寄った途端、アキラ様は椅子から崩れ落ちそうになり、

とっさに抱きとめました。

アキラ様が今、私の腕の中にいます。

私の、腕の、中に。

その後、アテイ様に挨拶をしてアキラ様を部屋まで運びました。  
アキラ様が初めて島に来た時のように……いつものように。



## 海賊との遭遇

時刻は昼過ぎ、一日の内で最も気温が上がる時間。

今日も天気は快晴で、木陰で涼しい風を感じながら昼寝でもしたいぐらい。

そんな中、木漏れ日が踊る森の中を歩く一団がいた。

「ふうん、カイルたちも野盗を捕まえに行くんだ？」

「おうよ！同じ人間として、そんなみつともない真似は放つとけねえからな！」

にこやかに話し合っているのは、出会ってすぐ意気投合したアキラとカイル。

ほんの数十分前、いつものように何事も無く目の覚めたアキラは、偶然出掛けようとするアルデイラを見つけたため話を聞くと、

昨夜、自分が倒れてからアテイに頼んだ野盗退治に行くこと知り、付いて来たのだ。

「おう、カイルってば、おつとこ前〜。」

「ははははは！まあな！」

アキラはカイルが気に入ったらしく、先程から褒めちぎっていた。しかし、そんな二人のやり取りが面白く無かったのか、

単に会話に加われなくて悔しかったのか、ソノラが頬を膨らませる。

「もう、アキラ！そんなに褒めたらダメだってば！」

兄貴、調子に乗っちゃうじゃん！」

「え〜？でもさ、こんな格好いい兄貴がいたら自慢だぜ？」

ソノラだって、そう思うだろ？」

「そ、そんな訳ないじゃん！こんなバカ兄貴！」

「なんだと!?!」

途端に喧しく口喧嘩を始めた兄妹から少し距離を置き、

アキラは微笑ましそうにその光景を眺めていた。

「仲が良いな。」

「ふふ、よく解るわね？」

そんなアキラの独り言に突然話しかけてきたのは、いつも掴み所のない笑みを浮かべているスカールレル。

音も無く近寄ってきたスカールレルに、アキラは大して驚くことも無く、朗らかに笑って返す。

「まあね、俺にも弟妹がいるから。」

そう言ってから、不意に目を逸らして悲しげな瞳をするアキラに、スカールレルは優しく、静かに尋ねる。

「……家族に、会いたい？」

「——会いたい。……会いたいなあ。」

何処か遠くを見つめて呟くその声は、遙か昔を懐かしむようで、年若いアキラには似つかわしく無かったが、何故かこの上も無く似合っているような気もして、

スカールレルは「そう。」とだけ呟きアキラの隣を歩き続けた。

そんな二人を見つめる一対の瞳。

紅い髪に、蒼い瞳。アテイだ。

アテイはアキラを見ていた。一つの疑問を持って。

「(どうして、アキラさんは私には敬語で、カイルさんたちには砕けた話し方なんでしょう?)」

道すがら、ずっとその考えに捕らわれていたアテイが、

思い切ってアキラに尋ねようとしたその時。

「ソロソロダナ。」

ファルゼンのくぐもった声に出鼻を挫かれてしまう。

どうやら件の泥棒たちのアジトに着いてしまったらしく、

アテイはアキラに話しかける機会を逃してしまう。

「おい、見ろ!」

次いで、カイルが声を上げ、指差した先には一隻の難破船。

それは野盗が人間であるという事の確認で、アテイが悲しげに顔を歪める。

しかし、その事に気付かなかったカイル一家が、難破船に翻っている旗を見て騒ぎ出す。

難破船のマストで風に揺られているのは、ヒゲのついたドクロが描かれてた旗。

それを見たアキラとアルデイラの声が重なる。

「うっわ、カツコ悪く。」

「センスが無いわね。」

そして、アキラたちは浜辺でたむろして、好き勝手言っているジャキーニ一家を発見する。

アティは話し合いに来たのだと訴えるが、

全く聞く耳を持たないジャキーニの掛け声で戦闘が始まった。

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△▼

今、俺の目の前にはナイフをちらつかせた海賊が一人いる。

まあ、仲間内で一番弱そうなのは俺だし？丸腰なのも俺だけだけ？

……何でこんな事になったんだろう？

アルデイラに頼み込んで付いて来た時は、どうせ足手纏いにしかならないって解ってたから、

戦う事になったら後ろの方でじっとしてる手筈だったんだけど。

まさか後ろからも敵が来るなんて……。

ちらりと周りに視線を向けると、みんな忙しそうに立ち回ってる。

はあ……やっぱ俺がやるしかないのか。

喧嘩もまともにした事無いんだけどなあ……。

周りから相手に視線を戻すと、やたらと余裕ぶったムカつく顔が目に入る。

にやついた顔のまま、そいつはナイフで突いて来る。

……あれ？何だかやけにゆっくりだな。

余裕でも見せてるのかな？

まあ、チャンスには違いないよな。

えくと、確か前、合気道やつてる奴から聞いた技は……。

正面から斬りかかって来る相手は、体を相手の軸線からずらした  
後、

刃物を持つてる方の手首を掴んで、その勢いを殺さないように引つ  
張って足を払う、と。

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△

その場に居た全員が目を見開き、呆然としていた。

誰かが大きな声でアキラの名前を呼んだ。

みんながその声に不吉な物を感じ、目の前の敵を吹き飛ばしアキラ  
の方へ目を向けた。

その時には既に手遅れだった。

海賊の一人がいつの間にか自分たちの背後に廻り、アキラに向かっ  
てナイフを突き出していた。

みんなの頭に戦闘前のアキラの声が蘇る。

「俺、戦闘力皆無だから後ろで見学してるよ。

みんな怪我しない程度に頑張れよ。」

そう言っただけで楽しそうに笑っていた。

助けなければ、と思う。

しかし、その場所は遠すぎて、剣も拳もナイフも届かない。

召還術を詠唱する時間もない。

誰もが息を飲んだ瞬間。

アキラが水が流れるように、ゆらりと動く。

突きかかって来るナイフをかわし、海賊の手首を取り、足を払う。

たったそれだけで海賊は投げ飛ばされ、投げられた先にあつた岩に  
ぶつかり、

気を失ってしまった。

仲間も海賊たちも呆然とアキラを見ていた。

戦闘に関しては全くの素人のアキラが、雑魚とはいえ戦い慣れた海賊を投げ飛ばす。

その事実が理解できず、ただアキラを凝視していた。

一方、その場に居る全員に凝視されているアキラは、少し居心地が悪そうに体を動かした後、

頭を搔いて戸惑う様に謝った。

「えつと……ごめんなさい？」

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△

うつわ、結構飛んでったな。

しかも岩にぶつかったし。

……生きてる、よな？

念のため確かめよう。

……あつ、生きてる生きてる。

よかつた、こんなんで殺人犯になりたくないな。

ん？何かみんなコツチ見てるな。

……もしかして、こいつ投げ飛ばしちや駄目だった……とか？

と、とりあえず謝っておいた方がいいかな？

ごめんなさい。

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△

何故か疑問形で謝るアイツの声で、俺たちはようやく動き出した。残ってた雑魚を俺たち近接戦闘組が倒し、ジャキーニの野郎は先生

たちが召還術でぶっ飛ばした。

野郎は何だか叫んでたが、やっと一段落つけた俺たちはアイツの周りに集まった。

「おいおい、スゲエじゃねえか!」

「ホント、凄いよ!」

「人は見かけに因らないってホントね。」

「スカーレル、それは褒め言葉になっていませんよ。」

俺とソノラ、スカーレル、ヤードが褒めてやると、アイツは間抜け面して言いやがった。

「あれ?みんな、俺がアイツ投げ飛ばしたのを怒ってんじゃないの?」

「はあく?何で俺たちがお前を怒るんだよ?」

「いや、だつてみんなコツチ見てたし……。」

何だか悪戯の見つかつたガキみてえにそわそわしてるアイツを見て、

俺たちは顔を見合わせ深くため息を吐いた後、苦笑を浮かべて誤解を解いてやった。

「俺たちがお前を見てたのは、

戦えないつっつてたくせに、あっさり敵をやっつけたからだよ。」

「そーそー、敵なんだからやっつけてイイに決まつてるじゃん!」

アイツはやつと納得いつたのか、そわそわしなくなったが、

今度は顔を赤くして照れ始めやがった。

見てて飽きない奴だぜ、まったく。

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△

危なかったわ……。

もしアキラに怪我でもされたらクノンに叱られるじゃない!

その他大勢と一緒にアキラに駆け寄った私は、

そう文句を言いたいのを我慢して、アキラを上から下まで見回して

みる。

ふう、どうやら掠り傷一つ無いようね。

……それにしても、どういう事かしら？

アキラは戦闘経験は無いと言った筈なのに、今の動きはどう見ても素人の動きじゃないわ。

……ひよつとしたら、例の昏睡と何か関係があるのかしら？

確かめる必要があるわね。

「アキラ、ちよつといいかしら？」

「ん、アルディラ？何？」

話しかけると、笑顔を浮かべながら問い返してきたアキラに、先程の事を尋ねてみる。

「貴方、戦えないと言わなかったかしら？」

「言っただけど？」

さらつと答えるって事は、隠し事をしている訳じゃなさそうね。

「じゃあ、何故あの海賊を投げ飛ばせたの？」

「ん、何故って言われても……」

投げ方は昔、友達に聞いた事があつたからで、後はあの海賊が油断してたから、かな？」

辻褄は合ってるわね。

でも、あの動きは絶対に素人には無理。

更にアキラは嘘を吐いてないとすると、やっぱり例の昏睡かしら？

……帰って調べるしかないわね。

「アキラ、調べたい事が出来たからラトリクスまで戻りま……アキラ！」

言葉の途中で、アキラが糸の切れた人形のように崩れ落ちる。

しまった！もう時間なの!?

とつさに手を伸ばしてアキラの体を掴んだけど、今考えると馬鹿な事をしたわ。

私の力で男の体重を支えられる筈ないもの。

だからアキラと一緒に倒れる事を覚悟して、衝撃に備えたんだけど……。

いつまで経ってもそんな物は来なかったわ。



は、何とか間に合いました。

ずっと声をかけるタイミングが掴めなくて、アキラさんの周りをうろうろしてましたけど、

そのおかげでアキラさんが倒れるのを防げました。

アルデイラさんと一緒に、ですけど。

男の人ってこんなに重たいんだなく、なんて考えてると、

カイルさんがアキラさんを背負ってくれました。

そのままラトリクスまで送ると言うカイルさんに、アルデイラさんはお礼を言った後、

どこか照れたように私の方を見て言いました。

「……ありがとう。その、助かったわ。」

「いえ、アキラさんもアルデイラさんも無事で良かったです。」

そう言って笑いかけると、アルデイラさんは何だか驚いた表情をした後、

まるで何かを懐かしむように微笑みました。

「アルデイラ。私の事はアルデイラでいいわ、『アテイ』。」

「……っ！　ありがとう、アルデイラ。」

そうしてアルデイラは綺麗な笑顔を残して、

アキラさんを背負ったカイルさんと帰って行きました。

何だか島の一員として認められたみたいです。

これからは、もっと島の人たちと仲良くなれるでしょうか？



## 夜会話くアテイく

空には円い月が昇り、浜辺には波の打ち寄せる音だけが聞こえる。その静かな空間に、一つの白い人影が在った。彼女は特に何かをする訳でも無く、ただ砂浜に腰を降ろし、月の光で朧気に見える水平線を眺めていた。

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△

目が覚めた。

時計を見るとまだ真夜中だったが、これはそう珍しい事じゃない。俺の起きていられる時間はとても不定期で、昼だけじゃなく早朝や深夜の時もある。

今みたいに夜の場合は、狭間の領域に遊びに行くのがいつものパターンだ。

……でも、何か変だ。

いつもみたいに、ぐっすり寝たって感じがしない。

まるでさつき目を閉じたばかりみたいだ。

確認のために枕元の時計付きカレンダー（クノンさんお手製）を見ると、

昼間起きた日から次の日に変わろうとする時間だと判った。

一日の内に二回も目が覚めるなんて初めての事だ。

……ま、いつか。今日は月でも見に行こう。

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△

静かな月の光の下、物も言わず浜に座り、波の音を聞きながら、ただ遠くを見つめる白い人影。

いつからそうしているのか、いつまでそうしているのか、白い人影は動かない。

しかしその静寂は、森から現れた黒い人影が現れた事で破られた。

「……アテイ?」

「!!?」

驚き振り返る白い人影、アテイは、森と浜との境目に黒い人影、アキラを見つける。

声をかけてきたのがアキラだと知り、アテイは強ばった体から力を抜き、

いつものように笑顔を浮かべ、尋ねる。

「どうしたんですか、こんな時間に?」

「目が覚めてしまったので、お月見でもしようかと。」

そう言うアテイさんはどうして?」

ゆつくりと近付きながら答え、問い返すアキラ。

アテイは少し戸惑うように視線を逸らした後、力の無い笑みで答えた。

「私……も、月を見に来たんです。」

「……そうですか。隣、宜しいですか?」

アキラはアテイの態度については触れず、隣に座っても良いかだけを聞いた。

その対応にアテイは更に戸惑いを深くしながらも、首を小さく縦に振った。



あれからアキラさんは砂浜に転がって、ずっと月を眺めています。  
……どうして、何も聞いてこないんでしょう？

自分でもさっきの態度は変だと思うのに……。

私の事なんかどうでもいいと、思われてるんでしょうか？

何だか落ち込みだした私の耳に、アキラさんの静かな声が聞こえてきました。

「この……リインバウムの月は、随分大きいですね。」

「そうですね？」

やっと話しかけてくれた事にほっとしながら、

そつとアキラさんの表情を窺って問い返してみました。

「ええ、月明かりが眩しい位です。」

私の世界の月はもつと小さくて、こんなに明るくはなかったんですよ。」

「そうですねか……。」

何だかこうして世間話をしていると、昼間の事が思い起こされません。

今なら……聞けるかもしれません。

「あ・あのーアキラさんはどうして私に敬語を使うんですか!？」

アキラさんは驚いた顔をした後、体を起こして私に向き直り、にっこり笑って言いました。

「アテイさんが私に敬語を使うからですよ。」

「え?……私、ですか?？」

「私が訳が解らず首を捻っていると、アキラさんは楽しそうに続けてくれました。」

「あはは、まあ単なる私の主義ですよ。」

「礼儀には礼儀を返し、恩には恩で報いる、と決めているんです。」

「そうですねか。……立派ですね。」

アキラさんは軽く言っていましたけど、

何だかその決意はとても強いように感じて、私の決意なんか霞んでしまいそうです。

そこで会話が途切れたまま、しばらく時間が流れました。

何だか間が保たなくて、不意にアキラさんの様子を窺うと、何故かその蒼い瞳に悲しい光が灯っていました。

「どうしたんですか？」

「……あく、実はですね、両親の事を思いだしてたんです。」

アキラさんは、どこかバツが悪そうに頭を掻きながら教えてくれました。

「さっき言った私の主義なんですけど、元々は両親から教わったんですよ。」

どこかアキラさんが嬉しそうな、楽しそうな様子だったので、

ご両親を誇りに思っている事が伝わって来ました。

「良いご両親ですね。」

「……ええ。」

思わず見惚れてしまいました。

月の光に輝く銀系の髪、優しく暖かな蒼い瞳。

どこか照れたように微笑むアキラさんは、女の私から見ても、とても綺麗でした。

そのまま、ぼくっとしていると、「アテイさん？」と声をかけられました。

慌てて「何でもありません。」と答えると同時に、一つの疑問が沸き上がります。

最初にここに来た時は、呼び捨て……でしたよね？

「アキラさん、私の事は呼び捨てで構いませんよ？」

私がそう言うと、アキラさんはとても楽しそうに、にやりと笑って言いました。

「私の事も、呼び捨てで構いませんよ？」

こ、これはカイルさんの時と同じ状況です！

ひよっとしてカイルさんに聞いたんでしょっか？

……今度は舌を噛まないようにしないと。

「ア・ア・ア・アキラアキラアキラアキラ ……ひだっ！」

うう、またやっちゃいました。どうして私ってこうなんでしょう。私が恥ずかしくて俯いていると、アキラさんが突然笑い始めまし

た。

「ぶっ！くくく、あっははは！」

アテイってば、ホントに男の名前は言えないんだ？」

ううう、酷いです。

確かに格好悪かったですけど、そんなに笑う事ないのに。

「……あれ？今、私の名前。」

「うん、アテイって呼んだよ。」

アテイの俺と気軽に付き合いたって気持ちは伝わったから。」

そう言っで見せてくれた笑顔は、今までの中で一番近くに感じられて、心臓が大きく跳ねました。

突然早くなつた鼓動を何とか押さえようとしていると、

不意にアキラさんが笑顔を消して、瞳に真摯な光を宿して話しかけてきました。

「だから、さ……アテイが何か悩んでる時は、いつでも相談に乗るよ？」

「アキラさん……。」

気にしてくれてた……私の事を気にかけてくれてた。

さつきまでの事が嘘のように、胸は静まりました。

でも、今度は……涙が、出そうです。

涙を堪えて膝を強く抱いていると、アキラさんが背中を優しく叩いて言ってくれました。

「俺じゃ、愚痴を聞いてあげる位しか出来ないかもしれないけど、

それで良ければいつでも聞いてあげるから……。」

だから、一人で抱え込まずに話してよ。

アテイは一人じゃないんだ。少なくとも、俺がいるよ。」

「……はい。」

私が震える声で小さく返事を返すと、アキラさんは再び笑顔を浮かべ、

私の背中を一叩きして静かに立ち上がり、森の中に戻って行きまし  
た。

私も船に戻る事にします。

……今夜は良く眠れそうです。

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△

後日、アテイからこの話しを聞いたマルルウが島中に言い触らし、アキラは青空相談室を開く羽目になったとか。

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△

## 昼会話くマルルウく

幻獣界の集落、ユクレス村。

その中心には村の名前と同じ巨木が悠然と立っている。

木漏れ日の踊るその巨木の根元に、一人の銀髪の青年が樹に背を預け座っていた。

彼は、気持ち良い微風が頬を撫でるように過ぎるのを、静かに目を閉じて楽しんでいる。

しばらくの間、そうやってまどろんでいた彼の耳に、可愛らしい声が届いた。

「ねむねむさーん！またお昼寝ですか〜？」

その声に青年は目を開いて、自分の方に飛んでくる小さな人影を確認し、

多分に残る眠気の籠もった挨拶を返した。

「……やあ、妖精さん。こんにちは。」

「マルルウはマルルウなのです！」

妖精さんじゃないって、何回言えば解ってくれるのですかー!？」

返ってきた挨拶に、小さな体で精一杯怒りを表し、マルルウは青年の顔の前で停止する。

すると青年は呆れたような表情を作り、溜息混じりに言い返す。

「そっちこそ。俺の名前はアキラであって、ねむねむじゃないって何回言わせるんだよ?。」

返ってきた言葉にマルルウはフラフラと高度を下げ、その瞳に涙を浮かべる。

「うう〜、ねむねむさんイジワルですよ〜。

マルルウがお名前覚えるの、苦手だって知ってるのに〜。」

そのまま地面にへたり込みそうなマルルウを、地面に着く前に両手に乗せると、

再び顔の前まで持ち上げてアキラは優しく話しかける。

「〃マルルウ〃？

マルルウは人の名前を覚えるが苦手なだけで、出来ない訳じや無いだろう？」

その声の優しさに、マルルウは顔を上げてアキラと目を合わせる。そこに在るのは、今までに見た何よりも深い蒼色の瞳。

「それにさ、マルルウが名前を呼んで貰えなくて悲しいように、

俺も名前を呼んで貰えないと悲しいんだよ？」

そう言ってアキラはほんの少し、哀しみの色の混じった笑顔を浮かべる。

マルルウは泣くのも忘れて、その哀しくも美しい表情に魅入られる。

「だから、さ……名前を呼んで？マルルウ。」

囁くように言われたその言葉に、マルルウはまるで熱に浮かされたように呟いた。

「……アキラ、さん。」

その瞬間、アキラの表情は満面の笑顔に変わった。

先程までの哀しみを秘めた笑顔ではなく、ただ純粹に喜びだけが満ちた笑顔に。

「ありがとう、マルルウ。」

「はわわわわわ!!ど・どういたしましてですよ〜!」

初めて人の名前を呼んだのが恥ずかしかったのか、笑顔でお礼を言われたのが恥ずかしかったのか、

マルルウは顔を真っ赤にすると、どこかへ飛び去ってしまう。

残されたアキラは再び目を閉じ、樹に背を預ける。

そして、誰にも聞こえない位小さな声でそっと呟く。

——そう、名前を呼んで。俺の名前を。

——俺が〃俺〃である事を確認できるように。



## 日常話く風雷の郷く

「母上ー!はーはーうーえー!?!」

今日も今日とて、鬼姫の御殿に元気な子供の声が木霊する。

「何じゃ、スバル?騒々しい。」

我が子の声に、未だ若く美しい母が表に出てくる。

すると、そこには全身ずぶ濡れの子供二人と、青年が一人。

「はは、こんにちはミスミ。」

ずぶ濡れのまま青年の挨拶は、何処か間が抜けていた。

この島ではミスミを呼び捨てにする者は少なく、

当然キュウマとしては、新参者のアキラがミスミを呼び捨てるのを快く思っていないが、

ミスミの一声により不問とされている。

青年の間の抜けた様子に呆れ、しかしどこか喜びの色を混ぜてミスミが問いかける。

「アキラ!?お主までどうしたのじゃ?」

「あく、それが……。」

「アキラってば蓮渡りの途中で寝ちやっただぜ!」

アキラの言葉を途中で遮り、スバルがどこか楽しそうにミスミに伝える。

ミスミが目でアキラに問いかけると、「あは、あははは。」とバツの悪そうな笑いが返ってきた。

「そのままアキラが沈んでっちやうから、オイラとパナシエで助けてやっただ。なー?」

「う、うん。」

スバルの同意を求める声に、パナシエと呼ばれた犬の亜人がどこか脅えたように肯定する。

「それは難儀じゃったな。」

何はともあれ、そのままでは風邪を引いてしまうぞ、お主たち。まずは風呂に入つて来るが良い。」

いつも泥だらけで帰つて来るスバルの為に、鬼姫の御殿では早くから風呂の用意がされている。

ミスミに軽く背を押され、三人は風呂場へと向かう。

アキラはスバルに手を引かれ、「早く早く！」と急かさながら、それを「はいはい。」と軽く流す。

逆の手でパナシエの手を引くアキラには、既に何度も寝泊まりさせて貰つたからか、

特に遠慮した雰囲気は無い。

その様子にミスミは満足そうに微笑むと、

女中に着替えと食事の用意をするように伝えに向かった。



### 脱衣所

「パナシエは風呂に入つても平気なのか？」

「うん、大丈夫だよ。お湯から出る時は体が重いけど。」

「(やっぱりただの犬とは違うんだな。)」

### 風呂場

「やったー！一番乗りー！」

「こら、スバル！飛び込むんじゃない！それと、体を流してから入れ！」

「ちえー。」

「二人とも、ちゃんと肩まで湯に浸かるんだぞ。」

「はーい。」



三人が風呂で騒いでいる間に、居間では幾分か早い夕餼の支度が進められた。

そして準備が整ってすぐ、スバルが二人を引き連れ駆け込んで来た。

「母上、お腹空いた!」

スバルとパナシエは作務衣(さむえ)に良く似た寝間着、アキラは紺色の着物だ。

「これ、慌てるでない!夕餼の支度ならば出来ておる。」

ミスミは慌ただしく座に着くスバルを諫めると、アキラの方に視線を移し、

感心したように見つめる。

「それにしても、お主は着物がよう似合うておるな。」

「まく、こんな髪と瞳になってるけど、俺は日本人だからね。」

アキラの照れを含んだ返答に、ミスミは「そうであったな。」と頷く。

そこへスバルの食事を催促する声が入り、四人での夕餼が始まった。



辺りが夕日で赤く染まる頃には四人の夕餼も終わり、パナシエは親の待つ家へと帰って行つた。

そしてパナシエの居なくなつた鬼姫の御殿では、

夕日の降り注ぐ縁側で三人の影が重なりあつている。

夕餼の直後あたりから眠気を訴えていたアキラが縁側で眠つてしまひ、

「そのままでは痛かろう」と、その頭をミスミが自分の膝に乗せてやったところ、

それを見たスバルが自分も混ざると言つてアキラの上に乗つたのだ。

スバルはアキラに乗つたまま、楽しそうにその日有つた事を母に話していたが、

そのうちに眠つてしまつたらしい。

我が子の安らかな寝顔を見、母は眩きを漏らす。

「やはり、子供には父親が必要なのじゃな。」

そして視線を自分の膝の上で眠る青年に移し、額に掛かる銀の髪を分けてやりながら語りかける。

「お主はどう思う、アキラ？」

当然、眠っている青年から返事は無かったが、母はその場に流れる穏やかな空気に頬を緩めた。

そして彼は遂に出会う

ジャキーニたちを懲らしめた翌日、俺は久しぶりに畳の感触を味わう為に鬼の御殿に来ていた。

畳に転がり、そのすべすべとした感触と真新しいイ草の匂いを楽しむ。

しばらくすると、隣の部屋からアティとミスミの声が聞こえてきた。

どうも、ミスミがアティに島の子供たちの先生になってくれと頼んでいるらしい。

「……ウイルくんの為の先生でいてあげたいんです。」  
「こんのオ——バカタレがアアツ!!」

「きやつ!?!」

突然の怒鳴り声に跳ね起きる。

目茶苦茶聞き覚えのあるその声に、俺は膝立ちのまま、襖をちよつとだけ開けて確認する事にした。

ああ、やつぱゲンじいだよ……。

「若造め、知ったような口を叩くでないわい!」

「ご老体……いつ、こちらに!?!」

「つい、さつきじゃよ、ミスミ殿。」

唐突に現れ、説教を始めるゲンじいに、ミスミが驚きの声をかける。それをさらつと流すゲンじい。

「つーか、ミスミに気付かれずに近付くなんて何者だよアンタ。」

あ、ミスミがこつちに気付いた。

「ここは唇に指を当てて沈黙の合図だ。しーつ、と。」

ゲンじいは嫌いじゃないけど、小言が多いから……。

「な、何なんですか?このオジイさん……。」

「こつちの世界の教師がやって来たと聞いて、見に来てみれば……実

になつたらん！」

見知らぬ人間に怒られ、うろたえるアテイに、ゲンじいは更に憤然と怒鳴りつける。

……何か勘違いしてるなあ。

教師は教師でも、アテイは家庭教師で、ゲンじいが考えてるような学校の教師じゃないのに。

しかも新米だし。

「言うに事欠いて、一人の為の先生でいたい、だとオ？」

『子供たち』を導いてやれぬ者が、『子供』を導ける筈無かろうがッ

!!

「!?」

これぞ真理! って感じて言い切ったゲンじいに、アテイが衝撃を受けたように固まった。

けど……逆じゃないかな？

『子供』を導けなきや、『子供たち』なんて導ける訳ない。

複数よりも単数の方が楽に決まってる。

つか、アテイは家庭教師なんだから、たった一人の為の先生でいいんだって。

「ついて来い！ワシが貴様に教師の何たるかを教えてやるわい！」

「は？ちよつと!? そんな、引つ張らないで下さいい!?」

おっと、ここまでかな。

いくら教師魂に火が付いたからって、無理強いは良くない。

ちよつとからかつて煙に撒こう。

「おいおい、こんな衆目の中で誘拐かよ。

いくらアテイが若くて可愛いからって、それじゃ犯罪だぞ、エロジジイ。

ああ、仕事絡みだからセクハラか？」

俺が毒を吐きながら襖を開けて現れると、

アテイを引つ張って行こうとしていたゲンじいが顔を赤くして動きを止める。

「な、何じゃとッ!?ワシは教師の何たるかを教えようと……っ！」

「はいはい。

そんな事言っても、アテイから離れないその手が全てを物語ってるよ。」

「ッ!!」

ゲンじいは慌ててアテイから手を離すと、今度は俺の首根つこを捕まえた。

「おのれ小童が！今日こそ、その性根を叩き直してやる!!」

俺はそのまま引きずられて行き、ゲンじいからお説教を喰らった訳だけど、

その甲斐なくアテイは島の子供たちの先生を引き受けちゃったらしい。

まあ、お説教の方は例によって例の如く、途中で眠り込んでしまっただけ。

うくん、こんな時はこの病気に感謝、だな。



翌日、空は気持ち良い晴れで、俺は森の中を散歩してた。

そう、散歩してただけの筈なのに——どうして俺は捕まってるんだ？

……状況を整理してみよう。

目の覚めた俺は、いつものように暇を持て余し散歩に出た。

ここまでは問題無い。

森の中を散歩したら、ネコを連れた少年が、でかいオッサンに捕まってる所に出会った。

今思えば、これが失敗だったな……。

たった一人の少年に、大の大人が寄ってたかって武器を突きつけてる。

その様子に思わず口走っちゃったんだよ。

「……ダサ。」

この一言でそいつらの俺に対する扱いが決まった。すなわち敵で、捕虜だ。

抵抗しようかとも思ったが、人数差を考えればそれは無理つてモノだ。

それに奴らの格好は、明らかに軍隊か何かだった。

多分アルデイラの言つてた‘帝国軍’つて奴らだと検討を付け、隙を見て逃げるために大人しく捕まっただったな。

で、捕まっただけがいいが逃げる隙なんかありやしない。

そうこうする内に、奴らの本隊まで連れて行かれてしまった。

……こりゃ駄目かな？

△▼△△▼△△▼△△▼△▼△▼△

突然の嵐に巻き込まれ剣を紛失し、なんとか流れ着いた島で隊を立て直した。

そして島の探索のため派遣した部下が捕虜を捕まえた聞き来てみれば、

ネコを連れた子供と優男が縄で縛られていた。

……これは何かの冗談か？

「……ギャレオ、これは何だ？」

「はっ、捕虜であります！」

副官になってそれなりになるギャレオの返事に、頭痛を感じながら質問を重ねる。

「男の方はともかく、この子供もか？」

「はっ、この子供は男の仲間だと思われます！」

思われます、だと？確認も取らず、いきなり捕まえたと言うのか？

酷くなった頭痛に耐えながら、最後の質問を試してみる。

「……何を根拠にこの者たちを捕らえたのだ？」



「はっ、それは……その……。」

まともに答える事も出来ないギャレオに、私の忍耐も限界がきた。「何の根拠も無しに、年端もいかぬ子供を剣で脅し、捕らえたと言うのか!？」

貴様は帝国の威光を汚すつもりか!」

「はっ、も・申し訳ありません……。」

大きな体を小さくして悄然としているギャレオを横目に、捕らえられた二人に向き直る。

「私は帝国軍海戦隊所属、第六部隊隊長、アズリア・レヴィノスだ。

お前たちはこの島の者か？」

……それともビジュの報告に有った反逆者か？」

言葉の最後の部分にだけ剣呑な雰囲気混せてやる。

案の定、子供の方は気圧されたようで怯えているが、

優男の方は気にした風も無く返事をしてきた。

「俺はアキラ。まだ日は浅いが、この島の住民だ。

更に言えば、あんたたちと一戦交えたのも、この島の住民だよ。

後、そっちの少年とはさつき初めて会った。」

そこで優男は言葉を切って、子供の方をちらりと見た。

子供はまだ怯えていて何も話せそうにない。

それを確認すると、優男は深く溜息を吐くように言葉を続ける。

「それにしても、反逆ねえ……。ここは帝国領じゃないんだがな。

それとも、あんたたちは『侵略』に対する自衛を反逆って言うのか?」

「何だと、貴様!」

「止せ、ギャレオ。」

優男の言葉に熱くなるギャレオを手で制し、話の続きを聞いてみる。

「『侵略』とは、どういう事だ？」

報告では、はぐれに襲われ撃退しているところをお前の仲間によられたと聞いているが?」

「そのはぐれが、この島の住民なんだよ。」

「何?」

「だから、この島の住民は全員はぐれ召喚獣なんだって。

それをアンタたちが突然襲うから、みんな応戦しただけ。」

うんざりしたように話す優男に、どういふ事が尋ねようとすると、

今まで怯えていた子供が大声を出した。

「待って下さい!この島には人の暮らす村か町が在るんじゃないんですか!」

妙に切羽詰まった声に、私は開きかけた口を閉じ、優男の返事を待った。

それに、それは私も聞きたかった事だ。

「……君の期待を裏切るようで悪いんですが、

この島に住んでいる人間は、私とゲンじいの二人だけです。」

「そんな……。」

突然口調を変えた優男に不可解さを感じながら、子供の様子を窺ってみる。

優男の言葉がそれほどショックだったのか、すっかり気落ちして座り込んでしまった。



「嘘を吐くな!召喚獣がいるなら召喚士が居る筈だ!

貴様がそうなのではないのか!」

少年の問い掛けに答えてやると、突然でかいオッサンが怒鳴り出した。

その途端に少年が再び怯えモードに入ってしまう。

まったく、軍人つてのは皆こうなのかね。

本当は口を開くのもウザかったが、黙っていると何をしてくるか分からないので、

仕方なく答えてやる。

「俺もはぐれさ。召喚士は居ない。……どこにもな。」

自分で言ってる事なのに、途中から答える俺の声に苦いモノが混じる。

胸に大きな穴が開いたようで、オッサンに対する苛立ちも消えてしまふ。

そう、居ないんだ。誰も帰れない。

……絶対には。

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△

恐怖とショックで何も考えられなくなっている僕の耳に、

深い哀しみと絶望に塗り込められた声が届いた。

それは僕が勝手な望みを掛けていた人の声だった。

その声は、僕の受けた痛みとなんて比べられない位の痛みを秘めていて、

僕は自分の事も忘れてその人を心配していた。

「あの……大丈夫ですか？」

僕が声をかけると、まるで泣いているような笑顔で「大丈夫です。」と応えられた。

全然、大丈夫そうに見えないのに、僕に気を遣ってる。

僕が……子供だから。

また落ち込みそうになる僕に、その人は自己紹介してきた。

「先程も聞かれたかもしれませんが、私はアキラ。一応、はぐれ召喚獣です。」

良ければ君の名前を教えてくださいますか？」

その物言いに、初めてこの人が僕だけに丁寧に振る舞っている事に気が付いた。

その事に少し戸惑いながらも、自己紹介を返す事にした。

「……僕はウイル。ウイル・マルティーニと言います、アキラさん。」

僕がぎこちないながらも、何とか笑顔で名乗ると「よろしく。」と綺麗な笑顔で返された。

成る程……あの人の言ってた通りだ。

「マルティーニだど？ 帝国でも屈指の貿易商の名だな。」

それがどうして、こんな所に居るのだ？」

せつかくアキラさんの笑顔で和んでいたのに、無粋な女隊長のせいで台無しになった。

僕是不機嫌さを隠しめせず、女隊長をしばらく睨み付けてから話し始めた。

「……僕は軍学校に入る為に、家庭教師と船で工船都市パステイスに向かっていました。」

その途中で海賊に襲われて、嵐まで起きて、この島に流れ着いたんです。

今は、不本意ながら海賊の世話になっています。」

「成る程、辻褄は合うな。」

と言う事は、ビジュの報告にあつた人間とは、その海賊共という事だな。」

僕の話で納得したのか、女隊長はそう呟いてから少し考えて、

部下に僕の縄を解くように言ってくれた。

この人は……そんなに悪い人じゃ、ないのかもしれない。



「待って下さいよ、隊長殿オ。そんなガキの戯言を信じるんですかい？」

ウイルクんの縄が解かれた時、顔に入れ墨をしたチンピラ風の男が現れた。

何だコイツ？

黙ってチンピラ風の男と怖い姐さんの話を聞いていると、

どうやらこのチンピラ（もう決定）がアルデイラやアティに伸された奴らしい。

それでウイルくんを人質にしようと提案してる。

……最低だな。

俺が何か言ってるやろうとしたら、姐さんが低く押し殺した声を出した。

「……では、お前はこの子供に縄を掛け、捕虜として扱えと言うのか？」

「ヒヒ、それが利口ってモンですよ。」

「この愚か者め！」

どこの馬の骨かも判らぬ輩に負けただけでは飽き足らず、まだ恥の上塗りをする気が！

それとも貴様は、こんな子供を人質に取らなければ戦えない臆病者なのか！」

「っ!!……ちっ、勝手にしやがれ！」

おお、上手いな。

チンピラは姐さんの挑発にあっさり乗って、捨て台詞を吐いて逃げるように去っていった。

その後ろ姿が見えなくなった頃、ウイルくんが小さな声で姐さんに尋ねた。

「どうして、助けてくれるんですか？」

その質問に、姐さんは初めて見せる微笑みで答えた。

「帝国の民を守るのが、私たち軍人の務めだ。」

……良い人じゃん。チンピラの仲間とは思えないな。

名前はアズリア、だったかな？

駄目元で聞いてみよ。

「なあ、アズリア。ついでに俺の縄も解いてくんない？」

まるで冗談でも言うように笑顔で軽く聞いてみると、

アズリアは少し考えてからニヤリと笑うと、交換条件を言ってきた。

「島の者たちが我々の邪魔をしないと約束するなら、縄を解いてやつ

「でもないぞ?。」

やっぱり笑顔で拒否してみる。

「そう言われても、俺たちも自分の生活は守りたいし?。」

アズリアは更に笑みを深める。

「ならば交渉は決裂だな。」

最後に子供のように言い放つてみた。

「アズリアのケチー。」

何故かアズリアとのお喋りは楽しい。アズリアも楽しそうに笑っている。

まるで学校の友達と喋っているみたいだ。



深い森の中、紅い髪を靡かせながらアテイが走っている。

その顔は後悔と不安に彩られ、いつもの心暖まる笑顔は無い。

何かを必死に探すその瞳に、小さな人影が映る。

アテイは期待と不安を胸に、人影に走り寄る。

しかし、それは求めていた人ではなく、機械の少女の影だった。

アテイは落胆を顔には出さないように、クノンに尋ねる。

「クノンさん、ウィルくんを見ませんでしたか?。」

しかし、返ってきた言葉は望んだ物ではなく、更に落胆が募る。

途方に暮れるアテイに、クノンが逆に尋ねる。

「アキラ様をご覧になりませんでしたか?。」

「見てませんが、アキラさんに何かあったんですか?。」

今、心を占めている不安のせいか、

アキラを探しているとの言葉に不吉な物を感じ、アテイの声が震える。

それとは対照的に、クノンはいつもの抑揚のない声で告げる。

「いいえ。昏睡の原因が判明したので、アルティラ様がお呼びなので

す。」

「そうだったんですか。……良かった。」

あー！じゃあ、アキラさんの病気も治るんですね？」

悪い状況の中、唯一の明るい報せにアティは頬を緩ませるが、返ってくるのは感情の伺えない声。

「それはまだ判りません。今は原因が判明しただけです。」

「あ、そうか。そうですよね。じゃあ、アキラさんを見かけたら――」

「センサーに反応。竜骨の断崖に人と思われる反応があります。」

「っ！行きましょう！」

アティの言葉を遮り、クノンがセンサーに何かを感知した事を報せる。

それはウイルかアキラが近くに居る可能性を示しており、アティの足を動かすには十分な物だった。



「隊長、本当にその者は来るのでしょうか？」

「来る。それがもし、あの者ならば、必ずこの子供を救いにやって来る。」

私が知っている、あの者ならばな。」

……崖の端で、オツサンとアズリアが勝手な事を言ってる。待ってる位なら、使いを出すとかすればいいのに。

ウイルくんの縄は解かれたけど、俺の縄は付いたまま。

……どうすつかいな？

「――来たな。」

「ウイルくん！アキラさんまで!？」

え？あ、ホントだ。アティとクノンさんが森から出てきた。

あはは、二人とも驚いてるよ。

まあ、知り合いが縄を掛けられてたら、普通驚くだろうけど。それにしても、アズリアってばやけに嬉しそうだな。

「アズリ、ア……？」

ん？アティはアズリアと知り合いなのかな？

「ふふ、向こう見ずなのは学生の頃とちつとも変わらん……アティ。」

ああ、成る程。二人は同級生な訳か。

と言う事は、穏便に話が終わるかもしれないな。

「帝国軍海戦隊所属、第六部隊隊長。これが今の私の肩書きだ。

今なら海賊共と暴れた事は見逃してやろう。

大人しく投降しろ。悪いようにはしない。」

「……それは、出来ません。」

「どう——。」

「どうしてですか!?アイツらは僕たちの船を襲った海賊なんですよ!

どうして……信用出来るんだよ!？」

あらま、ウイルくんてば爆発しちゃったよ。

言葉を遮られたアズリアも、ウイルくんの勢いに黙って様子を見ている。

うくん、何か張り詰めてると思ってたけど、そういう事か。

でも、部外者の俺には何も言えないな。

ここはアティに期待しよう。

「仲間だから、ですよ?貴方だって解ってる筈ですよ。

確かに彼らは私たちの船を襲ったけど、いい人たちだって。」

「っ!!」

アティの疑う事など何も無いという純粋な言葉に、ウイルくんは息を飲み、目を見張る。

この子も本当は解っていたんだろう。

カイルたちは確かに海賊だけど、意味も無く暴力を振るうような人間じゃない。

アティの完全勝利、だな。

唇を噛んで涙を堪えるウイルくんに、アティが優しい眼差しを向け



る中、

アズリアが表情を厳しくして声を上げる。

「……よかろう。だが、我々の邪魔をするなら容赦はせんぞ！」

「……解ってます。」

アテイも表情を引き締めて応える。

全てを言わなくても、お互い通じ合う。時の重なりが生み出す、目に見えない絆。

……今の俺には無いモノ。

こんな時だけど、二人が少し……羨ましい。

アズリアが、涙目のウイルくんの背中を優しく押して「行け。」と囁く。

ウイルくんがこつちを見て戸惑っているので、小さく頷いて促してやると、

まだ躊躇いながらもアテイの所へ走り始める。

すると、アズリアが俺の方へ歩いて来て剣を抜き、縄を斬ってくれた。

「アズリア？」

「お前も行くがいい。」

何だかやけに疲れた声を出すから、つい軽口が口を突いて出た。

「人質はいいのか？」

「馬鹿にするな。帝国軍は人質なんぞ取らん。」

その少し怒ったような様子が、すっかり元に戻ったようで二人して少し笑った。

「さあ、もう行け。」

アズリアの声に頷いて、アテイたちの所へ向かう。

二、三步歩いた時に、まだ礼を言っただけの無事なアズリアに声をかけた。

「サンキュー、アズリア。」

「さんきゅー？」

首を傾げて可愛らしく言うものだから、俺は笑いながら意味を教えよう。

「ありがとう、て意味だよ。」

そして今度こそ、アテイたちの方へ走り出した。

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△

「ありがとう、か。……ふ、らしくないな。」

赤くなってしまった顔を自嘲の笑みで誤魔化しながら、部隊に指示を出すため後ろを向いて歩き出す。

……もう、アテイと共に歩く事はあるまい。

少し落ち込んでいる私の耳に、下品な笑い声が届く。

「ヒヤハハハ！そう簡単に終わってもらっちゃ困るんだよ！」

ビジュ!?

慌てて振り向いたその先には、先程別れたアキラがビジュに羽交い締めにされ、

ナイフを突きつけられている姿があった。

「ヒヒヒ、いけませんねえ、隊長殿オ。アイツらは帝国軍に刃向かう海賊でなぜ？」

「ならば真つ向から勝負を挑み、打ち負かすまでだ。

その男を離せ、ビジュ。これは命令だ！」

「ヒヒヒヒヒッ、残念ながらそれには従えませぬねエ。

俺はソイツらに借りがあるんだよ。

この手でぶちのめさなくちや気がすまねエぜ!!」

くっ、愚か者め!

しかし、どうすれば……っ。

下手に動けば、ビジュは躊躇わずにアキラを傷つけるだろう。

かと言ってあの体勢では狙撃も出来ん。

……今、私に出来るのは、状況に変化があればすぐに動けるように隊を整える位か!



あの人の、先生の所へ走っていると、後ろから下品な笑い声が聞こえてきた。

振り向くと、ついさつき女隊長にやり込められた刺青の男が、アキラさんを羽交い締めにしてナイフを突きつけている。

頭の中が真っ白になる。

助けなきや!という思いだけは強く残って、気が付くと僕はアキラさんの方へ走っていた。

「アキラさ——ん!!」

「ミヤミヤミヤ、ミヤ——ッ!!」

僕は沸き上がってくる心のままに、僕の中で膨らんだ魔力を解き放った。

それは威力なんて全く無い、光と音だけが派手な物だったけど、一瞬の隙を作るには十分な物だった。

「しよ、召喚術だ?!」

刺青の男が怯んだ隙に、アキラさんは男のナイフを持った手を掴み、遠ざけ、

踵を思い切り男の足の指に落とした。

そうして羽交い締めから抜け出すと僕の方へ走ってきて、

あの綺麗な笑顔でお礼を言ってくれた。

「ありがとうございます、ウィルくん。お陰で助かりました。」

その笑顔と声に、僕が喜びを噛みしめっていると、刺青の男の声が邪魔をしてくれた。

「よくもッ!?!よくも、よくもッ!!まとめてエ……ブチ殺して……ッ。」

「てめえがなっ!?!」

「ぐひゃアっ!?!」

刺青の男がナイフを投げようとしたところを、いつの間に現れたのか、

海賊の船長が助けてくれた。

人助けをするなんて……本当に、変な海賊。

「総員、ビジュを援護！あの愚か者を、私の下まで連れて来い！」

女隊長の声と同時に、帝国兵たちが僕たちの方へ走って来る。

それを見て、アキラさんはテコを抱き上げると、僕の手を引いて走り出した。

「長居は無用、です。」

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△

俺は例によって例の如く、みんなの後ろでクノンさんと観戦をした。

それにしても、ウイルくんまで戦えるなんて、俺ってばかなり情けないな。

今度、誰かに戦い方を教えて貰おうかな？

大した時間もかからずに雑魚を倒し終わって、アテイがでかいオツサンと一騎打ちをしている。

何でナイフで戦ってるんだろ？

力押しじゃ不利だろうに。

俺がそう思った途端、アテイが鋭く高い音とともに碧の光に包まれた。

何だ？何が起こってるんだ!?

——器、黒い器、私の体

頭に直接響くようなドス黒い声。それと同時に頭に走る痛み。

まるで万力でゆっくりと締め付けられるような痛み。

『コレ』は少し前にも起きた事がある。

あれは……アテイに会う少し前だ。

——もう少し、後少しで出来上がる

出来上がる？　いったい何が？

必死に痛みを耐えるが、頭の芯が急速に冷え、血の気が無くなっていくのが分かる。

——お前に私を注ぎ込み、お前を私にしよう

……もう、ダメだ。

ぐらりと揺れる視界の中に、白く、そして碧くなったアテイを捉えながら、俺は意識を失った。

——ふふふ、器、黒い器、私の体

——もう少し、後、少し

## 開かれる扉

雲も無く晴れ渡る空、涼やかに吹き抜ける風。

今日も島は気持ち良い天気だったが、それとは全く逆の雰囲気を漂わせている人物が居た。

その人物は、借りている船室のベッドに力無く座り、酷く落ち込んでいた。

原因は昨日の事。

軍学校時代からの親友の、絶縁状とも言える拒絶の言葉。

そして、どうやら自分のせいで倒れてしまったらしい、最近できた優しい友人。

この二重の衝撃に、ただひたすら自己嫌悪に陥っていた。



その頃、船長室では海賊たちと少年が話し合っていた。

「ねえー、先生の事どうにかできないの？」

「どうにかって言ってもよー、ありや女隊長サンかアキラじゃなきや無理だぜ。」

頬を膨らませて不満を漏らす妹に、兄は苦り切った表情で答える。

「そうですね。私たちが行っても、無理に笑顔を浮かべられるだけですし……。」

「あの人は我慢し過ぎだよ。」

手がないのは召喚士も少年も同じようで、一様に暗い表情をしている。

「隊長サンの方は無理だから、アキラが良くなるのに賭けるしかない

わね。」

一番人生経験のありそうな彼にそう言われ、一同は押し黙る。

「アキラ……大丈夫かな……。」

少女の眩きは壁に当たって消えた。

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△▼△

昨日、アキラは倒れてからすぐにリペアセンターに運ばれて綿密な検査を受けた後、

点滴をつけられ寝かされていた。

「……アキラ様。」

今、アキラの側にはクノンが一人、その目覚めを待つて佇んでいる。検査は既に終了し、結果も出ている。

昏睡の原因について、アルディラは一つの推測を立てていたが、今回の事件と検査がそれを確認した。

すなわち、アキラの異状には遺跡が関係している、と。

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△▼△

喚起の門は、自動召喚の門である。

では召喚のための魔力は、どこからきているのか？

世界からである。

喚起の門は、その付属する施設によって世界に漂う微量の魔力を集め、召喚に使用している。

それと同じ現象がアキラの体にも起きていた。

辺りに漂う魔力が、何らかの方法でアキラに注ぎ込まれているのだ。

アキラが元からそのような体質だったのか、召喚された際に偶然そうなったのか、

あるいは遺跡に手を加えられたのか。

封印の剣に反応を示した事から、遺跡が何かしたのはまず間違いないだろう。

しかし昏睡の直接の原因になっているのは、その魔力の摂取量だった。

己の限界を超えて取り入れられ続ける魔力にアキラの体は耐えきれず、

強制的な眠りに入って体力を温存し、それによって現在の状況に対し適応しようとしていた。

その結果が髪と瞳の変質であり、運動能力の向上であった。

これはアテイの抜剣時と同じ状態である。

原因は明らかになったが、だからと言って有効な治療法がある訳ではなく、

現在はどうすれば良いのかアルデイラが検討している。

アキラは今、遠く離れた紅き女性の後悔にも、近くに佇む機械の少女の心配にも気付かず、

ただ、眠り続けている。



私が、もつとしっかりしていれば……。

私が、もつと強ければ……。

アズリアに嫌われる事も、アキラさんを傷つける事も無かったのに……ッ！

カーテンを閉め、薄暗くなっている船室のベッドで、紅き女性は膝を抱きしめ顔を埋めていた。



誰かが様子を伺いに来れば笑顔を造るが、食事には手を付けず、用事がある時以外はずっと船室に引きこもっている様は、とても放っておけるものでは無かった。

しかし、海賊たちにも少年にも有効な手だては無く、ただ一人、この状況を打開できる青年を待っていた。

△▼△△▼▼△△▼▼△△▼▼△

私が暗い船室でうずくまっていると、不意に外が騒がしくなりました。

また、誰かが様子を見に来たのでしょうか？

だったら笑わないと……。

みんなが心配するから、笑顔を見せなくちゃ。

でも、トタトタと、できるだけ静かに歩こうとするこの足音は……？

いいえ、そんな筈ありません。

あの人は今もまだ眠っている筈です。

……私の、せいで。

足音が私の船室の前で止まると同時に、ドアが勢いよく開かれました。

開かれたドアの向こう、明るい昼の日差しの中には、私のせいで倒れてしまったあの人が、

私の心の半分を占めていたあの人が、いました。

「おはよう、アティー！」

「アキラ、さん……？」

予想外に元気なアキラさんの声と姿に私が呆然としてみると、  
当の本人はずかずかと船室に入って来てカーテンを押し開きました。  
た。

「どうしたんだよ、こんなに部屋を暗くして？これじゃ病気になるよ

「？」

「あの、それは……その……」

私が半ばパニツクになって、しどろもどろしていると、

アキラさんはその場でクルリと一回転して笑顔で聞いてきました。

「どう、この服？ヤツファアに貰ったんだ。」

そう言われて、初めてアキラさんの服が変わっている事に気付きました。

下は以前と同じ、ジーンズと丈夫そうなブーツでしたが、

上は黒いタンクトップと、ヤツファアさんの物と似たようなメイトルパのベストでした。

「どう？似合う？」

笑顔で尋ねてくるアキラさんは、どこか初めて服を買って貰った子供のようで、

つい『笑って』しまいました。

「クス。ええ、よく似合ってます、よ……って、そうじゃありません！

私、アキラさんに謝らないと！」

そうです！ビックリし過ぎて忘れてました。

アキラさんは私のせいで倒れてしまったんです。

私の、せいで……。

「謝るって——何を？」

「え？」

顔を上げると、そこには不思議そうに首を傾げたアキラさんがいました。

「だ、だって、私が剣を喚んだからアキラさんが——。」

「ああ、別にいいよ。アティが剣を喚ばなくても、どうせ眠っちゃう時間だったし。」

「で、でも！」

アキラさんは軽い事みたいに言ってくれましたけど、それじゃ私の気が済みません。

そう思っ言葉が続けようとしたら、とんでもない一言がアキラさんの口から出ました。

「じゃあさ、デートしよう！」

「はえ？」

デート。

親しい男女、主に恋人と一緒に遊びに出かける事。

……………。

……………。

「つて、ええええええ!!? デ、デートつて、私とアキラさんが!？」

「そーアテイは俺にお詫びがしたいんだろ？」

だから、今日一日デートしてくれたら許してあげるよ。」

「それは、その……でも……／／／」

あわわ、ど・どうしましょう？

顔が熱い。きつと真つ赤になってます。

「俺と一緒にじゃ……イヤ、か？」

……………!

アキラさんが悲しそうに顔を俯けました。

その表情は、反則です！

「い、イヤじゃありません！デートします、しますから！」

私が慌てて言うと、アキラさんはパツと顔を上げて笑顔を浮かべました。

「よっしゃー！善は急げ、だ。行こう、アテイ！」

アキラさんはそう言うと、私の手を掴んで駆け出しました。

少し眩しい日差しに目を細めます。

ああ、どうして貴方はそんなに凄いですか？

貴方はとても自然に、私に光をくれる。

光の下に連れ出してくれる。

このままじゃ、私は貴方から離れられなくなりそうです。

アキラさん。



俺は少し強引にアテイの手を掴んで船室から飛び出した。  
行き先はまだ決めてないけど、今は何故だか走りたい気分。  
何処がいいかな？

妖精の花園に行ってもいいし、魔晶の台地でも綺麗な所をこの前見つけた。

畳の上でのんびりしてもいいし、ここじゃない場所の映像を見せて貰うのも楽しい。

アテイは何処が好きかな？

いつその事、全部廻ろうか？

さつき船を降りる時、カイルに「アテイとデートに行つて来る」と言つたら、

「おう、バシッと決めてこい！」と言つてくれたから、

少しくらいなら遅くなっても問題ないだろう。

その後、「ちよっ!?デートってどういう事!?アキラー!先生ー!」  
って聞こえたような気がするけど、多分気のせいだろ。うん。

「ま、待って下さい、アキラさん!そんなに急いで何処に行くんですか?」

逸る気持ちのままに走っていた俺は、アテイの声で我に振り返りを止める。

「ご、ごめん、アテイ。俺、つい嬉しくて。」

慌てて謝る俺に、アテイは柔らかな笑顔で「いえ、いいんです。」と言つてくれた。

その笑顔にちよつと落ち着いて、アテイの顔を窺う。

「えと、アテイは何処に行きたい所ある?」

「いえ、特には。アキラさんにお任せします。」

ここまで走つて来たせい、顔を赤くしているアテイにエスコート役を仰せつかつて、

行き先を考え出した時、大事な事を思い出した。

「あーそうだ。まずはラトリクスに行かなきゃいけないんだった。」

「どうしてですか?」

「アティにアルデイラから伝言があるんだ。」

『貴女が拾ってきた彼、気が付いたわよ。』だつてさ。」

俺が伝言を伝えてからしばらくの間、アティは首を傾げていたが、ようやく合点がいったのか「ああ！」と手を合わせた。

「思い出したところで、ラトリクスに行こうか？」

そう言つて手を差し伸べると、アティは「はい。」という返事と共に自然に俺の手を取る。

そして俺たちの手は、ラトリクスに着くまで繋がれたままだった。



「あら、アティ。いらつしやい。」

……ところで、どうして貴方たちは手を繋いでるのかしら？」

『その時、場は極寒の冷氣に包まれた気がしマシタ。』（アキラ談）

アキラったら、どういうつもりなの!?

クノンの前で他の女と手を繋ぐなんて！

「あ、あの、アルデイラ。あの人が目を覚ましたって聞いたんだけど？」

慌てて手を離したのはいいけど、赤くなった頬が気に入らないわね。

何か二人の間に進展でもあつたのかしら？

……まあ、いいわ。

後でアキラに言い聞かせれば、何とかなるわ。

それに、今はアティの拾つて来た人間の事もあるし。

「……ええ、目は覚めたんだけど、ちょっと問題があるのよ。」

「問題、ですか？」



「記憶の混乱、って、どういうことですか？だって、検査の結果は異常な  
いって……。」

「その通りです。再検査でも、なんら肉体的な異常は発見されません  
でした。」

推測される可能性は、おそらく……。」

「心因性のもの。そう言いたいよね、クノン？」

「はい……。」

会話によるリハビリが、あの患者を完治させる最良の方法なのだと  
は解っています。

ですが、私には……それを達成するだけの機能がありません。

そこでアテイ様の力を借りるのが最良と判断したのです。」

そう、私には『ココロ』が解らない。

アルディラ様にゆっくり考えるように言われたけれど、まだ解らな  
い。

やはり、機械人形には解らないのでしょうか？

「分かりました。そういう事なら——。」

「駄目！アテイはこれから俺とデートだから。」

アテイ様の言葉をアキラ様が途中で遮りました。

……デート？

親しい男女、主に恋人が（以下略）。

「……お二人は、恋人になられたのですか？」

おかしい。

体にはどこも損傷は無い筈なのに、大きな穴が空いてしまったよう  
に感じる。

センサーの故障だろうか……？

「ち、違います！恋人になったとかじゃなくて、

二人で遊びに行こうって言ってただけです！ね、アキラさん!？」

「ん〜。まあ、そういう事にしておきますか。」

お二人が恋人でないと聞いて、何故か私は『安心』しています。  
先ほど感じた大きな穴も、なくなつたような気がします。  
——やはり後でチェックを行った方がいいかもしれません。

## 変化

「具合はどうですか？イスラさん。」

「……貴方たちは？」

にっこり笑って尋ねるアテイ。

しかし、突然訪れた二人の客に、彼は不思議そうに目を瞬かせる。その様子にアテイは、あ、といった感じで自己紹介を始める。

「初めまして、私はアテイと言います。」

貴方を見つけて、ここに連れてきたのが私なんです。」

「私はアキラと言います。まあ、貴方と似たような境遇のモノ、ですかね？」

その尻馬に乗って、俺も我ながら不可解な自己紹介を試してみた。

「……………は？」

案の定、彼は更に混乱したらしく、間の抜けた声を漏らして固まってしまう。

俺と彼との出会いは、こんな感じで始まった。



結局イスラを加え、その日は三人で島を廻る事になった。

集落を回って住民と他愛ない会話をしながら、綺麗な場所や面白かった出来事の話をするうちに、

アテイは元気になったみたいだし、イスラの顔にも笑顔が浮かぶようになってきた。

……まあ、デートは潰れてしまったけど、良しとしよう。

今は休憩という事で集いの泉に居る。



「どうでしたか、イスラさん？少しは気晴らしになりましたか？」  
「はい。久しぶりにすっかりと歩いて、外の日差しを浴びて、とても気分がいいです。」

本当にありがとうございます、アテイさん。アキラさんも。」

「いえ、私もこの島に人間が増えて嬉しいです。」

アテイの問いかけに、イスラは嬉しそうに答える。

そんなイスラに笑顔で応えながら、俺は二人の表情を窺う。

……どうやら今は無理して笑ってる訳じゃなさそうだ。

それにしても、特に面白い事がある訳でもないのに、

にこにこ笑ってる三人組って、端からみたら馬鹿みたいじゃないだろうか？

そんな事を考えていると、アテイが何かを思い付いたように聞いてきた。

「そう言えば……アキラさん、今日は眠くならないんですか？」

「ん、そう言われれば眠くないな。どうしてだろ？」

「どうしてでしょう？」

アテイと二人で首を傾げていると、イスラが遠慮がちに尋ねてくる。

「あの、どういう事ですか？」

「ああ、すみません。えくと、それについては長くなりますし、

道すがらお話しする事にして、今は日が暮れる前に帰りましょう？」

一人だけ話題に置いて行かれる形になったイスラに謝り、俺は帰る事を提案する。

いくら月明かりがあっても、夜の森は迷いやすい。

暗くなる前に帰らないと。

「そうですね。風も出てきちゃったみたいですし。」

「それじゃ、俺はイスラさんと帰るよ。アテイ、また明日。」

「あ、はい。また明日。」



アテイさんと別れた後、アキラさんは一言も口をきかずに黙々と歩き続けている。

何となく気まずくて、話しかけようとしたけど全て徒労に終わった。このままラトリクスまで歩くのは正直勘弁して欲しいと思い始めた時、

突然アキラさんは立ち止まり、僕の方を振り返った。

そこにはさつきまでの微笑みはなく、蒼い瞳には冷たい光を宿し、端正な顔には厳しい表情があつて、知らないうちにゴクリと喉を鳴らしてしまった。

……緊張、しているのか、僕は？

「イスラさん？」

さつきまでの明るい声とはまるで違う、感情の起伏が読みとれない冷たい声が僕の名を呼ぶ。

思わず裏返つてしまいそんな声を無理に押さえつけ、返事をする。

「は、はい？」

「私は、貴方がどうして無理に笑っているかは聞かないし、興味もありません。」

……でもな、俺の仲間を傷付けたら——殺すぜ？」

「っ!!」

怖い。

コイツは何の戦闘訓練も受けていなさそうだったのに、今は何をしても勝てる気がしない。

口の端だけで笑う表情の中で、蒼い瞳が闇を湛えて僕を見ている。恐怖で身動き出来なくなっていると、不意に笑みが元に戻り、プレッシャーが無くなった。

「早く帰りましょう？ 余り遅いとクノンさんが心配しますし。」

そう言つて何も無かつたように歩いて行く彼を、

僕は未だに固まったままの足をどうにか動かして追いかけるしかなかった。

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△

イスラと帰って来た翌日の朝、自然に目が覚めた。  
昨夜アルデイラの言ってた通りだ。

普通に夜寝て、普通に朝目が覚める。

……随分久しぶりだなあ。

体が適応したって事らしいけど、どう適応したんだろ？

時差ボケが治ったとか、そんな感じなのかな？

……まあ、いいや。

とりあえず普通に一日過ごせる事を喜んどこう。

さて、今日は何しようかな？

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△

「お手伝い、ですか？」

朝食の後、アキラ様が言われた事を確認の為に聞き返しました。

「ええ。折角、普通に生活出来るようになった事ですし、

今までお世話になった分、ご恩返しでもと思ひまして。」

そう言つて微笑むアキラ様を見ながら、やっていたただく仕事を検索  
しましたが、

ラトリクスでは常に私たちが働いているので、特にお任せする事は  
ありませんでした。

そこで少し考えて、お任せする仕事を導きだしました。

「……傍に、居て下さい。」

「え？あの、クノンさん？」

アキラ様が驚いたような、困ったような表情をしました。説明が足りなかったからでしょうか？

「私の傍に居て下さい。」

何かお任せしたい事があれば、その都度お願い致します。」

「ああ、何だ……つまり、クノンさんの助手って事ですね？

任せて下さい！」

アキラ様がいつもの綺麗な笑顔を浮かべてくれました。

本当は、ただ傍に居て“欲しかった”だけですが、これはきつと、言っではいけない事。

私は、アルディイラ様の——護衛獣だから。

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△▼

その日は一日中クノンさんの傍にいて、細々とした仕事を手伝った。

……まあ、あんまり手伝う様な事はなかったんだけど。

しかも、途中でまたあの頭痛に襲われた。

痛みは以前のように気を失う程のものでは無かったが、

俺は痛む頭を押さえながら、またアテイが抜剣したのだろうと考えた。

今回は『声』も聞こえず、すぐに頭痛は治まった。

そのまま手伝いを続けようとしたのだが、

心配したクノンさんに無理矢理寝かし付けられてしまった。

ベッドの中で、俺は頭痛について考えを巡らせる。

……アテイ、また誰かと戦ってるのか？

その夜、ラトリクスの自室でだらだらしていた俺は、

突然訪ねて来たマルルウに誘われて宴会に行った。

そこで初めて、みんながジルコーダと戦いに行っていた事を報せら

れた。

「どうして俺も連れて行ってくれなかったんだ」と拗ねてみれば、

一様に「仕方ない」と返ってきた。

戦えない者には危ないから、と。

仲間が、友達が危ない目にあっているのに、何も手助けできない上に足を引つ張りかねない。

そんな自分がみつともなくて、悔しくて……俺は一人、宴会から抜け出した。



逃げたり、隠れたり、見てるだけ。

……そんなのが嫌で、俺はキュウマに修行をして貰えるように頼んだ。

うん、頼んだのは俺だけどき——このままじゃ俺が死ぬ!?

〈修行・キュウマ〉

「戦い方を教えて欲しいんだ、キュウマ。」

虫退治を終え、宴会をした翌日、朝早くに訪れたアキラ殿は、開口一番そんな事を言つてのけた。

また何を突然……。

そう思い断ろうとしたが、その瞳が真剣な光を宿していて気が変わった。

「……何故、私に？ヤツファ殿の方が宜しいのでは？」

「俺の居た世界、正確には国だけど、そこは剣よりも刀の方が主流なん



「いつその事、このまま修行中の不慮の事故という事に……。」

「待てまてマテ！怖い事言うな!!」

「問答無用！往生して下さい、アキラ殿！」

「どわー——!?!」

結局、その日はミスミが止めに来てくれるまで、ひたすらキュウマに追い回されて終わった……。

そして、流れるにその日は鬼の御殿に泊まって、翌日。

目を覚ますと満面の笑顔のキュウマが側に居た。

「……キュウ、マ？」

「おはようございます、アキラ殿。今日も共に修行に励みましょう！」  
マジかよ……。

## 〈二日目〉

今日もアキラ殿と修行をするため、朝早くに彼の部屋を訪ねた。

起きたばかりの彼を昨日の場所に連れ出し、敵の攻撃をかわす修行と称し襲いかかる。

今日こそは仕止めてくれる！



いきなり襲いかかってきたキュウマの斬撃を、借りた刀で受け止める。

驚いたキュウマは飛び離れ、一旦間合いを取った。

俺だって昨日は伊達に逃げ続けた訳じゃない。

キュウマのスピードにも慣れたし、攻撃パターンも大体把握した。  
今日は一矢報いてやる！

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△

驚いた。

昨日とはまるで別人だ。

避ける動作に無駄が無くなり、私の攻撃の合間に反撃までしてくる。

まだまだ未熟な斬撃だが、その端々に私の斬撃を真似しようとしている意志が感じられ、

自然と口の端が持ち上がる。

面白い！私の技、盗めるモノなら盗んでみよ！

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△

「だー、疲れた！」

キュウマの修行が終わった後、俺は海賊船に来ていた。

甲板で大の字になり、涼しい海風に身を任せる。

既に陽は沈みかけで、日差しは肌を焼くものではなくなっている。

側ではアテイが腰を降ろして、にこにこしながら俺を見てる。

「お疲れ様です。大丈夫ですか？」

「無理！もー動けない。」

子供みたいに駄々をこねると、アテイはクスクス笑う。

それにつられるように、俺もへらりと笑う。

少しの間笑った後、思い出したようにアテイにお願いしてみる。

「なあ、アテイ。明日から俺に召喚術、教えてくれない？」

「え、キュウマさんとの修行はいいんですか？」

突然の申し出に、アテイは目を丸くして問い返してきた。



俺は不敵な笑みを浮かべ、答える。

「もうお墨付きは貰ったよ。」

『これだけ出来れば十分でしょう。後は様々な敵と戦い、経験を積むことです。』

「だつてさ。」

「——たった二日で、修行終わらせちゃったんですか？」

「そ。しかも必殺技まで教えて貰っちゃった。」

「え、どんな技なんですか？」

「秘密。」

にやりと笑い、教えようとしないうちに、アティは頬を膨らませて拗ねてしまう。

そこで慌てて今度見せてあげるからと約束し、機嫌を直して貰って話を戻した。

「で、教えてくれる？」

「まあ……そういう事でしたら。」

どことなくアティは不満顔のままだったが、俺は喜びいっぱいの笑顔で礼を言った。

「ありがとう、アティ！」

## 結ばれる絆

朝。

起きてから、いつものように鏡の前に座る。

櫛を手に取り、いつもより少し、念入りに髪を梳かす。

今日は、朝からアキラさんと一緒に召喚術の勉強です！

〈修行・アテイ〉

食堂に行くとき、もうみんな揃っていて私が最後でした。

「おはようございます。」と挨拶すれば、みんなからもそれぞれ挨拶が返ってきました。

アキラさんも眠そうな眼のまま、へによつと笑って「おはよう。」と言ってくれました。

朝から何だか良い気分です。



今日はアキラさんが一緒に勉強に加わると聞いて、僕らしくもなく緊張してる。

だって、あの人の前でみっともない所は見せられない。

この前からずっと言いたい事があって、練習に使っている森の中の空き地に着いてからも

チラチラとアキラさんを窺っていたら、アキラさんの方から話しか

けられてしまった。

「どうしたんですか、ウイルくん？」

「あのーその……」

抱き上げていたテコをぎゅっと抱きしめて、思い切って言うてしま  
う。

「僕の……僕の『兄さん』になつてくれませんか!？」

突然の事に、アキラさんはびっくりしてる。

呆れられたのかな？

ううん、嫌われてしまったのかも知れない。

そう思つて、そつとアキラさんを見上げると、優しい笑顔があつた。

「私と、兄弟になりたいんですか？」

「は、はい！」

静かで穏やかな声に、緊張しながら答える。

「兄弟になつたら丁寧な言葉使いなんてしませんよ？」

「構いません！」

「叱つたりするかもしれないですよ？」

「いいんです！」

期待で声が震えそうになる。

「こんな筈じゃなかったと、幻滅するかもしれませんよ？」

「そんな事ありません！」

思ったより大きな声で言い切つた僕に、アキラさんは清々しい笑顔  
を見せて言ってくれました。

「よし！じゃあ今から俺とウイルは兄弟だ！」

「……い、いいんですか？」

戸惑うように聞く僕に、アキラさんは照れたように言いました。

「ウイルみたいなた子なら大歓迎だよ。」

「あり、がとう……兄さん。」

抑えきれずに泣き出した僕を、兄さんはテコごと優しく抱きしめて  
くれた。



「あの、もういいですか？」

何故か突然、二人の世界に入ってしまったウイルくんとアキラさんに声をかけました。

ウイルくんに信頼できる人が増えるのは良いことの筈なのに、何だか胸がもやもやします。

除け者にされたからでしょうか？

「ごめんごめん。」

では改めて、アテイ先生お願い致します。」

ウイルくんを離しながら軽く謝った後、

アキラさんは右手を胸に当てて軽く腰を曲げ、仰々しく頭を下げました。

それが何だかお芝居のようで、さつきまでとは逆に自然と笑顔になります。

「では、召喚術の五つの属性から。」

それぞれ召喚石を用意しましたが、どれが何だか判りますか？」

私は眼鏡をかけて、足下に五色の石を置きました。

ウイルくんの授業でも最初にやった属性の説明。

その後、相性を調べるのが基本です。

「ああ、判るよ。黒がロレイラル、赤がシルターン、

青がサプレス、緑がメイトルパ、透明なのが名も無き世界。」

すらすらと答えるアキラさんに、パチパチと拍手を送って補足をいれます。

「はい、正解です。それぞれ機属性、鬼属性、霊属性、獣属性、無属性ですね。」

じゃあ次に、どの属性と相性が良いのか調べます。」

そう言った途端、テコが「ミャーミャー！」と鳴き出して、緑の召喚石を両手で挟み持ち、

アキラさんに差し出しました。

「こ、こらテコ！すみません、兄さん。」

「ああ、いいって。これからやってくれって事かな？」

そう言ってアキラさんがテコの頭を撫でると、私に窺うような視線を送ってきました。

「別にどれからでも構いませんよ。」

テコのお願いを聞いてあげたそうだったアキラさんは、私の言葉を聞いて、

見ているところちまで嬉しくなる笑顔を浮かべます。

「サンキュー、アテイ。」



「さんきゅー？」

「ああ、ありがとうって意味。それにしても……。」

俺が笑いを抑えていると、アテイが首を傾げながら聞いてくる。

「どうしたんですか？」

「いや、アズリアと同じ反応をするから、つい……くくく。」

「そうです、か……。」

急に表情を暗くしたアテイに、俺は笑いを納めて声をかける。

「——アテイ？」

「あ、すみません。何でも、ありません……。」

この表情は前にも見た事がある。

明るい月の下、白い浜辺で誰にも言えず、不安を溜め込んでた時の表情だ。

「アテイ、前にも言っただろ。」

『聞くぐらいなら俺にもできる』って。言ってみなよ？」

できるだけ優しく聞こえるように静かな声で言うと、アテイは迷うように視線を泳がせた。

「……アズリアの事だろ？」

「っ!!」

本人は目を丸くして驚いてるけど、バレバレだよな。そんな事を考えていると、アティは今にも泣きそうになっていて、慌てて声をかけた。

「大丈夫だつて！アズリアは良い奴だから、話せば解つてくれるさ。」  
そう言うのアティは「そうですね。」と言って、小さく笑みを浮かべた。



「おほん！」

アキラさんの優しい声に私が顔を上げ、その蒼い瞳を見つめていると、

横から遠慮がちな咳払いが聞こえてきました。

「どうでもいいですけど、早く先に進めませんか？」

ちよつとムツとしたウイルくんの声に、

いつの間にか近くにあつたアキラさんの顔から慌てて離れました。

私つたら生徒の前で何て事を……!!?

赤くなつてしまった表情の事はできるだけ気にしないように、

平静を装ってアキラさんの相性チェックの続きを始めます。

「えと、ではテコの持つている召喚石を掌に乗せてみて下さい。」

「りようか〜い。」

軽い返事をした後、アキラさんはテコの前でしゃがむと、掌を差し出して言いました。

「貸してくれるか？」

その声にテコは嬉しそうに鳴くと、石を渡しました。

すると緑の石が淡く光を放ちます。

「兄さんも僕と同じ獣属性ですね！」

「へ〜、そうなの？」

いつになく嬉しそうにはしゃぐウィルくん、

アキラさんは光る石を不思議そうに眺めながら応えるので、間違いないと保証して相性診断の続きを促しました。

「獣属性を使えるのは間違いありませんよ。」

「他にも使える属性がないか調べてみましょう。」

そう言つてアキラさんに霊属性の石を手渡します。

「あれ？コレも光ったけど？」

「本当だ……。兄さんは二つの属性が使えるんですね。」

「凄いですよ、アキラさん！最初から二つの属性を使える人は珍しいですよ。」

同じように淡く光る石をみながら、

いまいち凄さが解らなかつたのか、気のない返事をするアキラさんに

「念のため」と言つて機属性の石も渡してみました。

「……コレも光ってるけど？」

「……光ってますね。」

「こんな事もある物なんですなぁ。」

珍しい事もあるんだなぁ、と思いつつながら最後の鬼属性の石を渡しました。

「……………壊れてるんじゃない？」

「……………」

「そ、そんな筈ないんですけど??？」

アキラさんの掌には淡く光る石。

困惑しつつも自分で手に取つて確かめました、

やっぱり強い反応を示すのは元々使えた霊属性しかなくて、

アキラさんは四属性が使える特異体質だという事で納得するしかありませんでした。

そこでアキラさんを元氣付ける意味も込めて、笑顔で贖辞を贈つてみました。

「きつと石が壊れてるんじゃないかって、アキラさんが普通じゃないんですよ。」

「……………」

あ、あれ？私、何かおかしな事言いました？

△▼△△▼△△▼△△▼△▼△

何だか俺は特異体質らしい。

まあ色々使えるのは便利でいいけど。

そんなこんなで本格的な修行を開始する事になった。

「それで、どうすれば召喚術は使えるんだ？」

「えーと、そうですね。じゃあウイルクンにお手本を見せてもらいましょう。」

「はいー！」

復習を兼ねて、ウイルが召喚術をやって見せてくれる事になった。

ウイルは緑の召喚石を手に、呪文？を唱える。

何かやけに気合い入ってるけど、どうしたんだ？

突然、光が弾け、ウイルの前にテテが現れる。

おぉー、何遍見ても凄いな。

手品みたいだ。

テテは辺りを見渡すとウイルの方に顔を向ける。

多分、何の用か聞いてるんだろう。

ウイルが特に用は無いと告げて礼を述べると、テテは再び光に包まれ消えてしまった。

……………どういう原理なんだ？

「さあ、次はアキラさんの番ですよ。ウイルクンがやった通りに真似してみてください。」

俺が召喚の原理に悩んでいると、アティにさらりと言われた。

「いや、やってみろって言われても、やり方とか何にも聞いてないんだけど。」

「え？ですから、ウイルくんのやった通りにすれば大丈夫です。」



誓約なんて案外簡単にできる物ですよ。」

そんなんでいいのか、先生……。

ま、いいか。

とりあえずウイルの真似をしてみよう。

えーと、石はどれにするかな？

緑のやつはテテだって分かってるけど、違うのは何が喚べるか気になるな。

……よし、赤いのにしよう！

何か良いのが喚べそうな気がする。

俺は赤い石を手に取り握り締めると、ウイルが言った通りに言葉になぞる。

「古き英知の術と我が声によつて、今、汝へと新たなる名を与えん。

新たなる制約の元にアキラが命ずる。……来たれ、異界の者よ！」

声とともに何か俺の中から抜ける感じがして、目の前で光が弾ける。

眩しくて思わず瞑っていた目をゆつくりと開けると、

俺の前には巫女装束を着て狐の仮面を付けた少女がいた。

口元だけ覗く狐の面、純白の絹のような長い髪、大きな鈴の付いた髪留め、

白い着物に赤い袴、膝丈の白い足袋に赤い下駄。

……そして、ピクピク動く大きな動物の耳と、フサフサした大きな尻尾。

俺の前に現れたのは、そんな格好をした十代半ばの女の子。

つか、どう見ても人間に化けた狐、だな。



数瞬の間、場に沈黙が降りる。

教師と生徒はいきなり高位の『狐火の巫女』が召喚された事に。

青年は初めての召喚術が成功した事に驚いて。

「何の用や？」

場の沈黙を破ったのは召喚された少女。

喚ばれたはいいが、その後何の命令も無い。

ラインバウムに長く留まりたくない少女としては、

さっさと用を片づけシルターンに帰りたいかった。

少女の問いかけで、やっと青年が正気に返る。

「あ、いや、特に用は無いです。」

俺たち今、召喚術の修行してて、それで君を喚び出したんだよ。」

青年の少し慌てたような説明にも、少女は特に反応する事なく、

淡々と言葉を紡ぐ。

「ほな、はよ還してくれへん？」

「ああ、何か用事の途中だった？ごめん、すぐ還すよ。」

少女の冷淡な口調を全く気にする事もなく、

青年はさらりと承知すると、己の臨時教師に送還方法を尋ねに行つた。

そんな反応が返ってくるとは思っていなかったのか、

少女は少し驚いたように青年の後ろ姿を見つめる。

程なくして青年は戻って来ると、少女に声をかける。

「お待たせ。それじゃ今から還すけど、また後で喚んでもいいかな？」

朗らかな笑みを浮かべた青年の頼みに、少女は怪訝な声を出す。

「何でや？用は無いですやろ？」

それに、ウチらは召喚術には逆らわれへん。喚びたかったら喚べばええ。」

どこか嘲りを含んだような、その少女の言葉も気にした風もなく、青年は笑顔で返す。

「実は俺の護衛獣になつて欲しいんだ。」

それに、今みたいに突然じゃ、親や友達が心配するだろ？」

青年のラインバウムの人間ではあり得ない『頼み』に、

少女は内心首を傾げるが表情には出さず、端的に否定の言葉を述べる。

「嫌や。」

「え？」

余りにも短い否定の言葉に思わず青年が聞き返すが、少女の冷淡な態度と言葉は変わらない。

「嫌や言うてるんや。ウチ、こっちの世界好かんねん。」

「あく、そつか。それじゃ仕方ないな。ごめん、いきなり喚び出した  
りして。」

「……って、還えしちゃうんですか!？」

「そうですよ、兄さん！」

誓約があるんだから護衛獣になれ、と言えはいいいじゃないですか  
!？」

少女と青年のおかしな会話に割り込んだのは教師と生徒。

普通では考えられない会話に、思わず口を挟んでしまったらしい。

「だってさ、無理矢理言う事きかせるのって感じ悪いじゃないか？」

「う、それは……まあ……。」

「でも！」

なおも食い下がろうとする義弟に、青年は滅多に見せない悲しい表情で語りかける。

「ウイル。この娘の気持ちが俺にはよく解る。」

「っ!!」

「『幸い』俺には酷い召喚主は居ないけど、

誓約なんかで無理矢理言う事きかせるのは間違ってる。解るな？」

「はい……兄さん。」

申し訳なさそうに俯く弟に、義兄は優しく肩を叩き「気にするな」と  
微笑む。

すると、今まで黙って動向を見守っていた少女が口を開いた。

「アンタ、こっちの世界の人間とちやうんか？」

「ん？ああ、違うよ。一応、俺も召喚獣。」

青年の答えに少し警戒を解き、少女が更に尋ねる。

「ほな、同郷か？」

「いいや、俺は名も無き世界から喚ばれたんだ。」

それを聞き、少女は何度か頷くと呟いた。

「成る程な。道理で変わつとる訳や。」

……ええやろ。護衛獣、やったるわ。」

呟きの後、数秒の間青年を見つめ、少女は護衛獣になると言い放つ。  
当然、青年は困惑して尋ねる。

「でも、こつちの世界に居たくないんだろ？」

「ああ、嫌や。そやけど、ここで還つても、また誰かに喚ばれるだけや。  
そやったらアンタの護衛獣やつてる方が、なんぼかマシや。」

それにアンタ、男前やしな！」

少女は唯一見える口元に笑みを浮かべ、さつきまでとは逆に澆刺と  
答える。

その元気の良さに青年は笑みを深める。

「はは、ありがとう。俺はアキラ。君は？」

少女がゆつくりと狐の面を外すと、その下から金色の瞳が現れ、日  
の光を弾いて輝く。

その金の瞳が楽しげに細まり、満面の笑みが浮かぶ。

「ミュや！ゆるしゆうな、アキラ。」

「ああ、よろしく。ミュ。」

なわばり W W

カーテンを透して淡くなった朝日を瞼に感じながら、腕の中の温もりを抱きしめ微睡む。

そんな朝の至福の時は、ソノラの甲高い怒鳴り声で破られた。

「アキラ、おはよー……って、どうしてミュと一緒に寝てるのよー!?!」  
寝覚め最悪。

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△

「だからー、ベッドが一つしか無かったんだから仕方ないじゃん。

それとも何?俺に床で寝ろとでも?」

アタシはあの後、部屋から放り出されて、今は食堂でアキラにさっきの事を詰め寄ってたトコ。

うー、笑顔だけど目が笑ってない。

怒ってるアキラって怖いよー。

「で、でもさー!だったらアニキの部屋に行くとか——」。

「嫌。いくらカイルでも、男なんかと寝る趣味は無い。」

そう言っってパンを千切り口に運ぶアキラは、不機嫌さが滲み出て取り付くシマも無いって感じ。

どうしよー。

「アキラ、そろそろ行こや。」

「ん、もういいのか?」

「もう、お腹いっぱいや。」

「よし、じゃあ行くか。」

「ちよ、ちよっと!どこに行くのよ?」

席を立ち、ミュを連れて出かけようとするアキラに声をかけたら、意地の悪い笑顔で「内緒。」って言われた。ぶーぶー、教えてくれたっていいじゃん。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

ミュを喚び出した翌日、島の案内とミュの紹介とを兼ねて集落を廻る事にした。

「さて、ミュはどこから廻りたい？」

傍らのミュを見下ろして尋ねると、金色の綺麗な瞳と目が合う。

その瞳を楽しそうに細めてミュは言う。

「ウチ、最初はシルターンの人らに挨拶したい！」

その微笑ましい様子に、俺も笑顔を浮かべて応える。

「よし、じゃあ風雷の郷から行くぞ！」

「うん！」

満面の笑顔のミュを腕にぶら下げながら、俺は風雷の郷に向かって歩き出した。

何だかこつちでも妹ができたみたいだなあ。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

アキラが狐の小娘を連れてきおった。

護衛獣として喚んだらしい。

言うてくれれば、わらわがいくらでも成ってやったものを。

「アキラの護衛獣になったミュ言います。よろしゅう。」

「ミスミじゃ。この郷を束ねておる。よろしくな。」

「自分はキュウマです。この郷の護人をしています。」

何か困った事があれば、いつでも言っして下さい。」  
小娘には適当に挨拶を済ませ、キユウマが挨拶をしている内に、アキラに向き直り笑顔を見せる。

「この後は暇か？茶でも飲んでいかぬか？」

「あく、ごめん。他の集落も廻らないとならないんだ。」

「お茶は、また今度頼むよ。」

「そうか……ならば仕方あるまい。」

「残念じゃな……ん？小娘がこちらを見ておるな。」

っ!!

「わ、笑いおった!?!わらわを見て笑いおったな!?!」

まさか小娘……。

「アキラ、早よ次の集落行こ！ゆっくりしとつたら、日が暮れてしまうで。」

ああ！アキラの腕にしがみつくでないわ、小娘！

……ふ、ふふ。成る程、よく解った。

「わらわに宣戦布告という訳か。」

よかろう！受けて立ってやるわ、小狐が!!



「ミュ、次はどこに行こうか?」

「別にどこでもええよ。」

次の行き先はアキラに任せて、さっきの事を考える。

まさか紅毛アテイと帽子女ソノラの他にも邪魔者がおるやなんて……。

まあ、アキラは男前やし、しやあないやろ。

せやけどウチは負けへんで!

「よし、じゃあ次はラトリクスに行こう。」

ウチが気合いを入れとる間に、次の行き先が決まったらしい。  
確かラトリクス言うんは機界の集落やった筈。

「ええけど……何でソコなん？」

「俺が最初に世話になった所で、命の恩人が居るからかな。」  
ウチの質問にアキラは少し照れて答える。

照れたアキラも男前や！

「アキラの恩人やったら、ウチの恩人も同然や。早よ行こー！」  
組んだ腕をぎゅっと抱きしめ、アキラを引っ張るように歩き出す。  
ラトリクスまで遠いとええな。

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△

「何？何なの、その娘？早く元の場所に捨てて来なさい！」

まったく、アキラったら何を考えてるのかしら。

恋人（クノン：アルディラ主観）の所に他の女の子を連れて来るなんて！

「アルディラ、犬や猫じゃないんだから……。」

狐だつて一緒よ！

どうして男つていうのは女心を理解しないのかしら!?

クノンが可哀想じゃない！

「どうぞクノンとお呼び下さい。」

「ウチはミュ。よろしゅう。」

……あら？

クノンったら、全然気にしてないわね。

そう！そうよね！

ぽつと出の小娘に、私の可愛くて素直で優しいクノンが負ける訳ないわ！

「お〜い、アルディラ？」

クノンの可愛さに比べれば、月とスツポン、

アイギスにダークレギオン（？）よ！

「……駄目っぽいな。次に行くか。じゃあクノンさん、また今度。」



「はい。お待ちしております。」

アイギスの咆哮に掛かれれば、あんな小娘の一人や二人。  
あつと言う間に消し飛んで〈以下略〉

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

初めは眼鏡の姐さんが敵かと思たけど、アレはちやうな。  
問題は看護師の娘の方や。

アキラは恩人や、ゆるてたから結構差を付けられとる。  
ウチももつと頑張らな!

「後はユクレスと狭間の領域か……。」

先に狭間の領域に行つて、今日はユクレスで泊めて貰うか。  
ん? ウチが気合い入れとる間に、予定決まったみたいやな。

……つて、アレ? 昨日は船で寝たのに、今日は帰らんでええんかな  
?

「アキラ、急に行つて寝るトコ貸して貰えるんか?」

「ああ、それは大丈夫。俺つて各集落に寝場所持つてるから。」

「そうなんか。ソレやつたら安心やな!」

何でそんなに寝場所持つてるのか分からへんけど、  
アキラが大丈夫言うんやから気にせんでええやろ。  
そう考えて、ウチはアキラの腕を抱く力を強める。

——ウチら、恋人に見えるかな?

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

せつかくアキラさんが私に会いに来てくれたというのに、  
何なんですかね……このお嬢さんは!?

「二人とも、今度俺の護衛獣になったミュダ。仲良くしてやって。」  
「ぐ、護衛獣ですって!?!アキラさんの!?!」

くっ、何て羨ましい!!

「冥界ノ騎士、ファルゼン。」

「……副官のフレイズです。ヨロシク、お嬢さん。」

「ミュです。よろしゅう。」

ペこりと頭を下げる様子は可愛らしいですが、こんなお嬢さんに護衛獣が務まるとは思えません。

アキラさんには考え直して貰いませんと。

「アキラさん、敵は帝国軍人です。このような、お嬢さんには荷が重い  
のでは?」

「そうですか?ミュはかなり強いと思いますけど……。」

アキラさんに言われて、もう一度お嬢さんを見てみる。

っ!!

成る程……かなり強い魔力を持っているようですね。

ですが!

「まあ、フレイズさんに比べれば、まだまだかもしれませんが。」

——あ、ああ!!

アキラさんが私の事を考えてくれたなんて!

私は、私はもう幸せで胸がいっぱいです!!

「……アキラ、早よ次に行こ。ココに居たらあかん。」

「え?あ、うん。じゃあファルゼン、またな。」

「……ウム。」

ああ、アキラさん!私はこの喜びをどうやって伝えたらいいのです  
か!?

例え三度生まれ変わろうと、私は忘れません!

アキラさーん!!



危ないトコやった……。

まさか、あんな変態が居るやなんて。

ウチがアキラをしつかり守らんと。

「最後はユクレスだな。あそこはミユも気に入るんじゃないかな？」

「何でや？何か面白いモンでもあるんか？」

アキラの言葉に考えんのを中断して聞いてみると、楽しそうな笑顔で返される。

「行ってみれば分かるよ。」

「ふくん。」

何や分からんけど楽しみやな。



「何で〜!? どうしてですか〜!? どうしてマルルウを追いかけますか〜!!?」

アキラさんが久しぶりに来て、一緒に遊んで貰えると思ったのに、傍に居た狐さんが突然襲いかかってきたですよ。

「こら、ミユ。マルルウが嫌がってるだろ? 止めなさい。」

アキラさんに後ろから抱きしめられるように捕まえられて、

狐さんはやつと止まってくれたですよ。

「うう、すまん。ウチ、小そうてチヨロチヨロしとるのを見ると、つい――。」

ち・小さい!?

ま・マルルウは、マルルウは――。

「小さくなんかないのですー!」

そう叫んで飛びかかろうとしたら、マルルウは大きな手に捕まってしまうのです。

「お前は小さいし、そっちの嬢ちゃんのは本能だ。」

どっちも仕方ねえだろ。」

し、シマシマさんまで〜!

何とか自由になろうとじたばたしていたら、アキラさんにちよつと困った笑顔を向けられました。

「ごめんな、マルルウ。ミュにも悪気は無いんだよ。」

はっ! そうなのですよ!

せつかくアキラさんが来てくれてるのです。遊んで貰わないと!

マルルウがぴたっと動きを止めると、シマシマさんは手を離してくれました。

マルルウはすぐにアキラさんの方に飛んで、その頭に乗ります。

ここはマルルウの指定席なのですよ。

「それで、そっちの嬢ちゃんは何者なんだ、アキラ?」

「ああ、昨日俺の護衛獣になったミュだ。仲良くしてやってくれ。」

そう言うと、アキラさんは狐さんの背中を押してアキラさんの前に立たせたですよ。

「ミュ言います。よろしゅう。」

「俺はヤッフア。一応この護人だ。ま、よろしくな。」

「マルルウはマルルウですよ。」

ぐ 挨拶が済んで、狐さんをよく見てみました。

真つ白な毛並みと、金色に光る瞳がとつても綺麗なのですよ。

でも、急に金の瞳がマルルウを睨んだのです。

「アンタ、いつまでウチのアキラに乗ってるんや!? 早よ、降りい!」

「アキラさんはマルルウのアキラさんなのです! 狐さんのじゃありません!」

「何やてー!?! がうっ!」

飛びかかってくる狐さんをおわして逃げ回るマルルウの耳に、

アキラさんとシマシマさんの話し声が聞こえてきました。

「なあ、ヤッフア……何時から俺は誰かのモノになったんだろ?」

「……さあな。」

そんなの決まってますですよ。

初めて会った、その瞬間からなのです!



あのちびつ子を追いかけて回した後、縞のオッサンに食事をご馳走してもらった。

野菜や果物ばかりで何や味気なかったけど、そこそこ美味かった。

それで今は、ふかふかでええ匂いのする草を敷き詰めたテントの中で、

アキラの腕に包まれて丸うなってる。

気持ちええなあ。

それにしても、どこに行ってもウチの敵が居る。

船には紅毛アテイと帽子女ソノラ、鬼の村ではオバハンミヌミ、

鉄の街では看護士娘クノシメ、水晶のトコの変態フレイヌは論外として、ココのちびつ子ルツもや。

せやけどアキラは渡さへん。

渡せる訳、あらへん。

長いコト生きてきたけど、

召喚獣の都合や心を優先しようとした人間は初めてや。

この機会を逃したら、もう二度とこんな奴には会われへん。

アキラの笑顔は暖かい気持ちになる。

アキラの声を聞くと安心する。

アキラの傍に居ると落ち着く。

アキラの腕に抱かれると幸せになる。

ウチはアキラが好きや。

誰にも渡したあらへん。

ウチだけのモンにしたい。

……けど、そんな無理やて解ってる。

アキラは仲間を大事にしとるし、ウチは人間やあらへん。

せやけど、今、この夜、この瞬間は、ウチだけのアキラや。  
だから、少しでもこの瞬間が続くように、少しでも一緒に居られる  
ように、ウチはアキラを護る。

護り続ける。

好きやで、アキラ。

## 己の居場所

ミュのお披露目が終わった翌日、  
世話になったユクレス村を後にし、俺はミュを連れて船に向かって  
いた。

今までの戦闘はアテイを中心に起こっていたから、  
アテイの傍に居れば置いて行かれる事は無いと考えたからだ。  
そういう訳で、今は森の中を歩いている。

腕には相変わらずミュがぶら下がっているが、特に邪魔にならない  
ので気にしない。

しばらく歩いてると、木陰に人が居るのが見えてきた。

あれは……アテイと、アズリア？

アテイはどうかやら眠っているらしく、目の前のアズリアに全く反応  
しない。

それに対してアズリアは、その状況をどうしたらいいのか迷って  
いるようだ。

そのまま見守っていようかと思ったが、アズリアが剣の柄に手をか  
けたところで声をかけた。

「アズリア、何してるんだ？」

アズリアは声に反応して跳び退き、戦闘体勢に入る。

それを見てミュが飛びかかろうとするのを手で押し止め、  
できるだけのんびりした声で話しかける。

「アズリアも散歩？あ、こっちは俺の護衛獣になったミュ。」

警戒を解かないアズリアを刺激しないように、

ミュの手を引きながら歩き、アテイの隣に腰を下ろす。

同じようにアズリアを威嚇したままのミュは、俺の胸にしがみつ  
くようにして離れない。

仕方なく足の間に座らせると、軽く抱きしめるような格好になっ

た。

俺たちが腰を下ろしたのを見て、やっと剣の柄から手を離れたアズリアに目を向け、

笑顔で問いかける。

「アズリアも一緒に昼寝しない?」

アズリアは驚いたような、呆れたような表情をして口を開いた。「何を考えている? 私たちは敵同士だぞ。」

その硬い声に対抗するように、軽くやる気の無い声を出す。

「いいじゃん別に。ここには俺たちしか居ないんだし。」

そういうのは、お互い仲間が居る時だけにしようよ。」

すると今度こそ呆れた表情をして、アズリアは体から力を抜いた。

「つくづく変な奴だな、お前は。」

「そうかな?」

「そうだ。」

言い切られちゃったよ。

そんなに変でもないと思うけど……まあ、いいか。

ん? アズリアがミュをじっと見てるな。

あ、眉間にシワができた。

ミュが何かしたのかな?

この位置じゃ確認できないんだけど。

眉間にシワを作ったアズリアは、ずかずかと歩いて来ると俺の右隣、

アティとは逆になる位置に腰を下ろした。

てつきりアティの隣に座ると思ってた俺は、不思議に思い名前を呼んだ。

「アズリア?」

「うるさい。こっちの方が都合がいいんだ。」

そう言っただアズリアは俺の肩に頭を乗せてきた。

ああ、確かにこの体勢はアティにするより、俺にした方が楽だよな……っつて、

そんな場合じゃない!



この体勢はちよつと、いや、かなり恥ずかしい。  
どこか不機嫌そうに耳を動かすミュと、恥ずかしくて慌てる自分を  
落ち着かせる為に、

ミュの頭を何度もゆつくりと撫でた。



いつの間にか眠ってしまった俺は目を覚ますと、  
自分の置かれた状況を確認して思わず笑みを浮かべてしまった。  
アテイもアズリアもミュも、気持ち良さそうに眠ってる。  
敵も味方も無く、召喚獣と人間も無い。

いつか、みんなとこんな風に過ごせるようになればいいな。

三人にまだ起きる気配は無い。

俺は動くに動けず、木陰の下で穏やかな風に身を任せ、木の葉の奏  
でる音に耳を傾ける。

風に靡くミュの髪を優しく撫でてやると、大きな耳が小刻みに動  
く。

それがおかしくて、つい声に出して笑ってしまった。

それに反応してか、アズリアが目を覚ました。

「……………ん……………ここは？」

「おはよう、アズリア。」

「っ!!」

寝起きにすぐ近くから声をかけられたからか、

アズリアは俺にもたれ掛っていた体をぱつと起こして距離を取っ  
た。

「……………アキラ？」

「おはよう、アズリア。」

不思議そうにしてるアズリアに、もう一度につこり笑って挨拶をす  
る。

すると、挨拶に反応してアテイとミュも目を覚ました。

「……あれ？アキラさんに、アズリア？……おはようございます。」  
「……………」

アテイは寝起きで、今一状況把握ができないらしく、ぼくつとしながら頭を下げ、

ミュはもう一度寝ようとするように、俺の胸に猫みたいに頭を擦り付けている。

「おはよう、アテイ。ミュも、もう起きな。」

俺が挨拶を返すと、やっと意識がはつきりとしてきたのか、アテイはアズリアを見て目を丸くした。

「え？ええ!?!どうしてアズリアがここに?」

「アズリアはアテイと話をしに来たんだって。」

俺がにつこりと笑みを浮かべてアテイの疑問に答えると、

アテイ以外の二人から驚きの声が上がったが、無視して続ける。

「話し合いで解決した方が双方にとって有益だってさ。な?」

最後の部分はアズリアの目を見つめ、有無を言わせない口調にする。

勢いにつられて、アズリアは戸惑いながらも肯定してしまう。

そうなれば、もうこっちの物だ。

アズリアを再び近くに座らせると、

三人で（ミュは俺の膝の上から動かなかった）円になり話しを始める。

「アテイ、剣を持って私の所へ来い。」

そうすればお前の仲間たちは見逃してやる。」

「それは、できません。」

いきなり直球のアズリアに、アテイが苦しそうに表情を歪めて言った。

その途端、立ち上がって怒鳴り出しそうだったアズリアを遮り、俺が代わって疑問の声をあげる。

「どうして?」

俺の横槍で勢いを削がれたのか、アズリアは浮かせかけた腰を下ろ

し、慥然として俺を睨む。

「貴様、どっちの味方なんだ？」

確かに今のタイミングだと、アズリアの邪魔をしているようだが、発言の内容はアティを問い詰める物で、どっちの味方か判らない。

しかし、今の俺にとってはどうでもいい事だったので、白々しく答える。

「俺は、俺の味方だよ。」

納得はしなかったようだが、これ以上言っても無駄と判断したのか、

アズリアはアティに問い直した。

「何故だアティ？何故、海賊やはぐれの味方をする？」

「仲間を守るのに、理由が必要ですか？」

アティの言葉にアズリアは口を噤む。

そして、苦々しさの中にどこか寂しさを含んだ表情を浮かべる。

「では、どうあっても我々と敵対すると言うのだな？」

アズリアの問いに、今度はアティが悲痛な表情で何かを訴えようと腰を浮かせかけるが、

再び俺が横槍を入れる。

「アズリアが諦めれば、敵対しなくて済むけど？」

今度はアティが出鼻を挫かれ、俺の方を恨めしそうに見てくる。

だけど、俺はどこ吹く風で、そんな視線は無視する。

そんな俺の軽い言い方が気に入らなかつたのか、内容が気に入らなかつたのか、

アズリアが気色ばんで怒鳴る。

「帝国軍人に、任務の失敗は許されない！」

軍とは結果のみが問われる実力主義の世界なのだ！

何も知らぬ癖に勝手な事を言うな！」

アズリアが叫ぶ、アズリアの中の現実。

その実情を曲がりなりにも知っているアティと、知らない俺。確かに俺は軍の世界など知りはない。

だけど、アズリアだって俺の世界を知りはしないんだ。

同じ世界観を知る者だけど、悲しげな表情を浮かべるアテイと、怒りを浮かべるアズリア。

俺は二人の表情を交互に見て、小さく息を吐く。

そして、一切の表情を消し、

目を閉じて、

意識だけを二人に向け、

尋ねる。

「己の成そうする事とは、友を傷付けてまで成さねばならぬ物か？」

静かな声で

「己が身を置く場所は、命を懸け、尽くすに値する所か？」

心に染み入るように

「己の本当の望みは、いったい何だった？」

謳うように。

目を開くと、アテイもアズリアも言葉をなくし、目を見開いたまま考え込んでいた。

俺は二人の邪魔をしないように、何故か上機嫌で首に抱きついてくるミュの頭を撫でながら、

二人が結論を出すのを待った。

「隊長――アズリア隊長――！」

「先生――ど――？」

しばらくすると、二人を呼ぶ声が聞こえてきた。

お互いはまだ気付いていないみたいだけど、このままじゃすぐに気付いて戦闘になるだろう。

アテイとアズリアは同時に立ち上がると、お互いに笑顔を浮かべる。

「今日はここまでですね？」

「ああ。この問題は次までの課題にするでしょう。」

まるで学生のような会話をして、二人は背を向けて歩き出した。

俺はミュを抱えて立ち上がり、二三歩アテイの方に歩いて立ち止ま

り、振り返る。

「アズリア、またな。」

「……ああ。」

こちらを見る事もなく返事をするアズリアが、あまりにもらしくて笑ってしまった。

アテイの後を追いながら、俺は二人の事を考える。

この二人は別々の道を進みながら、きっと同じ所を目指してる。

## 戦闘開始

まだ陽があまり高く昇っていない時間、

海賊たちと朝食を食べ終えたアキラとミュは後部甲板の船縁に座り、

湿り気を含んだ海風に髪を遊ばせながら、特に何をするでもなく水平線をぼんやりと眺めていた。

そこへ、突然野太い声が轟く。

「アテイ殿は居られるか!?!」

驚いた弾みに、海に落ちそうになるアキラとミュ。

何とか落下を免れて、二人はほっと顔を見合わせる。

そして何事が起こったのかと、二人は体を低くして下から見つからないように船の反対側、

陸地に接している側に回る。

そして船縁からそつと下を見下ろした。

するとそこには、船の前で仁王立ちしている、アズリアの副官、ギャレオの姿があった。

アキラたちがその姿を確認した時、どたどたと船の中から足音が響き、

前部甲板にある出入り口からアテイたちが飛び出てきた。

そしてそのまま、アキラたちに気付く事無く船を降り、ギャレオと対峙する。

アキラは、未だに驚きで尻尾を膨らませたままのミュの頭を撫でて落ち着かせながら、

その場でギャレオの宣戦布告に耳を傾けた。



一通り宣告が終わらせたギャレオが帰った後、残されたアテイたちが話しているところへ、アキラが船から降りてきて輪に加わる。

当然、その腕にはミュがくつついている。

「くつくつく……。弱者ときたか。」

「カイルさん……。」

「ムダよ。ああまで言われちゃあ、流石にアタシらも引つ込みつかないわ。」

不敵に笑うカイルにアテイが声をかけようとするが、スカーレルに遮られてしまう。

そして続くようにソノラが申し訳なさそうな顔で謝る。

「ごめん、先生……。あたしたち、やっぱね、海賊なのよ。」

「おい、先生よ……。まさか、止める気じゃねえだろうな？」

「はい、止めちゃいます。」

ソノラの謝罪に続き、カイルが念の為といった感じで尋ねると、至極あっさりアテイから肯定の返事が返ってくる。

予想外の返事に呆気にとられるカイルに、アテイは「今のは自分に対する宣戦布告だ」と続ける。

そう言われてカイルは何も言えなくなるが、やはり感情的に納得はできない。

そこはアテイも解っているのか、苦笑を浮かべ更に言葉を接ぐ。

「我慢して欲しいなんて無理な事は言いません。」

「ただ、その前に……少しでいいですから、私に彼女と話す時間をください。」

その言葉に沈黙する海賊に代わり、今まで動向を黙って見ていたアキラがアテイに声をかける。

「——アテイ、答えは出たのか？」

「はい。どうなるか分かりませんが、私なりの答えは出しました。」

明るい笑顔を見せるアテイに、アキラも嬉しそうに笑う。

「OK。じゃあ、みんなを呼んでアズリアの所に行こうか？」

「はい！」

ミュを除く周りの者たちには、

二人の遣り取りが何の事か分からず、首を傾げる。

しかし、そんな周囲を放ったまま、アキラとアテイは構わず先に進んで行く。

結果、困惑顔のカイルたちが慌ててその後を追いかける事になった。



「来たか……。」

布告した場所に既に陣を布いていたアズリアは、アテイが来たのを見て一人だけ前に進み出た。

そして、同じようにアテイとアキラ、アキラから離れようとしないミュが、

仲間たちを残して前に進み出る。

互いが互いの間合い一歩手前まで来た時、同時に立ち止まり、見つめ合う。

「アズリア、答えは出たのか？」

「ああ。ここに来たという事は、お前も答えが出たのだろう、アテイ？」

「はい。」

アテイにしたのと同じ質問をするアキラに、アズリアは不敵な笑みで答えた。

そしてアズリアの確認に、アテイも笑顔で答えた。

そこにあるのは、まるで学校で戯れる生徒のような楽しげな雰囲気。出された宿題をやってきたかと、互いに確認し合うような和やかな



物だった。

「それじゃ、答え合わせしよう。」

先ずは自信ありそうなアズリアからいつてみようか？」

軽く挑発するように、楽しい笑顔で尋ねるアキラに、アズリアは腰に手を当て得意げに答える。

「ふ、良いだろう。」

アテイ、私は、お前も剣も、両方を手に入れる事にした！」

ビシツとアテイを指さし宣言するアズリア。

その姿はさながら舞台女優のように決まっていたが、

その素晴らしさも、突然笑い出したアキラのせいで台無しになってしまふ。

「ぶはっ！くくく、あは、あははははは！」

ア、アズリア、くく、カッコ良すぎ。

そ、それで、アテイ、熱烈な告白に対する返事は？」

顔を真っ赤にして「告白じゃない！」と怒鳴るアズリアを無視し、アキラは少し頬を赤くしたアテイに答えを尋ねる。

「あ、はい。ええと……ごめんなさい？」

「誰が告白の答えを聞いた！」

お前は どうして、いつもいつもそうズレているんだ!？」

アキラ！お前もいつまで笑っている!!」

「あは、あははははは、ごめ、ごめん。くくく。」

アキラが一頻り笑い、ようやくその笑いが収まった頃に、

アテイがその場を改めるように、その場に挑むように、口を開く。

「アズリア、剣は渡せません。貴女と戦うのも嫌です。」

だから貴女たちには剣を諦めて、島から出て行って貰います!」

何か吹っ切れたように、すっきりとした笑顔で言い放つアテイ。

その笑顔を、子の成長を喜ぶ親のように頬を緩めて見ていたアキラは、

何かを思い付いたようにニヤリと笑う。

「振られちゃったな、アズリア。」

「うるさい……ふん、私は私の道を征くのみだ。」

アテイ、力づくでも連れ帰ってやるぞ！」

「おっ・そう来るなら、こっちもそれなりに応えないとな。」

……コホン。

アテイは俺（たち）のモノだ！お前（帝国軍）になんか、絶対に渡さないぞ！

正々堂々と勝負だ、アズリア!!」

ノリノリで宣言したアキラだが、その口調はやっぱり芝居じみていて、

表情は明らかに面白がっている事から、冗談だというのは明白だ。しかし、冗談だと解っていても、周りの者たちは反応せずにはいられないらしい。

アテイは耳まで真っ赤にして照れており、アズリアはどこか釈然としないような複雑な表情をしている。

ミュに至ってはあからさまに不愉快だと表情に書いている。

言いたい事を言っすつきりとしたのか、アキラは周りの者たちの様子に気付いていないかのように、足取りも軽く仲間たちの元へと戻っていく。

それをアテイとミュが追いかけて、アズリアは背を向けて自陣へと歩み出す。

そして戦いの火蓋は斬って落とされた。



戦いが始まり、俺は刀を抜いた。

厳密に言えば、これが俺の初陣という事になる。

緊張で震える手を押さえつけ、嶺を返して握り込む。

相手を殺さないように斬るなんて、俺にはまだできない。

だから、殺さないように、やりすぎないように、嶺を返す。

そして俺は走り出す。

初めての戦場に向かって。

最初は慣れていない事もあって、みんなから離れないように注意していた。

でも、俺とミュの二人に歯が立つ奴らなんていなくて、

いつの間にか調子に乗った俺たちは、かなり突出してしまっていた。

「みんなからはぐれちゃったな。どうしようか？」

「別にええやん。ウチが居ればアキラに傷一つ付けさせへん！」

ミュの強気な言葉にちよつと笑いながら、俺もだんだん強気になっていく。

「よし！だったら思い切って、アズリアの所まで攻め込むか！」

「了解や！」

俺たちは更に深く敵陣に斬り込む為に、再び走り出す。

敵の剣を避け刀を叩き込む。

すると倒れる敵を目隠しに利用して、後ろから新手が現れる。

刀を振り下ろした直後で反応の間に合わない俺に、そいつが斬り付けようとした瞬間、

俺の脇からミュが飛び出して、威力は低いが詠唱の短い術をぶつける。

そいつが怯んだ隙に刀を斬り上げ叩き伏せる。

打ち合わせをした訳でもないのに、ミュとはぴつたりと息が合う。

自然と俺たちの顔には笑顔が浮かんでいた。



「よ、アズリア。調子はどう？」

あつと言う間に敵の本陣に辿り着いた俺は、横から威嚇してくる

オツサンを無視して、

軽い口調でアズリアに話しかけた。

「まさかお前がここまでやるとは思わなかったぞ。

それで？アテイより先に私とやるつもりか、アキラ？」

不敵に笑うアズリアに、とんでもないと首と手を横に振る。

「アズリアとアテイの邪魔はしないよ。

それより、あのチンピラはどうしたんだ？」

「チンピラ？……ああ、ビジュの事か。

そう言えば、さつきから見当たらんが……それがどうかしたか？」

「ん？いや、何となく聞いただけ。」

怪訝な表情をするアズリアに、何でもないと軽く答えながら、俺は周りに目を向けた。

戦闘はほとんど終わっていて、立っている帝国兵は四、五人しかない。

そのまま視線を巡らせていると、アテイとカイルの二人が目に入る。

二人は戦闘が始まった時と同じように、アテイが召喚を唱える間はカイルが守り、

カイルがストラを使ってる間はアテイがナイフで牽制していた。

感心しながら見ていると、不意に、帝国兵を倒したばかりのカイルと目が合った。

カイルは目を丸くして俺を見つめると、慌てたようにアテイに話しかける。

そして、残りの帝国兵をみんなに任せて、アテイと二人でこつちに向かって走り出した。



「アキラ、無事か!？」

あつと言う間に近くまで来たカイルは、俺を背に庇うようにアズリアの前に立ち塞がる。

「カイル、何をそんなに慌ててるんだよ？」

「何をつて、お前が敵に囲まれてるから助けに来たんだろうが！」

「別に囲まれてないけど？ただ世間話してただけだし。」

な、アズリア？」

無言で肯くアズリアを見て、カイルの額に青筋が浮かび上がる。

「ほう？じゃあ何か？」

お前は戦闘の最中に敵の大将と仲良くお喋りしてたってか？」

「その通り！」

胸を張って言い切った途端、カイルに胸倉を掴まれ持ち上げられる。

「くくのくやくろく！」

「わー！嘘、ウソ！冗談だつて！」

カイルは、腕に噛みついてぶら下がるミュをものともせず、俺の首を絞め上げ始めた。

その、もの凄い形相に思わず謝ってしまった。

そこへアティが仲裁に入ってくれる。

「まあまあ、カイルさん。」

今はそんな事より、アズリアたちと決着をつけないと。」

「ちつ、仕方ねえ。後で覚えてろよ、アキラ！」

「了かしい。」

怒声にへろつと敬礼をして応えようと、カイルは俺を投げ捨てるように離してオツサンに向き直る。

「女隊長サンは先生に任せるとして、アンタが俺の相手かい、オツサン？」

「ムツ、いいだろう！貴様等全員まとめてかかって来い！」

「あ、俺たちはパスね。」

勢い込むオツサンの出鼻を挫くように、俺は気のない声を出す。

「やっぱ、こういうのは「対」でやるモンでしょ？」

「違いねえ！オツサン、俺と一騎打ちといこうぜ！」

それとも、一対一<sup>サシ</sup>でやるのは怖いのかい？」

「嘗めるな小僧！帝国軍人の力、見せてやる！」

二人は同時に動き出し、それぞれの右拳をそれぞれの左頬に叩き込む。

人を殴ったにしては派手な音が響き、二人の足がふらつく。

しかし二人とも怯まずに次の打撃を繰り出す。

どうも攻撃を避ける事は考えていないらしい。

まさにどっちが先に倒れるかのガチンコ勝負だ。

……参戦しなくて良かった。

もう一方のアテイ、アズリア組の方をしてみる。

二人は何やら楽しげに喋っている。

近づいて聞いてみると、

軍学校時代の思い出話に花を咲かせてるようだった。

「あ、そうそう。覚えてますか？」

私とアズリアで戦闘の模範訓練をやらせられましたよね？」

「ああ。あの時は私の負けだったな。」

しかし、その後で行った軍事行動演習では私の勝ちだったな。」

あれ？思い出話に花を咲かせてるにしては何か険悪だな？

「入学して二度目の学科試験では、私の勝ちでしたね。」

「実技試験では私の勝ちだったがな。」

「ふ、ふふふふふ。」

……二人とも、その笑い方は怖いぞ。

ひよつとして、仲悪いのか？

「そろそろ長かった勝負に決着を付けるとしよう！」

「望むところですよ！」

アテイがナイフを、アズリアが剣を抜き、構える。

ピリピリとした緊張感が二人を包む中、アズリアが先に動いた。

まるで野生の肉食獣のように素早く踏み込み、連撃を放つ。

アテイは連撃を避け、あるいはナイフで捌きながら召喚術を唱える。

アズリアは召喚術が完成した瞬間、アテイから飛び離れ、効果範囲

を抜ける。

そしてまた、アズリアがアテイに向かつて踏み込んでいった。

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△

レベルの高い二組の戦いにみんなが目を奪われる中、俺は一人、視線を辺りに巡らせる。

あのチンピラがアテイを前にして何も仕掛けて来ないなんてあり得ない。

きつと何処かで隙を狙っている筈だ。

……………。

居た。

チンピラは森との境で何やら怪しげな動きをしている。

あれは……大砲!?

慌てて走り出した俺の後ろをミュが追いかけて来るが、追いつくのを待っている余裕は無い。

走り寄る俺に気付き、チンピラがにやりと汚い笑みを浮かべ、導火線に火をつけた。

くそ!間に合わない!!

そう思った瞬間、俺は大砲の射線上に立ち塞がっていた。

爆音が鳴り響くと同時に、腰を落とし、足場を固め、体の回転とともに刀を抜き打つ。

キュウマ直伝の『居合い斬り』だ。

凄まじい衝撃を右手に感じると共に、金属同士がぶつかる高い音が響く。

真つ二つになった砲弾が俺の左右に落ちた時には、俺は再び走り出していた。

二発目が撃たれる前にチンピラの所へ着いた俺は、

チンピラが慌てて次弾を装填した大砲に刀を突っ込む。

「……撃ってみるか？」

不敵な笑みで挑発する俺に、チンピラは苦々しい表情で「化け物め！」と吐き捨て、

森の中へと逃げて行った。

戦っていた者も、観戦していた者も、突然の大砲の音に動きを止めて呆然としてたが、

状況を把握して動き始めた。

「……つまり邪魔が入ったな。

決着をつけるのは、またの機会に取っておくでしょう。」

「……そうですね。それじゃ、また今度という事で。」

「総員撤退！大砲の回収を忘れるな！」

アズリアの号令で、帝国兵たちが互いに肩を貸し合い引き上げて行く。

その様子をぼんやりと眺めながら、無性に疲れを感じた俺はその場に座り込んだ。

何やら慌てたように、こつちに向かって走って来るアテイたちを視界に収めながら、

俺は気持ち良い風に身を任せた。



## 明暗

昨日は戦闘よりも、その後の方が大変だった気がする。

俺も大砲の前に立ち塞がったのは無茶だったと思うけど、

ミュに泣きつかれた状態の俺をみんなで叱るのは勘弁して欲しい。

あれは辛い。ホンツト辛い。

でも、もっと辛かったのは、アテイのお説教。

みんなのお説教が終わった後、

半分泣きながら俺を叱り続けるアテイは酷く脆くて、今にも壊れそう  
うで、

いつの間にか俺は「泣かないで。」と嘯きながらアテイを抱きしめ、  
慰めていた。



「はー、どうすつかなく?」

俺は船室のベットの上で寝ころんだまま、深い溜め息を吐いた。

原因は脇に立て掛けてある刀。

借り物だったのに、昨日した無茶のせいで刃がぼろぼろになってし  
まった。

キユウマに謝ったら「元々予備ですし、気になさらなくても結構で  
すよ。」と言ってくれたが、

俺の得物が無くなった事には変わりはない。

「……仕方ない。メイメイの店に行くか。」

「……アキラ、どっか行くんか?」

俺の横で丸くなって、うとうとしていたミュが、目を擦りながら起

き上がる。

俺も上半身を起こし、ちよつとだけ乱れたミュの白い綺麗な髪を手で梳いてやりながら微笑む。

「うん。実はまだミュに会わせてない住人が居るんだ。」

これから、その人の所に行こうかと思つて。」

気持ち良さそうに目を細めていたミュは、俺の言葉に可愛らしく首を傾げる。

「何でこの前行かへんかつたん？」

その言葉に俺は少し表情をしかめる。

「行くのはいいんだけど……面倒臭いんだ。」

「は？」

「行く度にそいつに酒をせびられるんだよ。」

まあ、それはいいんだけど、酒を手に入れるにはジャキーニの畑仕事を手伝わなきゃいけない。

それが凄く面倒臭い。」

また溜め息を吐きそうさ。

でも、やらなきゃ何も変わらない。

待っていても刀が降ってくる訳じゃない。

結局、自分でやるしかないんだ。

「よし！じゃあ行くか！」

「うん。」

気合を入れなおして船を出ると、たまたまスカーレルに出会つたので、

刀を手に入れに行く事を告げ、俺たちはユクレスへと足を進めた。



森の中にぽつんとある赤い中華風の店。

いや、シルターン風の店か。

とにかく、俺たちはいつも酒臭いその店へと入っていく。  
むせ返るような酒の臭いにミユが眉をしかめるのを見て、  
今度から連れて来るのは止そうと思いつながら、店の中を見渡す。

「メイメイ、居るかー?」

カウンターには誰も居らず、俺が店の奥に声をかけると、  
顔を赤くしたメイメイがふらふらと出て来た。

「あら、いらっしやーい。アキラが来るなんて久しぶりじゃない?」  
「会う度に酒を要求しなきゃ、毎日だって来てやるよ。」

それより今日は二つ用事が有るんだ。  
まず、俺の隣に居るのが――。」

ミユを紹介しようとして目を向けると、そこには目を丸くして口を  
開けた、

いかにも驚いてますって感じのミユが居た。

「……ミユ?」

「あー!!龍「にゃー……」!!!!」

ぐわ、み・耳が!

メイメイが、何か言いかけたミユを遮って上げた大声のせいで耳鳴  
りがする。

俺は咄嗟に抑えた耳から恐る恐る手を離し、メイメイを睨み付け  
る。

「何だよ、メイメイ?いきなり大声上げて。」

「にゃは、にゃはははは!何でもない!何でもないわよ。」

怪しい。

とんでもなく怪しい。

さつきから目を合わせようとしないうし、暑くもないのに止まらない  
汗が更に疑惑を深める。

「ここはミユに聞いてみるか。」

「なあ、ミユ。メイメイと知り合いなのか?」

「え、えっと……それは、その……。」

「あーつとーそ、そんな事より何か用事が有ったんじゃないの!」

俺の問いかけにミユがしどろもどろになると、メイメイはわざとら

しく話を逸らしにかかる。

……どうも相当知られたく無いみたいだし、これ以上は可哀想かな。

「あー、うん。この子はちよつと前に俺の護衛獣になったミュ。

ミュ、この島で唯一のお店を開いてるメイメイだ。」

「ミュ、言います。よろしゅう。」

「あー、よろしくねー。にやは、にやははは。」

「やっぱり、おかしい。」

メイメイはいつも通りだけど、ミュが何故か畏まつてる。

「ひよつとして、メイメイってお偉いさん？」

「それでアキラ、もう用事はおしまいかしら？」

「え？あ、いや。実は刀が欲しいんだ。前のは、こんなになっちゃつて。」

俺はメイメイの前にぼろぼろになった刀を差し出した。

メイメイは刀を鞘から抜き刃を見ると、呆れた表情をつくった。

「ありやまあ。よくこんなにもぼろぼろに出来るわねえ。」

「……まあいいわ。今、アキラに合う刀を持ってきてあげる。」

メイメイは再び店の奥に引き込むと、しばらくしてから一振りの刀を持って現れた。

「コレなんかどうお？結構な業物よ？」

俺は手渡された刀を抜き、じっくりと眺めてからにやりと笑う。

特に刃物に詳しい訳じゃ無いし、こいつが業物かどうかなんてさっぱり判らないけど、

こいつには何だか心惹かれるものがある。

「うん、気に入った。これにする。」

「毎度ありー。お値段の方は——。」

メイメイが刀の値段を言おうとしたのを遮るように、カウンターにどんツと『龍殺し』を置く。

「これで良いだろ？」

にっこりと爽やかスマイルで言ってみたが、メイメイは人差し指を振って得意げに拒絶する。

「あく、ダメダメ。言ったでしよう？この刀は業物なの！」

『龍殺し』の一本や二本じゃ——。」

またしてもメイメイの言葉を遮るように、どんツと二本目をカウンターに置いてみる。

「い、一本や二本じゃ——。」

明らかに心が揺れだしたメイメイの前に、駄目押しの本三本目をどんツと差し出す。

「……きゃー！今からその刀は貴方のモ・ノ!!

持つてけドロボー！にやはははははは！」

酒瓶を抱きしめ頬擦りするメイメイを見て、俺はにやりと笑うと刀を手に取る。

「じゃ、遠慮なく。行くぞ、ミュ。」

メイメイの狂態っぷりを見て呆然とするミュの手を引き、俺は店を後にした。

既に店の中ではたった一人の酒宴が、それはもう賑やかに行われている事だろう。

俺も別に酒は嫌いじゃないが、メイメイのペースには付いていけない。

何より今はミュも居る事だし、真っ直ぐ船に戻る事にした。

そして船に戻ってきた俺たちを迎えたのは、放火事件の報せだった。



集落が放火されたゆゑ話を聞いた日の夜、いつものようにアキラと寝とつたら、

月が高く昇った頃に、アキラがこっそり部屋から出て行くこうとする気配に目が覚めた。

「どこ行くんや、アキラ？」

「え!? あ、え〜と……トイレに。」  
めっちゃ動揺しとる。

まさかウチを置いて他の女のトコへ行くつもりやあらへんやろな  
??

「ど……こ……へ・行くんや?」

声を強してもう一遍聞いてみると、はーっと重い溜め息を吐いた。  
どうやら観念したみたいやな。

「……ちよつとラトリクスまで。」

あの機械娘のトコに行く気か!?

そうはさせへんで!

「もう遅いし、明日にしたらええやん?」

「あゝ、いや……明日はちよつと。」

何や!? 夜に行つてあの機械娘と何する気なんや!?

……させへん! させへんで! こーなつたら断固阻止や!

「ウチも行くー! それとも、ウチが一緒やつたら何か困るんか!」

「あ、いや、ミュも今日は疲れたろ? ゆっくり寝た方がいいんじゃない  
か?」

……意地でも付いてつたる!

けど、アキラは一筋縄ではいかんし、ココは小技を使わんな。

「い・や・や! 何でウチを置いて行こうとするんや?」

……ウチは、アキラの護衛獣ちやうんか?」

最後の方で顔を伏せて、声を震わせる。

コレでアキラには泣いてるように見える筈や。

「分かった! 分かったから。……泣かないで、ミュ。」

アキラは慌ててウチに近づくと、今にも泣きそうな声でウチを慰め  
て、優しく頭を撫でてくれた。

うつ……とりあえず付いて行くのは成功やけど、ウチの良心に大打  
撃や。

今度からは使わんようにしよ。

それにしても、優しいんはアキラのええトコやけど、

こんなに簡単にひっかかるやなんて……心配やわ。



夜。

明日の計画を推敲している時に、あの男が護衛獣と共に訪ねて来た。

来るとは思ってたけど、こんな時間に来るなんて……。まさか、今、仕掛けて来る気なのか？

「……こんな夜中に何か御用ですか、アキラさん？」

「ええ、少しイスラさんに聞きたい事が有りまして。」

「……………集落に火をつけたのは、お前か？」

怖い。

細められた蒼い瞳が、表情のない顔が、冷たさしか感じない声が。いつかの夜と同じように、凄まじい威圧感が僕にのしかかってくる。

いや、あの夜以上の威圧感が。

強すぎる威圧感が、彼の後ろの護衛獣さえも震わせる。

……でも、今バレル訳にはいかない。

計画はもう始まっているんだ。

僕の望みの為には、コイツに殺される訳にはいかない。

何とか誤魔化さないと。

「……………どうして僕だと思うんです？そんな事をして、僕に一体どんな利益が？」

「はっ、そんなセリフ吐いてる時点で、テメーが犯人なんだよ。」

ここは泣いて否定する場面だぜ、お坊っちゃん？」

欠けた月のように歪んだ笑みが僕を捕らえる。

まるで数百という虫が背筋を這うような寒気が走る。

「く、くくく。何をそんなにビビってるんだ？」

いくら閑散としているとはいえ、放火された場所は、

ユクレスみたいに森に密接した訳でもない村の中心近くだぞ？  
知らない人間が入って来たら村人が真っ先に気付く筈だ。

それが無いって事は、やった奴は村に居てもおかしくない程度には  
顔見知り。

アテイたちがやって無いとしたら、残りは？誰だろうな？」

……こいつは、一体何者なんだ？

仲間と居る時は馬鹿みたいにのほほんと笑っているくせに、

今は綺麗な顔に狂人のような禍々しい笑いを浮かべて、僕をじわじ  
わと追い詰める。

まるで、別人だ。

「……アキラ。」

僕が何も言えずにいると、彼の後ろに控えていた護衛獣が主の名を  
呼んだ。

声につられてそっちを見ると、いつの間にか震えの止まった少女  
が、

主と同じように金の瞳に冷たい光を宿し、こっちを見ていた。

「コイツ、ココで始末付けるんか？」

ツ!!

まずい。

ただでさえ、奥の手を使わないと勝てるかどうかも分からないの  
に、

二人掛かりでこられたら……!!

くっ、どうやってこの場を切り抜ける!?

「……いや、今は何もしない。」

護衛獣の声を聞いた途端、ヤツは狂笑を消し、人形のように無表情  
になって答えた。

何故、何もしないんだ？

もう何か手を打っているのか？

……だとしたら、何とか聞き出さないと。

「僕を捕まえなくていいのかい？」

……後で後悔しても知らないよ？」



「お前は、まだ何もしてない。だから何もしない。

今日、来たのは最後の警告だ。

俺の、仲間に、手を出すな。

……じゃあな。」

「……………」

言いたい事を言つて、ヤツは踵を返し部屋から出ていく。

その後を護衛獣が付いて行くが、部屋から出る前にちらりと視線を送ってきた。

それはまるで、遙か高みから見下ろすような、

取るに足らないモノを見るような、無機質な瞳だった。

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△

機械だらけの集落を出て、月の光でちよつとは明るい森の中を帰つとつたら、

今まで黙々と歩いてたアキラが突然立ち止まりよつた。

「……………はく。ごめんな、ミユ。怖い思いさせて。」

俺、キレると時々訳分かんなくなるんだよ。

最近まではそれ程でも無かったんだけど……………どつか悪いのかな、俺？

……………あんな嫌な事言つたの、初めてだよ。」

さつきまでの覇気がのうなつて、まるで泣き笑いみたいな表情をとる。

アキラには、そんな表情似合わへんのに。

……………それにしても、何や勘違いしとるみたいやな。

「アキラ。ウチは何も怖がってへんで？」

「え？でも——。」

「確かにちよつと驚いたけどな。それよりウチは嬉しかつてんで？」

「嬉しい？」

「そや！アキラみたい**に強くて**、ええトコと悪いトコが合わさったん  
を

シルターンで何て呼ぶか知つとる？

——— 神様、言うんやで!!」

凄まじい力を持ち、神聖さと邪悪さを合わせ持つモノたち。

ウチらはソレらを神様ゆーとる。

紅毛女と女隊長を諭した時の神聖さ、そして今日見せた全てを破壊  
しつくす様な邪悪さ。

まるで、アキラは神様そのものや。

そう考えると色々合点がいくわ。

ウチが稲荷に生まれたんも、巫女になったんも、どの社に仕える気  
にならんかったんも、

ぜくんぶアキラに会う為やったんや！

アキラ言う、たった一人の、ウチだけの神様に仕える為やったんや  
!

コレが運命、言うやつなんやな!!

## 振るわれた刃

放火騒ぎのあった翌日。

アテイたちは、放火したのは本当に帝国軍なのかを確かめる為に、フレイズの見つけた帝国軍の下へと森の中を歩いていた。

「あくあ、火を付けたのはアズリアじゃないんだから、聞きに行ったらって無駄なのになく。」

ごろごろと森の中を歩く一団の中で、他の者たちが真剣な表情で辺りに気を配っているのに対し、

やる気が無さそうに歩いていた二人の内、銀髪の方がぼやきを漏らす。

「どうやらアキラは、単調な森の中の探索に歩き疲れてしまったらしい。」

そして、アキラと手を繋いで歩いていたミュも、こくこくと肯いて同意を示す。

「空も曇ってて雨が降りそうだしさ。遠出には向かない日だよ？」  
更にぼやくアキラに、再びミュが、こくこくと肯いて同意を示す。

すると近くを歩いていたカイルが、呆れを含んだ口調で窘める。  
「あのなく、そんなモン本人に聞くまで分かんねえだろうが？」

大体、嫌なら付いて来なけりやイイじねえか。」  
「あ、それは無理。俺も久しぶりにアズリアに会いたいし！」

笑顔で言い放つアキラに、カイルは溜め息を吐く事で応えるに留まったが、

先程までとは逆に、ミュは眉をしかめて不平を述べようとした。

「どういう——。」

「ちよおつと!? 敵の親玉に会いたって、どういう事よ、アキラ！」

ミュを遮り大声を出したのは、ずっと兄とばかり話しているアキラに頬を膨らませていたソノラ。

お蔭で更にミュの機嫌は急降下したらしく、眉間の皺が深くなる。そしてミュはソノラを睨み付けるが、ソノラは全く気付かずにアキラに更に詰め寄る。

「まさか、あの女隊長に誑かされたんじゃないでしょうね!」

「誰がするか、そんな事!」

ソノラの追求に吼える様に答えたのは、アキラではなく別の誰か。多大な怒りと多少の恥ずかしさを含んだその声の主は、こほんと咳払いをして、その姿を現す。

「久しぶりだな、アテイ、アキラ。」

森の中から姿を現し、声をかけてきたのは渦中の人物、アズリア。そんな今回の騒動の張本人に、アテイとアキラは親しげに挨拶を返すが、

他の者は警戒心も露わにアズリアを睨み付ける。

ソノラがアキラを背に庇うように、もしくは二人の間を遮るように、

一歩前に出てアズリアに銃を向ける。

「ふふーん、だ。飛んで火に入る夏の虫とはアンタの事ね!

さあ、キリキリと白状して貰いましょうか!

……って、どうして私たちの場所が判ったのよ?」

「あれだけ喚けば、見つけてくれと言っている様なものだと思うが?」  
勢いに乗ってソノラは啖呵をきったが、ふと疑問が口をついて出る。

その答えをアズリアに、さも当然と言われた事に、ソノラの頬が恥ずかしさに赤く染まる。

そんなソノラを気にした風もなく、アズリアはアキラに目を向ける。

「それで、お前たちはこんな所で何をしているんだ?」

恥ずかしさで体を震わせ、今にも銃を乱射しそうなソノラの肩に手を置き、

アキラが入れ替わるように前に出てアズリアと向かい合う。

そして「ちよつと困ってるんだ。」と笑いながら話し始めた。

「実は集落が放火されてさ、その犯人を捜してるんだ。」

アズリアは怪しいヤツ、見なかった？」

全く疑いを向ける事なく尋ねてくるアキラと、自分を睨んでいる他の者たちを見て、

アズリアは苦笑を浮かべる。

「他の者たちは我々を疑っているようだが？」

「アズリアの仕業じゃない、って言ったんですけどね。」

と、アテイも苦笑を浮かべながら会話に加わる。

今度はアテイが心当たりを尋ねるが、アズリアから情報を得る事はできなかった。

すると、その話はどうでもいいとばかりに、アキラがアズリアに話しかける。

「ところで、アズリアはどこに行く途中だったんだ？」

「お前に答える必要はなからう？」

まるで突き放すかのようなその言い方に、アテイは少し目をきつくしてアズリアを見る。

「アズリア！また、そんな言い方をして！」

だから、貴女はよく誤解されるんですよ。」

「……ふん。我々は急いでいるのでな。これで失礼する。」

アテイに子供のように叱られ、アズリアは気恥ずかしさに頬を染めて視線を逸らすと、

足早にその場を去っていった。

照れを隠そうとするその姿を、アテイは苦笑しながら、アキラは微笑みながら見送る。

それに対しウィルが声を荒げる。

「先生！兄さん！いいの!?!」

「ええ。」

『自分のした事には責任を持つ。けして誤魔化したり逃げたりしない。』

彼女の口癖でしたからね。」

「俺は最初からアズリアは犯人じゃないって言ってるだろ、ウィル？」

無然として黙り込むウイルに代わり、カイルが答える。

「そうみてえだな。あんな様子じゃ、火をつけて回るなんて出来なさそうだぜ。」

「だとしたら、あの火は一体誰が……。」

その場の全員が、アズリアは犯人ではないのかもしれない、と意見を傾ける中、

キュウマが疑問を口にする。

その疑問に、ヤードがこの事件に対して憶測を述べ始める。

帝国軍に疑いの目を向けさせる事が、火をつけて回った犯人の本当の狙いだったとしたら、と。

みんなが一樣に不安に駆られ始めた時、まるで見計らったようにマルルウが飛んで来た。

「たたつ大変っ！ 大変ですよぉっ！」

いつもと違い、切羽詰まったように慌てるマルルウ。

ヤツファが何とか落ち着かせようとするが、マルルウは変わらず話し続ける。

「ややつ、ヤンチャさん！」

ヤンチャさんが……捕まっちゃったですよぉっ!!」

マルルウの叫びに全員が驚きに包まれる中、まるで不安を煽るように、雨が、降り始めた。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

激しくは無いが、決して止む事のない雨が風雷の郷に降っている。

そんな雨の中、郷の者たちが一カ所に集められ、兵士たちに武器を突きつけられていた。

ゲンジやパナシエといった見知った顔も見受けられる。

しかし、郷長の息子のスバルは一人、顔に刺青をした兵士ビジュに囚われ、

他の者たちから離されていた。

「ほおれ、どうした？」

さっさとあの野郎を連れて来ねえと、ガキの命はねエぞ？」

脅迫と共に頸元にナイフが突きつけられ、スバルが呻き声を漏らす。

その光景にパナシエがスバルの下へ駆け出そうとするが、

ゲンジに押し止められその場に泣き崩れる。

声を上げて泣き続けるパナシエに、囚われの身ながらもスバルが気丈な声を出す。

そして、その震える声に応えるように、森からアテイたちが飛び出して来た。

「スバルくん!？」

「ヒヒッ、よく来たな？待ちかねたぜエ……。」

アテイに応えたのは囚われのスバルではなく、どこか酷く醜く歪んだ笑みを浮かべるビジュ。

そのビジュに侮蔑の視線を投げかけ、ウィルが吐き捨てるように言い放つ。

「また人質だなんて、つくづく進歩ないやり方だね……。」

ウィルの侮蔑も全く気にした風もなく、何がおかしいのかビジュは笑い声をあげる。

「ヒヒヒッ。まあ、半分はオレ様の提案だかなア？」

「半分だと？」

勿体ぶった言い方をするビジュにカイルが問い返す。

しかし答えはビジュからではなく、思いも寄らぬ人物の口から語られる。

「今回の作戦は、僕が指示したんだよ。」

確実に剣を手に入れる為に、ね……。」

みんなが物陰から現れたイスラに驚き、その自白に息を飲む中、イスラは笑みを浮かべて続ける。

「ふふっ、みんな何て顔をしてるのさ？」

仲間同士疑う事をしない君たちだから、こんな不覚をとるのさ。

もつとも、気付いていた人も居るみたいだけど。」

最後の言葉と共に、その視線がアキラへと向けられる。

それにつられるように、みんながアキラの方を向くと、

そこには蒼い瞳に冷たい光を宿し、他の表情を一切なくしたアキラがイスラを見ていた。

睨み付けるでなく、ただ、その冷たい視線を向けていた。

普段見た事のないアキラの様子にみんなが呆然となる。

その時、アキラが静かに口を開いた。

「……イスラ。」

冷たい。

あまりにも冷たい声。

そこには一片の温もりも無く、身を切るような冷たい害意だけが籠められている。

「お前は最後の警告も無視し、今、俺の仲間たちに手をかけようとしている。……解るな、この意味が？」

アキラの問いかけに昨夜の事を思いだし、イスラの手が恐怖に震える。

イスラは拳を握りしめ震えを止めると、無理矢理に笑みを浮かべる。

「は、ははは。強がったってダメだよ。こつちには人質が居るんだからね。」

そう言つてイスラが手を上げると、兵士たちが一斉に人質たちに剣を向ける。

その光景に、キュウマが歯噛みをし、剣を向けられたゲンジが唸る。

「郷の者たちに手を出すつもりか!？」

「卑劣な……っ。」

二人の様子に調子を取り戻したイスラが、不敵に笑う。

「目的のためなら手段なんて選ばない。

敵の弱みについて、いかに早く確実に勝つかが大事なんだ。

そうだろ、姉さん？」



確認を取るように発せられたイスラの声に無言で応じたのは、竹林から現れたアズリアだった。

「姉さん、って……。」

「まさか!？」

アズリアの登場に、ウィルとアテイが驚きの声をあげる。

「あつははははは……。」

これで、僕がどうしてこんな事をしたのか理解できただろうか？

そうさ、僕の名前はイスラ・レヴィノス。

帝国軍諜報部の工作員であり——アズリアの弟さ!」

次第に強くなる雨の中、遂に雷が混じり始める。

その雷に後押しされるように、イスラが声高に自分の素性を明かす。

噂でしか知らなかったアズリアの弟がイスラだと知り、

アテイの口から「そんな……。」と呟きが漏れた。

アズリアは無言のままイスラへと歩み寄ると、辛辣な声で話しかける。

「まさか、お前がビジュと接触していたとは思わなかったぞ、イスラ……。」

「秘密を守るのは諜報部の鉄則だからね。」

計画を実行するまでは、姉さんにも話す事はではなかったんだよ。」

しかしイスラは全く気にした風もなく、仕方ないとばかりに軽く肩を竦めて答えた。

「選択の余地は無し、か。」

諜報部の仕事がどのような物か理解しているアズリアは、

まるで諦めにも似た口調でイスラの言葉を肯定した。

そこに籠められた感情を察して、イスラがアズリアを諫める。

「対面を気にするあまり、失敗を失墜にしまつたら、それこそ本末転倒でしょう？」

汚れ役は僕が全部引き受けるよ。

姉さんは、ただ黙認してくれればいい。」

最後の姉を気遣うような台詞に、アズリアは小さく「解つた……。」

とだけ口にした。

「それじゃあ取引といこうか？」

アズリアとの会話を終え、イスラがアテイへと向き直る。

剣を渡せばいいのだとは解るが、アテイは躊躇う。

剣を渡すためには、剣を喚ばなければならない。

もし剣を喚んで、またアキラが倒れたら？

迷い、視線を向けてくるアテイに、アキラは力強く肯いてみせる。

そして、アテイが意を決して抜剣する。

途端、アキラを襲う強烈な頭痛。

しかし、敵の前で倒れる訳にはいかず、アキラは歯を噛いしばって耐える。

アキラも最初の頃に比べれば、この頭痛にも随分と慣れたようで、よろめきながらも意識を失わずに立っている。

そして、やはり聞こえてくる『声』。

アキラは、剣を持ってイスラに近づくアテイを見ながら『声』に耳を傾ける。

——器、黒い器、私の体

——お前は私で満たされ、私はお前に満ちた

——後は鍵を手にして、お前を壊すだけ

——器、黒い器、私の体

——お前は私の物だ

勝手な事を言う『声』に、アキラが心の中で悪態を吐いたと同時に、突然『声』が聞こえなくなった。

それは同時に、アテイの手から剣が奪われた時だった。

「ほら、もう二度と手放したらダメだよ。」

「……っ。」

イスラの皮肉にアズリアの柳眉が逆立つが、何かを言う前にアテイが人質の解放を求める。

「さあ、これで文句は無い筈です……。みんなを解放して下さい！」

「ああ、いいとも。」

「ほらよッー！」

アテイの求めに応じ、イスラがビジュに合図を送ると、スバルが突き飛ばされるように解放される。

「せんせえっー！」

自由になった安堵から、スバルはアテイに抱きつき泣き始める。アテイは優しくスバルの頭を撫で、慰めてやった。

そんなアテイを横目に、帝国軍の卑怯なやり方に我慢できないといった風に、

ソノラが未だに郷の者たちに武器を向け動かない兵士たちを怒鳴り散らす。

「ほら、あんたたちも、さっさとそこを退きなさいってば！」

しかし、無防備に近づくソノラに帝国軍の斧が降り降ろされる。

「——危ないっ!!」

「え……って、ひゃああああっ!?!」

キュウマの叫びで、ソノラは自分に向かって降り降ろされる斧に気付くが、

避ける事もできず反射的に頭を手で庇い、目を瞑った。

「……?」

しかし、いつまで経っても覚悟した痛みが襲ってこず、ソノラが恐々と目を開けると、

そこには鞘に差したままの刀で斧を受け止めるアキラの姿があった。

無言のまま、帝国軍を睨み付けるアキラに代わり、ファルゼンがイスラを問いつめる。

「ナンノ、マネダ……。」

「品物一つに対して人質が一人……。」

「正当な対価でしょう?」

予想しなかったイスラの言葉にみんな愕然となる。

そこに、ふてぶてしくイスラが追い打ちをかける。

「全員を解放して欲しいんだったら、また別の対価を用意して貰わな

いとね。」

その傲慢さにアテイが激昂する。

「これ以上、何を望むんですか!？」

「そうだね……。」

君の命、かな?」

軽く言われた言葉の意味にみんなが息を飲む中、

アキラは押し止めていた斧を弾き飛ばし、イスラを見据える。

その無言の圧力に、イスラは周りに判らないように唾を飲む。

そして、努めて軽く聞こえるように言葉を接ぐ。

「何度言えば解るのかなあ?」

こつちには人質が居るんだから、大人しくしてなよ。」

イスラの軽口にアキラは何も応えず、ただその冷たい瞳を向け続けた。

その視線にイスラがキレかけた瞬間、アズリアが「命令」を出す。

「イスラっ!アテイは殺さずに連れて帰るんだ。いいな?」

「……何を言ってるのさ?」

使い手が死ねば、もうこの剣の力に脅えなくていい。

違いますか!？」

「ヒヒヒッ、隊長殿。まさか、イヤだとかぬかしたりしないでしょねエ?」

アズリアのおかげで何とか声を荒げずに済んだイスラは、その命令に異議を唱える。

そして、ここぞとばかりにビジュが追隨する。

アズリアが反論できずに押し黙ると、イスラは不適な笑みを浮かべてアテイに話しかける。

「みんなの為に犠牲になれるんだ。

アテイ、いかにも君にふさわしい結末だと僕は思うけど?」

それとも、やっぱり自分の身の方が可愛いかな?」

そのあからさまな挑発に、アテイは自分を差し出す事を承諾してしまふ。

仲間たちは何とかアテイを止めようとするが、アテイは泣き笑いの

ような表情で謝る。

「ごめんね。自分でもバカだなあ、って思ってはいるんです。

でも……私には、やっぱりあの人たちを見捨てる事はできないから。」

それを聞いたイスラは一瞬、ほんの一瞬だけ、辛そうな表情を見せる。

しかし、すぐに酷薄な笑みを浮かべ直し、剣を抜き放つ。

「ふふふつ、本当に君は僕の期待した通りに動いてくれる。

ありがとう……そして——さよなら!!」

目を瞑って項垂れるアテイに、イスラが剣を大きく振りかぶった瞬間、

アキラが刀を抜いて二人の間に割って入り、剣を受け止める。

突然響き渡った剣戟の音に、アテイが驚き目を開ける。

そして、同じように驚いているイスラが忌々しげに声を絞り出す。

「どういうつもりだい？

アキラ……。」

「もう、お前の言う事を聞くのは止めだ。

うんざりだよ。お前のやる事には。」

雷光が煌めき、アキラの冷たい表情を照らす。

怒りも侮蔑も籠っていない、ただ無機質な蒼い瞳にイスラの姿が映っている。

それを見たイスラが、悲鳴をあげるように命令を下す。

「ひ、人質を殺すんだ!」

別にイオスラには本当に人質を殺すつもりはなく、

そう命じる事によってアキラに隙ができるのを狙ったのだが、

アキラは微塵も動揺する事なく護衛獣の名を呼ぶ。

「ミュ!!」

「任しときー!」

力強い返事が返ってきたのは、囚われた郷の者たちの円の中から。

いつからそんな所に潜り込んでいたのか、

返事を返すのと同時に、ミュは準備を終えていた術を発動させる。

「護法火円陣！」

言葉と共に地面に右手を叩き付け、ミユを中心とした炎の壁で、郷の者たちと帝国兵の間を遮る。

郷の者たちに武器を向けていた帝国兵たちは、突然現れた炎に怯み、包囲を崩してしまふ。

突然の形成逆転に動揺が生まれたイスラは、アキラに剣を弾き飛ばされてしまふ。

剣を弾かれた時に捻ったのか、痛む手を押さえながら悔しげに唇を噛むイスラに、

アキラが刀を振り上げ冷たく言い捨てる。

『さよなら』」

自分がアテイに告げたのと同じ言葉。

その皮肉に、イスラは小さな後悔と大きな屈辱を感じながら迫りくる刀を凝視する。

しかし、後10cmという所で、横から突き出された剣により刀が止まる。

「姉さん……。」

呆然としているイスラに強烈な殺気を送りながら、アキラがアズリアに目を向ける。

「どういうつもりだ、アズリア？」

「ふ。こんな奴でも私の弟だからな。」

……見殺しには、できまい？」

その答えに沈黙するアキラを牽制しながら、アズリアが兵たちに新たな指示を出す。

「剣は手には入った。これ以上の戦闘は無用だ。撤退する！」

アズリアの命令に、兵たちは包囲を解いて森の中に逃げようとする。

しかし、森に入る直前で風が巻き起こり、帝国兵たちの行く手を塞ぐ。

驚き、慌てる帝国兵たちを見ながら、キュウマとスバルが顔を見合わする。

「これは——。」

「母上の『風』だ！」

さらに風は強くなり、帝国兵たちをその場に釘付けにする。そして、その風によって声が響く。

「重ね重ねの非道の数々、もはやこのまま見捨ててはおけぬわ。

白南風の鬼姫ミスミ、これより参戦仕る。

……覚悟しやれや！ 外道ども!!」

清冽な啖呵を切つて現れたミスミが槍を帝国軍に向けて構える。

風の壁によって逃げ場を失い、はぐれたちを突破しなければならなくなつた帝国兵に、

アキラから距離を取つたイスラが戦意を煽るような指示を下す。

「人質がいなくなつて何も問題は無いさ。

あいつらは、もう剣の力を頼る事はできないんだからね。

さあ、返り討ちにしやるんだ!!」

イスラの指揮で帝国兵が猛然と突撃する中、アズリアはギャレオと少数の兵を従えて後方に居た。

この戦闘には参加する気はないのか、乱戦となつた戦場を冷静に見据え続ける。

そして帝国側が押され始めた時、全軍に向けて号令を下した。

「これより包囲網を突破する！」

残存部隊は負傷者を回収、戦闘部隊で動ける者は自力でついて来い！

行くぞ!!」

アズリアを先頭に、残つていた帝国兵たちが戦場になだれ込む。

そしてアズリアが道を切り開き、帝国兵が戦場を駆け抜けた後には、アテイたちだけが残された。

「逃げられてしもたな。」

「……そうだな。」

いつの間にか隣に来ていたミュに、アキラが静かに応える。

そして戦場を見渡すと、いつもの優しい笑顔を浮かべ、明るく告げた。

「ま、誰も死ななかつたみたいだし、結果オーライだろ。」



## 日常話くアキラ・ミユく

「——って、和んでる場合じゃないわよー!!?」

雨上がりの空に、突然アルデイラの絶叫が響き渡る。

戦闘が終わり、アキラにもいつもの優しい笑みが戻った事で、張り詰めさせていた緊張を解いていた一同は、驚き飛び上がる。

アキラも、その声の余りの大きさに耳を塞いだが、怪訝そうな表情でアルデイラに尋ねる。

「急にどうしたんだよ?」

「どうしたも、こうしたも無いわよ! 剣よ剣!!」

シャルトスを持って行かれちゃったじゃない!」

アルデイラの指摘に、一同の声が揃った。

「「「「……あつ。」」」」

互いに顔を見合って呆然とする仲間たちに、アルデイラがヒステリックに詰め寄る。

『あつ』じゃないわよ! 『あつ』じゃ!! どうするのよ!?」

アルデイラの凄まじい剣幕に、しどろもどろになっている仲間たちに代わり、

アキラが緩い笑顔で答える。

「まあまあ、獲られた物は仕方ないって。それより少し落ち着こうぜ?」

一瞬、アキラの言葉と雰囲気気を抜きそうになりながらも、

アルデイラは頭を振ってボルテージを取り戻すと、再び声を荒げようとして、

続くアキラの言葉に声を失った。

「それにさ、召喚すれば良いじゃん。」

「……は?」

「だからー、アテイが剣を喚べば取り返せるんじゃないの?」

間。

そして、アキラの提案に一同が成る程と頷くと、アテイが一步前に進み出る。

「じゃあ、やってみますね?」

帝国に要求された時とは違い、今度はアキラ自身が剣を喚ぶ事を提案した事と、

先程の召喚でも何の影響も無かつたらしい事から、

アテイは気負いのない笑顔でそう言うと、右手を空に翳す。

みんなの見守る中、いつものように剣をイメージして集中力を高めていく。

アテイの額に汗が浮かび、それが玉のようになった時、

目映い碧の光と共に空間が砕けるような音が響き、アテイの手に剣が現れる。

しかし、疲労の為にアテイの集中力は切れ、剣はすぐに消えてしま

う。

そのまま倒れそうになるアテイを、アキラが抱き止める。

「大丈夫か、アテイ?」

「……大丈夫、です。」

心配そうに声をかけたアキラに、その腕の中のアテイは荒い息を吐きながら答える。

全く大丈夫そうには見えないのに、みんなに心配をかけまいと、元気に振る舞おうとするアテイにアキラは苦笑を浮かべる。

「……仕方ないなあ。よいしょ!」

オヤジ臭いかけ声と共に、アキラはアテイの膝の裏に手を通し、肩を抱くと、一気に持ち上げた。

俗に言う『お姫様抱っこ』をされ、本人と周りが騒ぐ。

「あ、アキラさん!? 私は大丈夫ですから、下ろして下さい!」

「アキラ! 本人がそう言っとるんや、下ろしたり!」

「ぶーぶー! 先生ばかりズルイ! アタシも疲れたよ、アキラ。」

「アキラ様、看護なら私がします。」

「アキラ！わらわも……ではない、軽々しく女子の体に触れるでない！」

「マルルウもアキラさんに乗りたいですよ。」

腕の中でもがくアティと、傍で飛び跳ねるミュ、

そして周りを取り囲んで騒ぐ女性陣に、アキラは溜め息を吐く。

「あく、はいはい。一度に言われても判りませーん。

ていうか、アティ。本当に大丈夫なら俺を押し退けられる筈だろ？」

「で、でも、これはちよつと恥ずかしいです。

それにアキラさんだって疲れてるでしょう？」

「せや！何もアキラが運ぶ事あらへん！」

投げ遣りな対応に、一斉にブーイングを上げる女性陣をさらりと無視して、

アティとミュの言葉に、アキラは空を見上げて少し考えた後、へらりと軽い笑みを浮かべる。

「ん、でもまあ、アティがこんな風になったのは、

提案した俺の責任みたいな物だし？

これくらい平気、平気。」

そう言つてすたすたと船に向かって歩き始めてしまふ。

結局、船に着くまでアティが下ろされる事はなく、ミュのやつかみが止む事も無かった。



眠い。

やっぱり怒るのは体力使うな。

俺、普段はあんまり怒らないしな。

ミュは朝からどっか行っちゃったし、今日は一日ユクレスで昼寝し

よく……。

「おい、みんな！アキラさんが『青空相談室』開いてるぞー！」

つて、おいー！

どうしてみんな、俺がユクレスで寝ようとするかと寄って来るんだ!?

そもそも青空相談室って何だ!?

「アキラさん、聞いてー。」

「聞いて下さいよ、アキラさーん。」

「俺もー。」

「私もー。」

ぐわっ!?!いつの間になんかに集まったんだ!?

ふ、ふふふ……。

上等だちくしょー！みんな纏めてかかってきやがれ!!

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△▼△

お、お……次で最後だな。

まったく……喧嘩の仲裁や悩み事なら分かるけど、何で作物の発育  
状況なんて報告に来るかな？

みんな暇なのか？

「あの、アキラさん？」

「ん？ああ、ごめん。今回はどうした、シアリイ？

また、人間について聞きたいのか？」

向かい合うようにしてユクレスの根に腰を下ろしているシアリイ  
に話しかけられ、

考え事を中断して顔を合わせる。

シアリイは人間に興味があるらしく、前からよく話しかけられて  
た。

その度に俺は、ちよつとこの世界とは違うけど、と前置きをして俺  
の世界の話をしていた。

ところが今日は違うらしい。

「あ、いえ、違うんです！」

今日は、その……ある人と……えっと……仲良く、なりたいたんですけど、どうしたら良いのか判らなくて……。」

頬を赤く染めて、詰まりながら必死に説明しようとするシアリイは可愛いけど……。

うくん、恋の悩みか……難しいな。

「仲良くしたい人が誰か、教えてくれるか？」

「え!?それは、その……。」

「相手が誰か判らないと、俺には一般論的な事しか言えないよ？」

大丈夫。誰にも言ったりしないから。」

少しでも信用して貰えるように、シアリイに柔らかく微笑みかける。

シアリイは赤い顔を更に紅くして、呟くように相手の名前を教えてくださいました。

「オ、オウキーニ、さん……です／＼／＼」

うんうん。

やっぱり好きな人の名前を他人に教えるのは、恥ずかしいよな。

うくん。でも、オウキーニか。

食事を作りた村に来た時に知り合ったのかな？

だったら……。

「シアリイ、料理は好きか？」

「え?あ、はい。結構好きです。」

「よし。なら、話は簡単だ。」

今度オウキーニが料理に来てくれた時に、作り方とか聞いてみない? きつと仲良くなれるから。」

そう言つて、励ますように再び微笑みかけると、シアリイも嬉しそうに笑つて、

何度も頭を下げて礼を言いながら帰って行った。

はく。それにしても自分の恋すらままならないのに、恋のキューピッド役をする事になるとは……。

俺が軽く苦笑を浮かべると、すぐ傍から声をかけられた。

「お疲れ様です、アキラさん。」

「アテイか。体はもう良いのか？」

その声に顔を上げると、アテイがにこやかに俺の傍に立っていた。いつから居たのか気付かなかったが、特に驚く事も無く尋ね返すと、

アテイは木の根に腰を下ろしながら答えてくれた。

「はい、健康そのものです。」

寝過ぎちやっただ位で、体慣らしに散歩してたんですけど、村の人たちにアキラさんが相談室をやってるって聞いて、見に来たんです。」

「はは、好きでやってた訳じゃ無いけどな……。」

俺が乾いた笑みを漏らすと、アテイは困ったような表情になり、言い淀んだ。

そこで目だけで何事かと問いかけると、アテイは申し訳無さそうに口を開いた。

「えっと、実は相談したい事があったんですけど……。」

アキラさん、疲れてるみたいですし、また今度にしますね。」

「ちよーっと、待った！」

言うだけ言つて、足早に立ち去ろうとするアテイを、マントを掴む事で何とか引き止めると、

俺は強引にアテイをもう一度木の根に座らせた。

できるだけ真摯に見えるように努めながら、アテイの瞳を覗いて語りかける。

「前にも言つたろ？」

『俺じゃ、愚痴を聞いてあげる位しか出来ないかもしれないけど、それで良ければいつでも聞いてあげる』つて。

『アテイが何か悩んでる時は、いつでも相談に乗る』つてき。だからさ、言ってみなよ?」

「アキラさん……。」

俺の言葉に、アテイは安心した様な、嬉しそうな笑顔を見せた後、

俯いて少し考えると、意を決した様に顔を上げて話し出した。

「あの！実は、私……ッ!!」

ミュちゃんに嫌われている様な気がするんです!!」

「……は？」

深刻そうな顔をしてたから、

てつきり剣の事やアズリアの事で悩んでるのかと思っただら……ミ

ユの事かい。

……まあ、いいか。

難しい事ばかり考えてるよりはマシだろ。

あく、うくん、でもなあ……。

ミュのあれは、アテイが嫌いって訳じゃなくて、リインバウムの間が嫌いなんだよな。

正確に言うと、リインバウムの召喚士が、だろうけど。

「あく、アテイ。ミュは別にお前の事が嫌いって訳じゃないと思うぞ。」

「そうですか？それにしてもミュちゃん、私と喋ってくれないし、避けられてる様な気がするんですけど……。」

不安そうな表情をするアテイを見て、何か上手い言い方は無いかと考えを巡らせて見るが、

いい考えが浮かばなかったので、ストレートにいく事にした。

「だったらさ、直接聞いてみればいいよ。」

「え？ミュちゃんに直接、ですか？」

「そう。ミュは今朝からどっか出かけちゃったから、

探すついでに散歩も兼ねて聞きに行こうか？」

躊躇いを見せるアテイに、笑顔で更に一押しする。

すると、アテイはほへつと気の抜けた顔を見せて呟いた。

「……付いて来て、くれるんですか？」

「勿論！俺が言い出した事だしな。」

「じゃあ、行ってみますー！」

力強く肯いた俺の言葉に意欲が湧いたのか、アテイは笑顔で返事をする。

俺は根から立ち上がるてアテイに手を差し伸べた。

「よしーそれじゃ、出発だ！」

「はいー」

結局その後、俺たちはミユを見つける事ができなくて、午後いっばい島を散歩して過ごした。

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△

今日のウチは、いつもとちやうで。

何せアキラより早起きして、一人で出かけとるんやからな！

……まあ、アキラと離れんのは不本意やけど、

ウチとアキラの幸せな未来の為に、今日はちよつと敵情視察や。

まずは、ちみつこマルルッからや！

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△

「え？アキラさんの事ですか??？」

「そや。どない思ってるんや？」

ふわふわと花畑の上を飛んどった、ちみつこを見つけて聞いてみる。

まあ、ウチの相手にはならへん思うけど、いっつもアキラの周りをチヨロチヨロしとるからな。

念の為や。

「マルルウはアキラさんの事、大好きですよ！」

いっつも、にこにこしてて、とっても優しいですから。」

……やっぱりちみつこは相手にならんな。

そんな子供の『好き』なんか論外や。



「だからマルルウ、大きくなったらアキラさんのお嫁さんになるのですよー!」

「なっ!? あかん! そんなん、あかんに決まってるやろ!?

アキラと結婚するんはウチや!」

いきなり何言い出すねん、このちみっこは!?

まったく……油断も隙もあらへんわ。

「じゃあ狐さんも一緒に、三人仲良く結婚するですよー。」

「アホ! 三人で結婚できる訳ないやろ!?

せやからアンタは諦め。」

「えー? 嫌ですよ。狐さんこそ諦めて下さい。」

「何やて〜! 言うても解らんちみっこは〜……こうや!」

「うひゃ〜!?!」

ちみっこに飛びかかって、花畑をアツチコツチ追いかけて回したつた。

コレでちみっこは「おっけー」やろ。

次は……あの変態フレイズに釘刺しとこか。



「おや? 貴女が一人で私の所に来るなんて珍しいですね、狐のお嬢さん?」

「ウチの名前はミュヤ! ちゃんと覚えとかんかい!」

「おや、これは失礼。」

……?

何やいつもと違うな? コレやったらまるつきり普通の兄ちゃんや。

まあ、ええわ。釘だけ刺して、早よ帰ろ。

「こら、変態。」

「なっ!? 誰が変態ですか、誰が!」

「アンタや、ア・ン・タ!」

……ウチのアキラにちよっかいかけるの止めてくれるか？」  
気分的には見下ろして睨み効かせたてやりたいトコやけど、  
変態のくせに背だけは高いから、どうしても見上げる形になつてま  
う。

まあ、ガン飛ばすだけで我慢したろ。

変態はウチの睨みにも怯まず、眉を逆立てて睨み返してきよった。  
「ちよっかいとは心外ですね？」

私は全身全霊でアキラさんのお役に立とうとしているのに。」

それで何でアキラの体にべたべた触る必要があるねん、この変態！

「……ええからアキラに近づくんやない！」

「何ですって!？」

あの方の魂の輝きは我々にとつて、至上の美酒、妙なる雅楽だと言  
うのに……っ。

それを取り上げようと言うのですか!？」

ああ、成る程な。

コイツがアキラの前でおかしなるんは、魂の輝きとやらで酔つとる  
からなんか。

……って、あかんやん！

元から何するか解らんヤツやのに、酔つとつたら余計危ないやんか  
!

「もうアンタはアキラに近づくんは禁止や、禁止！」

「理不尽です！護衛獣の貴女に何の権限があつて……」

「そや！ウチはアキラの護衛獣。ウチのモンは全部アキラのモンや。」

せやつたらアキラのモンは全部ウチのモンや！」

ウチは身も心もアキラのモンなんやから、アキラもウチのモンで当  
然や！

「何て傲慢な……っ！」

「そういう訳やから、アキラに近づくなや！」

言い捨ててウチは次の集落に向けて走り出した。

後ろで何や言うてるけど、「のーぷろぶれむ」や。

それに、あんな変態に構つとつたら日が暮れるわ。

さて、次は……こぶ付きのトコや！



「ん、何じゃ？お主一人か？アキラはどうした？」

で、会った早々それかい！

どいつもこいつも同じような反応しよって……。

誰がお前らなんかにアキラを会わせるねん！

「今日はアンタに言いたい事があって来たんや。」

「ん？何じゃ？」

「人妻で子供までおるくせに、アキラにちよつかいかけるんやない！」  
ビシッと指を突きつけて言うたつた。

大体、生涯の伴侶を決めた奴が、他の男に手を出そうとするトコから間違つてんねや。

しかもガキまでおるくせに！

「確かにわらわは人妻じゃが、連れ添いは既に亡い。何の問題も無からう？」

スバルの事とて、アキラは気に入ってくれておるしな。」

くっ、何て厚い面の皮なんや！

コレが年の功ゆーヤツか。

せやけどウチは負けんで！

「ふん、まあええわ。今日は一言言いに来ただけやからな。」

ええか！アキラには指一本手出しさせへんからな！」

もう一度ビシッと指さし捨てて台詞を決めて、呆然としてるこぶ付きを放つて、

次の集落に向けて「だっしゅ」した。

後ろで笑い声が聞こえたけど、今は我慢や。

コレ以上時間かけたら暗なつてアキラに心配かけてまう。

次は強敵の機械娘や！



「何のご用でしょう?」

……相変わらず愛想の無い娘やな。

まあ、ええわ。それよりさっそく確認しよか。

「ちよつと聞きたい事があるんや。アンタ、アキラの事どない思てるん?」

「質問の意図が解りかねます。」

即答かい!

分からへんにしても、ちよつとくらい考えるやろ普通!

「……あく、つまりやな、アキラの事が好きなんか? って聞きたいんや。」

『好き』とは、どのようなモノなのですか?」

な、なんやてく!?! そんなんも解らへんのかい!?

うゝ、この娘の行動は、どー見てもアキラに惚れとると思つたんやけどなあ?

……ん?

ちゅー事は、この娘はウチの敵にならへんって事やな。

よつしや! 「らいばる」が一人減つたな!

「ミュ様?」

「ん? ああ、せやなく……『好き』言うんは、ソイツの事しか考えられへん、  
言う事かな。」

「その人の事しか、考えられない……。」

「まあ、そんな感じや。ほな、邪魔したな!」

何や考え込んだる機械娘は放つとくとして、コレで全部釘差し終わつたな。

仕方ないとはいえ、一日中アキラに会えんなつてもたわ。

早よ帰ってアキラに甘えよ！



はー、やっと船まで戻ってこれたわ。  
ぎりぎりで陽が沈む前やな。

ん？船の前に居る人影は……。

「アキラ!!」

名前を呼びながら、その腕の中に飛び込む。

アキラはまるで、ウチが飛び込む事を分かっとなみたみに、その腕で抱きとめてくれる。

くっつ、やっぱアキラの腕の中は気持ちエエわ。

「ミユー！一日中どこに行ってたんだ？心配したぞ。」

ちよつと怒った声に謝る思て顔を上げたら、声のうなつてしまった。

いつもは静かに光つとる銀の髪が、夕陽を浴びて紅く艶めかしく輝く。

どこまでも紅い空の背景に、深い蒼の瞳が映える。

……綺麗や。今まで見てきたどんなモンより。

「……ミユ？」

「あ？ああ、今日は集落回って、みんなと話しとつたんや。」

ウチの答えにアキラが怪訝な顔をしとると、船から紅毛あかげが降りてきよった。

「あ、ミユちゃん！やっと会えましたね、アキラさん。」

「ああ。アテイ、あの話はどうする？」

「今日はもう遅いので、また明日、という事で。」

「そうだな。」

な、何や!?

ウチが居らへん間に何かあつたんか!?

紅毛は学校やら何やらで、「のーまーく」でええと思ったのに！  
くっ、もう二度とアキラを一人になんかせえへんで!!  
「覚えとけや、紅毛！」  
「え？ええ??？」

## 初めてのお休み

イスラの騒動があつた翌々日。

アティが船外へ出てみると、船の持ち主であるカイル一家が集まっていた。

「え、休日ですか？」

話に加わった途端、カイルたちに言い渡された休みの話に、不思議そうにアティが聞き返す。

「うん。昨日みんなで話し合つてさ、決めたんだよ。」

明日一日を先生の自由時間にしようって。」

ソノラが嬉しそうにアティに答える。

「センセったら、ほっとくと際限なく働きまくるからねえ。」

こうでもしないと、自分の為に時間を使おうなんてしないでしょ？」

続くスカールレルに凶星を指されながらも、アティは遠慮がちに断ろうとする。

「でも……。」

しかし、それもヤードがやんわりと押さえるように、休む事を再度奨める。

「偶には良いじゃありませんか。」

息抜きをする事で見えてくる物だつて、きっとありますよ。」

そして他の発言を封じるように、カイルが声を大にして宣言する。

「ともかく、明日は煩わしい事を考えるのは禁止だ！」

面倒くせえ事はみんな俺らに任せて、思いつきり羽根を伸ばしてくんなん？」

「は、はあ……。」

勢いに飲まれるように承諾の返事をしてしまったアティは、困つたような笑顔を浮かべる。

そして、少し離れた所で木箱を机代わりに、召喚術の勉強をしているウィルとアキラを見付け、そちらへと歩み寄る。

当然、二人の傍にはそれぞれの護衛獣が居て、主と同じように本を覗き込んでいたので、

アティは横合いから話しかける事になった。

「……って、言われたのは良いんですけど。」

アティが先程告げられた休みの話をする、二人からは肯定が返って来る。

「良いんじゃないですか？みんな、そうしろって言ってるんですから。」

「そうそう。アティは頑張り過ぎだよ。偶には休みなつて。」

「ミヤーツー！」

ウィル、アキラ、そしておそらくテコも、アティが休む事を奨める。

……ミユは、どうでもいいとばかりに欠伸をしていたが。

まだ何か躊躇っているようなアティに、ウィルが不思議そうに尋ねる。

「公認で休ませて貰えるなんて、滅多にない機会だと思いますけど？」  
「そうなんです！それが問題なんですよ。」

ウィルの質問に、我が意を得たりとアティが握り拳を胸の前で作る。

訳が分からず首を傾げる二人に、アティが情けない笑いを浮かべる。

「お休みを貰うなんて久しぶりなので……、

何をして過ごしたら良いのか、全然思いつかないんですよ。」

「はあ!? (ミヤ?)」

予想もしなかったアティの言葉に、思わずアキラとウィル（ついでにテコ）の驚きの声が被る。

……ミユは小さな声で「アホやな。」と呟いていたが。

そこで、当然沸き起こってくる疑問をウィルが尋ねる。

「それじゃ貴女、今まで休日はどうやって過ごしていたんですか？」



「そうですねえ……。」

学生の頃は自習をするか、ぼんやりするかのどちらかでした……。アティは少し考え、学生時代の休みに何をしていたか思い出す。そのあんまりな内容に、ウィルが質問を重ねる。

「趣味を持つとか、どこかに遊びに出かけたりとかは？」

「特にありませんねえ。」

ほら？それに私は村のみんなに学費を出してもらって勉強してきましたから、

外に出て遊ぶのはどうしても気が引けちゃって……。

滅多に遠出はしなかったんです。」

「……。」

アティの律儀な性格は解っていたつもりだったが、これ程とは思っても及ばず、

ウィルは言葉を無くす。

そこに、心底困ったといった感じでアティが尋ねてくる。

「でも、本当にそうなんですよ。どうでしょうっ。」

「知りませんよ!?!そんな事、普通は自分で考えるものでしょうに……。」

呆れて物も言えない時に、更に呆れる事を言われて、ウィルはつい怒鳴ってしまう。

そしてその後に、疲れたように言葉を繋げた。

「フミュウ……。」

「うくん……。」

テコが心配そうに見守る中、アティは目を瞑って頭を捻る。

と、そこで、隣で面白そうに成り行きを見ている存在を思い出した。

「アキラさん。アキラさんは休みの日には何をしていたんですか？」

「俺？そうだな……弟妹たちと日向ぼっこしたり、散歩とか買い物に行ってたかな。」

元の世界を思い出し、楽しそうに、でもどこか寂しそうにアキラは微笑んだ。

その表情にミュは気遣うような瞳を向ける。

アキラは頭を撫でる事で、心配無いとミュに伝え、アテイに目を向ける。

アテイは考え事に集中していて、二人の様子には気付かなかったように、うで、

「そうですか……。」と呟いて頭を捻り続けていた。

「別にそんなに急がなくても、休みは明日だろ？ ゆっくり考えればいいさ。」

「それもそうですね。ありがとうございます、アキラさん。」

放つて置くと際限なく悩み続けそうなアテイに、アキラがのほほん譲歩案を出す。

その言葉に意識の底から浮上したアテイは、にっこりと笑顔を浮かべてアキラにお礼を言うのと、

今日の授業の準備をすべく船の中へと戻って行った。

「どうやら何故休みを貰えたのかを、いまいち理解していないようである。」



みんなにお休みを貰ったのはいいんですけど……。

「結局、何も予定を決められないまま当日になっちゃったなあ。」

でも、せつかく貰った休みを寝て過ごすっていうのも悪いですし……。

「とりあえず、まずは誰かに声をかけてみましょうか……。」

何をするにしても、誰かと一緒の方が楽しいでしょうし。

うん、そうしましょう。」

そんな事をいいながら、私の頭には優しい笑顔をしたあの人が浮かびます。

アキラさんは……今日、暇でしょうか？



「で、いつの間にかこんな大所帯になってたりして。」

照れ隠しに、全員に声をかけたのは失敗だったかもしれない。

私が辺りを見渡して、その人数の多さに苦笑すると、

いつものようにミュちゃんを腕にぶら下げたアキラさんが、隣で楽しそう笑いました。

「それだけみんな、アテイが好きなんだよ。な、ちびっ子たち!」

「こっさり出かけちやうなんて、ズルいよ。」

「そうだ、そうだ!」

アキラさんに声をかけられ、パナシエくとスバルくんが騒ぎだしてしまったのを、

両手を挙げて何とか押し止めます。

「はいはい……。みんな一緒に遊びに出かけましょう、ね?」

そう言っ子子供たちを宥めていると、アルデイラとクノンさんがやって来て、

子供たちを引き取ってくれました。

「子供たちの事は私たちに任せて、貴女は好きなように過ごせばいいのよ。」

今日は貴女の為の休日なんですもの。ね?」

「特に、私はその目的の為に同行すると決めた訳ですから、遠慮などはないで、

どうぞご自由にお寛ぎ下さい。」

「ありがとう、アルデイラ、クノンさん。」

二人の言葉に感謝して、頭を下げる。

そこへ、ヤツファさんの号令がかかりました。

「よし、そんじゃあそろそろ出発するところかい?」

「いつてらっしゃい。」

「後はアタシらに任せて、思いっきり楽しんでくださいね。」  
留守番組のヤードさんとスカーレルに笑顔で見送られ、元気に返事を返して出発します。

「はい、それじゃあ行ってきます！」



日が高く明るい森の中を、一行はヤツファを先頭に賑やかに歩いていく。

後ろの方で子供たちに囲まれ、引つ付かれたりよじ登られたりして苦笑するアキラや、

お喋りに花を咲かせる仲間たちの様子を見渡して、

アテイが嬉しそうに隣にいたウイルに話しかける。

「何か、こうしてみんなと歩いているだけで、わくわくしてくる気がしますね。」

「先生、見てて分かる位はしゃいできますからね。」

珍しく浮かれた様子を見せるアテイに、ウイルも嬉しそうに応じる。

アテイは目を閉じ、ほんの少しの間、島に来てからの事を思い出し、残念そうな声で誰ともなく問いかける。

「考えてみたら、みんなが集まるのはいつも戦いの時ぐらいで、

こうやって、普通に集まった事なんか無いですよ？」

いつの間にかカイルと共に近くに来ていたソノラが、それに不思議そうに答える。

「そう言えば、そうだよね。」

「いい機会だし、今日は俺も連中と親睦を深める事にすつかかな。」

アテイとソノラの話聞いていたカイルは、

過ぎた事は仕方ないとばかりに豪快に笑って、他の仲間たちの方へと歩み去る。

その大きな背中を見ながらアテイは再び笑みを浮かべ、ソノラに「そうですね、それじゃ私も。」と言い残して後方へと足を向けた。



「アキラさん。」

「アテイ！いいところに来てくれた。ちよつと助けてくれよ。」

私を見てぱつと顔を輝かせたアキラさんは、結構凄い状態でした。

右手はパナシエくんに掴まれて、背中はスバルくんにつかわれて、頭はマルルウに乗られて、

その三人を左手にくつついていたミュちゃんが威嚇しているという状態。

これでここまで歩いて来るなんて、アキラさんはやつぱり凄いな。

……つて、感心してる場合じゃありませんでした！

子供たちを離さないと！

「ね、みんな。先生、アキラさんに大事な話があるの。ちよつと離れてくれる？」

「「え〜……。」」

「お願い！」

口を揃えて渋る子供たちに軽く手を合わせてお願いしてみると、名残惜しそうにしながらもアキラさんから離れてくれました。

ミュちゃんはそのままでしたけど。

「は〜、助かったよ。アテイ、ありがとう。」

「いえ、そんな……大した事じゃありませんから。」

につこりと綺麗な笑顔で言われて、熱くなった顔を隠しながら応えます。

「それで大事な話って何、アテイ？」

「えっ、えっ、と……。」  
困りました。

あれは子供たちを離れて貰う為の嘘だったんですけど、  
今更そんな大事な話なんて無いとは言えませんし……。

あ、そうです！

「アキラさん、耳を貸してくれますか？」

秘密めかせて言ってみると、どことなく楽しそうにアキラさんは顔を近づけてくれました。

銀の髪が少し耳にかかった綺麗な横顔が、私の目の前にあります。

とても綺麗なその横顔に見惚れてしまっていると、

ミュちゃんの唸り声が聞こえて正気に戻りました。

両手を筒のようにしてアキラさんの耳に近づけ、ミュちゃんには聞こえないように囁きます。

「目的地に着いたら、この前のデートの続きをしませんか？」

アキラさんは一瞬驚いた表情をした後、笑顔で「いいね。」と言ってくれました。

でも、私たちのやり取りを見て、ミュちゃんが騒ぎだしました。

「何や？何の話や!？」

アキラさんは、そんなミュちゃんを見ながら少し考えて、私の方に視線を変えました。

「んっ、秘密?？」

「はいー秘密です。」

更に騒ぎだしたミュちゃんには悪いですけど、何だか二人だけの秘密って感じで嬉しいです。

早く、目的地に着かないでしょうか？



海に程近い岩場に、色とりどりの花畑が広がっている。

アテイたちが見惚れていると、岩場の亀裂から染み出した温水があちこちにプールを作り上げ、

多くの動植物にとつて理想的な環境になっているのだと、クノンがみんなに説明してくれる。

その後、自由行動という事で、クノンが荷物番に残り、他の者たちは思い思いの場所へと散っていった。

そんな中、アテイを警戒してアキラにべつたり引つ付いていたミユの目に、

アキラの周りを飛び回るマルルウが映った。

目の前をマルルウが通る度に、ミユの尻尾がうずうずと動く。

そして何度目かに通り返した時、ミユが叫び声をあげた。

「——あかん！もう我慢できん!!」

「うひゃあああ!?!」

その叫びと共にミユがマルルウに飛びかかり、マルルウは悲鳴を上げながらも何とか逃げ出す。

そのまま追いかけてこが始まってアキラが一人になると、アテイがこっそりやって来て、

みんなに気付かれないようにアキラの手を引いて喧騒から抜け出した。



「あはは、 上手くいきましたね?」

「ホント。 誰も気付かなかったな。」

二人は花畑から少し離れた、小高い丘の芝生に並んで寝転んでいった。

上からは下の様子が一望できるが、下からは立たない限り見つかる事は無い絶好の場所。

そこから、こっそり二人はみんなの様子を窺い、くすくすと笑う。

「みんな楽しそうですね。」

「そうだな。」

でも、今日はアテイの為の休みなんだから、アテイが一番楽しみたいとダメだぞ?。」

「ふふ、楽しんでますよ?。」

みんな楽しそうですし、お日様はぽかぽかですし……。

(それにアキラさんが隣に居てくれて)……私は今、凄く幸せです。」

「そっか。」

心からの笑みを見せるアテイに、アキラは満足気に笑うと、ごろりと仰向けになる。

アテイも、それに倣うように仰向けになって空を仰ぎ見た。

どこまでも青く澄み渡った空、すずやかな風、そして潮騒に混じって聞こえてくる笑い声。

とても平和な時間を満喫していたアテイの耳に、隣から微かな歌声が届いてきた。

歩いて行こう

君と歩いて行こう

笑顔も泣き顔も全部見たいから

笑顔も泣き顔も全部見て欲しいから

君の傍に居て分かち合いたい

喜びも悲しみも

歩いて行こう

君と歩いて行こう

君を支えたいから

君に支えて欲しいから

君が泣きたい時は傍に居たい

泣きたい時には君に居て欲しい

笑顔で居て

笑顔になれるから



笑顔で居るよ  
笑顔で居て欲しいから  
歩いて行こう  
君とどこまでも歩いて行こう

目を瞑り歌に聞き入っていたアティは、歌が終わるとゆっくり目を開いて、

寝たままアキラの方に体を向ける。

「今の歌は……アキラさんの世界の歌ですか？」

「ああ。俺のお気に入りのお歌。」

アキラが笑顔で答えると、アティも笑顔を浮かべる。

二人で穏やかな空気を楽しんでいると、だだだ、と誰かが走って来る音が聞こえ、

小さな影がアキラに飛びかかった。

「アキラ……!!」

「ぐはっ!!」

どすっ、という鈍い音と共にアキラの呻き声があがる。

その呻き声の元凶は、アキラにダイブしたまましがみつки、

白くて大きな尻尾をぱたぱたと振っていた。

「え?! ミユちゃん!」

「……げほ……どうしたんだ、ミユ?」

ミユの突然の登場に驚くアティと、咽ながらも驚かずに尋ねるアキラ。

そして二人の様子など全く気にした風もなく、ミユは嬉しげにアキラに話しかける。

「ほらほらー! どうとうやったんや!!」

そう言っつてミユが掲げて見せたのは、ぐったりとしたマルルウだった。

「ま、マルルウ……!!」

高く晴れた空に二人の驚きの声が吸い込まれていった。

## 乱れた振り子

その日、俺とミュとアティは中央管理施設のテラスから機械の街を見下ろし、

昼食後のティータイムを楽しんでいた。

授業はどうした!?!とか、帝国軍は!?!とか、色々つまれそうだけど、

偶には息抜きも必要って事で。

そんな感じでまったり過ごしていると、アティが何かを思いついたように話しかけてきた。

「そう言えば、この間ジルコーダの残りが出た時の事なんですけど、

私いいもの見ちゃいました。」

「いいもの?…それって確か、俺がキュウマに追い回されてた時の話だよな?」

クノンさんがピンチだったとかいう。」

俺が修行時の事を思い出し、心持ち表情を青ざめながら「いいもの」が何かを尋ねると、

ミュの大きな耳が細かく動いた。

ミュは俺以外のやつとはほとんど会話しない。人間とは特に。

だから今も、会話には加わっていないが、聞き耳を立てている様子からすると、

少なくともこの話には興味があるみたいだ。

そんなミュを微笑ましく思いながら、アティの話に耳を傾ける。

アティは、ほにや、と本当に幸せそうな笑顔を浮かべて話し始めた。

「実はですね、クノンさんが笑ってくれたんです。

ほんのちよつとでしたけど、とつても可愛かったですよ。」

俺的には、今のアティもかなり可愛い表情をしていると思ったけど、そんな恥ずかしい事は言わずに話を続けた。

「あく、そう言えば俺も見た事あるな。」

俺がそう言った瞬間、アティは目を輝かせ、ミュは耳をこっちに向けた。

その、いかにも聞きたいって感じの二人に小さく笑いながら、その時の事を話してあげた。

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△

あれは、アティと知り合ってからしばらくした時だった。

クノンさんから「どうして笑ったのか」「嬉しいと思った原因はなんなのか」

「どうしたら嬉しいと思って貰えるのか」と聞かれた。

すぐにアルデイラに笑って欲しいのだと思いついて、その可愛さに頬を緩ませながら答えた。

「そうですね……。」

人が笑ったり笑わせたりするのは、状況や場所などによって条件が変わるので、

一概にこうすれば、とは言えません。

ですが、もしクノンさんがアルデイラに笑顔を見せて欲しいなら、笑いかけてみてはどうですか？

きつとアルデイラは笑い返してくれますよ。」

「笑い、かける……?」

クノンさんは俺の言った事を吟味するように、

少し考えてから「やってみます。」と、小さく可愛い笑顔を浮かべた。

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△

俺が話し終わると、アテイは「よかったですね。」と言ってくれたが、何故かミュからは冷たい視線を向けられ、

「まあ、ウチが喚ばれる前やし、大目にみたるわ。」と、ぼやかれた。……何かしたか、俺？

内心首を傾げていると、どこからか誰かの走る音が聞こえてきた。いつも静かなラトリクスでは珍しいな、何て考えてると、自分の名前を呼ぶ声とともに凄まじいタツクルを喰らった。

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△

「アキラ！起きて、アキラ!!クノンの様子がおかしいのよ〜!」

突然走って来たアルディラは、凄い体当たりでアキラさんを吹っ飛ばした後、

ぐったりしているアキラさんの胸倉を掴んで揺すりながら叫んでいます。

あわわ、アキラさんが死んじゃいます!

「お、落ち着いて、アルディラ!首!アキラさんの首が締まっています!!」

「離しいや、姐さん!」

私とミュちゃんが、やっこの思いでアルディラをアキラさんから引き離すと、

アルディラはぺたりとその場に座り込み、泣き出してしまいました。

すると、やっとの息の整ったアキラさんが、

まるで小さな子をあやすようにアルディラの頭を撫でて優しく聞きました。

「……で、クノンさんがどうしたんだ?」

ちゃんと言ってくれなきや分からないよ、アルディラ?」

その言葉にアルディラは泣き声のまま話し出しました。

「クノンが……クノンが、私を……避けてるみたいなの。」

このところ極端に口数が少なくなってしまうって、まるで相手をしてくれないし、

昨日の夜は、おやすみを言ってくれなかったし、

今日の朝なんて、おはようも無かったのよおおオオ!!」

た、確かにクノンさんの様子が変なのかもしれませんが、

それより今のアルデイラの方が変なような……。

私がいつもと違うアルデイラに驚いていると、アキラさんがそつとアルデイラの眼鏡を外し、

手で優しく涙を拭いてあげながら話しかけました。

「じゃあ、まずクノンさんに会って話してみないとな?」

本当に避けてるにしても、アルデイラの勘違いにしても、話してみないと分からないし。」

そう言って優しく微笑むアキラさんのおかげか、アルデイラは落ち着きを取り戻して、

涙を拭って眼鏡を受け取り、「そうね」と小さな笑みを浮かべました。

………?」

何だか胸がもやもやして気分が悪い。

アルデイラが泣き止んでよかった筈なのに、私はどこか……不愉快に感じてる?」

「そうと決まれば、まずはクノンの現在地ね!」

ツ!!

そうです。今はクノンさんの事を考えないと。

アルデイラが部屋の中の機械を操作して、クノンさんの居場所を探します。

ラトリクス内なら、せんさーがシキベツ信号を受しん出来るとか何とか……。

便利ですねえ。

少しすると、クノンさんの居場所を見つけたのか、アルデイラが笑顔になりました。

でも、すぐにその表情が凍り付いたんです。

「……あの子、どうしてスクラップ工場なんかに!？」

スクラップ工場。

その言葉に背筋に嫌な感じが走りました。

そして、それと同時にアキラさんが「行くぞ!」と告げて走り出しました。

私たちも遅れないように駆け出します。

……嫌な予感が当たらなければいいんですが。

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△

灰色の空。

先程までの天気嘘のように厚い雲が立ちこめ、今にも雨を降らせようとしている。

そんな暗い空の下、スクラップ工場に佇む少女の影が一つ。

今にもプレス機に飛び入りそうなその影に、焦燥の色を滲ませた女性の声がかけられる。

「クノン!」

「……アルディイラ様。」

その声にクノンははっと振り向き、主の名を呟くと、そっと目を伏せた。

「クノン、何をしているの? 貴女はこんな所には何の用も無い筈よ。

さあ、帰りましょう?」

「申し訳ありません、アルディイラ様。私は……私は壊れてしまったのです。」

壊れた道具は廃棄しなければ。」

まるで笑うのに失敗したかのような表情で、アルディイラが懇願するようにクノンに語りかける。

しかし、クノンは俯いたまま、いつもの平坦な声で自分の廃棄を進

言する。

俯いて表情の窺えないクノンの頬に、ポツリ、と一滴の雨が落ち、まるで涙のように流れる。

「何を言ってるの!？」

貴女は壊れてなんかない！壊れてなんかいないわ!!

だからこつちへ——。」

「いいえ!!」

……いいえ、私は壊れてしまったのです。何度も何度も検査し直しました。

でも……でも！何の異常も見つからないのに痛いんです！

——胸が、痛いんです。

アルデイラ様とアキラ様が一緒に居るのを見ると、

アルデイラ様とアキラ様が一緒に笑い合っているのを見ると——

——胸が痛いんです!!」

アルデイラの再度の呼びかけにも、クノンは泣き叫ぶようにして拒絶を返す。

そして、その叫びに呼応するように、一つ、また一つと雨が降り始める。

その数は次第に多くなり、まるでクノンとアルデイラの間を遮る幕のよう。

徐々に、しかし確実に強く、雨は降る。

かつてないクノンの強い拒絶に、アルデイラが膝をつき項垂れる。

すると雨音に負けぬような大ききで、しかし柔らかな響きで、青年がクノンを呼んだ。

「クノンさん。」

声に反応し、クノンの肩が揺れる。

「少し、話をしませんか?」

そう言って一歩近づく青年に、クノンが絶叫する。

「それ以上、近寄らないで!!……寄らないで、下さい。

私に、貴方を殺す理由を与えないで!」

「……………」

クノンの絶叫に、青年はただ沈黙で応える。

「ずるい……ずるい！みんな、ずるいです!!」

私が一番欲しいものを、貴女たちはいつだって手に入れることができる……。

一緒に『嬉しい』と感じる事ができる！

私にはっ……できない。

それが羨ましくて、悲しくて……憎らしい!!

胸がズキズキ痛んで、おかしくなってしまうそうなんですツ!!」

「……………」

雨に濡れ、泣くように肩を震わせるクノンに、青年は無言で更に一歩近づく。

「近付かないでっって言ってるのに!」

今度は拒絶の言葉と共に召喚術が放たれる。

「アキラ(さん)!!」

しかし、召喚術はアキラを掠め、地面に当たって消える。

慌てて走り寄ろうとするアティとミュを、アキラは右手をあげて制する。

そして、更に一歩、クノンに近づく。

「ツ!!どうして!?!」

どうして放っておいてくれないんです!?!」

再び召喚術が放たれるが、やはりアキラを掠めるだけで、あらぬ方向へと飛び去る。

アキラは歩みを止めずに口を開く。

「どうして?…そんなの、クノンが仲間だからに決まってるじゃないか。

仲間が、友達が悩んでるなら、苦しんでるなら、助けたいと、俺は思う。」

「仲間……。でも、私……。私は!」

「怖いんだろうとは思う。不安だろっとは思う。

でも、俺は止まらないよ。これが正しいと信じるから。」

アキラは話しながらも確実にクノンに近づいて行く。

「クノンだって本当は解ってるんだろ?痛みの原因が何か。」



ただ認めたくないんだ。

いや、認める訳にはいかないのかな？」

いつしかアキラはクノンの前に立ち、優しくその小さな姿を見下ろしていた。

不安に揺れる眼差しが、その優しい眼差しと交わる。

「……アキラ、様。」

「ほら、言っただけじゃん？まだ、言いたい事があるんだろ？」

誰もクノンを責めたりしない。俺が責めさせたりしない。

だから、言っただけじゃん？」

その言葉にクノンはまるで堰を破ったように叫び出す。

「……嫌い！大嫌い!!」

アルデイラ様も、アキラ様も嫌い！

こんなに辛い思いをするくらいなら、みんな消えちやえばいい!!

……でも、好き。

好きなんです。アルデイラ様も、アキラ様も、とても大切なんです。

だから……だから、そんな事を考える私が

……一番嫌い。」

スカートの裾を掴み、在らん限りの声で叫んだ後、クノンは裾を掴んでいた手をゆるゆると開き、

自分を隠すように、自分の心を隠すように、顔を覆い、小さく呟いた。

その震える小さな体をそっと抱きしめ、アキラは囁いた。

「大丈夫。……大丈夫だよ。よく言えたね、クノン。」

俺も、アルデイラも、そんな事でクノンを嫌いになつたりしないから。

だから、大丈夫。」

クノンは縋るようにアキラの体に腕を回して抱きつき、

アキラはクノンの震えが収まるまで、ただ同じ言葉を囁き続けた。



暖かい。

冷たい雨に濡れた体が、アキラ様の体と触れた部分だけが熱を持ったように熱く、

冷えた体に心地良い。

雨音と共に囁かれるアキラ様の声が、心地良い。

今、この瞬間がとても心地良くて、私の体の震えはゆっくりと収まっっていく。

いつしか雨は止んでおり、雲の間から陽の光が差し込み出した。

私アキラ様から離れ、その光景を見てみると、声をかけられた。

「クノン。クノンの胸が痛くなった原因は『嫉妬』だよ。」

「——嫉妬？」

「そう。好きな人が自分以外の人と仲良くしていると感じる心の一つ。」

「心……。あんな恐ろしいモノが……。」

心があんなに危険なモノだったとは。

やはり、心の部分だけでも廃棄しなければ……。

「でも、それだけじゃないよ？」

好きな人の笑顔を見ると、胸が暖かくなるだろ？

好きな人に声をかけられると、どこか軽くなるだろ？

それも、心なんだ。」

好きな人。

アルデイラ様の事を考える。

胸が暖かい。

好きな人。

アキラ様の事を考える。

胸が、熱い？

同じようで少し違う。

これも心の一つだろうか？

尋ねようとしたら、先に話しかけられた。

「人の心は全部が全部綺麗なものじゃない。醜いところもあるし、そ

れは捨てられない。

でも、心にはそれ以上に綺麗なところがある。だから、捨てちゃ駄目だよ?」

ツ!!

どうして分かったのでしょうか?

……でも、もう捨てようとは思っていません。

アキラ様が、綺麗な心を教えてくれたから。

「大丈夫です。」

心は、もう……大切なモノですから。」

何故だか誇らしくて頬が緩みます。

すると、アキラ様がとても綺麗な笑顔で指差しました。

「アルデイラが、待ってるよ?」

そこには変な表情をしたお二人と、涙を流すアルデイラ様が居ました。

アルデイラ様の所へ駆け寄ると、頬を叩かれました。

「二度と、こんな事、許さないから……。」

「アルデイラ様……ごめんなさい……。」

私が謝ると、アルデイラ様に強く抱きしめられました。

アルデイラ様の腕の中も、心地良いものでした。

好きな人に抱かれるのは、とても心地良い。

またいつか、アキラ様にも抱きしめて貰おう。

## 蠢き出す過去

木漏れ日の差す森の中、最近になって何度も通った為に踏み固められて硬くなってきた小道を、

三つの人影がゆつくりと歩いている。

アキラ、ミュ、アテイの三人が、フアリエルの呼び出しを受けて、森の中を狭間の領域に向かって歩いているのだった。

「——で、ウイルくんは言ってくれましたけど、

私がこの剣を持つてる限り、帝国軍との騒動は続くんですよね……。」

喚起の門近くに差し掛かった時、アテイは今朝方のウイルとの会話をアキラとミュに話していた。

休日を貰い、多少は気分が軽くなったとは言え、少しでも考える時間ができると、

自分の持つ剣の所為で人質にされたスバルたちの事を

考えてしまうアテイを見かねたらしいウイルに、

「今ちやんと人を守るといふ夢を叶えている、と励まされたと話した後、

アテイは疲れたように眩きを付け足した。

その眩きにミュがアテイに呆れた視線を送り、アキラはその頭に手を置く事でミュを注意し、

アテイに向けて口を開こうとした時、近くで誰かが戦っている音が聞こえてきた。

瞬間、アキラとアテイは目を合わせると、同時に音の聞こえてきた方へと走り出し、

ミュも慌ててアキラの後を追いかけた。



「お願い、お願いだからーこのまま眠っていて！」

喚起の門の前で、亡霊兵士たちと戦うファルゼンを見つけ、アキラとアテイの声が重なる。

「ファルゼン!？」

「アテイ!?アキラさんまで!？」

突然呼びかけられた事で一瞬の隙が生まれ、

亡霊兵士の攻撃を受けてしまったファルゼンが悲鳴をあげる。

すかさず抜剣しようとするアテイと、ミュを連れたアキラが助けに入ろうとするが、

助けようとした人物の声で動きを止める。

「近づかないでっー！」

「えっ!？」

「剣の力を使ったら、ますます彼らは荒れ狂ってしまうわ！」

「何ですって……?？」

ファルゼンの言葉でアテイは完全に動きを止められてしまったが、逆にアキラとミュは何の問題も無いと判り、騒ぐ亡霊たちに向かおうとする。

しかし、二人もやはりファルゼンの声で動きを止める。

「気を静めて……。もう、貴方たちの戦いは終わっているの。」

「還りなさい……。二度と目を覚まさない深い眠りの中へと。」

三人の見守る中、ファルゼンの言葉と辺りに広げられた魔力によって、

苦悶に呻いていた亡霊兵士たちは鎮まり、消えていく。

「兵士たちが……。消えていく……。」

「グ——ッ。」

「大丈夫、ファリエル!？」

静かに姿を消す亡霊兵士たちを見て、アテイが信じられないといった感じで眩きを漏らす。

しかし、その驚きもファルゼンが苦しげに声を出した時には消え失せ、

アティは思わずファリエルの名を呼びながら駆け寄った。

そしてアティとは対照的にアキラとミュは辺りを警戒しつつ、ゆっくりとファルゼンに近寄る。

「ナゼ……ココニ、キタ……」。

近づいたらダメだと、あれほどお願いしたじゃないですか!？」

近づいて来た三人に、途中でファリエルに姿が変わりながらも問い詰める。

しかし、その変化に驚きの表情を浮かべたのは、ミュ一人。

「それは……」。

「うう……っ」。

「しっかり!?!しっかりして!?!ファリエル!?!」

アティたちが答えに詰まっていると、ファリエルはマナの使い過ぎで意識を失ってしまう。

その緊急事態に、アキラはすぐさま倒れたファリエルを横抱きにし、

アティたちを連れて狭間の領域へと駆け出す。

その道の途中で、不機嫌そうに走るミュの気配に気まづくなったのか、

アティが走りながらもアキラに尋ねる。

「アキラさんもファリエルの事、知ってたんですね?」

「そりゃそうさ。俺の方がアティたちより先にこの島に来てたんだし。」

返ってきた言葉に、アティが意表を突かれたような表情を浮かべる。

「あ、そうでしたね」。

……ところで、どうしてアキラさんはファリエルに触れるんですか?」

「ファリエルって幽霊ですよね?」

失念していた事実を思い出し、納得するアティ。

しかし、すぐに次の疑問が思い浮かぶ。  
「ん？ああ。」

フレイズによると、俺の体からは常に魔力だかマナだかが出てるらしくて、

それがファリエルとか霊体に作用してるんで、実際に触ってる訳じゃないんだって。」

「へー、そうなんですか。」

「らしいよ。……お、狭間の領域が見えて来たな。急ぐぞ！」

「はい！」

ひた走る一行の前に、森の中の水晶群が現れ、三人は更に速度を上げて駆け出した。



「かなり消耗は激しいですが、ここに戻った以上はもう安心です。」

「よかった……。」

フレイズの指示でファリエルを魔晶の台地へと運び、

その言葉を聞いてアティは安堵の声を漏らした。

そして、ファリエルが落ち着きを取り戻したのを見計らって、フレイズは険しい目を向ける。

「それにしても、今回ばかりは無茶が過ぎますよ！」

鎮めの儀式をする時は、必ず私に声をかける約束をした筈ではありませんか？」

フレイズの怒りを目の当たりにして、ファリエルは項垂れると謝罪の言葉を紡ぐ。

「ごめんね、フレイズ。」

彼らの本格的な目覚めが、こんなにも早く始まってしまおうとは思わなくて……。」

二人だけで進められる会話に痺れを切らし、アティが怪訝そうに口

を挟む。

「ねえ、二人とも。私にも分かるように説明してくれますか？

鎮めの儀式とか、彼らとか……。」

「それは……。」

「亡霊ですよ。」

「フレイズ!？」

アテイの問いかけにフアリエルが言い淀むと、フレイズが横から簡単に答えてしまい、

フアリエルが驚きと戸惑いの声をあげる。

「これ以上隠そうとしたところで無理です。」

それに……その原因である彼女には、真実を知る義務がある筈でしよう!？」

「え……。」

反論するようにフレイズが声を荒げると、

今度は突然自分に関ってきた話にアテイが疑問の声をあげる。

フアリエルは苛立ちを押し隠しながらフレイズに命令した。

「さがつて、フレイズ。」

「しかし!？」

なおも反論しようとするフレイズに、今度こそフアリエルは押さえきれずに叫んでしまう。

「さがりなさい!これは、誓約に基づく命令です!!」

「——っ。」

今までフアリエルが持ち出した事の無い誓約の名に、フレイズは息を飲み押し黙る。

「私から、きちんと全部説明するから、だから——っ。」

「お願いだから……フレイズ……。」

「……分かりました。」

驚きのあまり、目を見開いているフレイズの前で、

フアリエルは小さな体を震わせながら泣くように懇願する。

その姿にフレイズは苦い表情をしながらも、一言承諾の言葉を残して飛び去っていく。



今まで黙って様子を眺めていたアキラは、軽くファリエルの背中を叩いて微笑むと、

「フレイズの後を追って歩き去り、ミュもその後を追って行ったため、

その場にはアティとファリエルの二人だけが残された。

数秒の沈黙の後、ファリエルは瞳を強いものに変えて話し出した。

「それでは、お話しします……。」



アキラがフレイズを見つけた時、フレイズは人程の大きさもある水晶の上に力無く座っていた。

「フレイズ。」

「アキラさん……。すみません、見苦しい所をお見せして……。」

いつもと違い、落ち込んだ様子を見せるフレイズに、

アキラは微笑みを向け、ミュは溜め息を吐いた。

「フレイズはちゃんと解ってると思うから、何も言わない。

「だけど、愚痴なら聞くよ?。」

「……ウチはなくんも聞いてへんからな。」

アキラがフレイズの正面の水晶に腰掛け、明るく話しかける。

そして、その隣にミュが座り、そっぽを向いたまま耳を伏せた。

「……ありがとうございます、お二人とも。」

アキラの自分と向き合ってくれる優しさと、ミュの遠回しな優しさに、

フレイズは小さな笑みを浮かべた。



フアリエルに話を聞き、他の護人たちにも剣の事、遺跡の事、昔の事を聞いたアティ。

しかし、それだけでは納得が行かず、彼女は護人たちに秘して遺跡の調査を決意する。

「……ねえ、先生。いいの？アキラにこの事言わなくて……。」

「ええ、アキラさんは遺跡には近づかない方がいいんです。

それに、アキラさんも召喚された方ですし……。」

「まあ、お前がいいってんなら構わねえけどよ……。」

ソノラが不安そうにアティに尋ねるが、アティははつきりとした口調で言い切った後、

少し顔を伏せて付け加える。

その様子にカイルが自分の頭を荒っぽく搔き回しながら息を吐き、応える。

「そろそろ行きましょ。」

グズグズしているとアキラたちにばつたり、なくんてコトになりかね無いわよ。」

「……そうですね。」

進むのであれば、行動を起こすのは早い方がいい。」

重くなる空気の中、スカールとヤードが先に進む事を促す。

それを受け、アティが強い意志の光を瞳に宿し、前を見据える。

「ええ、行きましょー！」

そしてアティたちは足を踏み入れる。

古き召喚師たちの狂気が生み出した遺跡へと……。



アティたちに置いていかれたアキラとミュは、海賊船の一室で置いていかれた事にも気付かず、

既に日の高くなった現在もまだ眠っていた。

しかし、穏やかな寝息をたてていたアキラの眉間に皺が刻まれ、口からは苦しげな声が漏れ始める。

やはりそれは、アティが遺跡で剣を抜いたのと時を同じくしていた。

次第に痛みが増しているのか、大きくなるアキラの呻き声に、ミュが目を覚ます。

「……アキラ？……アキラ!？」

どうしたんや!?!どっか苦しいんか!?!」

ミュの叫びにアキラがうつすらと目を開く。

しかし、金の瞳と重なり合った蒼い瞳に意志の光は無く、

口からはぼんやりと、夢でも見ているかのような眩きが漏れる。

「……行かなきゃ。」

「行くて……どこ行くんや?……アキラ!？」

ミュの問いには答えず、アキラはふらりと立ち上がる。

そしてブーツも履かずにふらふらと部屋から歩み出る。

「待ってや、アキラ!ウチも行く!ウチも一緒に行く!」

そしてミュも、自分は裸足のままにも拘わらず、アキラのブーツを胸に抱き、

後を追って部屋から飛び出した。



木々の乱れ立つ森の中をアキラはふらふらと、しかし氷上を滑るように、

かなりの速さで移動していく。

「行かなきゃ」と繰り返し、夢を見ているように。

転びそうになりながら付いてくるミュにも気付かずに。

やがて森を抜け、アキラの足が止まった。

そこに在ったのは喚起の門。

低く唸るような音を発し、淡く光を放つ喚起の門だった。

アキラが腕を伸ばして門に触れようとした瞬間。

音が止み、光も消え、アキラは糸の切れた人形のように崩れ落ちた。

……。

……………。

数分の後、草むらの揺れる音と共に、

白い髪に木の葉や枝を絡ませたミュが、荒い息を吐きながら辿り着く。

胸にはアキラのブーツをしっかりと抱き締めているが、

その小さく白い素足には、擦り傷や切り傷が無数に付いていて痛々しい。

「アキラ!?!」

倒れているアキラを見て、ミュはブーツを投げ出すと、

アキラに駆け寄って体を調べるが、どこにも異常は見られず一息吐く。

そしてアキラを起こそうと、名を呼び、体を揺する。

しかし、アキラは目覚めない。

焦りが募り、ミュは声を張り上げ名を呼び、体を揺する力も強くした。

しかし、アキラは目覚めない。

為す術の尽きたミュには、涙を浮かべ、ただアキラにしがみ付く事しかできなかった。

## 日常話く青空相談室く

喚起の門の前で、アキラに泣きすがるミュを発見したのは、遺跡の内部に居なかつた為、門の異変を察知できたキュウマとヤツファであった。

二人はアキラから離れようとしなないミュを宥めるとアキラの容態を調べ、

例の昏睡だろうと判断し、キュウマはアキラを背負ってミュと共に風雷の郷に向かい、

ヤツファはクノンを呼びにラトリクスへ向かった。

キュウマたちが風雷の郷に着いてからしばらくして、ヤツファとクノンが郷に到着し、

アキラの診察が行われた。

そして診察の結果、多少の衰弱は診られるが特に問題はないとクノンが述べ、

一同は深く安堵の息を吐いた。

その翌日。

「ならぬと言ったら、ならぬ!!」  
「どうしてだよ!?!」

怒鳴り声で目覚めると、木張りの天井が目映った。

重い頭とだるい体に苦戦しながら周りを見渡すと、障子と襖に囲まれた部屋で、

畳の上に敷かれた布団に寝かされている事に気付いた。

それに、いつも通り右腕にくっついて眠っているミュにも。

少し腫れたような目元に気づいて、そつと撫でるともぞもぞ動いて可愛い。

だけど、そんな事をしてる間も、隣の喧嘩は続いていく。

「そなたのような子供が出る幕ではないわ！戦いは遊びではないのじゃぞ?！」

「言われなくたって、おいらそれぐらい解ってらい！」

解って言うてるのに、何で母上は勝手に決めつけんだよ?！」

「決めつけてなどおるものか！本当の事を言うておるだけじゃ。」

どうも、ミスミとスバルが言い争ってるらしい。

内容から察するに、スバルが戦いに出るか出ないかで揉めてるみたいだ。

「これは……。」

「ま、見ての通りじゃ。よくある母と子のケンカじゃな。」

怒声に混じって、アテイとゲンじいの声が聞こえてきた。

「よくある、って……。どうして止めないの、キュウマさん!？」

「今回ばかりは自分が口を挟める話では無いのですよ。」

どうやらキュウマも隣に居るらしい。

しかし、ゲンじいもキュウマも喧嘩を止める気は無いらしく、母子喧嘩はヒートアップしていく。

「自惚れるでない!!」

一際大きいミスミの声と共に、風船が割れたような音が聞こえた。きつとスバルが頬に平手打ちをされたんだろう。

驚いて勢いの止まったらしいスバルに、ミスミが更に言い募る。

「あの方は特別なのじゃ。」

周りが止めるのも聞かず、勝手に戦に潜り込んで、結果を出したからこそ認められただけじゃ。

普通の者が真似できる事ではない!」

「だったら、おいらも結果を出してやる！」

母上が許してくれないなら勝手に戦に出て、おいらが強いつて事を証明してやるっ!!」

再び平手打ちしたらしい音。

さっきのに比べ、かなり大きい音だった。

そこにミスミの怒鳴り声が続いた。

「できもせぬ大口を叩くでないわ！」

敵に捕らわれて、ぴーぴー泣いておったひよっ子の分際で。」

「う……っ。母上なんか……っ、母上なんか、もう大っ嫌いだあっ!!」  
「スバルくん!？」

涙混じりのスバルの叫び声が聞こえた後、走り去る音が聞こえ、それに続いてアテイの声と走り去る音が聞こえた。

きつと出て行ったスバルをアテイが追いかけたんだろう。

ふう、と溜め息を吐いてから、首を捻ってミュの方を向き、名前を呼ぶ。

「ミュ……ミュ、朝だぞ、起きろ。」

すると、今までの騒ぎにも全く起きなかったミュが身じろぎし、眠そうな瞼をゆつくりと開いた。

陽の光にも似た金の瞳と目が合い、自然と笑みが浮かぶ。

「おはよう、ミュ。」

「——っ、アキラ！アキラ！アキラっ!!」

目が覚めるなり首にしがみ付いてきたミュの背を、抱き付かれています少し痺れた右手で優しく叩いてやる。

グズつくミュに何があったのか聞こうとした時、襖が開き、

ミスミ、キュウマ、ゲンじいの三人が顔を出した。

「おお、アキラ！目が覚めたか。」

「ご気分はどうですか、アキラ殿?」

「ふん。ぶっ倒れるなど、たるんどる証拠じゃ!」

三者三様の言葉に、まとめて「おはよう。」と返して、その場に居る全員に向かって聞いてみる。

「なあ、どうして俺はここで寝てるんだ?」

「貴方は喚起の門の前で、例の昏睡を起こしていたのです。」

「覚えてらっしゃいませんか?」

答えてくれたキュウマに「覚えてない。」と返しながら、夢遊病にでもなったかと心配していると、

ミュが首元に顔を埋めたまま涙声で喋る。

「ウチ——っ、ウチ、ホンマに心配したんやで!」

小さな体を震わせて泣くミユを、両手でぎゅっと抱きしめる。

「ごめん。ミユを喚んだ時には、もう治ったと思ってたから言わなかったんだ。」

「ごめんな。それと、心配してくれて、ありがとう。」

「——っ、アホーアキラのアホー！」

泣きやまないミユの背中をもう一度優しく叩きながら、

心配かけないようにクノンさんに診て貰おうと決め、ちらりとミスミに視線を向ける。

「な、なんじゃり!? わらわは羨ましくなぞ無いぞー！」

「……? 何を言ってるんだよ?」

それより、さっきの騒ぎはどうするんだ?」

「聞いておったのか……。」

突然しよげたミスミを見て、心の中で溜め息を吐く。

仕方ない。臨時相談室を開くとするか。

俺は右手で布団の側の畳をペしペし叩き、ミスミをそこに座らせた。

「……で? 何があつたんだ?」

瞳を見て尋ねると、ミスミは目を伏せて苦笑を浮かべて話し出した。

「すまなんだな。見苦しい所を見せてしもうて。」

イスラがこの郷を襲撃した事がきっかけになったようじゃ。

あの一件があつて、わらわはそなたらと共に戦う事を決めた。

ならば自分も、と考えたのじゃろうな。じゃが、あの子に戦はまだ早すぎる!」

話してる途中でまた興奮してきたのか、ミスミは膝の上の手を握り締め、声を荒げた。

その声の大きさにミユの耳がぺたりと伏せる。

……どうでもいいけど、そろそろ降りてくれないかな?

まあ、軽いからいいんだけど。

「あゝ、修行を見てたキュウマはどう思うんだ?」

「そうですね……。」



今のスバル様の力量でしたら、足手纏いにはならないと思います  
が。」

「そんな事、承伏できるものか！」

わらわはあの子を立派に育て上げると、良人おっとの墓前で約束したの  
じゃぞ！

あの人の代わりに守ってみせる、と。なのに……。

何故わざわざあの子を危険の中に放り出さねばならぬというの  
じゃ!？」

キュウマの言葉にミスミがいきり立ち、最後には瞳に涙を滲ませ  
る。

子を思う母の気持ち、か……。

俺には絶対に解らない気持ちだな。

だけど、似たようなものなら解る。

大切な家族を危険から遠ざけたいと想う気持ちは。

……今は兎に角、溜まった気持ちを吐き出させる事が大事だ。

「それだけが理由じゃないだろ?この際だ、全部言ってみろよ。」

俺の言葉にミスミは言葉を探す様に視線を彷徨わせる。

そして、いつもと違う弱々しい声で呟いた。

「……怖いのじゃ。あの子が戦で命を落とすのが……。

あの人が遺したスバルまで失ってしまったら……わらわは——  
——っ。」

そう言って肩を震わせるミスミを見詰め、心配そうにミスミを見る  
キュウマとゲンじいを見詰め、

俺は深く溜め息を吐くと、ミユを転がすように横にどけて何とか体  
を起こした。

すぐさま俺の膝に頭を乗せて、自分の場所を確保しようとするミユ  
は気にしないようにして、

正面からミスミの瞳を覗き込む。

「……キュウマもゲンじいもだけどさ、特にミスミだ。

スバルを失うのが怖いとお前は言うが、

家に一人残されるスバルも同じ気持ちだって、解ってるか？

スバルがお前の涙を止めたいと思ってる事を、知ってるか？」  
「あの子が……そんな事を？」

「ああ。スバルがいつまでもお前の子供である事は変わらないが、子供はいつまでも子供のままじゃ無いって事だ。」

「そうか……。わらわはあの子が自分の知らぬ間に変わっていったら、まう事を、

認められずにいただけなのかもしれない……。」

さつきまでの激情が嘘のように、静かにミスミが感慨に耽っている  
と、

戸を開く音がして、スバルとアテイが帰ってきた。

「母上!!」

「スバル……。」

「母上……。おいら、本気だよ。遊び半分じゃない！」

父上や母上の真似をしたいんじゃない!!

自分のしたい事を、できる事を、本気で試してみたいんだ!!」

「……解った。付いてきやれ……スバルよ……。」

そう言つて、スバルを連れて立ち去るミスミを見ながら、

もう大丈夫だろうと判断して布団に倒れ込む。

これにて臨時相談室は閉店だー。



気持ちのいい日差しと風が、ゆらゆらと木漏れ日を踊らせる。

そんな、ある昼下がりの実りの果樹園。

「あれ？あれはオウキーニさんと……。」

アテイが訪れたその場所では、すっかり顔馴染みになった料理上手な海賊と、

何度か面識のあるユクレス村の女の子が、向かい合つて何やら話していた。

「それじゃ、私お返事待ってます！」

「え？えええっ?!ちよっ……っ?!シアリイはんっ?!」

照れで頬を紅く染めたシアリイは、何かを成し遂げたように清々しい笑みを浮かべ、

身を翻して走り去る。

数瞬の間、驚きのあまり黙ってその後ろ姿を見送っていたオウキーニは、

やっと驚きの声をあげて彼女を呼び止めようとするが、

既にその姿は遠く離れていて、彼女の足を止める事はできなかった。

そして、大口を開けたまま呆然としているオウキーニの目は、樹の陰から顔だけ出し、

目を輝かせながら自分の方を見つめる紅毛の女性を捉えた。

「あ……。」

「せ、先生!?まさか、今の全部見て……。」

「ご、ごめんなさい!成り行きなんです！」

けして気になって覗き見をしてた訳じゃなくって……。」

唐突に狼狽えだすオウキーニに、アティは慌てて木陰から出て、手を振りながら弁解を試みる。

「……………」

「あは、あはははははっ！」

しかし先程、木陰からこっそりと目を輝かせていたアティが、何を言っても白々しいだけであった。

案の定、オウキーニも全く信用せず、白い目をアティに向ける。

それに対して、アティは誤魔化し笑いを浮かべる事しかできなかった。



一方、オウキーニの下を走り去ったシアリイは、比較的大きな樹の陰に入ると、

「はあ、と息を吐いてから不安そうな顔を上げて一つの影に尋ねた。「どうでした?」

「私、変な所ありませんでしたか、アキラさん?」

シアリイが顔を向けたその場所には、

珍しくミュを連れていないアキラが満面の笑顔で立っていた。

「ああ、バッチリだ!」

「これでしばらく待ってれば、きっとオウキーニから良い返事が貰えるぞ!」

「ほ、ホントですか!」

「……オウキーニさん／＼／」

サムズアップして太鼓判を押すアキラに、シアリイの耳がぴよこりと跳ね、嬉しい驚きを表す。

そして、両手を胸で組んでうっとりとしているシアリイの傍で、

アキラは一人うむうむと満足そうに頷く。

「そうする内に、アキラは不意に思いついたように、シアリイに声をかける。

「そうだ!ただ待ってるだけってのは不安だろう?」

「ちよつとオウキーニに探りを入れて、いつくらいに返事が貰えるか調べて来るよ。」

「え?あの、アキラさん!」

そしてシアリイの返事も待たずに、アキラはオウキーニの下へと走り去る。



オウキーニの下に駆け出したアキラは、

アテイとオウキーニが話しているのを見て、こっそりと二人に近づ

く。

やがてアテイとオウキーニの話し声が聞こえてきた。

「あの子……シアライちゃんは、ユクレス村の住人ですよね。」

「うちが食事を作りて村を回ってる時に知りおうたんですわ。」

料理がごつつ好きで、色々教えて欲しいって習いに通って来るようになって……。」

「で、こうやって告白される事になった訳ですか。」

「ごっ、告白やなんて！そんな……!?!」

オウキーニが顔を真っ赤にして声をあげたところで、アキラが二人の死角から突然声をかけた。

「オウキーニ、告白されたのか!?!」

相手は誰々？可愛い娘？」

「わあ!!アキラさん（はん）!?!」

二人が驚き叫ぶがアキラは全く気にした風もなく、そ知らぬ顔でここにこと、もう一度聞き直す。

「で、誰に告白されたんだ？」

「シアライちゃんですよ。」

「せ、先生!」

いともあっさりバラされてしまいオウキーニが慌てるが、

アテイの次の一言で黙らされてしまう。

「でも、嫌いな訳じゃないんでしょう?」

「そ、それは……まあ……。」

「なら良かったじゃありませんか？両思いなら、すぐにお返事を——」。

「あきまへんのやつ!!」

突然、アテイの言葉を大声で遮るオウキーニ。

驚くアテイとアキラ表情に、我に返ったように頭を下げる。

「あ……すんまへん、大きな声出してしもて……。」

そやけど、ほんまに困るんですわ……。」

「どうしてですか?」

やんわりと尋ねるアテイに、オウキーニは毅然と答える。

「海の男は陸の上に柵を残したらあきまへん……。」

「うちは、これでも海賊なんです！ジャキーニ一家の副船長なんですわ！」

シアリイはんが好いてくれても、いつかは出ていくんです！

それに、うちはリンバウムの人間や。

メイトルパ生まれのシアリイはんを、幸せにできる訳ないんや。

絶対に——っ。」

最後には苦渋の滲んだ顔を下に向け、己の手を強く握り締めるオウキーニ。

その、まるで自分に言い聞かせるような言葉に、

アテイは何も言えず、ただ悲しそうにオウキーニの名前を呟く。

「オウキーニさん……。」

「先生、アキラはんも、頼みますからこの事はあんさんには黙つといて下さい……。」

きちんと自分でケリをつけますさかい。お願いします！」

「う、うん……。」

「……………」

アテイの声に、急に意識を取り戻したように顔をあげたオウキーニが、

今度は深く頭を下げて二人に頼み込む。

アテイは何か言いたそうにしながらもその頼みを聞き入れるが、

腕を組んだアキラは、目を瞑って黙ったまま答えない。

そんなアキラに、オウキーニは土下座しそうな勢いで再び頭を下げる。

「アキラはん、この通りや!!」

アテイが心配そうに二人を見つめる中、アキラはゆっくりと目を開く。

その瞳はいつもより苛烈な光を宿し、オウキーニをひたと見据える。

「オウキーニ、頭を上げろ。」

力強く、逆らう事など思いも寄らない絶対的な声。

いつの日か、アティとアズリアが聴いた神秘的なモノとはまた違う、

まるで王者のような威厳のあるモノ。

その言葉に弾かれるように顔を上げたオウキーニの目を、アキラの蒼い瞳が射抜く。

「俺も別にジャキーニに言う気は無い。

ただ——お前の言葉に気に入らない所が有っただけだ。」

「……気に入らへん所、でつか？」

「そうだ。」

どうして異世界の者同士だと幸せになれないなんて思う？

どうして試してもみない内から諦める？」

「そ、それは……。」

まるで不始末をしでかした臣下が王の前でうろたえているかの様に、オウキーニは狼狽し始める。

そんなオウキーニを数瞬見詰めた後、アキラはそれまでの雰囲気霧散させ、

気遣うように言葉を続ける。

「まあ、いいさ。俺が何を言っても、結局はお前の問題だ。」

ただどな、お前が島を出て行けばシアリイは泣くぞ。

シアリイを泣かせてまで海賊を続けたいのか、よく考えろ。」

「……………」

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△

考え込み、その場に黙ったまま立ち尽くすオウキーニと、

それを心配そうに見つめるアティの下を離れ、アキラは大木の陰、シアリイの所へと戻って来た。

「……あゝ、シアリイ。あれは返事を貰えるまでかなり時間かかるぞ。」

どこか気まずそうに告げるアキラに、シアリイは可憐な微笑を浮かべながら答える。

「いいんです。私、いつまでも待ちます。」

「……そっか。」

まあ、いざとなればジャキーニの船に潜り込んで、押しかけ女房になるって手もあるしな！」

「はいー！」

一途なシアリイの答えに、アキラはそつと微笑む。

そして、それまでの雰囲気を変えるように、笑顔が悪戯を持ちかける子供のそれに変え、

提案する。

すると、シアリイも楽しそうに笑顔で返す。

その笑みに、何の心配も必要ないと見て取ったアキラは、

まるで親が子供を見るような暖かな眼差しでシアリイを見つめ、その頭を撫でた。

アキラの突然の行動に、シアリイは驚き、顔を真っ赤にするが、撫でる手の優しさに、されるがままになるのだった。



## それぞれの悩み

遺跡の調査から数日。

どうやってアルデイラやフアリエルに接していいのか悩み続けていたアテイは、

ウィルの叱咤激励に背を押され、アルデイラと話をすべくラトリクスを訪れていた。

しかし、そんなアテイの行方を遮る者が居た。

「退いて下さい！クノン……。」

「お断りします。言った筈です。」

アルデイラ様が自分からそれを望まない限りは、貴女と会わせる訳にはいきません！」

アルデイラの私室に向かおうとするアテイの前にクノンが立ち塞がり、

先程から同じ押し問答が繰り返されていた。

「だからこそ、私は彼女と会わなくちゃいけないんです！」

部屋の中に一人で閉じ籠って……辛い事、全部押し込めて……、彼女だけにそんな思いをさせるのはイヤなの!!」

「――！」

アテイの涙まじりの叫びにクノンが息を飲み、場に一瞬の沈黙が降りた時、

通路の奥から二人にのんびりとした声がかげられた。

「そんな所で何を騒いでるんだ？」

「アキラさん（様）……。」

二人の前に現れたアキラの銀髪は所々跳ね、

瞼は今にも閉じられそうに垂れていて、寝起きである事がはっきり見てとれた。

そんなアキラの右手に掴まっているミュに至っては、未だに夢の中

なのか、

こつくりこつくりと船を漕いでいた。



「……成る程。アティはアルテイラと仲直りしに来たけど、

アルテイラが引籠もつて会おうとしない、て訳か。」

「仲直り……うくん、まあ、そうですね?」

あまりにも大雑把なアキラの解釈に、アティが小首を傾げる。

「だったらアティから部屋に入ってやらないとな?」

「駄目です! アルテイラ様の許しが無い限り、ここを通す事はできません!」

再びクノンが両手を広げてドアの前に立ち塞がる。

必死に主を守ろうとするクノンの行動に、確かな心の成長を感じて

アキラは微笑みを浮かべた。

「クノン。今のお前なら解るだろ?」

「どうする事が本当にアルテイラの為なのか。」

「そうですね、クノン! 壊れたつていうのなら、直せばいいじゃない?

「このままじゃ、本当にアルテイラの心が壊れちゃいます!」

「それは——っ。」

二人の言葉にクノンの表情が苦しそうに歪み、両手が力を失ったように少し下がる。

その様子にアティが更に言い募る。

「彼女を苦しめたくない気持ちは、私だって貴女と同じつもりです。

信じて下さい……私の事を……。」

「アティ様……。」

今度こそ力を失って垂れたクノンの手はスカートを掴み、

その瞳がどこか縋るようにアティに向けられる。

「全てを捨ててしまう必要なんてないんです。」

私も一緒に手伝ってあげるから……。  
だから、お願い、アルディラ……。

扉を開けて、私に顔を見せて！」

アテイの泣きそうな叫びに、小さな声が応えた。

「バカね……。」

ドアを開けて出てきたアルディラは、疲れた顔に笑みを張り付けていた。

その様子にクノンが心配そうに傍に近寄る。

「アルディラ様……。」

アルディラは近寄るクノンに小さく謝罪と感謝を告げると、アテイの方に向き直る。

「でも、それは私も同じ。閉じ籠もっていたって、この気持ちが消えてくれる訳ないのにね。」

「アルディラ……私……。」

様々な感情が入り交じり、何を言えばいいのか判らなくなったアテイが、

何か言おうとするのを手をあげて押し止め、アルディラが口を開く。

「全てを話すわ。」

壊れてしまった私の言葉が、どれだけ役に立つかは分からないけど……。

それでも、貴女たちには知って欲しいから。」

そう告げると、アルディラはアテイとアキラを喚起の門に誘う。

今から話す、昔話にふさわしい場所へと。

しかし歩き出したアテイが、その場から動かないアキラとミュに気付き、足を止める。

「どうしたんですか、アキラさん？ ミユちゃん？」

「……ちよつと用事があるからパス。後で粗筋だけ教えてくれる、アテイ？」

「アキラが行かへんのやったら、ウチも行かへん。」

「え？ でも……。」

まさか付いて来ないとは思っていなかったアテイが戸惑っている  
と、

アルデイラが軽く溜め息を吐きながら応える。

「……はあ、呆れた。貴方つて本当に怠け者ね。」

こんな大事な話しをすつぽかそうなんて。

でもまあ、いいわ。こんな人放っておいて、二人だけで行きましよう、アテイ。」

「え？え？で、でも——！」

状況に付いていけずに慌てるアテイの背中を押して、

外へ向かうアルデイラが振り向きアキラを見てウインクを送る。

それにアキラは、手を顔の前で合わせて軽く頭を下げる事で、ミュは大きな欠伸で応えた。



二人の姿が完全に見えなくなってから、数瞬の間を置いてアキラがクノンに尋ねる。

「……クノン。俺の検査結果はもう出たかな？」

喚起の門の前で倒れ、風雷の郷に運ばれてから、アキラはシアリイの告白を見守ったり、

島をうろついたり、普段通りの行動を取りながらも、

その合間にラトリクスで身体検査を受けていた。

昨日がその最終検査で、そのままミュと共に泊まっていたのだ。

「はい。やはり以前と同じで、原因は全く不明です。」

ですが——。」

『ですが』……何やねん？」

言い淀んだクノンに、さっきまでの眠気が嘘のように、目をきつくしたミュがにじり寄る。

そんなミュに恐れをなした訳でもないだろうが、クノンは言い淀ん

だその先を告げる。

「これは推測ですが、

アテイ様が剣を喚ぶ事で弱まった遺跡の封印に関係があるのでは、と……。」

「あの紅毛か——っ！」

途端、危険な雰囲気を纏うミュ。

アキラはそんなミュに苦笑を浮かべ、頭を撫でる事で落ち着くように伝える。

無然としながらもアキラの意図を悟り、ミュは刺々しい雰囲気を和らげる。

そんな素直なミュに、アキラは苦笑を柔らかな笑みに変えると、クノンに顔を向ける。

「まあ、再発したと決まった訳でも無いし、大丈夫だろ。

実際、ここ数日は何もなかったし……。」

そこまで言うと、アキラはミュを撫でているのと逆の腕を伸ばし、クノンの頬にそつと触れた。

「だから、クノン……そんな表情かおをしないで。

クノンには何の責任も無いんだよ？」

「——っ、申し訳、ありません。」

アキラに言われて初めて自分が浮かべている表情に気付き、

クノンはとっさに謝罪の言葉を述べてしまう。

その反応にアキラは困った笑顔で応える。

「——泣かないで？」

そう言っつて頬に触れた手の親指で、クノンの目元を優しく拭う。

勿論そこには涙など流れてはいなかったが、それでもクノンは心が洗われるような、

心が沸き立つような何かを感じ、アキラの手にそつと自分の手を重ねた。

当然、ミュがそれを快く思う筈もなく、すぐに邪魔に入ったのだが。

「アキラ、用が済んだやったら早よ戻ろ？」

「そうだな。じゃあ、クノン、また。」

「はい、アキラ様。また。」

頭を下げて別れの挨拶をした後、

クノンはアキラに触れられて頬に手を当て、じっと二人の背中を見送った。



その日、船に戻ったアキラとミュを迎えたのは、

何とも言い難い、沈痛な面持ちをした海賊の面々だった。

「……あく、聞くと面倒な事になりそうだけど、どうしたんだ?」

全員の顔を見渡した後、アキラがしようがないな、といった苦笑で尋ねる。

その横ではミュが「だったら聞かないやいいのに」と言いたそうな表情をしていたが。

一方、尋ねられたカイルは、頭を乱暴に掻きながら話し出した。

「それがよ、俺たちも先生と一緒に護人の話を聞いたんだが……。」

「まくた、センチに負担かけちゃう事になっちゃったのよねえ。」

言い淀んだカイルの言葉を、スカーレルが軽く自嘲の籠った声で引き継ぐ。

「あたしらだって、何か先生の役に立ちたいのに——っ。」

「しかし、現状では我々には何もできないのが事実です。」

そして、ソノラとヤードがアテイの力になれない悔しさを吐露する。

どんどん重くなる場の雰囲気の中、アキラは全く気にした風もなく軽く尋ねる。

「ここから、みんな揃って暗くなるなよ。」

「というか、何が原因なのかさっぱりだぞ?」

「実はな……。」

カイルたちが入れ替わり立ち替わり説明し、

アキラとミュは、無色の派閥が界の意志（エルゴ）を作り出そうとした事、

この島がその為の実験場だった事、その実験のほとんどが失敗に終わったが、

ハインル・コープスだけが成功し、その結果として島で戦争が起きた事を知った。

「……ふーん。」

それでアルデイラとフアリエルの願いの板挟みで、アテイが部屋に引き籠もったって訳か？」

一通り話を聞いたアキラが思案顔で尋ねると、海賊たちが揃って暗い顔で肯く。

その様子を見て、ミュがぼそりと呟く。

「……ヘタレやな。」

そんなミュに同意するように、アキラは深く溜め息を吐いた。

「どうしてそれだけ心配していて、アテイに話しかけに行かないんだ？」

「だって……あたしなんかじゃ何も言っただけじゃないよ。」

「ああ。俺らがどんだけ言っても、所詮は他人の言葉だ。」

事の中心に居るあいつにや……届かねえよ。」

ソノラは今にも泣き出しそうに、カイルは悔しげに歯を噛み締めて心の内を語る。

それを聞いた途端、アキラの蒼い瞳に苛烈な光が灯る。

そして、その瞳で海賊たちを睨み付け、絶対者の様に言葉をぶつける。

「……本気で言ってるのか？」

それだけ親身になって心配してるお前たちの言葉が他人の言葉だなどと、

本気で思っているのか？

お前たちの言葉が他人の言葉である筈が無い！

お前たちは仲間だろう？

ならば！その想いが届かない筈が無い！

お前たちはいつも諦めるのが早い。

アテイの為に何かをしたいならすればいい。

どんな小さな事でも、ただ心配してるだけよりはマシだろう。」

「……。」

「もう少しよく考えるんだな。」

そう言い捨てると、アキラはミユを連れ、黙り込む海賊たちを置いてアテイの部屋に向かった。

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△

軽い足音が二つドアの前で止まり、ノックの音が二回。

アテイはもう少し一人で考え事をしていたかったが、

訪ねて来た人たちを無視する訳にもいかず、部屋に招く返事をする。

「……どうぞ。開いてます。」

ドアの開閉音と共に、ラトリクスで別れたアキラたちが顔を出した。

そう言えば、後で粗筋を説明する約束だったと、アテイが話しかけようとする。

「あ、アキラさんにミュちゃん……。」

えっと、粗筋でしたよね？実は——。」

「話ならいい。もうカイルたちに聞いたから。」

アテイの言葉を遮ると、アキラが少しきつい口調で更に続ける。

その口調の鋭さに、自然とアテイの表情も真剣なものへと変わる。

「アテイ、俺は前にも言った筈だぞ。お前はもうどうしたいんだ？」

周りの奴らに優しくするのはいいさ。

両方の願いを叶える方法を考えるのも素晴らしい事だろう。

だけどな、肝心の「お前」はいったい何が大事なんだ？

それをよく考えろ。」



そう言うなり、アキラはアテイの返事も聞かずに身を翻して立ち去ってしまう。

少し慌てるように、ミュもその後が続いて走り去る。

「私の、したい事……。」

再び部屋に一人きりになったアテイは、ぽつりと呟くと、また考えを巡らせ始めた。



アテイの部屋を去ったアキラたちが向かったのは、その日の朝、後にしたばかりのラトリクスだった。

アキラは迷う事なくアルデイラの部屋に向かい、扉の前で立ち止まった。

そしてミュにそこで待っているように告げると、一人、部屋の中へと入っていく。

部屋の中には憔悴したアルデイラが一人で椅子に腰掛け、

テーブルに肘を付き、両手で目を覆っていた。

そんなアルデイラに目を向けると、アキラは何の躊躇いもなく尋ねた。

「話は聞いた。」

遺跡に取り込まれたハイネルさんの意志に会いたいんだって？」

「……ええ。」

一拍の間を空けて力なく答えるアルデイラに、アキラは眉をしかめる。

「——らしくないな。」

「らしくない？らしくないですって!？」

貴方に私の何が解るって言うの!？」

アキラの一言に、今まで項垂れていたアルデイラは怒りに顔を染め、

椅子を蹴飛ばすように立ち上がり声を荒げる。

しかしそれも、いつもの穏やかな笑みを浮かべたアキラの言葉に消え去ってしまう。

「解ってるさ。」

アルディイラはクノンが好きで、

ハイネルさんが護ろうとしたこの島を結構気に入ってる、って事くらいはな。」

「——っ！」

しばらくの間、無言でアキラの微笑みとアルディイラの恨みがましい目がぶつかり合う。

しかし、その沈黙をアキラが破る。

「本当は解ってるんだろ？ハイネルさんは、もう死んでしまったんだって。」

そして死んだ者は帰ってこないんだって。

……だから護人になって島を、ハイネルさんの夢だったこの島を、護ってきたんだろ？」

アキラの言葉が終わる頃には、既にアルディイラの顔から怒りの色は消え、悲しみが表れていた。

そしてアルディイラは深く息を吐くと、脱力して椅子に腰を下ろした。

「……敵わないわね、貴方には。」

そう言って苦笑するアルディイラに、アキラは嬉しそうに笑う。

「元気でたか、アルディイラ？」

「ええ、まあね。」

「なら、後はアティ次第だな。」

明日には結論を出すだろうし、今日はこれで帰るよ。また明日。」

「ええ、また明日。」

そしてアキラは待たせていたミュを連れ、その日二回目になる帰り道を辿る。

微かな笑みを浮かべながら。

## 呼びかけ

「私の答え一つで全てが決まる……。」

「(肝心の私がしたい事は何か。)それは——。」

「(ずっと昔から二人が背負ってきた物)できるなら、それを二つとも叶えたい。」

でも、それができないなら——!。」

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

日が頭上に差し掛かる頃、アテイの呼びかけに、アキラ、ミユ、ウイル、アルデイラ、クノン、フアリエル、の六人が集いの泉に集まる。

全員が集まったのを確認し、アテイが静かに話し始める。

「正直、今も私の選択はこれでいいのか、気持ちは揺れ続けてます。」  
アテイは一息おいて、周りに情けない笑みを向ける。

誰も口を開かずアテイを見つめる中、再びアテイが話し出す。

「当たり前ですよね？」

心ってというのは、そんなに簡単に割り切れるものじゃないんですから……。」

「貴女にも決められない……そういう事？」

答えるのを避けるようなアテイの台詞に、アルデイラが少し堅い声で尋ねる。

それに対してアテイは、前半は苦笑いで、後半は目を瞑って静かに答える。

「それで済むなら、正直そうしたいけど……。」

答えはちゃんと決めました。」

そう言つて再び口を噤むアティを、ウィルが心配そうに見つめる中、

アティは目を開けると毅然とした表情で告げる。

「封印しましょう。それがより多くの笑顔を守る事になると思うから。」

「――！」

はつきりと告げられたアティの言葉に、周りに居た者たちは三者三様の表情を見せる。

アキラは口の端だけ上げて満足そうに笑い、

フアリエルは安堵して全身から力が抜けたように、ぼうっとした顔を見せる。

しかし、そんな二人とは対極に、アルデイラの表情は硬く強ばる。

その表情を見て、アティが悲しげに語りかける。

「ごめんね、アルデイラ。」

マスターに会いたいと願ひ続けてきた貴女の気持ちが解らない訳じゃないんです。

本当は叶えてあげたい。でも――！」

アティは一呼吸おくと、表情を厳しいものに変える。

「――遺跡は危険過ぎます。」

私はみんなを、みんなの笑顔を守りたい。

だから……私は封印を選びます。」

強い意志を秘めたアティの瞳に、アルデイラは目を閉じて小さく笑ひ、吐息のように一言呟く。

「ふふふ……。やっぱり、そういう答えになるのよね。」

「アルデイラ……。」

心配そうに名前を呼ぶアティに、アルデイラは目を開くと悲しい笑みを浮かべ、一雫の涙を零す。

「でも、それも仕方ない、か。」

あの人は……たった一人のあの人は、もう居ないんだものね。」  
「義姉さん……。貴女は、そんなにも兄さんを……。」

遠く時を隔てた今もなお変わる事のない想いを抱く義姉に、フアリエルの表情も悲しみに染まる。

しかし、対するアルデイラは涙を拭うと、幾分かすつきりとした表情でクノンに笑いかける。

「ふふ、ねえクノン？」

これからも世話をかけるけど、二人で仲良くやっていくしか無さそうよ?」

そんなアルデイラを、クノンは微かな笑みで受け止める。

「喜ばしいと、感じます。」

それに、それこそがあの方の最後の望みでもあるのですから。」

「あの人の、望み?」

クノンの言葉にアルデイラは眉を寄せ、どこか遠くを見つめるような瞳になる。

どこかに置き忘れた物を思い出そうとするその表情。

それを手助けするように、クノンがメモリの奥に大切に保存していた言葉を再生する。

「生きて、幸せになって、この島を笑顔で満たして欲しい……。」

みんなが笑っていてくれる事が、自分にとって一番嬉しい事だから』と。」

どこか誇らしげに伝えられたその言葉に、ウィルが目を見開く。

「それって……先生と、同じ……。」

今は亡いその人を知る者は、かつてその人が浮かべていた微笑みを思い出し頬を緩め、

故人を知らぬ者は、過去と現在に全く同じ願いを抱く者が居る不思議に頬を緩める。

そんな中、とても深い眠りから覚めたようなアルデイラの呟きが漏れる。

「そう———そうだったわね。」

「はい。」

アルデイラの暖かな笑みに、クノンの満面の笑みが重なる。



「何、笑ってるんや、アキラ?」

今まで静かに成り行きを見ていたミュが、どこか嬉しそうに笑うアキラに気づき、

不思議そうに尋ねる。

すると、アキラは軽くミュの頭を撫でながら、本当に嬉しそうに答えた。

「クノンさんも随分笑えるようになったな、と思つて。」

その答えに複雑そうな表情をするミュに気づかず、

アキラはにこにここと実に嬉しそうにクノンを見ていた。



集いの泉の前で話し合い、遺跡の封印を決めたアテイたち。

そして、クノンの心の成長を喜んでいたアキラ。

みんながどこか、ほっと一息ついて笑顔を浮かべていた。

しかし、ハタと何かに気づいたように、アキラが眉をしかめて心配気な表情になる。

そして漏れた一言。

「封印……するんだよな?」

「どうしたんですか、アキラさん?」

そんなアキラの呟きに気づき、アテイが不思議そうに尋ねる。

アキラは困ったような笑顔を浮かべると、答えを返す。

「ああ、封印するならアテイが剣を喚ぶ事になるだろう?」

その時どうしたらいいかな——と思つて。」

「あ……そうですね……。どうしましよう?」

言われて初めて気づき、アテイも困ったような表情を浮かべる。二人で首を捻っていると、掛け直す眼鏡をキラリと光らせながら、アルデイラが不敵な笑みと共に話しかけてきた。

「ふっふっふっ、それについては、私に考えがあるわ！」

ヤツファとキュウマに結界を張らせましょう！」

「あ、そうですね。二人に任せておけば、きっと大丈夫ですよ。」

完全に元気を取り戻したアルデイラの言葉に、ファリエルがおつとりと賛成する。

あまりにも軽い調子の二人に、ミュが不審そうな目を向ける。

「ホンマにあの二人に、そんなんでできるんか？」

「あら、馬鹿にしちゃ駄目よ？あの二人だって護人なんだから。」

ぽつりと呟かれた声に、間髪入れずにアルデイラが応える。

いかにも自信ありげなアルデイラに、アキラは感心したような声を出し、その提案を採用する。

「へー……じゃあ、二人に頼むか。」

アテイたちが遺跡に着くまでには二人を呼んで来れるだろうし、もう出発した方がいいんじゃないか？」

続けて、封印するなら早い方がよかろうと、出発を促すアキラに、

アテイは少し考えてから肯き、笑顔を浮かべる。

「……そうですね。善は急げと言いますし。」

「じゃあ、行ってきますね。」

「ああ、しつかりやって来い。」

軽く頭を下げて出発を告げるアテイに、アキラは柔らかく微笑んで応えた。



遺跡の封印に向かうアテイ、アルデイラ、ファリエルを見送り、アキラたちは結界を張って貰う為に、ヤツファとキュウマを手分け

して呼びに行く事にした。

「じゃあ、俺とミュはヤツファを呼んで来るから、ウィルとクノンはキュウマの方を——。」

アキラが三人の方を向き、役割分担をしようとするが、

その言葉を遮るようにウィルが、続いてクノンが発言する。

「僕もユクレスの方に行きます！」

「私も、ユクレスに向かいます。」

二人のその意気込みの強さにアキラは驚いて瞬きし、ミュはむっとして無言で二人を睨む。

一瞬の膠着状態に陥った四人の頭上を、甲高い鳴き声をあげながら一羽の鳥が通り過ぎる。

鳴き声がトンビのように聞こえたのは、果たしてアキラの気のせいだろうか？

その後、ようやくアキラが立ち直り、再び役割分担をしようとする。

「えっと……じゃあ、二人にはユクレスに行つて貰つて、俺たちは風雷の郷に……。」

「風雷の郷に行きます！」

「私も。」

しかし、やはり二人に途中で遮られてしまう。

いつも冷静な二人が熱くなっている理由に気付かず、アキラは困惑の表情を浮かべる。

そこへ、鈍い主の窮地を救うべく、ミュが解決策を提示する。

「そんな行きたいんやったら、

アンタらが手分けして二人を連れて来いや。

ウチらは、ここで待つとるから。

……それともナニか？

わざとアキラの邪魔して、いらんコトするつもりなんか？」

……多分に皮肉や挑発が含まれてはいたが。





数十分と言うには長く、数時間と言うには短すぎる時を経て、集いの泉の前のベンチに座って待っていたアキラとミュの前に、ウィルに連れられたヤツファと、クノンに連れられたキュウマが姿を見せる。

「よお、アキラ。面倒くせえが、来てやったぜ。」

「我らを呼び出すとはいったい何事です、アキラ殿？」

アキラが笑顔を浮かべてベンチから立ち上がり、二人の方に歩いていく。

勿論、ミュはその後ろにぴったりとくっついていく。

そしてヤツファとキュウマの前まで来ると、

アキラはその歩みを止めて綺麗な笑顔のまま唐突に切り出す。

「時間が無いから説明は省く。」

俺に遺跡の力が影響しないように結界を張ってくれ。」

「はあ？何だ、そりゃ？」

「いきなりそのような事を申されても、何の事か理解できませんが……。」

珍しいアキラの傍若無人っぷりに、ヤツファとキュウマが戸惑う。

しかし、アキラは思っていたより焦っているのか、それとも単に気に入ったのか、

傍若無人な態度を取り続ける。

「時間が無いから説明は省くって言ったろ？」

言葉の内容は傍若無人そのものだが、そう言ったアキラはどこか楽しげな笑顔で、

遊んでいるのは明らかだった。

明らかではあったが、ヤツファとキュウマはどうする事もできず、互いに顔を見合わせる。

そこで、話を進める為にウィルが助け船を出した。

「義兄さん、ちよっとくらい説明してあげないと、二人だって困るだけだよ。」

「そうですよ、アキラ殿。」

すかさずキュウマが便乗し、アキラに説明を求めると、いかにもアキラはつまらないという表情を浮かべて口を開く。

「仕方ないなあ。……クノン、お願い。」

「お前がするんじゃないのかよ!?!」

口を開いた方がいいが、急に面倒になったのかアキラはクノンに説明を任せてしまう。

そのいい加減さに思わずヤツファが突っ込むが、

「アルディイラ様たちが遺跡を封印に行かれたので、その間アキラ様の安全を確保する為に、

お二人に遺跡の影響を排除する結界を張っていただけだったのです。」

「……嬢ちゃんも律儀に答えんなよ。」

クノンがさらりと説明してしまう事で、がっくりと脱力してしまった。

「という訳だから、ちやつちやつと張ってくれ。」

「承知しました。しましたが……。」

「何でお前はそんなに偉そうなんだよ……。」

そんな一連の騒動をすっぱりと無視すると、アキラは再び笑顔で要求を口にする。

その様子にキュウマとヤツファはどこか釈然としないものを感じながら、

仕方なく承諾の返事をするのだった。



「……ホントーっに、これで効果あるのか?」

集いの泉の前にある広場に、多分に疑いを含んだアキラの声が響

く。

どうやらヤツファとキュウマによる結界の準備が整ったようだが、準備をしてももらった当のアキラは、じと目で二人の方を見ている。

「信用しろって！」

メイトルパの呪術とシルターンの妖術を使ってるんだぜ？」

「そうですよ、アキラ殿。護人が二人も居るのです。安心して下さい。」

対する二人の声はやたらに明るく、その顔は今にも吹き出しそうにひくひくと動いていた。

「……そんな顔で言われても、な。」

二人の顔を交互に見た後、溜め息を吐くように呟いたアキラの姿は、

まるで罰ゲームを受けているようなものだった。

地面に重なるように描かれた二種類の方陣、これは問題ない。

しかし、方陣の上に立たされたアキラは、顔中に不可思議な紋様を描かれ、

額に一枚の札を貼られていた。

ミミズがのたくった様な文様や額の札は、方陣を描き終わった二人が、

突然思い出したかのように後から付け足したモノで、本当に必要なモノなのか、大いに疑わしい。

アキラはしばらくそのまま二人を睨んでいたが、ふう、と息を吐くと諦めたように声をかける。

「……もう、いいや。とにかく早いところやっちゃってくれよ。」

「おう。」

「承知。」

その言葉に二人は、にやりと勝者の笑みで答えた。



「……。」

「……。」

「……。」

先程のやり取りから数十分。

高く晴れた空の下、飛び行く鳥の声を聞きながら、

ぼんやりとした黒髪黒瞳の青年を囲んだ者たちがいた。

多重魔法陣の上にいるという事は、その青年がアキラなのだろう。

他に変わった事と言えば、アキラの顔から落書きと札が無くなり、

ヤツファとキュウマに魔力を注ぎ込まれた多重魔法陣が、淡く光を

放っている事くらい。

アキラの姿が変わっているという事は、

この多重魔法陣は確かに遺跡の影響を遮断しているのだろう。

……そしてやはり、顔に書かれた落書きと札は必要なかったらし

い。

「……。」

「……。」

「……暇だ。」

大して大きくもないアキラの呟きが辺りに響く。

初めはアキラの変化に騒いでいた周りの者たちも、

ミュの「黒もええなあゝ」の一言で話をまとめられ、静かになった。

そして今は、やるべき事はやってしまったので、アテイたちが封印

を始めるのを待つしかなく、

その場の全員が手持ちぶさたになっていた。

それならば、とキュウマが詳しい事情説明を求めたが、

アキラの「面倒だ」の一言でバツサリと斬り捨てられた。

笑顔付きで。

「……先生たちに何かあったんでしようか？」

そのうち、沈黙に耐えられなくなったのか、ウィルが心配そうにア

キラに話しかける。

「大丈夫だって。向こうにも護人が二人ついてるんだから。」

「でも——。」

アキラが励ますように殊更明るく返すが、ウィルは不安を拭えないのか言い継ろうとした。

その時。

「くっ!?!」

「義兄さん!?!」

「「アキラ（様）（殿）!?!」」

アキラが頭を抱え、地面に膝をつき、苦悶の声をあげた。

それに驚いた全員がアキラの名前を呼び、その姿を見た時には、アキラは銀髪蒼瞳になっていた。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

——器、黒い器、私の体

（くっ、やっぱりまた出やがったな……!?!）

以前と同じ声のアキラの頭に響く。

その声と共に重いプレッシャーが辺りに満ち、アキラは凄まじい頭痛に襲われ、

その表情が苦痛に歪む。

それでも、結界により痛みは幾分か軽減されてはいたが。

更に声は続ける。

冷たい愉悦を含んだ音色で。

——私が憎くないか？奴らが憎くないか？己が憎くないか？

（……何だ？何を言ってる!?!）

頭痛に耐えながら、アキラは声に出さずに叫ぶ。

——この世界が憎くはないか？

（……っ!!）

声はアキラの問いに答える事なく、更にアキラに語りかけてくる。その声に、一瞬、アキラが息を、飲んだ。

——器、黒い器、私の体

(……………)

心なしか愉悦を増した声に、アキラは沈黙で答える。

全てでは無いにしろ、自分の心の一面を言い当てられた動揺を隠す為。

——力が欲しくないか？ 他を圧倒する力が、全てを破壊する力が

(……………)

その動揺につけ込むように、声は続けた。

まるで悪魔の囁きのように。

——器、黒い器、私の体

(……………)

次第に声は優しくなり、甘さを帯び始める。

痛みに苦しむアキラを労るように。

心の傷を包み込むように。

——お前が力を望むなら、比類無き力を与えよう

(……………比類無き、力……………)

例えその優しさが偽りでも、例えその温もりがまやかしても、

今のアキラには抗う術が無く、徐々にその声を受け入れてしまう。

——お前を、世界を、私を破壊できる力を！

(そんな力があれば……………)

声は、アキラの自分への憎しみまでも懐柔の手段にしてしまう。

己を殺す事ができる力を与えるという、

本来なら決してあり得ない矛盾にも、今のアキラは気づかない。

——器、黒い器、私の体

(絶対の力があれば——っ！)

アキラは頭の痛みも忘れ、完全に声の思惑にはまってしまう。

——その時こそ、お前は私になり、私はお前になる

(……………どこだ?)

もはや声にすら気づかず、アキラは一人問いかける。

——器、黒い器、私の体

(その力はどこに在る!?)

力への凄まじい渴望で、アキラが叫ぶ。

——お前はもう、その場所を識っている

(……俺は、識っている………)

そこで、アキラは、意識を失った。

自分の体が大地に崩れ落ちたのにも、自分を心配する仲間たちの声にも、気づかずに……。

## 一難去つてまた一難

昼も大分過ぎた頃、海賊船の前に人だかりができていた。アテイたち、遺跡を封印に行った者を出迎えようとする面々である。

じつと森を見つめる一同の視界に、三つの人影が映る。

それはやはり、期待通りにアテイ、アルデイラ、ファルゼンの三人組で、

ざわめく仲間たちに迎えられるながら、三人は船内へと進んでいく。

船長室が、護人たちとアテイ、

そして見張りの為に外に残ったスカーレル以外の海賊たちでいっぱいになる。

「全部——終わりました。」

幾分か疲れた表情をしたアテイが、それでも笑顔を浮かべ達成感に満ちた声で告げる。

「そうか……。」

「ご苦労様でした。」

すると、一同を代表するようにカイルが感慨深げに肯き、ヤードが労いの言葉をかける。

「……………」

その様子を一步後ろから、アルデイラとファルゼンが黙って眺めていると、

二つの影が二人に近づいて来る。

二人がその影に気づいて振り向くと、そこには随分古くからの同僚たちの笑顔があった。

「詳しい話は後でしっかりと聞かせて貰うからな……お二人さんよ？」

「とりあえず、今日のところはゆっくりと休んで下さい。」



ヤツファアがどこか嬉しそうな響きを持たせながらも問いつめるように言うど、

それをフオローするようにキュウマが労りの言葉をかける。

アルデイラとファルゼンは、二人の言葉をただ黙って有り難く受け入れた。

「やれやれ、こんなのはもう二度とゴメンだよ。」

和やかな雰囲気にも包まれた一同を見渡し、ウィルがアテイに向かい苦笑いを見せると、

アテイも申し訳なさそうに笑って返す。

しかしアテイは、ふと何かに気づいたように視線を左右に巡らせる。

やがて一通り見渡したアテイは、目当てのモノが見つけれなかったのか、誰ともなく尋ねた。

「あの、アキラさんは……?」

その一言に、今まで談笑していた留守番組がぴたりと押し黙る。

突然の沈黙に封印組が慌て出す。

「まさかアキラさんに何かあったんですか!」

「ヤツファア・キュウマ! 貴方たちが付いていながら、どういふ事なの!」

「――!」

アテイとアルデイラばかりか、ファルゼンにまで詰め寄られ、ヤツファアとキュウマが後ずさる。

たじたじとなる二人に代わり、カイルが前に出ると手を挙げて三人を押し止める。

「おいおい、落ち着けよ。アキラなら無事だ。」

その言葉に安堵の表情を見せる三人だが、続く目を伏せたソノラの言葉に再び慌て出す。

「……また、寝ちゃってるけどね。」

「そんな――?! 結界が効かなかったんですか!」

心なしに青ざめて叫ぶアテイに、キュウマが淡々とした口調で答える。

「いえ、結界は間違いなく機能していました。しかし——。」  
「遺跡の方が一枚上手だったって事さ。」

言い淀んだキュウマに代わり、ヤツファが自嘲するように続けた言葉に全員が重く沈む。

その沈黙を破るように、アルデイラがいつもの冷静な声でクノンに問いかける。

「クノン、アキラはいつもの昏睡に陥っただけなのね？」

「はい。生命・身体共に異常ありません。」

すかさず、いつもの感情の動きが見えない平坦な声の返答がくる。

そう。アキラには何の異常もなかった。

少なくとも、封印を行う前と比べては。

事実、今もアキラはベッドで静かに寝ている。

“銀髪”のアキラが。

「そう。なら遺跡は封印した事だし、今回の作戦は成功というところね。」

アルデイラが重苦しい雰囲気が消そうと、笑顔で明るく振る舞うが、

同じタイミングで部屋に入ってきたスカーレルが水を差す。

「だったら、良かったんだけどねえ……。」

「どういう事よ？」

意味が掴めず尋ねるソノラに、スカーレルがうんざりしたように答える。

「外を見ればイヤでも解るわよ。」

「まさか——！」

その言葉に弾かれたように、アティは船外に向かって走り出した。



「隊長殿オ、何でさっさと仕掛けようとしねエんですか？」

今なら船ごと火イつけちまえば、全滅できるでしょうに！」

海賊船をぐるりと包囲した帝国軍の先頭で、

ビジュが不満を隠そうともしないでアズリアに詰め寄る。

「言った筈だぞ。」

軽々しく火攻めを行うのは止めろ、と。

使い手ごと剣を手に入れる、ともな。

それに、剣が喚ばれていない状態で使い手が死んだ時、

剣がどうなるのかは誰にも解らんのだからな。」

しかし、アズリアはビジュの方を見る事もなく、その不満をあつさりと斬り捨てる。

まるで無視するかのようなその対応に、ビジュの顔が一瞬怒りに染まるが、

すぐにいやらしい笑いを浮かべると、なおもアズリアに纏わり付く。

「成る程……。」

ですが、本当にそれだけが理由なんですかねエ……。」

何か含むようなビジュの言葉に、アズリアは目を細め、初めてビジュの方を向く。

「ほう？何か言いたそうだな、ビジュ？」

言いたい事があるなら言ってみるがいい。

貴様ごときが、私に、何か言えるのならな！」

「——くっ！」

凄まじい侮蔑が込められた言葉とプレッシャーに、思わずビジュの足が一步下がる。

そこへギャレオが現れ、アズリアに報告を入れると共に、船の一角を指さす。

「隊長、奴らが来ました！」



船から出てきたアテイたちが見たのは、辺りを埋め尽くすような帝国軍の陣容だった。

「性懲りもなく来やがって。」

アテイと共に出てきたカイルが忌々しそうに言い捨てる。

その後、仲間たちがぞろぞろと現れ、帝国軍と相対する。

その様子を黙って眺めていたアズリアが、揃った面々を見て尋ねる。

「……アキラの姿が見えんな？」

「へっへーんだ！残念でした！今回アキラはお留守番だよ！」

「お前らの相手は、オレらだけで十分だ！」

「なんだとお!？」

アズリアの問いかけにソノラとカイルが挑発混じりに答えると、

気の短いギャレオが身を乗り出すが、アズリアが片手を上げる事で制する。

「……ふん。アキラが参戦しないのならば、こちらにとつても好都合だ。

これ以上、時間の浪費を繰り返すのは不本意なのでな。

今日こそお前を連れて帰る！」

一瞬、ほんの一瞬だが、アズリアは気遣わしげに船を見た後、

表情を不敵な笑みに変えてアテイに宣戦を布告する。

「そんな事をして、もう無意味です。」

「なんだと？」

その布告に対し、アテイは穏やかな笑みで戦わない事を告げる。

当然、思いも寄らなかつた事にギャレオが疑問の声をあげた。

そしてアテイは静かな声で、その疑問に答える。

「あの剣は封印しました。島の遺跡ごと。」

「——っ！」

告げられた事実、アズリアが息を飲んでアテイを凝視する。

そんなアズリアを見返しながら、アテイが嬉しそうに話しかける。

「だから、もう争いを続ける理由なんて無い。

渡せと言われたって、剣はもう無いもの。」

アテイと付き合いが長いアズリアは、それが本当の事なのだろうと思ひ、目を瞑り黙考し始める。

そんなアズリアの様子を見ていたギャレオが、何も言わない上司に代わり声を荒げる。

「————デタラメを言うな！」

「ホントだってば。」

あんまりしつこいと嫌われるよ、オジさん。」

「む、ぐぐぐ……。」

しかし、一回りも年下の娘に軽くあしらわれ、口を噤む。

その時、黙考を続けていたアズリアが目を開き、アテイに決然と告げる。

「ならばなおの事、お前を手に入れねばならんな。」

「え!？」

その言葉に驚くアテイとは対照的に、スカーレルが相手の真意を見抜く。

「成る程……センセに封印を解かせるつもりね。」

ま、そうしないとアンタたちは帝国に帰る事もできないんだし、当然よね。」

スカーレルの言葉を聞いて、アテイは初めてその事実気づき、眉を寄せる。

そんなアテイを気遣うように、ヤードが声をかける。

「どちらかが勝てば、もう片方は負ける。」

それが、世の理ですからね……。」

アズリアは、アテイの苦しそうな様子に気づかぬフリをしながら、冷たく言葉を紡ぐ。

「封印されたのなら、解き放てばいい。」

そして、封印した者ならば、その解き方も知っているのが道理。

今度こそ貴様らを叩きのめし、全てを手に入れてみせるツ!!」

最後は剣を抜きながら言い放ったアズリアに、カイルが荒々しい笑いで応える。

「おもしろえ……。やって貰おうじゃねえかよ！」

ぴりぴりとした一触即発の雰囲気、ウイルが不安げにアテイを見上げる。

「先生……。」

ウイルの声に、アテイは一度目を閉じて深く息を吐く。

そして厳しい表情で帝国軍を見遣る。

「みんなが辛い思いをして、ようやく手に入れた平穏だもの。

その想いを——無駄にする訳にはいきません!!」

戦う意志を固めたアテイに、ビジュがいやらしい笑みを向ける。

「いいのかア？ 剣の力にやあ、も才頼れねエんだろオ？」

そしてギャレオが今までの鬱憤を晴らすように、気合いに満ちた声をあげる。

「互角の条件での戦いならば、我らが不覚を取る事は無い！」

「く——っ。」

その勢いに怯むアテイを庇うように、涼やかな声と共にアルデイラが前に進み出る。

「そう都合良くいくものかしらね？」

「あるでいら……。」

今までのアルデイラからは予想できない行動に、ファルゼンが呆然とその名前を呟く。

すると、アルデイラが微笑みと共にファルゼンに話しかける。

「島の平穏を乱す者は絶対許さない。それが護人の務め。

そうでしょう？ ねえ、ファルゼン。」

「……アア！」

その問いかけに、ファルゼンが高揚した声で応える。

すると、仲間たちの中からヤツファとキュウマも進み出て、不敵な笑みを見せる。

「やれやれ……。そんじゃ、オレらも——。」

「負けずに務めを果たしましょう!!」

「……いきます!!」

そんな護人たちに励まされたように、アテイも再び毅然とした表情

で告げる。  
そして戦闘が始まった。

## 収束と変化と

戦いが始まってから数十分。

戦況はアテイたちに有利に動いていた。

「（勝てる……）剣が無くたつて、みんなと一緒にならどんな困難にだつて勝て——。」

しかし、アテイが勝利を確信して喜びを感じ始めた時、それは起こった。

——そうかな？

アテイの耳に、どこかで聞いた事のある声が響くと共に、辺りを紅い光が照らす。

「!?（この感覚——っ。そんな、まさか……）あああああつ!?」

光と共にアテイは馴染み深い気配を感じ、慄然とする。

そして、次の瞬間。

アテイは碧の光に包まれ、シャルトスを手にしていた。



紅い光が辺りを照らした時、船の中でも混乱に陥っていた者が一人。

「アキラ!? ——アキラ!!?」

……何やねん、この光？」

ベッドの上でシーツを握り締めながら苦しむアキラに、傍にいたミユがしがみつき、

窓の外を睨みつける。

窓から紅い光が差し込んだと思った途端、静かに寝ていたアキラが



苦しみだしたのだ。

前回と同じく、何ら有効な手を打てずに、

ただアキラの名を呼ぶしかないミュの瞳に涙が滲みだした時、  
呻き声が止み、アキラの目がゆっくりと開かれた。

一瞬、ミュの表情が喜びに包まれるが、アキラの瞳を見た途端、表情が凍る。

「!？」

ゆっくりと開かれたその瞳は、いつもの深い蒼でもなく、昼間見た黒でもなく、

暗い闇の色を映していた。

アキラは能面のように表情を動かさず、その口から無機質な声を漏らした。

「扉も……鍵も……私さえも……もはや私には必要ない。」

「……アキラ？」

かつて聞いた事のない声に、思わずミュは確認するようにアキラの名前を呼ぶ。

その時、再び外に変化が生じる。

紅い光はそのままに、突然空を雷雲が覆い、海を波立たせる程の地震が起きる。

「今度は何やねん!？」

激しく揺れ動く船に、ミュはアキラのベッドにしがみついて叫ぶ。

しかし、そんな叫びを無視するように、強い風と共に大粒の雨が降り出す。

「!？」

立て続けに起きる異常事態に、もはやミュは声も出せず、窓を叩きつける雷雨を凝視する。

その瞳に一際明るい紅い光が映る。

遺跡から立ち昇る紅い光の柱は、まるで血の色のように目映く輝き、その存在を主張していた。

……やがて、光が消えてミュが我に返った頃には、揺れは治まり、雨だけが窓を叩いていた。

アキラも既に目を閉じ、何事も無かったように静かな寝息をたてている。

ミュは緊張で張りつめた表情のまま、ゆつくりと辺りを見渡した後、

静かに上下するアキラの胸に顔を押しつけた。

「……起きてえや、アキラ。」

くぐもったミュの言葉に応える声は無く、静かな部屋にアキラの寝息と雨音だけが響いた。



降りしきる雨の下、続けて起きた異変に動きを止めていた双方の中で、

シャルトスを消して元に戻ったアテイの叫びが木霊する。

「どうして……。一体、何が起きているの!?!」

「判らないわ……。私にも……。」

何が起きたのか、どうなってしまうのか、本当に……。」

アテイの叫びにアルディアが呆然としたまま答える。

そして、それに被さるようにアズリアの号令がかかる。

「総員撤退するーどのみち、これ以上の戦闘続行は無理だ!」

「り、了解!」

呆然としていたギャレオが、号令に弾かれたように敬礼して撤退の指示を出し始める。

その様子を悲痛な面もちで見つめながら、アテイが力無くアズリアに声をかける。

「アズリア……。」

その声にあズリアはアテイの方に振り向くと、全く衰えない光を瞳に宿したまま傲然と告げた。

「お前の仕業であろうとなかろうと、関係無い。」

そこに剣がある限り、私はお前共々それを奪回してみせる。

次が——最後だ!!」

どこかアティを気遣うような台詞と、強い決意を秘めた最後通告を残し、

アズリアは部隊を引き連れ、激しい風と雨の中を去っていく。

残されたアティたちは皆、悄然と立ち尽くし、雨に身を任せていた。そんな中、一人アティだけが暗雲を見上げる。

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△

全てが終わったと思っていた。

そんな私たちをあざ笑うかのように、横殴りに雨は叩きつけます。

新たな嵐の始まりを、私の胸に刻み込むように。

呆然と空を見上げながら、私は眩いていました。

「それでも、止まない雨は無い。終わらない嵐は無い。」

そうですね……アキラさん……。

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△

帝国軍と戦った日の夜。

未だに眠りから覚めないアキラの部屋に、白い髪の少女と紅い髪の女性が居た。

二人はベッドの傍の椅子に腰掛け、じつとアキラの顔を見つめている。

「……ようやく、雨もあがったみたいですね。」

窓を叩く雨音が止んだ事で、アティが目を窓の外に向けてミュに話しかける。

「……。」

「あ、あはは……。はあく。」

しかし、ミュからの返答はなく、アティは乾いた笑いを浮かべた後で溜め息を吐いた。

部屋に来て以来、アティは何かとミュに話しかけているのだが、ミュは部屋に入ってきたアティを一瞥してからは全くそちらを見ようともしない。

当然、会話になる事もなく、先程のやり取りが繰り返されていた。そして気まづくなつたアティが再びアキラに視線を戻した時、来訪を告げるノックの音が響いた。

「?（こんな夜更けにいったい誰かな?）」

ノックがした時、ミュはピクツと耳を動かしたが、出迎える気はないのか座つたままだ。

そこでアティがドアを開けに向かう。

「どちら様ですか?」

「……私です。」

「フレイズさん!」

アティがドアを開けると、そこには普段とは違い、張りつめた表情をしたフレイズが立っていた。

「こんな夜更けに不躰で申し訳ないのですが、貴女がこちらに居らっしゃると聞いて……。」

付いて来て下さい、アティ。

どうしても、貴方にしておきたい話があるんです。」

「……分かりました。」

フレイズの雰囲気、アティもやや表情を厳しくして応じる。

しかし、そこへ予想外の声加わる。

「——俺も行く。」

「アキラ!」

一番最初に反応したのは、それまでじっと黙って座っていたミュ。椅子から立ち上がり、アキラの顔を覗き込む。

ミュが見つめる中、アキラはゆっくりと目を開けてミュを見ると、

その蒼い瞳で微笑んだ。

「くっつ!!」

その優しい笑みに、ミュが涙を滲ませながらアキラの首に抱きついた。

そんなミュに笑みを深めながら、アキラはその頭を撫でてやる。

そこへ、先程のアキラの言葉を拒絶するフレイズの声がかげられる。

「……申し訳ありませんが、アテイと二人だけで話したい事があるのです。」

「なら、この部屋を使えばいい。俺たちは外に出てるから。」

「……。」

その拒絶も、アキラは代替案を出す事でさらりとかわす。

そしてアキラは、沈黙するフレイズを寝たまま横目で睨む。

「……それとも、アテイだけを連れ出さなきゃいけない理由でもあるのか?」

「ツ!!」

その言葉に、傍目で判る程フレイズの体が強ばる。

アテイとアキラが見つめる中、フレイズは目を瞑って一つ深呼吸すると、

アキラをの目を真っ直ぐ見返して応えた。

「……分かりました。付いて来て下さい。」



「ここは……。」

「魔晶の台地。」

私たちの領域を満たすマナは、この水晶から生み出されています。」

「……。」

フレイズの後を付いて来たアテイが辺りを見渡して呟くと、律儀に

説明してくれる。

しかし、無理矢理付いて来た筈のアキラと、アキラに付いて来たミユは、

いつもと違うフレイズにも、ここへ連れて来た事にも何も言わず、フレイズを見ていた。

そんな二人の視線に気まずいモノを感じるながらも、フレイズは敢えて無視するようにアテイに話しかける。

「……拓けた場所の方が、何かと都合がいいですからね。」

「例えば——私と全力で戦う、とか。」

対するアテイは、フレイズの剣呑な雰囲気を感じてか、引き締まった表情でフレイズを見据える。

「承知の上でしたか。」

「殺気を感じて……。」

「これでも、一応は元軍人ですし。」

軽い驚きと安堵を滲ませながら、フレイズがアテイと距離を取って言うと、

アテイも柔軟な対応が取れる体勢に移って応える。

そして、フレイズが剣を抜こうと柄に手をかけた瞬間、横から伸びた手が、その手ごと柄を押さえ込んだ。

驚いたフレイズが手の主を見ると、いつの間に近寄ったのか、アキラが隣で微笑み、

その傍には睨みを効かせるミュウが居た。

「アキラさん!?!」

「まずは話し合い。だろ?」

「……フレイズさん。聞かせてくれませんか?」

そこまでして、貴方がファリエルを守ろうとしている理由を。」

アキラにいつもと変わらぬ笑顔で話しかけられ、アテイに懇願するように尋ねられ、

フレイズは手から力を抜いて息を吐いた。

「……いいでしょう。ここまで踏み込んで来てしまった貴女には、それを知る権利がある。」

アキラさんも、無関係という訳ではありませんし。」

そこでアキラは手を離すと、近場の水晶の上に腰を下ろし、ミュがその横にちょこんと座る。

それに倣い、フレイズとアテイも、思い思いの場所に腰を下ろした。そして、一泊の間を置いてフレイズが語り出す。

「ファリエル様が、あのように亡霊として生き続けている原因を作ったのは、この私なのです。」

「!？」

「……。」

のっけから驚くべき事を聞かされ、アテイが目を見開く。

そんなアテイの様子と、逆に目を瞑り何の反応も示さないアキラと、

ただアキラを見つめるミュを見渡し、フレイズは話を続けた。

「まだ未熟ながらも、精一杯に運命へと立ち向かって行く彼女の魂の輝きを、

私は心から慈しみ、その助けとなる事を心から嬉しく思っております。

ですが、それでも越えられない運命がやって来たのです。」

「この島で起こった過去の戦い……。」

「……。」

どうやら、アキラは話が終わるまで口を開く気はないらしく、聞き役に徹している。

当然、ミュも口を挟む気などない。

そこで必然的に、フレイズとアテイの二人によって話は進められていく。

「乱戦の中ではぐれ、ようやく私が彼女を見つけ出した時には、

ファリエル様は息を引き取られる寸前でした……。」

「——っ。」

「半ばまで炎に失われた身体には、手の施しようもなくて……。」

あの時ほど……私は自分の愚かさを悔いた事は……ありません……。」

「フレイズさん……。」

フレイズの深い悲しみの表情に、アテイの表情も悲しみに染まる。しかし、フレイズは休む事なく話を続ける。

「死せる者の魂は、次の世界で新たな姿に生まれ変わります。

しかし、この島ではそれが不可能である事は、貴女たちも知っている筈です。」

「……島の力に囚われて、操られるがままの亡霊になってしまおう。」

「ファリエル様を、彼女の魂を、そんな目には会わせたくなかった……。」

そして……私は天使である事を捨てました……。

自分の魂を分け与え、彼女を霊的生命に変え、確定されていた運命に逆らったんです。」

「な……。」

人を霊的生命に変えるという今まで聞いた事のない話に、

アテイの目が、今日何度目かの驚きに開かれる。

「天使のもたらす奇跡は、その魂に課せられた運命を全うさせる為に用いるもの。

その掟を破った私は、もう天使ではない。

「堕ちた天使なのです。」

「そんな……。」

「悔いてはいません。

生き延びたいと願う彼女の意志を、私は叶える事ができたのですから。」

「フレイズさん……。」

そしてフレイズの話は過去の事を終え、現在の事に移る。

「だが、貴女と出会い、ファリエル様は変わられてしまった。

兄を救えなかった無念。

現世に存在し続ける為の意識を、彼女は捨てようとしている。

それが、自身の消滅を意味すると知りながら。貴女の為に……。」

「あ……（あの時、二人が話していたのは、この事だったんだ……。」

フレイズはより一層表情を歪めると、その表情を隠すように両手で



覆い、

肩を震わせ、アティはその話に思い当たる事があるのか、下を向く。

「転生の輪からはぐれた彼女の魂は、もはやどこへも行けません。

生きる意味を失えば、後はただ消え去る運命です。

私は、それを黙って見過ごす事はできない……。」

語りから嘆きが変わったフレイズの言葉に、アティは悲しい目で見つめて力なく尋ねる。

「……だから、力づくで私を彼女から遠ざけるつもりなんですね。」

「その通りです。」

貴女が彼女との接触を断つ事を誓って下さらない限りは……。」

その言葉にフレイズは顔を上げ、険しい瞳でアティを見据える。

両者の瞳が重なり、まさしく火花を散らそうとしたその時、初めてアキラが口を開いた。

「お前は、主の苦しむ姿を見ていたいのか?」

「!？」

やっと口を開いたかと思えば、その内容は凍てつく風のように冷たくて、

普段のアキラからは想像もできないもの。

更に、その顔は完全な無表情で、アキラが何を考えてそんな事を尋ねたのか、

その真意が全く伺えない。

しかし、フレイズの動揺など気にもせず、アキラは立ち上がり、進み出る。

その後ろには、いつの間に被ったのか、口元だけが覗く狐面を着けたミュウが、

まるで神に仕える巫女のように、恭しく付き従う。

アキラがフレイズの前で立ち止まると、その間に立つようにミュウが一步進み出る。

そして、常とは違う平坦な声で、なまり 訛もなく告げる。

「ただ静かに聞くがいい。今、託宣がなされる。」

“神なる声”ではなく、“真なる声”による“真託”が。」

そして、ミュが一步下がり、アキラの脇に控えると、辺りが厳かな空気に包まれる中、

アキラは波一つない静かな湖面のような瞳をフレイズに向けた。

「お前は、主に兄を救えなかった無念を抱き、永遠に生きろと言うのか？」

「ッ！そ、それは……。」

弾劾するようでいて、どこか風が吹いただけのようなアキラの問いかけに、

フレイズは目を逸らす。

「主に、顔では笑顔を浮かべさせ、心の中では無念に泣かせるのが、お前の望みなのか？」

「違う！」

糾弾にも似た問いかけは続き、フレイズは思わず叫び返し、立ち上がる。

そして、今にも泣きそうな表情でアキラを睨みつけるが、アキラは揺るがぬ瞳で見返す。

「しかし、お前は言った筈だ。

兄を救えなかった無念を捨てさせない、消え去る事も見過ごさない、と。」

「……違う——違う！違う!!私は——ッ！私は、ただ——ッ。」

傷を抉るように、心の闇を曝すように、アキラはフレイズの言葉を取り上げる。

フレイズも、自分がどれだけ勝手な事を言っているのか、どこかで解っていたのだろう。

悲鳴をあげるように否定すると、力なくその場に膝をついた。

そこへ突然、先程までとは逆に、暖かさを感じさせる声舞い降りる。

「お前の願いは何だ？」

「私の……願い？」

その声に戸惑うように、下を向いたままフレイズが聞き返す。

「そうだ。お前の本当の願いは何だった？」

「ファリエル様の、幸せを……護る、事。」

正しい答えに導くように、自分の原点を思い出させるように、

アキラはフレイズに語りかけ、途切れ途切れにフレイズが答える。

「お前のしようとしていた事は、ファリエルの幸せに繋がるのか？」

……そうかもしれない。しかし、違うかもしれない。

ファリエルの幸せは、ファリエルにしか解らない。」

「……。」

静かに、ただ静かに告げられた言葉を、フレイズは黙って聞き届ける。

そこへ、アティが説得するように言葉を続ける。

「そうですよ。貴方にも、私にも、そんな事を決める権利なんてありません。」

それは、彼女自身が決める事です。」

その言葉に、フレイズは手を強く握り締め、悔しそうに言い捨てる。

「しかし、それではあの方が——っ！」

フレイズの悔しさを思いやり、ファリエルの行動を思い返し、アティは悲しげに応える。

「解ってます。」

あの子はいつも、みんなの前に立って災いを受け止めようとしてる。

死なない身体を理由に、彼女はみんなの生命を守る盾になろうとしてるんでしよう?」

「それを知っていながら、何故貴女は止めてくれないのです！」

魂だけの身であろうと、傷つけば痛みや苦しみだって感じるのですよ!」

「——っ。」

その言葉にフレイズが激発し、膝をついたままアティを睨み上げる。

そして、フレイズは己の訴えに息を飲むアティに、更に激情をぶつける。

「止められない……。護衛獣である私には、止められないのですよ。」

だから、私は貴女に託したのに……なのに——っ！  
「なら、お前が守ってやればいい。」

「!？」

その激情に被せるように、アキラの静かな声が響く。

驚いてアキラを見上げるフレイズに、アキラは月の光のように優しい笑顔で告げる。

「お前も共に戦場に立って、今度こそファリエルを守ってやればいい。」

「アキラさん……。」

告げられた言葉に、呆然とフレイズが目を見開く。

「そうですよ、フレイズさん。」

私だってファリエル一人に全部任せる気なんかありません。

ファリエルだって仲間なもの。私はファリエルも守ってみせる。

ただ、私は同時にあの子の気持ちも大事にしてあげたいの。

力づくで危険から引き剥がす事だけが、守るって事じゃない筈でしょう？」

「アテイ……。」

続けて、アテイにも笑顔で言われ、今度はそちらを見上げる。

呆然として、何を言ったらいいのか判らないフレイズの耳に、聞き慣れた声が届く。

「……フレイズ。」

「ファリエル様……。」

水晶の陰から現れたファリエルが、しばらくの間フレイズと見つめ合う。

そして、声をかける。

「どうして、こんな勝手な事をしたの？」

「……聞いて、おられたのですね。」

「うん……。」

静かに問いかけるファリエルに、フレイズは泣き笑いのような表情を見せる。

そして、下を向いたまま、力なく話し始める。

「護衛獣の使命は、召喚した者を守る事。

例えば貴女が拒んでも、その為なら私は戦い続けたい。

貴女の魂だけは、失いたくない——っ。

守りたいんです！」

最後には叫ぶようにして告げられたフレイズの想いに、ファリエルは嬉しそうに微笑んで応える。

「ありがとう……フレイズ……。貴方が心配してくれて、私、とても嬉しいよ。

貴方のおかげで、私、凄く幸せだったわ。

だから、もう、いいの……。

貴方が、憎まれ役にならなくてもいいの。」

「ファリエル様……。」

初めて聞く主の心の内と、自分の事を思いやる言葉に、

フレイズは顔を上げ、その瞳に涙を滲ませる。

「それにね、フレイズ。私、今は消えるつもりなんてないよ？」

「え……？」

明るく、まるで悪戯を成功させたように笑うファリエルに、フレイズが戸惑いの表情を浮かべる。

それを見て、ファリエルは更に楽しそうに笑う。

「もつと別の未練ができちゃったから。貴方や、集落のみんな。

それに——。」

何事か言い淀み、ファリエルはアキラの方をちらりと見て、心なしか頬を染める。

そして、アキラと目が合うと慌ててフレイズの方に向き直る。

「わ、私！色んな人たちと一緒に、ずっとこの島で暮らしていきたいの！

……だから、消えない。もつたいなくて、消えたりできないよ？」  
「あ……。」

ファリエルの話す、別の未練という言葉に、フレイズは目から鱗が落ちたように、

この日、何度となく浮かべた呆然とした表情になる。

しかし、フレイズの態度に不安なものを感じたのか、フアリエルが心細そうに尋ねる。

「ダメ、かな？」

「いいえ——っ。いいえ、決して。」

フアリエルの声に弾かれるように、フレイズは応え、涙を零した。



しばらくして、フレイズが落ちついた頃。

またいつの間にか面を外したミュにくつつかれて微笑んでいるアキラと、

ほくほくした笑顔のアティと、フレイズの泣き顔を初めて見て嬉しそうなフアリエルが、

優しげにフレイズを見つめていた。

その視線に恥ずかしくなったのか、フレイズは膝についた土を払いながら立ち上がると、

一つ咳払いをしてアティに向き直った。

「数々の無礼、どうかお許し下さい、アティ。もう、私は迷わない。

彼女の望んだ道が、貴女と共に行く事であるのなら……私も共に戦います。

彼女の魂の輝きを守る為に……。

そして……私に道を見せてくれた、貴女たちの魂の輝きを信じて……。」

「ええー」

そして、真剣な表情で告げられた言葉と共に差し出された右手を、アティが笑顔で握り返す事で、今回の騒ぎは幕を下ろした。

## 告げられた言葉

フレイズとの騒動から一夜明けた日の朝。

昨日の異変の原因を調べる為、アルデイラとフアリエルが遺跡に入った。

しかし、遺跡はまるで死んだように静かで、何の異変も見られなかった。

そこで二人は辺りの機械を適当に破壊し、外に待たせていたアテイに結果を教える為、

遺跡を後にした。

そして、それらの事を伝えられたアテイは、

二人と相談して、当面の間は放っておくのが最善だろうと判断したのだった。



昼、外から聞こえてくる騒ぎにごろ寝を止めて、

未だに眠そうなミュを抱えて船から降りてみると、そこはある意味戦場だった。

「……で、いったい何がどうしたって言うんだ？」

騒ぎの大元らしい連中に声をかけると、

アテイとウィルがさかさず俺の背中に隠れて、カイルとオウキーニを指さす。

「あれ！あれを見て下さい、アキラさん!!」

「あの二人が気味悪い物を食べさせようとするんですよ、義兄さん！」  
その二人の大きな声に、腕の中のミュも完全に目を覚ましたよう

で、

不満気ながらも下に降りて、二人の指差す方に目を向ける。

「気味悪い物？」

そう言つて俺もオウキーニの手元を見てみると、大きな皿にタコ刺しが並べられていた。

うげっ、まだ動いてる……気持ちわりいく。

「そりや二人とも逃げるわ。」

なんて考えてると、

オウキーニが満面の笑顔で俺とミュに近寄つて来て皿を差し出した。

「アキラはん、ミュはんも、一つどうでつか？美味いでっせ。」

皿の上でうねうね動いてるタコ刺しを目の前に突きつけられ、

顔を引き攣らせながら手で皿を遠ざけるようにして断りを入れる。

「あ、いや、生はちよつと……。」

「アキラが食べへんのやったら、ウチもいらん。」

俺たちがそう言うのと、

オウキーニは残念そうに「そうでつか……美味しいんやけどなく。」

と言いながら引いてくれた。

すると、オウキーニの隣に居たカイルが不服そうに呟く。

「なんでえ、もったいねえな。こんなに美味しいのによ。」

「いや、だからって動いてる物は食う気しないだろ、フツウ。」

俺の反論に、後ろの二人も頻りに首を縦に振る。

どうも、みんなにタコを好きになつて欲しかったみたいだけど、

これじゃ逆効果だよオウキーニ……。



何故か更にタコに対する情熱を燃え上がらせたオウキーニを見送り、



アティは気分転換の為に、  
いつも通り腕にミュを引っ付けたアキラと共に潮風の香る浜辺に  
来ていた。

来てからしばらくの間、ミュを除く二人はぼつぼつと会話をしてい  
たが、

いつの間にか三人揃って浜辺に座り、黙って遠い水平線の向こうを  
眺めていた。

そんな時。

「——!?!」

「アティ!?!」

「!!?!」

突然アティの体を碧の光が覆い、三人が驚きに包まれる中、アティ  
の手に剣が現れる。

「剣が、また……勝手に——っ!」

「くっ……!?!」

「アキラ!」

頭を押さえてよろめくアキラとアキラに駆け寄るミュを見て、

アティが剣を消そうと慌てるが、光と共に男性が現れ動きを止め  
る。

「驚かせてしまって、すまない……」

遺跡の意志が沈黙した今なら、何とか君に姿を見せる事ができたか  
ら……。

剣の力を借りて……会いに来たんだ……」

「貴方は……。あの時、私を助けてくれた声の……」

突然現れた碧に光る男の声に、アティは何度も自分を助けてくれた  
人だと気付き、呆然と眩く。

男はアティに朗らかな笑みを浮かべてみせる。

「ああ、そうだよ。僕の名前はハイネル。ハイネル・コープスだ。」

「貴方が……」

ゆっくり名乗る男性が、アルディラたちの話しによく出てくるハイ  
ネルであり、

今まで助けてくれた声の主だと知り、アテイが驚きに目を見開く。そんなアテイに、アキラを支えるミュが怒鳴る。

「何、悠長に喋ってんのや！早よ剣を消さんかい！」

「は、はいー」

その声に慌ててアテイが再び剣を消そうとするが、痛む頭を手で押さえたアキラが止める。

「……待て、ミュ。アテイも待ってくれ。」

そんなに大した痛みじゃないから。

……貴方のお陰かな？」

最後には小さいながらも微笑んで、ハイネルに向って話しかける。

その様子に、本当に大した事は無いのだろうとミュとアテイは一息吐いた。

「ああ。どうやら君も遺跡の影響を強く受けるようだからね。」

障壁を張っておいたんだ。」

初対面にも関わらず微笑んでくれた事が嬉しかったのか、ハイネルもアキラに微笑んで返す。

そこでアキラは潮風を胸一杯に吸い込んで深呼吸し、

いつもと違って軽い頭痛を頭を振って追い払い、

真っ直ぐな瞳でしっかりとハイネルを見つめ直した。

「それで、そんな事までしてアテイに会いに来たって事は、話してくれるんだろ？」

貴方の知ってる事を。」

アキラの言葉を受け、ハイネルも笑顔から真剣な表情になり、静かに肯いて話し出した。

「アルテイラやファリエルたちから僕の事は色々聞いたと思うけれど、

過去の戦いで僕は核識となり、この島を守る為、無色の派閥と戦っていたんだ。

そして、二つの魔剣、シャルトスとキルスレスに封印されてしまった。

精神を、ばらばらに分断されてね……。」

「そんな!？」

「……。」

ハイネルの言葉に思わずアティは声をあげてしまうが、アキラは少し表情を曇らせただけで、声には出さなかった。

そんなアキラを心配そうにミュが見つめる中、ハイネルは雰囲気を変えるように笑顔を見せる。

「でも、そのお陰で剣を通じて、こうやって君たちと話ができるんだよ。」

「あ……。」

考え付きもしなかった利点を指摘され、アティは恍けた表情で一言声を漏らした。

初めて出会った赤の他人の事を親身になつて案じるアティを、

ハイネルは微笑まし気に見つめながら続けた。

「核識となった時点で、僕の精神はいずれ崩壊する運命だった。

だから、こうして剣に閉じ込められてしまった事を、僕は悔いてはいない。

大切な人たちの笑顔を、何とか守る事もできたしね？」

「ハイネルさん……。」

続くハイネルの言葉に、少し哀し気なもの、落ち着きを取り戻したアティ。

そしてアキラはハイネルの想いを知り、ほんの少しの苛立ちの混じった哀しい笑みを浮かべ、

静かに握り締めた手に力を込めた。

たった一人、そんなアキラの様子に気付いたミュは、

握り締められた拳を黙って、その小さな手でそっと包み込んだ。

ハイネルの言葉は続く。

「ただ……辛いのは……、僕の手の届かない所で、

分かれたれた『意識たち』がそれを壊そうとしている事だ……。」

「どういう事ですか？」

「二本の魔剣と遺跡。僕の意識は三つに分かれて存在している。

……三つに分かれて存在している筈なんだ。」

そこで言い淀み、戸惑うハイネルに、アキラは心当たりがあった。「ひよつとして、俺の頭に響いてくる声の事か？」

「……ああ。」

「どういう事か、聞かせてくれるか？」

自分の問い掛けに間を空けて肯いたハイネルに、アキラは静かに問いかけを重ねた。

ハイネルは俯き、苦しそうな表情をしながらも、その口を開いた。「三つに分かれた意識は、そのどれもが僕であり、本当の僕じゃない。いびつに歪んだ存在だ。」

「……ただ、この島に戻ってから……いや、君と出会ってから、その三つ以外に、僕であって僕で無いような、

僕ではあり得ないような何かの気配を感じるんだ。」

「……四つ目の存在、か。」

ハイネルの言葉に、アキラは深々と溜息を吐いた。

今までの状況から考えて、あの声が遺跡に関係ない訳が無い。

しかし、遺跡そのものと言ってもいいハイネルが、その存在を判らないと言う。

であれば、あの声は遺跡であつてもハイネルでは無い、という事なのだろうか。

何の手掛かりにもなっていない事を、己が一番理解しているのか、考え込んでいるアキラを申し訳無さそうに見ていたハイネルは、その視線をアテイへと移した。

「四つ目の存在については判らないけど、君を取り込もうとしたモノについてなら判る。」

あれは……誰の心にもある、他人には見せられない闇。

生きている以上、それは仕方ない……。

人は理性でそれを押し止め、何とかやっ払いこうとする。」

「……………」

「……ただ、分かれた事で、僕の中の闇は暴走を始めてしまったんだ。

怒りや悲しみ……妬み、憎しみ……。

そうした衝動が遺跡と結びつく事で生まれた存在が、あの化け物な

んだ……。」

「遺跡の意志……。私を取り込もうとした、あの声の主……。」

静かにハイネルの言葉を聞いていたアティは、自分を取り込もうとした声の正体を知り、

その事実を噛み締める様に呟いた。

「同じ源を持つからこそ、僕には解るんだ。

本当の僕が、誰にも見せなかった感情。

あらゆる全てに対する不信や、憤り……。

あの化け物は、僕の心の闇そのものなんだ。」

「——っ。」

酷く悲しそうに、辛そうに語るハイネルに、アティもかける言葉を失い息を飲む。

しかし、次いでハイネルはその表情を不安に彩らされる。

「だけど、四つ目の存在はそんな僕の心の闇とも違う……気がする。

そして、そいつも何かをしようとしてる。

それが何かまでは判らないけれど、きつと恐ろしい事だ。

……もしかしたら、遺跡の化け物がしようとしている事よりも。」

その言葉に、考え込んでいたアキラが顔を上げ、傍にいたミュがハイネルに問い掛ける。

「何でそんな事が解るんや?」

「……感じるんだ。そいつの禍々しい息遣いを。」

自分が感じている恐怖と共に、ハイネルが重々しく告げ、三人の顔にも緊張が走る。

そして、そのまま場に沈黙が訪れるかと思った時、ハイネルが痛々しい表情で話し出した。

「僕は……。僕は、何としてでも遺跡の化け物を止めたかった。

だけど、今の僕にはそれを叶えるだけの力がなくて……。だから……。だからっ!」

「私を——喚んだんですね?」

まるで血を吐くように告白するハイネルに、アティが静かに応える。

初めから全て知っていたかのような、アテイの穏やかな表情に、ハイネルは驚き、次いでその顔を辛そうに伏せる。

「……それしか、方法がなかったんだ。」

同じ輝きの魂。すなわち、核識になりうる可能性を持った存在ならば、

封印を解く事も、再び封じ直す事もできる筈だから。

……だから、君たちに望みをかけたんだ。

だけど……もう、充分だ……。」

「え？」

最後に静かな、それでいて嬉しそうな表情を見せるハイネルに、アテイが小さく疑問の声を上げる。

「あれが、最後なんだ。」

僕にはもう、君の心を守るだけの力が残ってない……。

今度、同じ事が繰り返されたら、君という存在は本当に消えてしまおうだろう。

それに、今まで僕にすら判らなかつた別の存在がある。

だから、これ以上は剣を喚んじやいけない。絶対に……。」

その姿を徐々に薄ませつつも、表情を硬くしたハイネルはアテイに向かつて警告する。

突然の事にアテイが思わず手を伸ばし、ハイネルの名を叫ぶ。

「ハイネルさんっ!？」

「お願い——っだ——っ。」

しかし、アテイの手はハイネルに届く事無く、その姿は消えてしまおう。

それと同時にアテイは元の姿に戻り、剣も消えてしまう。

「あ……。」

アテイは呆然として声を漏らすが、辺りには静かな波の音だけが響き、

今までハイネルが居たという痕跡はどこにも残っていない。

それでも何かを探すようにアテイは辺りを見渡し、何も見つけられずに項垂れる。

動く事もできず、その場で考え込むアテイにアキラは声をかけた。「……行こう、アテイ。アルデイラたちが待つてる。」

「……はい。」

そして三人は浜辺を後にし、集いの泉へと足を向ける。

残ったのは、いつまでも打ち寄せる波と、三人分の足跡だけだった。



どこか沈んだ様子のアテイが、アキラとミュを伴って集いの泉に現れると、

それを機にアルデイラとファリエルが遺跡を巡つての問題を、ヤツファとキュウマに語り始めた。

その時、ファリエルはファルゼンの正体が自分である事を明かした為、一時、場が騒然となった。

驚きが落ち着くと、今度は護人たちがファリエルを囲み、懐かしそうに昔話を始めたが、

それもマルルウが帝国軍が来た事を伝えに来るまでだった。



知らせを聞いた俺は、頭にマルルウを乗せて森の中を船に向かって走ってる。

別にマルルウを連れて行かなくちゃいけない理由は何も無いんだけど、

乗っかってきたマルルウを放り出す理由も特に無かったからだ。

そんな事より、凄いい速さで木々を縫って走るアテイたちをミュと併走して追いながら考える。

今までのアズリアを観てると、奇襲つてのは可能性が低い。むしろ、宣戦布告をしに来たって方がしつくりくる。

なら、別に走る必要は無いんじゃない……。

なんて考えてる間に、森を抜け、船に着いてしまった。

そこで俺たちを待っていたのは、アズリアの副官の筋肉男と——  
イスラだった。

「待ちかねたぞ。」

「ギャレオ……それに、イスラも。」

森の中から現れた俺たちに筋肉男が話しかけてくる。

アテイが緊迫した声で二人の名前を呟くのが聞こえた。

俺はマルルウを頭の上から降ろし、イスラの顔を睨み付ける。隣に居たミュも、イスラを見るなり瞳に危険な色を宿らせる。

「用件だけ伝えて、さっさと帰っても良かったんだけどね。」

彼がどうしても、君に直接宣戦布告したいって言うからね。」

イスラは俺とミュの視線を感じたのか、一瞬こちらを見た後、すぐにアテイに視線を移して飄々とした態度で話しかけた。

へえ、この前よりは度胸が付いたみたいじゃないか。

「それが隊長の命令だからな。」

アテイよ、帝国軍海戦隊第6部隊特使として貴様に告げる！

我が隊は全軍を以て、貴様らに総力戦を挑むものなり。

決戦の場所は、この布告状へと記した。

受け取るがいい。」

「……………」

筋肉男がイスラに続いてアテイに話しかけ、丸められた一枚の紙を突きつける。

アテイは『決戦』という言葉に表情を引き締めると、黙ったままその紙を受け取った。

「この度の戦いにおいて、完全決着のみを我らは望んでいる。

相応の備えをもって挑まれよ！」

「上等だぜ……。いい加減、はつきり白黒つけねえとな。」

筋肉おと——いい加減、名前と呼んでやろう——ギャレオが告



げた言葉に、

やはりというか何というか、カイルが面白そうに返事をする。

「そうだよ。目障りなモノを、いつまでも生かしておく必要はないし。」

そろそろ、まとめて死んで貰わないと。」

他を見下したような歪な笑いを浮かべて安い挑発をしてくるイスラに、スカーレルが目を細める。

「あらあら……。」

今の発言、そのままアナタのお姉さんの意志って事かしら？」

「馬鹿な事を言うな！」

そして、それに過剰な位反応するのはやっぱりギャレオ。

こんなに感情的で本当に副官が務まってるのかね？

「落ち着いて下さい。スカーレルも挑発しないで。」

アテイが二人の間に割って入り、引き離す。

そして、スカーレルが肩を竦めて後ろに下がるのを待ってから、ギャレオに向き直る。

「承知しました、とアズリアに伝えて下さい。」

「へえ？とうとう戦う気になったんだ？」

「私は、私の大切なものを守ってきました。」

そして、これからも守ってみせます。」

「先生……。」

アテイの揺るぎ無い決意に、ソノラが嬉しそうな表情になる。

アテイも大分しつかりしてきたな。

「……我らは我らの信念を貫くのみ。それだけだツ!!」

「いつまで君がそんな夢物語を言ってるのか、楽しみにしてるよ。」

ふふ、ふふふ……。」

「……。」

アテイの言葉に少しの間瞑目したギャレオは、自分を奮い立たせるように大きな声で宣言する。

その後、やっぱりイスラが挑発するように言葉を残して、二人は去って行った。

そんな二人を黙って見送るアテイを見ながら、俺はイスラについて考えていた。

今、イスラを、じっと観察していて気付いた。

アイツの行動や態度には、いつもどこかに嘘がある。

それに、辛辣な言動や、神経を逆なでするような笑いの合間に、時々泣きそうな瞳が覗く。

……どうしてアイツは、あんなに必死になって嫌われようとしてるんだらう？

## 動き出した影

島に住む者たちが夕闇の墓標と呼ぶ丘。

そこが帝国軍が指定した決戦の場だった。

誰がそう呼び始めたのか、いつからそう呼ばれ始めたのかは判らない。

ただ、その丘が夕陽に染まる時、点々と存在する自然石がまるで墓標の様に見える丘だった。

間も無く夕暮れとなる時刻、その丘に整然と布陣する帝国軍と対峙する様に小さな集団が現れた。

「来ましたぜ、隊長殿。」

「……。」

自分たちに比べ、十分の一にも満たない人数の癖に、

まるでこちらを怖がりもせず堂々と現れた一団に、ビジュは苦々しげな表情で報告する。

当然、アズリアにもその姿は見えていたが、特に何も語らず、その一団が来るのを待った。

やがて、ある程度距離をとって停止した一団の中から一人、アテイだけが歩み出てくる。

それに呼応して、アズリアも軍勢から離れる。

二人は、互いの集団の丁度中間地点で向き合った。

「今回で決着——ですね、アズリア？」

「ああ。この一戦でケリをつけるとしよう。」

アズリアを前にして、アテイはいつもとは違う笑みを浮かべる。

それは好敵手を前にした戦士の笑み。

これから始まるギリギリの戦いに、自然と高揚する心が作り出した笑み。

対するアズリアも、同様の笑みを浮かべている。



力強く笑うカイル、いつもと同じふてぶてしい笑みのヤツファ、見慣れた鎧姿のフェアエル、幾分か緊張しているスバル、そして、任されたポジションに掛かる責任の重圧に、自然と手に入力するウイル。

それぞれからの返事を確認し、アティは続けて次の指示を出す。

「ソノラ、アルデイラ、マルルウには、この前線部隊を後方から援護して貰います。」

「任せといて！」

「了解したわ。」

「頑張るですよー！」

元氣よく返事をするソノラと、静かに了承するアルデイラ、

そして空中で一回転して、そのやる気を見せるマルルウ。

三人の返事に肯き返し、アティは更に指示を続ける。

「ヤードさん、フレイズさんは後方部隊を守りながら、前線部隊の回復をお願いします。」

「承知しました。」

「お嬢さん方を護衛はお任せ下さい。」

真剣な面持ちで返事をするヤードと、朗らかに笑ってみせるフレイズ。

二人の返事を確認して、次の指示を出す。

「アキラさん、ミュちゃん、ミスミ様、クノンは敵右翼を強襲。

できる限り素早く壊滅させて、敵中央の横を突いて下さい。」

「りよ〜かい！」

「……ふん。」

「承知した。」

「お任せ下さい。」

何やら楽しげに返事をするアキラと、そっぽを向くミュ、

そして貫禄と共に肯くミスミと、いつも通り何の気負いも感じさせないクノン。

それぞれの顔を見渡し、アティは次の仲間に向け顔を向ける。

「スカーレル、キュウマさんは、右翼を更に迂回する形で敵の後ろを突

いて貰います。

まずは気付かれないうように回り込んで、アキラさんたちが敵中央の側面を攻撃し始めたら、

後ろからできるだけ派手に攻撃して下さい。」

「へえ、面白そうじゃない。」

「お任せを。」

不敵な笑みを見せるスカールレルと、重々しく肯くキュウマ。

二人の返事を聞いてからアティは軽く息を吐くと、更に瞳に力を込めて仲間たちを見据える。

「まず最初の突撃時は一塊で行きます。」

その後、敵と戦闘になる前に、各部隊へと分かれて下さい。」

アティはそこで一息置くと、ゆっくりと全員の顔を見渡す。

そして皆が静かに聴いているのを確かめ、続ける。

「この作戦の成功は、敵中央と左翼を抑えている間に、右翼を撃破し、側面と後方を同時に突けるかどうかに懸かっています。」

アティの言葉に全員の顔が緊張に引き締まる。

何度も戦って勝ってきたとはいえ、帝国軍は弱くない。

この作戦が失敗すれば自分たちは負けて、アティは剣ごと帝国に連れ去られ、

島は蹂躪されてしまうだろう。

絶対に負けられないという想いが、仲間たちの心を結びつける。

そんな仲間たちの想いに応えるように、アティが力強く宣言する。

「今度こそ、この戦いに決着を付けます!!」

「!!」

そして、戦端は開かれた。



戦いが始まってから数時間。

戦況は、ほぼアテイの作戦通りに進んだ。

確かに帝国軍は弱くなかったし、数もアテイたちより多かったが、個々の能力と連携ではアテイたちが勝っていた。

見事なチームワークと強さで、アテイたち主力部隊が敵の中央と左翼を抑え、

その間にアキラたち強襲部隊が敵右翼を打ち破る。

敵右翼にはアキラたちの倍は人数が居たが、

かつてミュと二人で敵陣を突破したアキラを止められる筈も無く、更にミスミとクノンという中距離支援が付いていた事もあって、

右翼はあつと言う間に蹴散らされてしまった。

そのまま強襲部隊は、作戦通りに敵中央の側面に襲い掛かったが、一つ不安があった。

それは、スカーレルとキュウマの奇襲部隊である。

他の部隊に比べ、奇襲部隊は敵に気付かれないように後方に廻らなければならぬ。

その為、どうしても移動に時間がかかる。

しかも、アキラたち強襲部隊は思ったより早く右翼を破ってしまった。

側面と背後を同時に攻撃するのは間に合わないかと思われたが、

スカーレルとキュウマの二人はその特技を活かし、見事に間に合わせてくれた。

二人は帝国兵の視界を避け、地面の起伏や岩の陰を伝い、素早く敵中央の背後へと廻り込み、

アキラたちが側面を攻撃し始めたのを合図に、音と光が派手な召喚術を撃ちまくった。

思わぬ所からの攻撃により、帝国軍は統率を乱し、総崩れとなってしまう。

そこへアテイたち主力部隊が、ここぞとばかりに攻撃に転じ、勝敗は決した。



いつかと同じ様に、アズリアはアテイと向かい合っていたが、次々と部下が打ち倒され、最後に残っていたギャレオがカイルの一撃で地に沈んだ時、

ゆっくりと剣を下ろし、構えを解いた。

「……どうやら、ここまでの様だな。」

最後の最後まで……結局、お前には敵わなかったな。」

「アズリア……。」

アズリアは剣を足元に突き立て目を瞑り、息を吐くように敗北を宣言すると、

諦観の笑みをアテイに向ける。

負けたというのに、どこかすっきりしたようなその笑みに、

アテイもほっとしたような、嬉しそうな笑みを返す。

そんな二人の周りに、まだ動く事のできるそれぞれの仲間たちが集まってくる。

アテイの方はアキラを始めとし、仲間たち全員が自分の足で立っているのに対し、

アズリアの方は、自分の足で立っているのはギャレオのみ。

後の帝国兵は互いに支えあっているか、動けずに倒れたままだ。

そのギャレオにしても、立っているのが精一杯といった様子。

部下たちの様子を見て、自分たちの完全な敗北を改めて確認し、

アズリアは少しだけ寂しげな表情を浮かべる。

それが、今まで築き上げてきた功績が崩れ去る事に対してなのか、自分が鍛え、率いてきた部隊の初めての敗北に対してなのかは、アズリア本人にしか解らない。

そしてアズリアは、アテイに向き直る。

「さあ、アテイ。煮るなり焼くなり好きにするがいい。」

勝者には、それをする権利がある。」

先程までの殊勝な雰囲気とは打って変わり、投げ遣りに言い捨て、



その場にどかりと座り込むアズリア。  
そんなアズリアに、アティはにつこりと笑いかける。

「そんな権利なんて、私は知りません。」

「アティ……？」

てつきり剣を諦め、帝国への帰投を命じられると思っていたアズリアは、

アティを困惑の表情で見上げる。

そこへ、楽しそうな顔をしたアキラが割って入ってくる。

「そうそう。そんな権利なんて誰にも無い。」

そうじゃないと、誰も彼もが負けられなくなるだろ？」

!!?

な、何を言っている？負けられないのは当然だろう!!？」

憎たらしいまでの笑顔で、今までの自分の常識を否定するアキラに、

アズリアは驚愕し、自分の常識を再確認しようとする。

しかし、そんなアズリアの望みが果たされる事は無かった。

アキラは静かな笑みと、静かな声で、強く語りかける。

「違うよ。負けたっていいんだ。」

ただ、自分の一番大切なモノが守れば。」

「……。」

それは単純な事。とても単純な事だった。

しかし、だからこそ気付き難い真実。

勝たなければ守れないと思っていた。

勝つ事が守る事だと信じていた。

そんなアズリアの思い込みが、アキラの一言で崩れ去る。

今まで、どんな時でも意識的に、そして無意識の内に張られていた、

アズリアの肩の力が、すんと、と抜け落ちる。

そんな気の抜けた様なアズリアに、まるで相手が解らなかった公式の解き方を教える時の様に、

少し得意顔のアティが講釈する。

「そうですよ、アズリア。」

勝った方が何でも好きにできたら、負けた方はどうなっちゃうんですか？

「ちやんと負けた方の事も考えなきゃ。」

常識を覆す様な、自分が礎としてきた常識を覆す様な事を、平然と述べるアテイに、

アズリアの顔に自然と笑みが浮かぶ。

昔からそうだった。

いつだってそうだった。

この目の前に居る人物は、初めて会った時から己の常識に反してきた。

しかし、それはいつも嫌なものではなかった。

どこか心が暖かくなる、優しい否定。

世の中はそんなに酷い物じゃないと思わせてくれる、優しい言葉。

今もまた、その言葉はアズリアの心を暖かくしてくれる。

「……ふ、そう負け負けと連呼するな。

腹が立つ。」

だから、そんな憎まれ口を叩きつつも、アズリアの顔には笑顔が浮かんでいる。

その楽しい顔に、アテイとアキラも笑顔を見せる。

そしてアテイは、座ったままのアズリアに手を差し伸べる。

「剣は渡せないけど、帝国に帰る為の手助けなら私たちにもできると思う。」

一緒に探しましょう？

互いの望みを叶える為の方法を。」

「そんな都合のいい話、お前は本当にあると思っているのか？」

まるで夢のような事を言うアテイに、差し伸べられた手を掴み、立ち上がりつつも、

アズリアはアテイに探る様な目を向ける。

それに対し、アテイは純粋な、真っ直ぐな瞳を返す。

「信じなかったら、どんな思いだっただけじゃないよ？」

だから——私は信じます！」

「それに、探してみなきや在るか無いか判らないだろ？」

探してみれば、案外簡単に見つかるかも。」

アテイの力強い言葉の後に、アキラが軽く続ける。

それは尤もで、前向きで、気楽な言葉だったが、

いつもの綺麗な笑みでアキラが言うのと、本当にそんな気がしてくる。

だから、アズリアも自分の常識を曲げる気になったのかもしれない。

「敵わんな……お前たちには……。」

そう言い切られると、拘っていた自分がバカらしくなってくる。」

呆れた様に、感心した様に呟き、アズリアは小さく笑う。

その言葉にアテイは瞳を輝かせてアズリアを見る。

「それじゃ——。」

「勝者からの和平だ。無碍にする訳にもいくまい？」

その一言に、アズリアの、帝国の降服宣言に、アテイたちから、わつ、と歓声上がる。

これで長かった戦いが終わるのだ。

これで島に平和が戻るのだ。

以前の様に、穏やかで楽しい日々を過ごせるのだと、互いの手を取って喜び合う。

そんな輪の外では、アズリアの前に部下たちが集まりつつあった。

よろめきながら、あるいは肩を貸し合いながら集まった部下たちに、アズリアは静かに告げる。

「聞いている通りだ。」

我々は剣の奪還を諦め、島の者たちの協力の下、帝国へ帰還する。」

「そんな——っ！」

「命令は……任務はどうするのです!？」

アズリアの宣言に、兵たちの中から驚きの声上がる。

寄せ集めの部隊だった自分たちが、アズリアが隊長になってからは、

まるで帝国の精鋭部隊のように失敗知らずになった。

その自尊心故か、それとも、そんな自分たちにしてくれたアズリアの恩義に報いるためか、

兵たちは口々に任務の続行を上申する。

しかし、そんな申し出をアズリアは一言で封じてしまう。

「我々は負けたのだ。」

全力で正々堂々と挑み、打ち負かされたのだ。

これ以上、何ができるといふのだ？」

「……………」

他の誰でもないアズリアにそう言われてしまつては、兵たちには何も言う事はできない。

無言で悔しそうに俯く兵たちに代わり、ギャレオがアズリアに声をかける。

「隊長……………」

「すまん、ギャレオ。」

私は部下たちに、軍人としての死よりも生を与えたいらしい。

…………身勝手を笑つてくれ。」

「いいえ！自分は、決して…………決して——っ!!」

上官の弱々しい表情と、初めて聞いた謝罪の言葉に、ギャレオも言葉を詰まらせ、目の端に涙を浮かべる。

そんなギャレオを見て、アズリアは苦笑する。

「大の男が泣くな。見つとも無い。」

「はいっ、申し訳ありません——っ!!」

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△

「あはははは！ははっ、あははははっ、あははははははっ!!」

突然、場の雰囲気に沿ぐわぬ哄笑が響く。

勝利に沸くアテイたちも、敗北に泣く帝国軍も、

驚きの表情でその発生源を見遣る中、アキラとミュだけが冷めた目

でその人物を捕らえる。

「何だかんだ言って、姉さんは結局、覚悟ができてなかったってワケだ？」

「イスラ……。」

その場に居た全員の注目を集める中、イスラの口から悪意が漏れる。

思っても見なかった弟からの侮蔑に、アズリアが呆然とイスラの名前を呟く。

「ま、仕方ないか。姉さんにとって、その人は大切なオトモダチだものね。」

「——っ！」

そんなアズリアの様子を、まるで気にしていないかのように、イスラは嘲笑を浮かべて更なる侮蔑を口にする。

アズリアがその言葉に息を呑み、身を強張らせる。

その姿を見たギャレオが激昂し、ぼろぼろの体で一步進み出る。

「口をつ——」

「黙れよ。」

しかし、ギャレオの怒声を冷たい声が遮る。

その声を聞いた者はみんな、余りの冷たさに動きを凍て付かせる。

恐々と、見てはいけないモノを見るように、アテイたちは視線を動かす。

その先に居たのは、蒼い瞳に冷たい光を宿し、鋭くイスラを見据えるアキラ。

「前にも言ったぞ？ 『うんざりだ』。お前の戯言に付き合うのはな。」  
言いつつ、アキラは一步イスラに向けて足を踏み出す。

逆に、アキラから放たれる圧迫感によって、イスラは一步後退する。その一步はどうやら無意識での行動だったらしく、

下がってからイスラは自分が後退した事に気付く。

それがプライドを刺激したのか、イスラは羞恥と怒りを顔にする。

「う、うるさい！ 何を勝ったつもりでいるのさ!？」

『僕は』まだ負けてない!!

「そうだろう、ビジュ!?」

「仰るとおりでさあ、イヒヒヒヒ……。」

「……?」

怒鳴りつけるようにビジュに同意を求めるイスラに、今まで何処で何をしていたのか、

ほとんど怪我らしい怪我もしていないビジュが現れ、追従する。

そんな二人の様子にアキラは怪訝な目を向けるが、疑問の声はギャレオから発せられた。

「貴様ら……どういうつもりだ!?」

「手前エラの指揮に従うのは、いい加減うんざりって事だよッ!」

ギャレオが詰問した途端、弾かれた様にビジュががなりたてる。

その目には、逆恨みという名の憎悪の炎が踊っていた。

それに対してイスラは味方ができた事で落ち着いたのか、いつもの皮肉気な笑みを浮かべる。

「ここからは、僕らのやりたいようにやらせてもらおうよ。」

言葉のやり取りなんか必要ない、力だけで決着をつける。明快なやり方でね!」

「何ですって……?」

イスラの言葉に、アテイが硬い表情で疑問を口にする。

先程の戦いで、帝国兵たちはみんな、傷付き、疲労している。

イスラがやろうとしている事は、事実上不可能だ。

それとも、一人でアテイたち全員と戦おうと言うのか?

同じ考えに至ったアズリアは、イスラを止めようと声を上げる。

「馬鹿な事は止める、イスラ!」

お前だつて解っている筈だ……。我が軍の戦力は、全てこの一戦に費やした。

これ以上、戦いを続けていく事など不可能なんだ!」

「それは姉さんの部隊の話でしょ?僕の部隊は傷一つ付いちやいないよ。」

なにしろ——ついさつき到着したばかりなんだからねえ。」

「「「?」」」

アズリアの叫びに、イスラは皮肉気な笑みを深くする。

そして、イスラの口から告げられた言葉に、護人たちが驚く。

何故なら、イスラの言葉、それはつまり、結界に覆われたこの島に、今、目の前に居る者たちの他にも人間が居て、自分たちはそれに気付かいていなかったという事。

アテイたちの前に人間が来た事は無く、アテイたちが結界を越える時でさえ、

嵐という徴があった。

それが、今回は何の変異もなく島に侵入していたというのだ。

結界の強力さを、遺跡の力を識っているだけに、俄かには信じられない話だった。

そして、それは他の者たちにしても同じ事だった。

「援軍が……？援軍が来たのか!？」

「そんな……。島の周りには嵐の結界が……。」

「あんなもの、とつくに消えてなくなってるよ。もう出入りは自由さ。難しく考えなくたって、帰る事なら簡単にできるんだよ。」

不確定ながらも、朗報に沸き立つギヤレオ。

即座には信じられず、呆然とするアテイ。

そして、人を小馬鹿にした笑みを浮かべるイスラ。

そんなイスラに、肩を震わせながらアズリアが問い質す。

「ならば……ならば、今の死闘は何の意味も無かったと言うのか!？」

「負け戦に意味を求める必要なんて無いじゃない。」

アズリアの叫ぶような問いかけに、イスラは無感動に答える。

まるで当然の事を答える様に、まるで感じる事など何も無いかの様に。

「イスラ、貴方はそれを知っていてどうして……?」

「ふふふふ……。」

そんなイスラに、アテイは怪訝な顔を見せるが、イスラはただ不敵に笑うのみ。

そして、戦いが終わるのを待っていたかの様に、出番が来るのを待っていたかの様に、

辺りが夕陽に紅く染まる中、たくさんの人影が整然と行進し、夕闇の墓標と呼ばれる丘に姿を現した。



## 虐殺

何もかもが夕陽で紅く染められた丘を、たくさんの、たくさんの人影が無言で行進してくる。

全員が一つの目的の下に動いている様に、或いは何の目的も無い様に。

整然と、誰一人列を乱す事無く、着実に近付いてくる。

その様子を見た帝国兵たちは、汚名を返上できると、

初めての敗北を味わわずに済むと、援軍の登場に沸き立つ。

島の者たちが夕闇の墓標と呼ぶ、その丘で。



「冗談じゃない……。今までの戦いだって、手に余るくらいだったのに……。」

「ミヤ、ミヤ——ッ。」

ウイルとテコの声を近くに聞きながら、俺は思わず舌打ちしていた。

やっと戦いが終わったと思ったのに、また一戦かよ！

しかも、こっちはさつき戦ったばかりで疲れてるってのに！

俺ら海賊だってこんなに戦ってばっかじゃねえぞ！

内心、俺が盛大に愚痴つてるとも知らず、ギャレオが興奮して大声を上げる。

「援軍ですよ、隊長!? これならもう一度、戦う事ができる。」

諦める必要なんて無くなるんです!!」

テメエはさつき俺に負けたばっかだろうが！

往生際の悪いその言葉に思わず一言言ってやろうとしたが、耳に届

いた笑い声に出鼻を挫かれた。

「ふふふ……。」

誰かは言うまでも無く、この場でこんな風に笑う奴は一人しかない。

イスラの野郎だ。

……何だ？まだ何かあるのか？

俺がイスラの笑みに警戒を抱いている内に、新手たちは攻撃を仕掛ける為の陣形を取り始める。

その動きにアズリアが目を瞠り、ぽつりと言葉を漏らす。

「違うぞ……。」

「え？」

その言葉を聞き返す様に、アテイがアズリアを振り返った次の瞬間。

「そいつらは帝国の兵士じゃないっ!？」

「!?!?!」

アズリアが告げた意外な内容に、俺たちの表情は驚きに染まった。



「……行けー!」

紅い髪の女性の号令で、一斉に行動を開始する人影たち。

彼らは奇声を上げながら、その手に持つ様々な武器で手近に居た帝国兵たちを攻撃し始めた。

斬られ、射られ、次々と倒れていく帝国兵たち。

身動きもできず、地に倒れ伏したまま次々と惨殺される帝国兵たちの姿に、

ソノラが銃を構える事も忘れて戸惑いの声を上げる。

「な、何で……う？どうして味方を攻撃すんのよ!？」

「ヒヒヒヒ、そりゃあ味方じゃねエからさ。お嬢ちゃん？」

その問いかけに答えたのは、厭らしい笑みを浮かべ、余裕を振りまいているビジュ。

同じ部隊の仲間が次々と命を落としているというのに、その顔は悲しみに染まるどころか、愉悦を浮かべている。

それは、突然現れた新手の正体を知っている事を明確に告げるもので、

カイルが低いドスの効いた声を投げかける。

「……何だと?」

「僕の部隊は僕の味方さ。援軍だなんて、一言も言つて無いつてば。」

「な——っ!?!」

しかし、その問いに答えたのは、他人を小馬鹿にした態度を取り続けるイスラ。

その言葉の内容に、ギャレオが愕然とした表情を浮かべる。

自分と同じく、帝国に所属するイスラの味方ならば、

自分たちの味方ではないのかと、ギャレオの表情は語っていたが、逆にイスラの表情は、それが決定的な間違いであると告げていた。

そんなイスラたちのやり取りなど何ら構う事無く、新しく現れた勢力は一方的な殺戮を続ける。

「刻まれし痛苦と共に、汝の為すべき誓約の意味を悟るべし。」

霊界の下僕よ……愚者どもを引き裂いて、その忠誠を盟主へと示しなさい!!」

まるでシスターのような格好をした女性の召喚術と砲弾の嵐が帝国兵たちを襲い、

更に傷付き、倒れ、絶命していく帝国兵たち。

無慈悲で、圧倒的で、純粋な暴力。

まるで人が虫ケラか人形のように崩れゆく。

まるで馴染みの無い、まるで現実感の無いその光景に、アキラは呆然と立ち尽くす。

今までの戦いとは全く違う。

勝負でも無く、決闘でも無く、死闘ですら無い。

ただの虐殺。

平和な日本で育ったアキラには全く無縁だった殺人。

それが今、目の前で行われている。

何ら特別な事ではなく、ありふれた日常の様に、アキラの周りを死  
が取り囲んでいた。

召喚術が、砲弾が飛び交い、剣戟が轟く中、イスラが晒う。

「これだよ。これこそが本物の戦場ってヤツさ。」

強い者が弱い者から何もかもを奪い取る。単純で、明快な真実。

君たちのやってきた戦争ごっことは違う！奇麗事なんて意味の無  
い世界なんだよ!!」

まるで泣くように、そんな現実を嘆くように、イスラは叫ぶ。

そして、イスラが声高に喋っている間にも、アズリアの目の前では  
次々に部下たちが死んでいく。

「止めろ——っ。」

アズリアが弱々しく呟いた瞬間、着物を着た男にまた一人。

「止めさせて……。」

更に、紅い髪の女性にまた一人。

「止めさせてえええっ！イスラあああっ!!」

「……聞けないね。」

目障りなものは、この際まとめて排除するって、もう決めただも  
の。」

遂には叫び声が変わったアズリアの嘆願も、イスラは静かに否定す  
る。

一言目だけはとても哀しげに、次いで凶悪な笑みで告げるイスラ  
に、ギャレオが吼える。

「貴様アアツ!」

「あはははっ！あははははははははは!!」

碌に動けもしないギャレオの雄叫びが愉快なのか、  
それとも自分の行いを振り返って自嘲しているのか、イスラは哄笑  
する。

「そんな事、絶対にさせないっ!!」

その哄笑を断ち切る様に、アテイが声を上げる。

そしてアズリアに背を向け、一步、イスラの方に踏み出す。  
白いマントに覆われた、その小さくとも大きな背中に、  
アズリアが思わずその背中の持ち主の名前を呟く。

「アテイ……。」

その小さな声を背中で受け止めながら、アテイはイスラに向けて宣言する。

「許せない……。こんな酷すぎる事、許しちやいけないんだ。

だから——っ！絶対に止めてみせます!!」

「へえ……。それじゃ、証明して貰おうかな……。」

力づくで、君の奇麗事を通してごらんよ!」

そして、吼える様な、泣き叫ぶ様なイスラの声を合図に戦闘が始まった。



確かに俺たちは帝国軍との戦いで疲れていたが、

だからと言って敵が見逃してくれる訳も無く、必死で応戦する事になった。

正規の軍隊である帝国兵とはどこか違い、一癖も二癖も厄介な新手に苦戦する中、

俺の目に紅が映った。

アテイと同じ鮮明な紅。

思わず戦場で動きを止めてしまった俺を護る為、術で敵を牽制してくれたミュが、

辺りを警戒しながら話しかけてくる。

「どないしたんや、アキラ?」

「……あそこに居る女。」

それだけの言葉でミュは俺の視線を辿り、  
敵の遙か後方に居て指揮を執っているらしい紅い髪の女を見つけ

出す。

そして、その姿を一瞥するや不機嫌そうに言い捨てる。

「……イヤな瞳やな。アレは人やない、道具の瞳や。」

ミュの過去に何が在ったのかは知らないし、嫌な思い出なら聞き出す気もなかったが、

俺は何故かミュの言葉に賛成する気にはなれなかった。

だから俺は、自分でも気付かない内に小さく呟いていた。

すぐ傍に居るミュにでさえ、遠くで起きた召喚術の爆音で聞こえない位、小さな声で。

「……そうかな？——俺には、泣いてる子供の瞳に見える。」

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△

皆が皆、疲れた体に鞭打って、何処からとも無く現れた「イスラの味方」を打ち倒していく。

俺もミュと一緒に戦場を駆け巡る。

少しばかりのダメージでは、全く戦意を無くさない「イスラの味方」たち。

だから俺たちは多少の危険に目を瞑って、

人体の急所である首筋や側頭部に打撃を放ち、一撃で気絶させていく事にした。

殺してしまえば楽なのかもしれないけど、相手がどんな卑劣な奴でも、

自分から同じレベルに落ちるつもりはなかったから。

そうやってしばらく戦い続け、相手の数が少なくなってきた頃、

カイルが生かさず殺さずの絶妙な力加減で、敵の一人を殴り倒して詰め寄った。

「喋れる程度には手加減しといた。ぶっ殺したい気分ではあるんだがな。

「さあ、答えやがれ!!お前ら、いったい何も——」

「新たなる世界にツ!!勝利と栄光をオツ!!」

「危ない!カイル!!」

「いけない!カイルさん!!」

「な——っ!?!」

凄まじい剣幕で詰め寄るカイルに、そいつはニヤリと厭らしい笑みを浮かべ、

意味の解らない絶叫を上げる。

嫌な予感がしてカイルの名前を呼んだ俺の声と、ヤードの声が重なった次の瞬間。

激しい光と音を発して、そいつは粉々に吹き飛んだ。

どうやら、どこかに隠し持っていた爆弾で自爆したらしい。

「——自爆しやがった。」

「最初から、相打ちを想定していたとしか思えない……。」

「こいつらにとっては当たり前の事よ。」

「スカーレル……?」

ヤツファとキュウマが愕然として呟く言葉に、スカーレルが平坦な声で応える。

いつもと全く違い、淡々とした雰囲気を出すスカーレルに、ミスミが目を見張っている。

その後もスカーレルやヤードによって会話は続き、敵の正体が“紅き手袋”の暗殺者だとか、

大陸全土を跨る犯罪組織だという言葉が耳に入ってくるが、俺の頭の中は他の事で一杯だった。

どうして、またヒトが死んでいるんだ……?!

俺たちは、目の前で起こる人殺しを止める為に戦った筈なのに、倒した敵が、また目の前で死んでいく。

……何でだよっ!?!

これじゃ、人が死ぬのを止められないじゃ無いか!?

「ぎゃあああっ!!」

また上がった叫び声に、俺の意識は現実に戻された。

小さな苛立ちと、大きな無力感を覚えながら、悲鳴の元に目線を走らせる。

そこには地に倒れ伏す帝国兵と、その傍に立つ血塗れのナイフを持つ女が一人。

紅い髪を持つ彼女は、物憂げに、悲しげに、小さく呟く。

「雑魚の始末は、これでお仕舞い。」

「後は……。」

彼女の言葉に続き、シスターのような姿をした女性が暗殺者の一人に目配せをする。

それはつまり――。

「ツ!!やめっ――。」

「あ、が……。」

伸ばした腕も、踏み出した足も、途中まで出た制止の声も虚しく、暗殺者の投擲したナイフが帝国兵に突き刺さる。

伸ばした腕を降ろすのも忘れて、崩れ落ちる彼を見遣る。

これで、もう、帝国軍はアズリアとギャレオだけになってしまった……。

彼らとは何度も刃を交えてきたけれど、別に憎んでいた訳ではない。

彼らも、俺たちが憎かった訳じゃないだろう。

ただ、任務で敵対していたに過ぎない。

別のどこかで出会っていたら、友達になれたかもしれない。

だけど、彼らはもう、目を覚ます事は……無い。

倒れた彼に、ギャレオが駆け寄る。

「しっかりするんだ！おい？おいっ!？」

う、うああああっ!？」

ギャレオも、彼がもう起きる事は無いと悟ったのだろう。

声を上げて涙を溢れさせる。

そんなギャレオに、ニヤニヤ笑いながらビジュが近付く。

「ヒヒッ、寄せ集めの部隊なんて所詮こんなもんよオ。」



「ビジュウウツ!! 貴様が、それを口にするのかアアアツ!？」

泣き、怒り、叫びながらビジュに、次いでイスラに襲い掛かるギヤレオ。

その激しきを見ながら、俺の心は静かだった。

……何か、もう、どうでもいい。

「おっと……。まあ、そんなに熱くならないですよ？」

どうせ玉碎覚悟の戦いだっただからさ。殺される相手が違っただけの事じゃない。」

「——っ。」

「それより、静粛に。今から式典が始まるんだからね。」

「式典だと……?？」

「そうさ、姉さん。病気で苦しんでいた僕に生きる為の方法を与えてくれた、

偉大な力の持ち主。この血染めの宴の主賓が登場するのさ。」

そんな俺を無視するように、状況は流れていく。

いつものイスラの挑発と、意味深なセリフ。

そうして、凝りに凝った舞台を整えて、アイツは現れた。

## 残されたモノ

酷い無気力と無力感が俺を襲う中、ソイツは夕陽を背に足音を響かせて現れた。

「漸く、ここまで漕ぎ着けたか……。」

「ゴミ共の始末、存外手間取ったものだ。待ちかねたぞ?」

その顔は逆光で影になって見えないが、

口元に浮かんでいる嫌な笑みだけは何故かはっきり見える。

その表情と言葉が、空っぽだった俺の心に波紋を起こす。

……彼らを、〃ゴミ〃と呼ぶのか?

沸々と湧き上がる怒りで、ぼんやりとしていた目の焦点が、ゆっくりとソイツに向かって合わさる。

「申し訳ございません。」

「まあ、良かろう。長い船旅で、勘が鈍った事にしてやる。」

「は……。」

「さあ、あなた。こちらへ。」

「うむ。」

紅い髪の彼女の謝罪に鷹揚な態度で接したソイツは、

女召喚士に招かれて徐々に俺たちに近付いてくる。

そして、近付くにつれソイツの顔がはつきりと見えるようになる。

肩にまでかかる長い黒髪に、残忍な色をした瞳。

その瞳を隠すというより、より強調するような黒くて丸いサンングラス。

見るからに上等そうな服に包まれた体は、まるで戦士のように逞しい。

ソイツはざわめく俺たちなんてまるで気にした風も無く、ゆっくりと視線を巡らせて問いかけた。

「同志イスラはどこだ?」

「はい、こちらです。」

「今日までのお前の働き、見事だった。」

我らのこの一步は、始祖らが望み続けた新たな世界への架け橋となるだろう。」

「ありがたきお言葉、感謝に絶えません。」

そして……遠路よりのお越し、心より歓迎いたします。」

オールドレイク様。」

……違和感。

オールドレイクと呼ばれたソイツに対するイスラの卑屈なまでの恭しさに違和感を覚え、

少し頭が冷える。

今まで俺たちに接する時も、必要以上に挑発的な態度を取ってきたイスラだったが、

味方だと公言した相手にも、まるで演技のような態度を取っている気がする。

だからと言って、俺がその理由を考え込んでいる間、この場の状況が待っていてくれる筈もなく、

女召喚士が一步前に出てきて、偉そうに名乗りを上げる。

「控えなさい、下等なるケダモノ共よ！」

この御方こそお前たち召喚獣の主、

この島を継ぐ為にお越しになられた無色の派閥の大幹部、

セルボルト家のオールドレイク様です！」

……下等？ケダモノ？

だったら、お前たちは何だっけ言うんだ？

抵抗も出来ない人たちを皆殺しにしておいてツ！！

下がっていた熱が再び湧き上がる。

ぎりつと奥歯を噛み締め、俺はオールドレイクを睨み付ける。

しかし、当の本人はまるで気にした風も無く、むしろ悠然と名乗りを上げる。

「我はオールドレイク。」

無色の派閥の大幹部にして、セルボルト家の当主なり……。

始祖の残した遺産。門と剣を受け取りに、この地へとまかりこした。」

「門」と「剣」？

どういう事だ？アテイの持つてる「剣」ならともかく、どうして壊れてしまつて制御不能な「門」まで？

あの「門」には、まだ何か在るのか？

「それがどうしたッ!？」

っ!?

……ギヤレオ？

「ゴミだ？雑魚だ？目障りだ？」

貴様らにそんな扱いを受ける謂れがあるものか——っ。

帝国軍人を……ナメるなあアッ!!」

あのバカッ！一直線にオールドレイクに突っ込んで行つてどうする

!!

ただでさえ、今はボロボロの体なのに！

「行くぞ、ミュ!!」

「了解や!」

ギヤレオを止めようとするアズリアの声を聞きながら、俺はミュと一緒に走り出すが、

俺たちとオールドレイクの間には結構な距離がある。

くそっ!間に合わない!?

俺の頭を諦めが掠めた瞬間、ギヤレオとオールドレイクの間にも人影が割り込んだ。

ただし、仲間の誰かではなく、敵の一人だったが。

そして、その和服姿の男は何の躊躇いもなく、ギヤレオに刀を振り下ろした。

「がはっ!？」

鈍い肉の裂ける音と、血の吹き出す音。

左肩から袈裟懸けに斬られたギヤレオを見て、その噴出した鮮血を見て、

血塗られた姿を見て、俺の足は止まってしまう。

足が震えて、止まってしまおう。

……死ぬ？死ぬのか？

また、俺の目の前で？

次は、ギャレオが？

「アキラ!?あの人間、助けへんのか?」

「っ!!助けるに決まってる!」

どこか焦れた様なミュの声に意識を引き戻され、俺の体を覆っていた震えが消える。

そうだ!まだ間に合う!まだ生きてる!

助けるんだ!!

そうして、俺たちは再び走り出そうとするが、その目前に過酷な現実が突きつけられる。



「武器も、技量も、その程度では結果など知れている。

その技量を恥じるがいい!!」

ウイゼルが冷徹な言葉と共にギャレオの体を横に薙ぐ。

その一撃で、たった一撃で、巨漢のギャレオが弾き飛ばさる。

新たに刻まれた横一文字の赤は、誰が見ても致命傷と解るもので、

ギャレオの残り少ない血液を盛大に吹き出した。

その光景は、その残酷な光景は、

再びアキラとミュの足を止めるには十分なもので、十分過ぎるもので、

アキラの表情は、後悔と、絶望と、怒りが混ざりあつて、今にも泣き出しそうだった。

動きを止めてしまったアキラとは逆に、

今まで一步も動けないで居たアズリアがギャレオに駆け寄り、その顔を覗き込むように膝を付く。

「ギャレオっ!？」

「あ、アズリアさ——っ、すみま、せ……。」

アズリアの呼ぶ声に、ギャレオは既に見えていないであろう霞がかった目を向ける。

そして絶え絶えな息の中、アズリアの名と謝罪を最後に、

ごぼりと口からも大量の血を吐き、一切の動きを、止めた。

「ぎゃ、ギャレオオオオッ!!」

力なく項垂れた首、そして光を消した瞳。

永遠に部下が目覚ます事は無いと悟ったアズリアには、地を握り締め、その名を力の限り叫ぶ事しか出来なかった。

しかし、そんな光景をまるで見ることも無く、まるで意識もせず、

オールドレイクは愉悦の笑みを浮かべる。

「流石はウイゼル。その剣の冴え、実に頼もしいな。」

「お前を喜ばせる為に振るった訳ではない。」

「ふふふ、口の悪さも相変わらずよ……。」

さて、まずは剣の方から受け取る事としようか。」

「——っ。」

無然と応えるウイゼルの言葉でさえ面白いと、オールドレイクは笑いを漏らす。

そして、やっと目的の物に取り掛かるべく、ゆつくりと視線を巡らせる。

その獲物を狙うような鋭い目に、アティは思わず反応してしまう。

ニヤリと厭らしい笑みを浮かべ、オールドレイクはアティに狙いを定める。

「お前が、そうだな?」

その声に、仲間たちが一斉に反応する。

連戦で傷付き、疲れきった体を引きずる様に、アティの下に行こうとする。

しかし、その行く手はオールドレイクの部下たちによって素早く塞がれてしまう。

護人たちの前にはウイゼルが、海賊たちの前にはツエリーヌが、

そして、アキラとミュの前には……。



アテイに狙いが付けられた瞬間、何かを考える前に、俺の脚は動いていた。

自分の足が一步前に出てから、遅れて俺は状況を理解した。  
ギャレオに続いてアテイまで……？

冗談じゃない。冗談じゃない!!

「ミュ、行くぞ！今度こそ助けるんだ!!」

「了解や！」

しかし、アテイの方に向かって駆け出そうとした俺たちの前に、一本のナイフが突き刺さる。

続いて音も無く現れ、そのナイフを引き抜き、構えを取ったのは例の紅い髪の女性。

「……行かせないわ。」

「キミは……。」

一言だけで、後は黙ったまま対峙する彼女。  
じりじりとした場の中で、ミュがそつと行動しようとするのを手を上げて止める。

そして今まで抜き身で持っていた刀を鞘に戻すと、  
できるだけ害意が無い事を示すように手を広げ、少し困ったような  
笑顔を見せる。

「頼むから、そこを通してくれないかな？」

「行かせない、って言ったわ。」

敵である筈の俺の不可解な行動に、彼女はぴくりと表情を動かすが、

すぐに表情を消して冷たく返す。

その態度にムツとしたらしいミュが俺たちの間に進み出るが、

咄嗟にその頭を抱え込むように抱きしめ、口を塞ぐ。

そのまま俺は彼女との会話を続ける。

「俺には解らないんだ。」

どうしてキミが泣きながら、あんな奴に従ってるのか。」

「泣いてなんか、いないわ。泣き方なんて、知らないもの。」

淡々と答えた彼女の声の中に、瞳の中に、確かに俺は、涙を見た。

「そうか……。それで、キミは涙も流さずに泣いているのか。」

「ッ!!」

今度はハッキリとその顔を強張らせた彼女に、

やっぱり俺の感は間違っていないなかったんだと確信する。

だから俺は、もう一度彼女に頼む。

「お願いだ。そこを、通してくれ。」

「……ダメ。できないわ。」

命令は、絶対だもの。」

「……………」

揺れる彼女の瞳は、はっきりと彼女の中の葛藤を俺に伝えてきて、俺も下手に動けない。

だけど、こうして手を拱いている間にも、途切れ途切れに聞こえてくる剣戟の音と召喚術の音。

そして、イスラの声。

「——台無しになるじゃない!」

「あ、ぐあああッ!!」

続いてアズリアの叫び声が聞こえてきた。

その瞬間、目の前の彼女の事も、彼女の持つナイフの事も忘れて、目をそつちに向けてしまった。

そこには腕から血を流すアズリアと、その傍に立ち剣を持ったイスラがいた。

くっそ!グズグズしてる場合じゃない!!





剣を取り落とし、傷口を手で押さえるアズリア。

その後ろから、アテイがイスラに向かって呼びかける。

「止めて、イスラ！」

アズリアは貴方のお姉さんでしょう!?

貴方の代わりに軍人になって、レヴィノスの家を守ろうと——。」

「そんな事、僕は一言だって頼んじやいないツ!!」

しかし、そんな呼びかけをイスラが鋭く遮る。

そして愕然とするアズリアに向かい、イスラはその胸の内を吐露していく。

「貴女は僕を庇って軍人になったつもりだろうけどね……、

そのお陰で僕はレヴィノス家にとって、本当に不必要な存在にされちゃったんだよ。」

「な——っ。」

「姉さんのした事は、ちつとも僕の為になんてなってない。

むしろ、逆効果さ。」

「そんな——っ?」

私は、そんな……そんなつもりじゃ!?

語られた内容に、アズリアは驚き、涙を浮かべる。

そんなアズリアに、イスラは静かと言ってもいい様な声で語りかける。

「弁解しなくてもいいよ。

だから……黙って死んでよ!?!」

一度、目を瞑り、深呼吸するように間を開け、

イスラは叫ぶように声を上げながら、剣を構えて振り下ろした。

その瞬間、思わず目を閉じたアズリアは、ザツ、と深く肉を切り裂く音と共に、

確かに己の顔に暖かな血が飛び散るのを感じた。

しかし、何の痛みも衝撃も伝わってこない事に、恐る恐る目を開ける。

「……怪我、ないか？……アズリア。」

「あ、アキラっ!?」

目を開いたアズリアが見たものは、自分を庇う男の背中と、振り返るようになして自分を見つめるアキラの顔だった。

「大丈夫……みたいだ、な。……よかつ——。」

「アキラッツ!!」

無事なアズリアの姿を確認すると、アキラは弱々しい笑みを浮かべ、意識を失って崩れ落ちる。

その体をアズリアは寸でのところで抱き止めるが、硬直したように体を強張らせる。

何故なら、アキラの体には左肩から右脇腹にかけて、深く生々しい傷が刻まれていたから。

「いやあああああッ!!」

アキラのその姿を見た途端、アティは悲鳴を上げ、シャルトスを手にしていった。

そして魔力による障壁が味方と敵を分けるように展開される。

「なあ——っ!?」

「ぬうっ!」

「オオオオオオ……オオオオオオオオオオオオオオオオッ!!!」

イスラとオルドレイクをも弾いたソレは、アティの声に呼応して更に強く、広くなっていく。

「何という結界……。」

そうか、怒りによって漸く本来の力に目覚めたか。

素晴らしい……実に素晴らしいぞ!?

それでこそ、出向いた価値がある!!」

そんな状況に追い遣られてなお、オルドレイクは実に嬉しげに、そして楽しげにその顔を歪める。

「ウバワセナイ……。」

モウ、コレイジョウナニモ……。」

ウオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

敵の様子を理解してか、それとも無意識下での行動なのか、アティ

は更にその魔力を高めていく。

その様子に危機を感じたのか、ウイゼルがオールドレイクの下へ近寄る。

「引け、オールドレイク。」

「これ以上の挑発は剣そのものを破壊しかねんぞ。」

「さあ、あなた。」

「うむ……。楽しみは後日まで取っておくでしょう。」

「……撤退！」

「ふはははは……、あつはははははは!!」

ツエリーヌを横に、そしてウイゼルを後ろに従え、

ヘイゼルの指揮する暗殺者たちを引き連れて、オールドレイクは高笑いを残し、去っていく。

どんなに悔しく思っても、どんなに憎らしく思っても、

疲弊しきり、更には暴走しているアティを止めなくてはならない護人や海賊たちには、

夕陽の中を悠然と去って行く彼らを、ただ見送るしかできなかった。

そして、アキラが倒れた今、誰も聞く事の無い「声」が、歓喜に満ちた眩きを洩らした。

——刻は来た

## 魔剣

陽が落ち、辺りが薄暗がりに包まれる中、

アテイはオルドレイクたちの姿が見えなくなるまで強固な結界を維持し続けた。

護人たちが名前を呼んでも、その身を揺すっても、アテイは反応せず、

ただひたすらに「敵」の背を睨み、唸る様な声と共に魔力を放出し続けた。

そして、その姿が見えなくなると同時に、結界とシャルトスは姿を消し、

アテイは糸が切れた様に崩れ落ちた。

その様子に慌てる護人たちと同じく、海賊たちも恐慌に陥っていた。

今まで傷らしい傷を負ったことの無いアキラが、

イスラの一太刀を受け、その鮮やかな赤で辺りを染めているのだから。

護人たちにアテイを任せて海賊たちは、アキラの下に駆け寄る。

彼らが来た頃には既に、背中から崩れ落ちたアキラを抱き込むように支えたアズリアが、

そのまま膝を枕代わりにアキラを横にし、ミュがその小さな手を赤く染めながら止血を行い、

クノンが手早く止血剤を塗り、厚手の布を巻きつけている所だった。

しかし、その様子を見ただけではアキラの容態が解らず、海賊たちは口々にアキラの名前を呼ぶ。

「アキラ（さん）!!」

「しかりしてよ、アキラ!」

カイルの、スカーレルの、ヤードの呼び声と、ソノラの叫び。  
しかし、当然の如くアキラの返事は無い。

それどころか、手当てをしている三人からも何の反応も無い事に、カイルが思わず声を荒げる。

「くっつ、どうなんだよ、クノン！アキラは、まだ生きてんのか!?」  
「ちよつとアニキ！それじゃまるで、アキラが助からないみたいじゃない!!」

荒々しい声に応えたのは問われたクノンではなく、妹であるソノラ。

その余りの剣幕と己の言葉に、はつとなつたカイルが小さく謝罪を口にする。

「わ、悪い……。そんなつもりじゃ……」

「黙って下さい!!」

しかし、その言葉も途中で遮られてしまう。

常ならば聞く事の無いクノンの強い叱責に、兄妹はびくりと体を強張らせる。

「応急手当は既に始めています！」

ですが、一刻も早くリペアセンターに運ばなければ——っ!!」  
焦りを含んだクノンの言葉に、皆が一瞬最悪の結末を思い浮かべる。

しかし、その考えを振り払うかのようにカイルが動き出す。

アキラの傍に屈み込むと、傷に触れないように、その体を横抱きに抱え上げる。

「走るぞ!!」

言うや否や駆け出すカイルに、遅れまじとミュが続き、皆も走り出す。

一丸となつてリペアセンターへ向かう中、カイルの声が漏れる。

「死ぬなよ、アキラ——っ!」

果たしてカイルの励ましは、アキラに届いただろうか……。



人も動物も寝静まり、明るい月の光だけが木漏れ日の様に注ぐ森の中。

かさり、と木の葉を踏む音が静寂を破る。

音の主はその体を包帯に包まれ、一目で重傷だと判る。

そんな体で彼は、アキラは、まるで夢を見ている様にふらふらと歩み続ける。

(力……)

俺にもっと強い力があれば……)

いくらりペアセンターで治療を受けたとはいえ、その傷が完治している筈も無く、

歩くだけで激痛が走るのだろう。

アキラは一歩進む毎に、その端正な顔を歪ませる。

そして額には、傷による発熱からか、玉のような汗が浮かんでいる。しかし、それでもアキラは歩みを止めない。

まるで何かに呼ばれるように、まるで何かを探しているように、歩き続ける。

どこかに向かっているのか、アキラ本人も自覚しないまま。



(……ここは、どこだ?……俺は、どこに行こうとしてるんだ?)

熱で意識が朦朧としながらも、

まるで操られるているかのように勝手に動く足がアキラを連れて行つてのは、“喚起の門”。

(どうして……、こんな所に……?)

自分をこの島に喚んだのがこの門である事をアキラは知っていた



封印の為の剣でも無く、開封の為の剣でもない。  
ただ、破壊する為だけの剣。

刀身からは、抑えきれない力が黒い光となって溢れ出る。

その唯一の存在にアキラが意識を奪われていると、唐突に、そして  
久しぶりに、

あの“声”が聞こえてきた。

——さあ、手に取るがいい

——その剣を掴むだけで、お前の望む力が手に入る

それは甘く優しい悪魔の囁き。

有り得ないと、そんな都合のいい話がある訳無いと解っているの  
に、

何かがアキラの判断を鈍らせる。

(これが有れば……)

この剣が有れば、みんなを守れる……?)

——そうだ。さあ！掴み取れ!!

アキラの手が、剣の柄へと伸ばされた。



いつもの様に、白々と静かに夜が明け始めた頃、島は突如として黒  
い光に包み込まれた。

再び夜が訪れたのではなく、日の光が遮られたのでもない。

“黒い”光という矛盾した存在。

それは熱くもなく、冷たくもなく、ただ島の全てを黒く照らし出し  
た。

そして、無色の派閥も、海賊も、島の住民も関係なく、彼らは“声”  
を聞いた。

“声”は、ただ一言だけを告げた。





辺りが黒く照らされたのは一瞬で、島には直ぐにいつもの朝日が戻ってきた。

それはここ、ラトリクスでも同じ。

しかし、一瞬の闇の後、明るい照明が元通りに部屋を照らす中で、アルディラは一人、顔を蒼白にしながら自分を抱くように腕を回し、

冷たい床にへたり込んでいた。

(……何? 何なの今の「光」は?)

この背筋を走る悪寒は?)

まるで熱でもあるかの様に体を震わせながら、アルディラは先程の現象について考える。

今、自分の身を襲っているのが恐怖という感情であり、

それから逃れる為にはそうするしか無いとでもいう様に、必死に頭を働かせる。

そして、過去の経験の一つがアルディラの脳裏に蘇る。

(これは……この圧迫感は……?)

周りのあらゆるモノが私を見張ってるような、この視線は……?)

……。

……マスター?)

アルディラが何かを掴みかけたその瞬間、軽い空気の抜けるような音と共にドアが開き、

クノンが「駆け込んで」来た。

「大変です、アルディラ様! アキラ様が——!」

そして告げられたのは、病室から忽然と姿を消したアキラの事だった。



島中が一瞬の異変にざわめき立つ中、一人、平然とした顔で「門」の前に立つ青年が居た。

「彼」は丈夫そうなブーツとジーンズを身に付け、上半身を包帯に包み、

右手には、刀身を闇に染めた一振りの剣を提げていた。その姿は確かにアキラの物だったが、

髪は夜の影の様な漆黒に、瞳は奈落の底のような闇色に染まっていた。

更に、右手から右頬にかけて、腕を伝うかの様に文様が刻まれていた。

それはまるで、踊るように燃え盛る黒い炎。

黒炎の踊るその頬で、「彼」は薄く笑いを浮かべる。

そして、何を思ったのか左手を顔の前まで持ち上げると、

ゆっくりと握ったり開いたりを繰り返す。

何かを確かめる様に、ゆっくりと繰り返す。

次いで体を見下ろし、己の手足を眺める。

そして、満足そうに、嬉しそうに、禍々しい笑みを浮かべた。

しかし「彼」は、ふと何かに気付いた様にその笑みを消し、森へと視線を向ける。

それを待っていたかの様に、森から六つの人影が飛び出す。

それは、いち早く主を探していた護衛獣であり、

村の事をパートナーに任せてきた護人たちであり、封印の魔剣の所持者だった。

彼らは目の前の光景に、一様に立ち尽くす。

何故なら彼らの目の前には、良く見知った顔の人物が、

全く見知らぬ出で立ちで立っていたのだから。

だから、彼の護衛獣は、ミュは、戸惑いつつその人の名を口にした。  
「……アキラ——？」

返って来たのは微笑み。

いつもの見守る様な優しい笑みでは無く、見下す様な、嘲る様な、酷薄な笑み。

それだけで、否、だからこそ、彼らは確信した。

“彼”はアキラでは無いと。

一斉に警戒態勢を取る仲間たちから一步、ヤツファとキュウマが進み出る。

そして、威嚇するように睨み付けながら尋ねた。

「お前……何モンだ？」

「どうしてアキラ殿と同じ姿をしているのかも、聞かせて貰いましょうか。」

“彼”は、ヤツファたちの態度をまるで意に介する事も無く、むしろ悠然と、その嘲笑を浮かべたまま答える。

『私は、お前たちの言う“アキラ”だよ。』

言葉を一旦区切り、“彼”はゆっくりと全員の顔を見渡すと、より一層その笑みを禍々しい物へと変えて続けた。

『——少なくとも、この“器”はな。』

それは、その言葉の意味は、つまり……。

「貴方はアキラの体に乗っ取った。」

……そう考えていいのかしら？」

皆が驚きの表情を浮かべる中、アルデイラが至極冷静に、淡々と尋ねた。

“彼”は、アキラの顔で、アキラの声で、まるで別人のように笑うのみ。

それは明らかに無言の肯定で、彼らの怒りに火を付けるには十分だった。

「今！すぐ！アキラの体から離れえ!!」

苛烈な光を瞳に宿し、今にも掴みかかる勢いでミュが吼える。

しかし、“彼”の悠然とした態度は崩れない。



その事実が俄かには信じられず、アテイたちは呆然と立ち尽くす。しかし、巻き起こる粉塵も、轟音も、間違いなく現実の物で、彼女たちは否応も無く認めるしかなかった。

“彼”の力の強大さを。

……やがて門が完全に崩れ落ち、粉塵も轟音も哄笑も止んだ頃、未だに楽しげな表情で残骸を眺める“彼”に、アテイが声を震えわせながらも尋ねた。

「貴方は……貴方は一体、何者なんです!？」

その声に、まるで自分以外の存在を思い出したかの様に“彼”は振り向いた。

アテイを見るその目は、まるで珍しい物でも見た様に楽しげに見開かれていた。

『ふ、ふふ。私が何者か、だと？』

判らないか？本当に解らないのか？“シャルトス”よ。』

からかう様に問い返す“彼”は、アテイという人間など存在せず、彼女の持つ魔剣だけが存在するとも言う様に、アテイをシャルトスと呼んだ。

「……………」

アテイは、沈黙で応えた。

それは、自分の存在を否定された事に対する反発でもあり、また、返す答えを持ち合わせていなかったからでもあった。

否、本当はアテイには解っていた。

“彼”が、どんな存在なのか。

何故なら彼女の持つ魔剣が、怯えていたのだから。

ハイネルではない。遺跡の欠片。“封印の魔剣”。

“碧の賢帝”シャルトスが、コレは手に負えないと、逃げなければと、

アテイに恐怖を伝えていたから。

それ故に、困惑と戸惑いを緋い交ぜにした複雑な表情をアテイは浮かべ、沈黙するしかなかった。

それすらも楽しいという様に、“彼”は禍々しく口の端を吊り上げ

た。

そして、

『ならば教えてやろう！』

私は狂気！闇の 狂 皇 ヴィサイアス!!』

右手に持った黒い剣を高らかに掲げ、辺りに闇色の魔力を暴風のように振り撒きながら、

“彼”は、“破壊の魔剣”は、凶笑と共に名乗りを上げた。

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△

吹き荒れる闇に耐えながら、彼らは皆、理解した。

アレは、高らかに、楽しげに、狂った笑い声を上げるアレは、

“碧の賢帝シャルトス” “紅の暴君キルスレス”と同じ、三本目の魔剣だと。

そしてそれ故に、先程の彼の、ヴィサイアスの言葉の意味を悟り、顔を蒼白にする。

「アレがシャルトスやキルスレスと同じ魔剣なら、アキラ殿の魂はもう……。」

「っ!!」

一同を代表する様に、キュウマが心を過ぎった不安を口にする。

アキラの意思は、心は、魂は、遺跡のシステムを上書きされて、消えてしまったのではないかと。

その言葉にミュが身を震わせ、アティが息を呑む。

アキラを失ってしまう事への、恐れのために。

「まだ判らないわ。」

その恐怖を振り払う様に、絶望を切り裂く様に、アルテイラの毅然とした声が響く。

「アキラの魂が消されてしまったかどうか、まだ判らないわ。

彼が一方的に言っているだけで、確認はできていない。

だとしたら、まだ可能性はある筈よ。」

理路整然としたアルデイラの説明に、皆の顔に覇気が戻ってくる。可能性が少しでも有るのなら、それを信じてできる事をやる。そんな決意が、彼らの瞳に光を灯す。

「……どうするんや？」

どうしたらアキラを元にもどせるんや？」

静かに、激情を押し隠した静かさで、ミュがアルデイラに問い掛ける。

アルデイラは小さく頷くと、問い掛ける形で説明を始めた。

「私たちは、今アキラに起きている現象と似た物を、よく知っているでしょう？」

「……シャルトスを持つてる時のアティか！」

一拍の間を置いて、全員の視線がアティに集中する。

そしてヤツファアが口にした言葉を、アルデイラが深く頷く事で肯定する。

「ええ、そうよ。」

だとすれば、あの剣を破壊するかもぎ取る事が出来れば、アキラが元に戻る可能性は有るわ。」

「せやったら話は簡単や！」

行つくでえ!!」

アルデイラの言葉が終わるや否や、ミュが声を上げて走り出す。それを追い駆ける形で、アティたちも走り出す。

「あの魔剣と正面から渡り合えるのは、同じ魔剣であるシャルトスだけです！」

皆は援護と死角からの攻撃に徹して下さい！」

「解ったわー!」「はい!」「おう!」「承知!」と、

それぞれの返事を聞きながら、アティはシャルトスを喚び出す。

四人の護人が、ぱつと散開する気配を感じながら、アティは前を走るミュを見つめる。

返答こそ無かったものの、ちらりとこちらを見た事から、作戦は理解してくれたのだろう。

ならば、自分は彼女の行動に注意して、必ず作ってくれる隙を見逃さない様にしなければ。

そして、ミュはアテイの作戦を正しく理解し、要望通りの動きを見せた。

アテイの前を走りながら符を取り出し、威力は低い短い呪いで発動できる低位の術を紡ぐ。

「炎よ・符に宿りて陣を成せ！ 『炎陣符』!!」

呪と共に放たれたミュの符が、ヴィサイアスを取り囲むように広がり、一斉に炎へと変わる。

しかし、彼は押し寄せる炎の壁を目の前にしても慌てる事無く、ただ短く裂帛の声を上げた。

『はっ!!』

その声と共に放たれた魔力が、炎の壁を瞬時に消し去ってしまう。

彼が、ニヤリと不敵な笑みを浮かべようとした次の瞬間、その目が驚き見開かれる。

消え行く炎の影から、シャルトスを構えたアテイが飛び込んで来たのだ。

その狙いは「アキラ」の右手。

多少の傷は負わせてしまうが、それは後で召喚術を使えば治す事ができる。

だから、アテイは躊躇わずにその剣を振り下ろした。

決まった!と、誰もが思ったその時、まるで音叉の奏でる様な甲高い音と共に、

全員の予想を裏切る形で碧の剣は黒い剣としっかり噛み合わされていた。

『……成る程。戦い慣れしているだけはあるな。

だが!この力の差は埋められまい!』

「くっ!!」

そして噛み合った剣は、ヴィサイアスの一振りですぐ簡単に振り解かれてしまう。

何とか転倒を免れたアテイは、衝撃で痺れてしまった腕で、





歩き出す。

その歩みを、弱々しい声が留めた。

「——本当にそう思ってるんですか？」

『何だど？』

彼が振り返り声の主を確かめると、そこには既にシャルトスも無く、

全身傷だらけで精も根も果てているのに、それでも尚、立ち上がるうとするアテイが居た。

よろよると、それこそ辛うじてといった感じのアテイが、倒れ伏す仲間たちを庇う様にヴィサイアスの前に立ち、向かい合う。

そして、どれだけ叩きのめされても、そこだけは決して衰えない強い光を宿した瞳を向ける。

「本当に、私たちを殺せなかったのを、“慣れ”の問題だと思ってるんですか？」

『ほう？では、貴様は何が原因だと言いたいのだ、シャルトスよ？』

再び、今度は背を伸ばし胸を張り、より強い声でアテイがヴィサイアスに問い掛ける。

すると、今まで浮かべていた表情を忘れたかの様に、表情を浮かべる事を忘れたかの様に、

ヴィサイアスは全くの無表情で、それこそ見た者が恐怖を抱く様な無の表情で問い返した。

しかしアテイは、怯えるどころか穏やかな笑みを浮かべて応えた。「アキラさんです。アキラさんが、まだ、貴方の中で戦っているんです。」

アテイの声に、表情に、ヴィサイアスの無が、ぴくりと揺れる。

『……馬鹿な事を。“器”は私が破壊した。完全に、だ。』  
どこか苛立ちの様なザラツキを含んだ声が否定する。

アテイは静かに目を瞑り、穏やかな笑みで応える。

「私は、信じています。」

『つならば、幻想を信じたまま壊れるがいい!!』

今度はハッキリと怒りを表し、ヴィサイアスは黒い剣を、己自身を振り上げ、

アテイを両断すべく振り下ろした。

「アテeeeeeeee!!」

目を瞑ったまま避け様ともしないアテイに、仲間たちの悲痛な叫び声上がる。

しかし、彼らは次の瞬間、目を見開く事になった。

そしてその現象は、加害者である筈のヴィサイアス自身をも驚かせるものだった。

刃がまさにアテイに届こうという所で、

誰かに掴まれた様に不自然に止まった、ヴィサイアスの腕。

ぶるぶると震える剣先が、彼の意思ではない事を示している。

そして、彼の頭に響いたのは「声」。

——……アテイは、俺の仲間は、殺させないよ。

『ば、馬鹿な?! 貴様、まだ?!』

——生憎と、信頼を裏切る様な育てられ方はしてないんでね。

『そんな問題では無い!』

貴様の心は確かに壊した筈だ!!』

——人間の心は、壊れても治す事ができる。

なら俺は、何度でも立ち上がってやるさ!

『くっ! おのれえええええ!!』

——おおおおおおおお!

アテイに剣を振り翳したまま、突然叫び始めたヴィサイアス。

何事かと彼女たちが見守る中、

彼の体から黒と白の光が互いに交わる事無くせめぎ合い、辺りに吹き荒れる。

一頻り光が吹き荒れた後、また唐突に静寂が訪れた。

恐る恐る、彼らは目を開く。

するとその場には、地面に突き立つ黒い剣と、銀の髪の毛、アキラが

居た。

唾然とするアテイたちに、銀髪のアキラはいつもの様に優しく微笑んだ後、

崩れ落ちる様に倒れた。

「アキラさん!!」

散々傷付いた体が思う様に動かないのをもどかしく感じながら、

アテイはアキラのもとに駆け寄る。

そして、アテイがその体をそつと抱き起こせば、アキラは綺麗な笑顔でアテイに告げた。

「……ただいま、アテイ。」

## 告白

深く、暗い闇から浮上する意識を感じながらうつすらと目を開ければ、

そこには随分と見慣れた天井。

ああ、リペアセンターの俺の部屋だと思い出したところで、隣から小さく声がかかった。

「ようやく目を覚ましたか。」

「……アズリア？」

声のした方に顔だけ向けてみると、いつも通り、きちつと軍服を着たアズリアが椅子に腰掛けていた。

アズリアらしい、なんて思っただけで小さく笑ったところで、

唐突に、前触れも無く、昨日の事を思い出した。

俺は、イスラに、斬られた。

そして“アイツ”を、あの『黒い魔剣』を、『闇の狂皇』ヴィサイアス”を、解き放ってしまった。

急に不安になって自分の右手を、

“アイツ”を握っていた右手をシートから抜き出して目の前に翳す。

その瞬間、アズリアが気遣わしげな表情で俺を見た気がしたけど、それよりも自分の右手を、右腕を見て、俺は息を飲んだ。

無い筈なのに……。

もう、この手には“アイツ”は居ないのにつ——！！  
どうしてコレが!?

右手から腕を伝い、肩へと舞い踊る、黒い炎の文様。

啞然とそれを見詰める俺に、アズリアが躊躇いがちに声をかけてくる。

「……アキラ、昨夜、お前の身に何が起こったのかは、大体聞いている。

そして今、ソレの所為で混乱している事も解る。だが後で知るよりは、今、一緒に見ておく方がいいだろう。」

そう言つて一枚の鏡を差し出してくる。

何の変哲も無い、ごく普通の小さな鏡だった。

俺は横になつたまま、震える右手でその鏡を受け取つた。

……鏡で見るものって何だっけ？

一瞬、馬鹿な考えが頭を過ぎる。

「……」

『自分の顔』だ。  
気持ちを落ち着けるように深く息を吐きながら、そつと鏡を覗き込む。

そこには、最近ではすっかり見慣れた銀髪蒼瞳の自分の顔がある……筈だった。

だけど映っていたのは、相変わらずの銀髪と、頬にまで及んでいる黒い炎と、

深い黒色をした右目だった。

「……」

ぱたり、と鏡を胸の上に伏せて、深く、深く息を吐く。

「……大丈夫か？」

再び躊躇いがちにかげられた声に、へらり、と笑つてみせる。

「大丈夫だよ。髪と目の色が変わったのは、これが初めてじゃないし。……それにこれは、『アイツ』がここに、俺の中に居るって証拠だし。」

そうだ。『アイツ』は消えてしまつた訳じゃない。

それなら、どこに居るか判つてるだけ気が楽つてものだ。

俺の中に居るっていうなら、出さないようにするだけだ。

少なくとも、『アイツ』がふらふらと出歩いて、

オールドレイクみたいな奴の手に渡るよりは遥かにマシな筈だ。

出来るだけ前向きに考えて、気持ちを落ち着かせる。

それから俺は体を起こそうとして、すっかり慣れてしまつた重みを左腕に感じた。

ふっと視線を動かせば、やっぱりそこには俺の腕を抱き枕のようにして掴むミュが居た。

……ただ、ミュの姿はあちこち傷だらけで、その頬には、うつすらと涙の跡が残っていた。

どうして!?

そんな疑問が、まず浮かんだ。

だけど、判ってる。そんな事は判り過ぎるくらい、解ってる。

俺が、やった。

俺が、ミュを、皆を傷付けた。

例え俺の意思じゃなかったとしても、*“アイツ”* がやった事だったとしても、

*“アイツ”* を解き放つたのは俺だから。

だから、俺がやったのと同じ事だ。

……どうして、こんな事になったんだろう？

ただ、皆を護りたかったのに。

ただ、皆を護る力が欲しかっただけなのに。

何が、いけなかったんだろう？

「その娘は、な。」

治療中も、どんなにお前から引き離そうとしても離れなかったぞ。

『自分はアキラの護衛獣だ』と言いつ張ってな。」

愕然とミュを見詰め続ける俺に、アズリアが優しい声で言う。

「……。」

俺は無言のまま、ミュを起こさない様にゆっくりと体を起こす。

シートをミュにかけ直してやり、そっと涙の跡を指で拭う。

たった一人、故郷から引き離されて、全く関係の無い戦いに巻き込まれて、

こんなに傷付いて、それでもまだ、俺を護ろうとしてくれる。

それが、とても有り難くて、とても情けなくて、自然と、涙が一つ零れた。

「……ごめん、ミュ。痛かったら？」

次は……次は絶対に、俺がお前を護るよ。」

眠っているミュには聞こえないだろうけど、俺は決意をより強いものにする為に、敢えて言葉にした。すると、横からそっと白いハンカチが出された。

無地で何の刺繍も無い、真っ白なハンカチ。

「使え。」

そっけなくて、その上命令口調だったけど、それはやっぱり優しい言葉だった。

だから俺は有り難くそのハンカチを受け取って、目元を拭かせて貰った。

「洗って返す。」そう言おうとした時。

「――傷が、残ってしまうそうだ。」

突然、アズリアがぽつりと言葉を漏らした。

何の事か判らずアズリアを視線を追うと、

ぐるぐると包帯を巻かれた俺の体を見ている事が判った。

まるで袈裟懸けに斬られた痕を隠す様に巻かれた包帯以外、俺は上に何も着ていなかった。

すつと、静かにアズリアの右手が動き、その指が俺の左肩から右脇腹にかけて、

包帯の上からイスラに斬られた痕をゆつくりと撫でる。

これは、かなり気にしてるみたいだな……。

確かに重傷ではあったけど今は全く痛くないし、

俺は男だから傷の一つや二つなんて全然気にしないんだけど。

「……すまない。」

ダメだこりゃ。

奈落の底に穴を掘る勢いで落ち込んでるよ。

……そんな、今にも泣きそうな顔をさせる為に助けたんじゃないんだ。

俺は、お前にも笑っていて欲しいんだ、アズリア。

「なくに気にしてるんだか。こんなの全然大した事無いって！」

むしろ、アズリアの綺麗な体に傷が付かなくて、ほっとしてるよ。」  
そう言つてにやりと笑うと、案の定、アズリアは顔を真っ赤にして





な。

ならば隊長の私が部下たちの弔いをしなければなるまい？

浜辺で部下たちの亡骸を焼いている時だったな……。

後ろに気配がして振り向くとアティが居たんだ。

自分だって大変だろうに、いや、これからはアイツの方が大変だろうに、

アイツはやはり他人の事を心配してるんだ。

……色々とな、話をした。

助けて貰った礼やら、弱音やら……。

そうそう、軍学校時代の話もしたな。

卒業前の最後の訓練試合の話だ。

最後の最後まで全力を出そうとしないアイツに、遂に私は腹を立てたんだ。

手加減抜きの一撃を真つ向からぶつけてやったんだが、

アイツはそれをかわすと武器を捨て、試合を放棄したんだ。

おかげで私は首席に成れずじまいだ。

それから……父の話をした。

私の父が率いていた部隊は、陸戦隊の選抜部隊だな。

その任務は召喚術を利用した破壊活動取り締まる事だった。

何？よく解らんだと？

ふう……簡単に言うとな、父は無色の派閥に敵対していたのだ。

それ故に父は奴らの憎悪を一身に受ける事となり、イスラはその巻

き添えになってしまったのだ。

……古き召喚術の中には、術者の命を触媒として厄災をもたらす呪いがある。

召喚呪詛、と言う。

イスラはその中の病魔の呪いをかけられた。

生まれた時からあの子の身体は病魔に苛まれ続けている。

しかも、死ねない。

絶息寸前のところで息を吹き返してしまう。

自ら命を絶とうとしても、結果は同じだった。

呪いが解けない限り、永遠に苦痛の日々を生き続けなくてはならぬのだ……。

だから卒業して久しぶりに戻った実家で、元気になったイスラを見た時は驚いたものだ。

ベッドから出られずにいた子が、一年足らずで軍務省の選抜試験を通過して……。

軍属になったと聞いた時には嬉しくて堪らなかった。

なのに——っ！

全ては無色の派閥がもたらしたものだっ！

解っていたんだ！有り得ない事だと！

そんな都合のいい話がある筈が無いと！

古き呪いを無効にする術は、古き知識を持つ者たちの所にしかあり得ない……。

イスラはその為は無色の派閥に頼った。

そしてあの子をそこまで追い詰めてしまった原因は、この私にあるんだ……。

あの子も、イスラも、そう言っていた。

実はな……昨夜、お前が暴れる前にイスラが来ていたんだ。

そして言ったんだ。

呪いの苦しみから逃れる為は無色の派閥に与したのだ、と。

私を殺す、と。

あの子は……叫んでいたよ。

『他人に僕の何が解るって言うのさ！』

毎日のように死の発作に襲われて、今度こそ死ぬかもしれないって脅え続けて……。

そういう恐怖を君は味わった事がある？

手厚く看病をしてくれていた者たちが、本当は自分の死を願って止まない。

それを知った時の絶望が、どれ程か解るって言うの？』

被っていた笑顔の仮面を投げ捨てて……。

『他人なんて信用できない。助けが来るなんて期待しない。』



イスラがどうして自分を殺そうとするのか。  
だからアキラに頼った。

アキラなら、自分に解らない事も解るかもしれない。

しかし、アズリアがアキラから何かを聞きだす前に、部屋の扉が軽い音を上げて開かれる。

アキラとアズリアが突然の来客に目を向けた途端、厳しい声が飛んできた。

「何をしているのですか!?!」

「く、クノン?」

部屋に入って来たのは看護士の少女で、その目は険しい光を持ってアズリアに向けられている。

その余りの剣幕にアキラとアズリアの二人が驚くが、

クノンは二人の様子など全く気にせず、ずかずかと歩み寄る。

「アキラ様は絶対安静の身です!」

面会は私が様子を看てから可能かどうか判断すると伝えた筈です  
!」

そう言うや否や、クノンはアズリアを椅子から無理矢理立たせ、

ぐいぐいと外に向かってその背中を押して行く。

「わ、解った! 解ったから、押すな!」

アズリアが慌てて言うのにも構わずに、クノンはその背中を押し続ける。

そして二人の姿はドアの外へ消え、部屋にはアキラと未だに眠ったままのミュだけが残された。

一瞬の騒々しさに、アキラは小さく笑っていたが、ふと真剣な表情で呟いた。

「馬鹿な望みだな、イスラ……。」



アズリアが部屋から追い出された後、アキラが今後どうするかをぼんやり考えていると、

クノンが再びアキラの部屋を診察に訪れた。

驚くべき事にその検査結果は、瞳の色の変化や腕に現れた文様にも関わらず、

内外共に何の異常も認められないというものだった。

アキラはそれならば、と自主退院しようとしたが、そんな事をクノンが許す筈も無く、

二人の間で小さな口論が起こる。

検査で何の異常も見付からなかったのだから大丈夫だと言うアキラに対し、

あの重症がたった一晩で治る筈が無い、仮に治ったとしても、いつ何処にその反作用が現れるか判らないのだから、

暫くは安静にして様子を見るべきだとクノンは主張した。

話は平行線を辿るかの様に思われたが、最後はクノンが押し切られる形で終わった。

口には有るか無しかの柔かい微笑を浮かべているのに、

その色違いの瞳には酷く真剣な光を宿して、

「皆が戦っているのに、自分だけ寝ている訳にはいかないよ。」と言われては、

今のクノンにアキラを止められる筈もなかった。



そんな一騒動を経て、アキラとミュは森の中を進んでいる。

今まで何度と無く通った道を、海賊船に居るであろうアティの下へ向かって。

しかし、その道の半ばでミュがぴたりと立ち止まった。

そこは何の変哲も無い森の一角で、アキラは訝しげな表情をミュに

向ける。

疲れてしまったという事は無い筈だが、一応アキラは尋ねてみる。

「ミュ？疲れちゃったのか？」

「……。」

しかしミュは俯いたまま答えず、アキラからはその表情も窺えない為、

その場に二人で立ち竦む事になった。

何の変化も無いまま五分が過ぎ、十分が過ぎようとした時、

ざあつ、と強い風が木々を揺らしながら吹き抜ける。

その風の音に紛れ、ミュがぼつりと眩いた。

「——んか…。」

「ミュ？」

風の音に掻き消された言葉を尋ねるように、アキラがミュの名を呼ぶ。

その声に、ミュは弾かれる様に顔を上げると、何かが爆発した様に叫び始める。

「っつ、ええやんか！もう、ええやんか!!」

何でアキラが辛いめえに遭わなアカンねん!?

何でアキラが怪我せなアカンねん!?

その金の瞳に涙を浮かべ、力の限りに叫ぶ。

「ええやんか、もう！アキラは十分頑張ったやん！」

こんな島の奴らなんか、ほつとこうや！

このまま二人でどつか行こ！そんで静かに暮らそうや!?

まるで懇願する様に。

「ミュ……。」

肩を震わせ、今にも泣き出しそうな様子で、アキラの顔を見上げて言い放つミュに、

アキラは軽く目を見開いて驚いた。

まさか、ミュがそんな事を言うなんて、思いもしなくて。

まさか、ミュがそんな事を考えてるなんて、思いもしなくて。

だけど、目の前で涙をこらえて震えているミュからは、

ただ痛い程の心配だけが伝わってきて、それがアキラに笑顔を浮かべさせる。

「ありがとう、ミュ。心配してくれて。」

「はは、そう言えばミュは俺の護衛獣だもんな。」

「主が怪我なんかしてちゃ——」

「ちやう!!」

アキラが笑いながら、ふと思い出したように『護衛獣』という言葉を出した瞬間、

とても強い声でミュがそれを否定した。

その余りにも強い否定に、アキラは再び目を見開く事になった。

確かにアキラは、今までミュと主従として接してきた事は無かったが、

ここまで強い否定を返されるとは思っていなかったのだ。

そして、アキラの驚いた顔を見たミュも、はっとした表情を浮かべると下を向いてしまう。

「……ちやうんや。ウチは——っ!……ウチはっ!」

下を向いたまま声を絞り出すミュは丈の短い袴を両手で握り締め、ぎゅつと目を瞑ったまま頬を紅く染め、先程とは違い、緊張でその小さな体を震わせる。

そして何度か躊躇った後に、意を決して告げる。

「ウチっ……ウチは、アキラの事が好きなんや!」

再びアキラを見上げるその顔は、熱っぽく潤んだ瞳と、震える小さな唇と、紅い頬で艶やかに飾られている。

そしてミュは、小さな手を伸ばし、アキラの服を掴む。

金の瞳は、黒と蒼の瞳を見詰めたまま。

「護衛獣やからとか、友達やからとかやない。」

「ウチは、アキラに、恋してんねん。」

そう告げると、ミュは紅い顔を隠す様にアキラにしがみつく。そして最後にぽつりと声を零した。

「せやから、アキラが傷付くんは見たくないんや。」





ミュに抱き付かれたまま、アキラは困惑していた。どんなに鈍い奴でも、ここまでではつきりと告白されれば相手の気持ち解る。

しかし、アキラは今までミュの事を恋愛対象として見て来なかった。

可愛い妹として接してきたのだ。

だから、ミュの突然の告白に戸惑った。

二、三秒の間だけアキラは逡巡し、それからそつとミュの肩に手を置いた。

そしてミュの顔が見える様に、その小さな体を引き離す。

「ありがとう、ミュ。

……だけど、ごめん。

俺もミュの事は好きだけど、これは、きつと、恋じゃない。

だから——ごめんな。」

優しく、哀しい言葉。

アキラは決してミュの瞳から目を逸らさずに、その言葉を告げた。

その表情は、寂しげに、そして申し訳無さそうに歪んでいた。

ほんの僅かな間だけ、ミュはぼんやりとしていた。

拒絶された。

その理解は、金の瞳から始まった。

見る間に涙が溢れ出し、頬を伝い落ちる。

「……う、うう——っ、アキラのアホー!!

ウチはもう知らん!

アキラなんか好きただけ戦って、好きただけ怪我したらええんや

!!

次いで、絶叫が迸る。

その自棄になった絶叫と共に、ミュはアキラの体を突き飛ばすよう

にして離れると、

最後に涙と捨て台詞を残し、森の奥へと駆け込んで行ってしまった。アキラには、ただその後姿を哀しげに見送る事しかできなかった。そこに、ぱきり、と小枝の折れる音が響く。

アキラが音のした方を見ると、そこには。

「あの、兄さん……その、僕は——。」

猫の召喚獣を連れ、緑の帽子を被った少年、ウイルが居た。

おろおろと慌てるウイルに、アキラは苦笑を見せる。

「いいんだよ。俺もミュも、人が居る事には気付いてたから。

それよりも……あの子を追いかけてくれるか？」

「……はい！」

告げられた言葉に驚きと逡巡を見せた後、ウイルはアキラの目をしっかりと見詰めて頷いた。



緑の帽子が森を掻き分け、ひた走る。

探しているのは金の瞳と白い髪をした狐の女の子。

彼女はきつと泣いているから。

彼女は今、ひとりぼっちだから。

彼は彼女の姿を求めて森の中を走り続ける。

そして見つけ出した小さな姿。

彼女は大きな木の下で、抱え込んだ膝に顔を埋めていた。

「あ、あの……ミュさん？」

走っていた足を止め、ウイルはゆつくりとミュに近付く。

そして、おずおずと呼びかけた。

「……何やねん。何でアンタが来んねん。」

「そ、それは……その——。」

返って来たのは不機嫌ながらも意外に強い声。

滅多に返ってこない返事に喜びつつも、何と云っていいのか判らず、ウィルは躊躇う。

やがて薄っすらと頬を紅くしたウィルが、ごくりと唾を飲み込み、告げる。

「ミュさんが……心配だったから。」

「召喚士なんぞに心配して貰う事なんかあらへん。」

いとも容易く、そして冷たく切り捨てられてしまった気遣いの言葉。

ウィルは厳しい表情に変わると、ミュをひたと見詰めた。

そして怒りも恨みも籠っていない、真剣みだけが伝わってくる声がミュに届く。

『召喚士が』とか、『召喚獣が』とかじゃなくて、『僕』が『キミ』を心配なんだ。」

「……ふん。アンタも、変な人間やな。」

ウィルの言葉に、ミュの大きな耳がぴくりと一度だけ動いた。

## 無色の派閥

森の中、少年と少女が向き合っている。

大きな木の下で顔を伏せてしゃがみ込んだ少女はその小さな肩を震わせて、

少年はそんな少女に気遣わしげな目を向けている。

少女は泣き声を出さない様に、少年はかける言葉を見付けられずに、

二人とも無言のまま、幾許かの時間が流れる。

そして、そんな二人に動きを促すかの様に優しい風が通り過ぎた時、

少女がそれまでの雰囲気吹き飛ばすかの様に、勢い良く立ち上がった。

「よっしゃー！へこむんは終わりや!!」

こっからはまた、氣い入れていくでえ!!」

大きな声でそう言いながら、袖で乱暴に目許を擦る少女。

その突然の行動に少年は驚き、一拍返事が遅れてしまう。

「そ、そうですよー！」

振られたって言っても、嫌われた訳じゃありませんし！」

「……。」

「……。」

励ます意味も込めて笑顔で告げる少年。

しかし、その台詞は何の慰めにもなっておらず、

むしろ逆に少女のこめかみを引きつらせる結果に終わった。

特に、『振られた』の部分で。

にも関わらず、少年はそれに気付く事無く、にこにこ笑顔を向けている。

当然少女はキツイ目を少年に向けるが、

少年の純粹で全く悪気の無い様子が何処と無く想い人とイメージが重なり、

怒りを削がれて溜息を吐く。

そして、ふと何かに気付いた様に考える。

「……そういや、そやな。」

恋人にはしてくれへんかったけど、アキラはウチの事、

好き言うてくれたし……。」

そこまで呟くように喋ると、少女は何かに閃いた様に焦り始めた。

「こんな事しとる場合やない！」

アキラがウチのものになる前に、変な虫が付かん様にせんと!!

——行くで、ウイル!!」

「っ!!」

くっつ、はい! ミユさん!」

弾ける様に走り出しながらも、付いて来る様に『名前』で呼びかけるミユ。

今まで頑なに拒絶されていただけに、その喜びはとても大きく、

少年は、ウイルは、涙ぐみながらも綺麗な笑顔で応えた。



ミユと別れて船に着いた時、その時にはもう事態はかなり進んでいた。

朝早くに行われたという護人会議で、住民たちは集落から当分の間出ない事が決まり、

子供たちに至っては、家の外で遊ぶ事すらできなくなったらしい。

そして当然、アテイの青空学校も休校という事に。

「うくん……。尤もな処置と言えばそれまでだけど、大変な事になってきたな。」

ん? 学校が休みってのいいとして、家庭教師の方はどうするんだ、

アテイ？」

海賊船の傍に設置されている、簡易テーブルとイス。

そこに腰掛けて、これまでの話をアテイに聞いていたが、ふと思いついた疑問を尋ねてみた。

「えっと、それが――、」

ウィルに『上の空で授業されても困る。それに今にも倒れかねない。』

と言われて、家庭教師の方も一時休みつて事になっちゃって……。

「あはは。それじゃ、どっちが先生だか判らないな。」

「うう。面目ありません。」

目を泳がせながら気まずげに答えるアテイ。

その様子が面白くて笑って返せば、アテイは更にしよげ返つて体を小さくした。

……アテイを苛めるのって、楽しいかも。

俺がそんな事を考えていると、

不意にしよげていたアテイが愁いを帯びた表情を浮かべ、呟いた。

「……でも、無色の派閥を島から追い出さない限り、

ずっとこんな毎日が続く事になるんですね……。

早く、何とかしないと――。」

その台詞に、俺は笑いを消して尋ねる。

少し目を細めて、アテイの反応を見逃さないように。

「それで、アテイはどうするつもりなんだ？」

「どうって――。」

戸惑いに瞳を揺らすアテイに、更に声をかける。

「この前見た様子じゃ、無色の派閥は個人の意思なんて無い。

指導者の掲げる理想を絶対として、それを実現する為だけに機能している機械みたいな物だ。

アテイの言葉は――多分届かない。」

目を逸らさない様にアテイの瞳を見詰めて、告げる。

そう、あの暗殺者たちは自分の事を人間だと思つてない。

……思わされていない。

だからきつと、言葉での説得はできない。

最後には目を瞑って、吐息のようにアテイに伝える。

「解ってます。」

アキラさんの言葉は正しいと思います。割り切らなきゃいけないとも思いません。

でも——。」

返ってきた強い言葉に目を開けると、アテイがしっかりと俺の目を見詰め返してきていた。

その訴えかけてくる瞳に、自然と小さな笑みが浮かんだ。

「割り切れないんだな、やっぱ。」

「信じたいんです。」

何もかもが結局最後は力によってしか解決できないのなら、何の為に言葉が存在しているのか、悲しくなっちゃうから。

私は……信じたいんです……。」

祈る様なその言葉に、最後にもう一度だけ問いかける。

「投げかけた言葉が、暴力によつて返されるとしても?」

「その時は、私が矢面に立って受け止めます。」

迷いもなく、しっかりと即座に返ってきた答え。

その余りにもアテイらしい答えに、苦笑が漏れた。

「簡単に言ってくれるよ、全く……。」

ま、その時は俺も微力ながら力を貸すけどさ。」

「ありがとうございます、アキラさん。」

俺の言葉に満面の笑顔で応えるアテイに、俺も笑顔になる。

うん。やっぱアテイには笑顔が似合う。

作り笑いや、愛想笑いや、癖になつてるものじゃなく、今みたいな本当の笑顔が。

のほほんとなんな事を考えていると、遠くからチビたちの声が聞こえてきた。

どうやらパナシエとスバルの二人が、アテイを呼びに来たみたいだ。

——みんなが、襲われてる?」



「ヒヒヒヒッ！大人しくしやがれ化け物がアッ!!」

森の中の拓けた一角で、野卑な男の声上がる。

次々に轟く召喚術の炸裂音。

そして上がる、様々な悲鳴。——悲鳴。——悲鳴。

逃げ惑うのは誰もが人では有り得ない異形。

男が化け物と呼ぶのも領ける。

しかし、その様はどうだろう？

彼らは弱々しく、ただ逃げ惑い、人間である筈の男が嬉々として襲い掛かる。

これではいっただいどちらが“化け物”だと言うのか。

その繰り広げられる残酷な光景を止めたのは、冷徹な女性の声。

「加減を考えなさい。殺してしまつては元も子もありません。」

「は、はっー!」

男は女性の声に畏まり、攻撃を控える。

しかし、それは被害者にとつて何の救いでもなく、

更なる悲劇をもたらす為の前奏曲でしかなかった。

何故なら逃げ惑う彼らを見る彼女の瞳は、モルモットを見る研究者と同じ色をしていたのだから。

その彼女に、鷹揚に、そして傲慢な言葉がかけられる。

「よいのだ、ツエリーヌ。」

あれぐらいの攻撃にも耐えられぬなら、採取しておく価値は無い。」

尊大な笑みを浮かべ、男は言い捨てた。

『価値は無い』。

自分の利にならないのなら、彼らに『価値は無い』と。

余りにも一方的で、余りにも横暴な、その思想。

しかし、周りの者は誰もそれに異を唱えない。



眉を寄せて不快気な老人も、伏目がちな紅い髪の女性も、やはりその行為を止めようとはしないのだ。

それどころか、その行為を勧めようとする青年が居た。

「この先にある集落は、はぐれたちが暮らしている場所の一つです。

四つの集落を順番に回っていけば、ありとあらゆる種類の標本が豊富に揃う事でしょうね？」

「楽しみだな……。」

彼は以前見聞きした知識を、男に伝える。

それは積極的な勧めではなく、悪魔が人を唆す時の様な甘い誘惑。

男はその言葉に、楽しみに目を細めた。

欲望に光る、その瞳を。

しかし、その瞳はすぐさま別の意味で細められる事になる。



「そういう訳にはいかないわ！」

俺とアテイが、スバルとパナシエに教えられた場所の近くまで来た時、

鋭い女性の声と召喚術の炸裂音が前方から聞こえてきた。

たぶん、アルデイラだな。

「風雷の郷は、我らの第二の故郷……。」

貴様らの様な外道を踏み込ませたりはしない!!」

おっと、キュウマも居るのか。

流石、護人。行動が早い。

走る速度を落とさずに内心で感心していると、良く知っている声が聞こえた。

「わざわざご苦労様です。護人のお二人さん。」

イスラ!!

……やっぱり、『最前戦』に居るんだな。

「こやつら、確かこの島の始まりを知るはぐれであったな。

ふふふ……、これは是非とも採取しておかねばなるまい？」

「貴方がそう望むなら。」

「待ちなさいっ!!」

「そう何もかも、都合良くはいかせねえよ!!」

オールドレイクとツエリーヌが好き勝手言っている間に、

俺とアティは森を抜けて、オールドレイクたちの前に立ちはだかる。

続くように近くの茂みから、アズリア、ヤツファ、フアリエル、そ

して海賊一家が現れる。

そんな俺たちを見て、イスラは「嬉しそう」に笑った。

「ほーら、出てきた？」

本当に解り易いね、君の行動原理はさ。」

「……イスラ。」

俺は前にも言った筈だぞ、そんな安い挑発には乗らないって、な。

それとも、そんなに「アティ」を怒らせたいのか？」

アティに向かって話しかけるイスラ。

それを遮る様に、イスラに声をかけた。

途端、イスラは表情を消して俺を睨みつけてきた。

それから一拍の間を置いて、イスラは皮肉気な笑みを浮かべてみせ

る。

「……あれ？生きてたのかい、アキラ？」

ホント、しぶといねえ、君って。」

……どうやら、ちよつとばかり怒らせたみたいだな。

つまり、凶星だった訳だ。

俺がそうやってイスラを観察していると、イスラは一度言葉を切っ

てアズリアに視線を動かした。

「それに、姉さん。」

その様子だと、本気で僕とやり合うつもりなんだ？」

「必ずお前を止めてみせる。全ては、そこからだ！」

「ふーん……。」

強い意志の籠った瞳でイスラを見据え、熱く宣言するアズリアを、

イスラは冷めた表情で、どうでもいいように応じた。  
いや、どうでもいいように振舞った。

本当はアズリアの言葉が嬉しかったんだろう。  
何故なら、俺は確かに見たからだ。

アズリアの言葉を聞いた瞬間、イスラの瞳がチラリと光ったのを。  
あれは、思慕と期待。

……アズリアが「願い」を叶えてくれるかもしれない、と思ったんだろう。

そんな事、ある筈が無いのに。  
まったく……素直じゃない。

さて、この我俣で捻くれたガキを、どうしてくれようか？

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼▼△

銀の髪が陽の光に輝きながら戦場を駆ける。

丈夫なブーツに包まれた足が大地を蹴り、風のように敵の間をすり抜ける。

黒い炎の紋様が刻まれた腕が振るわれる度、その手に握られた刀が銀の軌跡を描く。

今、アキラは一人で戦っていた。

いつも隣で舞い踊っていた純白の髪は無い。

鋭い金の瞳が敵を睨む事も無いし、威勢の良い関西弁が危険を知らせてくれる事も無い。

ミュが、傍に居ないから。

それでもアキラは、いつもと変わらぬ戦果を上げていく。

蒼と黒の瞳で全てを見据え、常人離れた動きで避け、攻撃する。  
まるで一人でも大丈夫だと言うように。

まるでミュが居なくても戦えると言うように。  
それは、きつとミュの為に。



勝利を確信し、油断しきつたその姿に、ヤードはぎらりと瞳を光らせる。

「——今です!!」

「くたばれっ!!!」

「な——っ!?!」

ヤードの合図と共に、オルドレイクの背後から人影が襲い掛かる。予想外の事にオルドレイクが驚きを顔にする。

しかし、襲撃者のナイフはオルドレイクに届く事無く、

甲高い音と共に刀によつて弾かれてしまう。

「ちっ—」

短い舌打ちをしてヤードの傍に退き、

己の邪魔をした者を鋭く睨みつけた襲撃者——スカーレル。

油断無くナイフを構えるスカーレルに対し、ウイゼルがゆつくりと刀を向ける。

「召喚術は囷か。

俺さえ居なければ成功したろうがな？」

「まったくね……。」

ほんの少しの苛立ちを混ぜて応えるスカーレルの前に、新たに人影が立ちはだかる。

紅い髪が目には鮮やかな彼女は、鋭くスカーレルを睨みつける。

「成る程……。追っ手を始末したのは貴様だったか……。」

『珊瑚の毒蛇』、裏切り者め!!」

「ご挨拶だわねえ! 『茨の君』さん!」

言い合い、二人は互いにナイフを相手に向ける。

そして、アサシンと元アサシンの切り結びが始まった。



あつという間に敵に囲まれてしまったスカーレルとヤードを目に

し、

アキラは立ちはだかる敵をほとんど無視するように駆け出した。繰り出される剣やナイフをかわし、或いは受け流し、敵の間を縫う様に二人の下へと走る。

攻撃する暇さえ惜しんだその結果、背後からアキラに向けて一本の矢が放たれた。

「燃え盛れ、『炎陣符』!!」

今まさにアキラの背に刺さろうとしていた矢が、突如として炎に包まれ燃え尽きる。

そして現れたのは、いつもアキラの傍にあった純白。

「大丈夫やったか、アキラ?」

「……ミユ。」

安否を尋ねるミユを、アキラは呆然とした表情で見詰める。

もしかしたら、もう戻って来ないかもしれないと思っていたから。

まるで家出から戻って来た子供の様に、

気まずい表情をしたミユは躊躇いつつアキラに問いかけた。

「一個だけ、聞いてもええ?」

「ああ、いいよ。何が聞きたい?」

ふわりと、ここが戦場である事も忘れそうな優しい笑顔でアキラが応える。

その笑顔に励まされる様に、ミユは一步アキラに近付くと、

不安に揺れる金の瞳でアキラを見詰める。

そして躊躇いがちに口を開いた。

「アキラはウチの事、嫌いや無いんやな?」

ミユの問いかけに、アキラは呆気にとられた様子をみ開く。

それから、くすつと小さく笑い、見る者全てが安心する様な優しい笑顔で応えた。

「勿論。俺はミユが好きだよ。」

その笑顔に、その答えに、勢い付いたミユは、アキラの服の裾を掴んで問いかけを重ねる。

「ほなウチ……アキラの傍に居ってもええ、よな?」



しかし、地に片膝を付いたその姿はぼろぼろで、今召喚しているピコリットでは、しばらく戦闘に参加できそうにない。

そんなヤードのやせ我慢に、ソノラが噛み付く様に怒鳴る。

「何でこんな無茶したの!？」

あいつらを倒すのは、あたしたち全員の目的じゃない!」

「……違うわ。」

静かな否定は、スカーレルから。

そして、スカーレルとヤード、二人の過去が語られる。

無色の派閥の儀式で壊滅した村。

派閥の構成員として、組織の暗殺者として、教育された子供たち。

そして復讐を誓う二人。

語られた二人の過去に驚く仲間たち。

中でもカイルとソノラは愕然としていた。

逆に、話を聞いても、アキラとミュは眉一つ動かさなかった。

何故なら、ミュはアキラ以外の人間に関心などないから。

そしてアキラにとっては、スカーレルとヤードの過去が、そして目的がどうあれ、

的がどうあれ、

二人が自分の友人である事に変わりは無かったから。

語られた過去によって、突然二人が別人に変わってしまった訳では

ないし、

そんな過去を抱えていた二人と友人になったのだから。

だから、アキラとミュの二人だけが冷静に周りを見ていた。

取り囲んだまま動かない暗殺者たちの何処が手薄か、

どうすれば傷付いた仲間たちを守りながら、この場を切り抜けられるかを。





後一步と言うところまで追い込んでおきながら、止めを刺す事もできず、

反逆者どもを仲間と合流させてしまった不甲斐無い手駒たちを見て、

オールドレイクがつまらなそうに歩を進める。

「やはり、私が直に手を下した方が良さそうだな。」

「オールドレイク様。その前に、僕の事を試してみませんか？」

しかし踏み出されたのは一步のみで、その歩みは横から出てきたイスラに止められてしまう。

「……できるのか？」

「はい、恐らくは。」

「ならば、見せてみよ。」

少しばかり不興気にオールドレイクは眉をひそめ、イスラに問う。

その問いに、イスラが恭しく頭を下げて肯定を返すと、オールドレイクは尊大に応じる。

もう一度頭を下げて、イスラは前線に立つツエリーヌの傍に歩み寄る。

そして言葉だけは丁寧に、表情には嘲りを込めてツエリーヌに声をかける。

「下がってください、ツエリーヌ様？」

「く——っ。」

新参の、それも格下の者からのあからさまな侮蔑。

屈辱に顔を歪ませながらも、主である夫の命令とあれば従うしかない。

苛立たしげに後ろに下がるツエリーヌに代わり、イスラがアティたちの前に立った。

「そういう訳で、今度は僕が相手だよ。」

人の神経を逆撫でするいつもの不敵な笑みで、イスラはゆっくりとアティたちに近付いていく。

そのイスラに対し、毛を逆立てて威嚇するテコを従えたウィルが、挑戦的に尋ねる。

「随分と、自信があるみたいですね……?」

「さあ、どうかかな?」

ウイルの問いかけなどイスラは意にも介さず、はぐらかしながら歩み続ける。

しかし、ぴたり、とその足が止まる。

原因は傍に立つ老剣士。

「……何のつもりです? ウィゼル様。」

「保険だ。」

冷たく無表情になったイスラが問いかければ、端的な答えが返ってくる。

少し、ほんの少し苛立ちを混ぜて、イスラは再度問いかける。

「何に対しての?」

「あ奴——あの男は、危険だ。」

ウィゼルは、じっとアキラを見詰めていた。

足運び、手の動き、そして静かに凧いだ蒼と黒の瞳を。

その様子にイスラは小さく息を吐く。

「……」

まあ、いいでしょう。行きますよ!」

そして、戦いの第二幕が上げられた。

## 暴威

「お前さ、アズリアを殺す気なんか無いんだろ？」

相手がイスラとウイゼルに代わってから幾ばくかの後、アキラはイスラと切結んでいた。

その切結びの中で突然投げかけられた言葉。

余りに場違いな言葉に、イスラは切結んだ剣と刀ごしに相手の瞳を見据える。

いつの間にか、蒼と黒、色違いになっていた瞳を。

「……何を言ってるのさ？」

僕に殺されそうになったくせに、まだそんな甘い事を言うのかい？」

ぎりぎりど、剣に籠める力は緩めずに、イスラは嘲笑を浮かべる。

しかし、イスラの挑発など全く意に介さず、アキラはにやりと笑い返す。

「そこだ。」

お前があの時、本当にアズリアを殺そうとしたのなら、

アズリアより『前に』出た俺が、生きていられる訳が無いんだ。」

「っ!!う、うるさい！」

あれは、突然キミが出てきて手元が狂ったんだ!!」

アキラの言葉に、一瞬イスラの身体が震えた。

まるでそれを誤魔化すかのように、イスラは渾身の力を剣に込めてアキラを弾き飛ばす。

続いた反論は子供の癩癩の様で、アキラはくすりと笑ってしまう。

「その割には、斬った後で驚いてたようだけどな？」

「うるさい！」

「黙れ!!黙れ!!黙れーっ!!」

アキラの言葉で頭に血の上ったイスラは、我武者羅に剣を振りまく

る。

それは、剣術も無く、狙いも無く、ただ振り回されるだけで、当然アキラには掠りもしない。

その剣が、甲高い音共に刀に受け止められる。

しかし、止めたのはアキラではなく、イスラの仲間の老剣士。

ミユの相手をしていたウイゼルは、イスラの形勢不利を見て駆けつけたらしく、

静かにイスラを見据えた。

「退け、イスラ。その様では虫一匹殺せはせんぞ。」

「くっ！」

イスラは悔しげに唇を噛み締めるが反論などはせず、素直にウイゼルの従い、

アキラから距離を取り離れていく。

それはウイゼルの力を認めているからであり、自分の不利を悟ったからであった。

そして、アキラとウイゼルが静かに相對する。

「イスラの代わりに、アンタが相手してくれるのかい？」

「……。」

アキラが軽く挑発を掛けてみるが、ウイゼルは無言で刀を下段に構える。

「(挑発には乗ってこない、か。」

いかにも百戦錬磨って感じだなあ。)

アキラが攻めあぐねていると、不意にウイゼルが低く呟いた。

「往くぞ。」

「なッ!？」

その声のアキラに届いた瞬間には、もうウイゼルはアキラの目の前に居た。

まさに神速の踏み込み。

そして、下段からウイゼルの刀が斬り上げられる。

アキラは上体を逸らす事で辛うじて回避し、そのままバックステップで間を開ける。

しかし、ウイゼルは更にアキラへと踏み込み、振り上げた刀でそのまま斬り下ろしてくる。

間を開けずに襲い掛かってくる斬撃を、アキラは刀で軌道をずらし、受け流す。

そして再び距離を取る。

今度はウイゼルも追撃をかけず、静かに刀を構えなおした。

「……成る程。力があり、速さもある。

技も中々のものだ。余程いい師に出会ったと見える。」

「そりゃどーも。」

アキラはウイゼルの褒め言葉に対して不躰に返した。

それもその筈。アキラは戦慄していたのだ。

ウイゼルは強敵だった。

今までの雑魚の様に弱くなく、ギャレオの様に力任せで攻めてくる訳ではなく、

キュウマの様に素早さで攪乱してくる事もない。

真正面から力と技で、ぶつかってくる。

今まで出会った事のない強敵だった。

アキラは、刀を握る掌がじつとりと汗をかいている事を意識した。

一瞬でも気を抜けば、自分はこの男に斬られるかもしれない。

いや、斬られるのだろう。

そんな考えが、初めてアキラの中に広がっていた。

ウイゼルが一步、アキラに踏み寄る。

「だが、覚悟が足りん。

お前の刃には恐怖が見えるぞ。

仲間を失うのが怖い。命を奪うのが怖い。命を奪われるのが怖い。

そんな剣ではワシは斬れんぞ!!」

再び神速の踏み込みで、ウイゼルがアキラへと迫る。

「——ふう。そうか。そうかもしれないな。」

迫り来るウイゼルに対し、アキラはだらりと身体力を抜いて呟く。

そして、左手でポケットから何かを掴み出すと、鋭くウイゼルを睨

みつける。

「だけど、俺は別に刀しか使えない訳じゃあ——ない!!」

叫ぶと同時に、アキラもウイゼルへと向かって走り出す。

無謀とも言えるその行動に、ウイゼルが一瞬警戒の表情を浮かべる。

しかし、警戒しながらも、アキラが間合いへと入った瞬間、手にした刀は反射的に横へと薙がれる。

それを待っていたかの様に、アキラは飛び込みの要領で斬撃を潜り抜けると、

前転で受身を取り、飛び起きる。

結果、アキラとウイゼルの間には再び距離が開く。

そして、アキラは手にした『赤い石』をウイゼルへと向けていた。

「お喚びたて申し奉る。

闇夜を照らす鋭い眼。全てを切り裂く爪と牙。

鬼妖界に居わす荒ぶる神よ。」

再びこちらへと迫りつつあるウイゼルを見ながら、

アキラの脳裏には以前ミュと話した内容が過ぎる。

『なあ、ミュ。鬼妖界で一番強いのもって、どんな奴なんだ?』

『ん?ん、そやなあ……一概には言えへんのやけど、ウチはあの方が一番凄いなあ。』

『あの方? 誰なんだ、あの方って?』

ウイゼルがアキラを間合いに捕らえるまで、後三步。

サモナイト石には既に十分な魔力が籠められ、後は名前を呼ぶのみ。

「今、我が喚び声に応じて来たれ! 召喚ツ!!」

ウイゼルの間合いまで、後一步。

脳裏に蘇っている弾む様なミュの声と、アキラの声が重なる。

『それは勿論!』

『龍神・隴!!!』



日も暮れる頃、気が付けば戦いを始める前とは逆に、イスラとウイゼルの二人だけが、アテイたちに囲まれるように残されていた。

当然、オールドレイクの下には、まだたくさん暗殺者たちが残っているが、

イスラの部隊は事実上壊滅させた事になる。

残っているイスラとウイゼルにしても、既に満身創痕の状態で戦えそうにはない。

イスラに至っては、立っている事もままならない状態で、片膝を付いている状態だ。

だからこそ、アテイは剣を引きイスラに告げた。

「終わりです、イスラ。諦めて投降して下さい。」

「はッ！何甘いコト言うてんねん。」

おい、小僧！「今度は」息の根え止めたるからな!!」

降服を勧めるアテイを遮り、ミュが一步イスラに踏み寄る。

その金の瞳は苛烈な光を宿していて、今にも飛び掛りそうな勢いだった。

しかし、イスラは二人を前にして、不意に表情を歪めた。

それは晒い。

「ふ、ふふふ。あはは。

あはははははっ！あーっはっはっはっはっ!!」

まるでダメージなど全く無いかの様に、高らかに哄笑しつつイスラが立ち上がる。

その身体には、薄く赤い輝きが纏わり付き、イスラを護る様に蠢いている。

更に驚くべき事に、イスラの身体に刻まれた無数の傷が、あつという間に塞がっていく。

有り得ない現象に皆が愕然とする中、アキラの右腕がぴくりと動

く。

「いいね……、実にいい気分だよ。これは……。」

君が大口叩く理由、今なら解るよ。誰にも負ける気がしないもんね……。」

それに、僕の望みは果たされつつある。

もう「前の時」みたいに、出し惜しみする必要はないんだよ。」

薄っすらと笑みを浮かべたまま、イスラはアティを、そしてミユを見下す。

そんなイスラの言葉を聞きながら、アキラは別の事に気を取られていた。

疼く右腕。

「この魔力は……まさか、そんな!？」

「間違いないわ。間違える筈が無い!」

戸惑いの声を漏らすフアリエル。

そして、わなわなと身体を震わせるアルディラ。

二人とも、信じられない、信じたくないという表情をしている。

しかし、ヤードの言葉が全てを肯定した。

「紅の暴君——キルスレス……。もう一振りの封印の剣!!」

その言葉に、その名前に、アキラの右腕が跳ねる。

勝手に動き出しそうになる右腕を左腕で押さえ、アキラは苦悶の表情を浮かべる。

「くっ——!」

その声を聞きつけたミュウが、イスラの事など忘れ去ったかのようにアキラの下へと駆け寄る。

「アキラ!?どっか怪我したんか?」

「だい、じょう——ううっ!」

遂にアキラは刀を握っている事もできなくなり、その刃を地面へと落としてしまう。

しかし、落としてしまった刀に意識を向ける余裕もない程、

アキラは必死に右腕を押さえ込んでいた。

今や右腕は鼓動するようにドクドクと痙攣し、





こわす壊す憎い壊す壊す

壊す恐怖壊す壊す悲しいコワス壊す積み重なる骸壊す壊すこわす死ね壊す壊す壊す

助けて壊す壊す許さない壊すコワス壊す熱い壊す壊す殺されるこわす壊す壊す壊す

壊す嫌だ壊す壊すコワス壊す奪う壊す壊すこわす壊す守る壊す壊す!!!

「う、あああああああああああああああああッ!!?」

突如として、アキラの体から吹き荒れる黒い魔力の暴風。

雷光の様に迸る闇。

そして、アキラの右手に現れた、黒い剣。

真つ直ぐなのに、どこか歪んだ印象をもたらす漆黒の刃。

魔剣を手に対峙していたアテイとイスラも、

緊張の面持ちで二人を見詰めていた仲間たちも、

鷹揚に成り行きを眺めていたオールドレイクたちも、

黒い暴風は分け隔てなく、全てを薙ぎ払う様に吹き荒ぶ。

「くう——っ!」

「何という……魔力じゃ……。」

「ふ、吹き飛ばされそうですよおおお!!?」

シャルトスを手にしたアテイですら吹き飛ばされそうな風に、

ミスミは顔の前に手を翳して耐え、マルルウはヤッフアにしがみつ

く。

しかし、突然の風に皆が混乱する中、高笑いを上げる者が一人。

「ふふふ、ふははははは!これはいい!もう一本魔剣があつたとはな。

あれもこちらに頂くとしようか。同志イスラ。」

「……は。仰せの通りに。」

遠く離れた場所で暴風にマントを靡かせながら、どこまでも尊大に、

オールドレイクはイスラに命じる。

一瞬、躊躇いを見せながらも、イスラは恭しくその命令に従う。

そして、キルスレスを片手に一歩、アキラに近付くイスラ。

途端、見えない巨人が鎚を振り下ろした様に、地面が波立つ。

「地震?！」

「いや、違う……。こいつは、そういう代物じゃねえ?！」

揺れる大地に苦勞しながらキュウマが驚きの声を上げれば、

地面に手を付いて耐えていたヤツファが何かを感じ取り否定する。

イスラがアキラに近付けば近付く程、揺れは大きくなり、地割れまでもが起き始める。

そこで何かに気付いたか様に、アルデイラが呆然と呟く。

「まさか、これもあの魔劍の所為だと言うの……?！」

「どちらにしても、普通じゃないですー！」

フアリエルの叫び通り、もはや地面は地面としての性質を保っておらず、

全員が揺れる大地に何とかしがみ付いている有様だった。

「ぐ——っ!？」

当然、イスラも既にアキラに近付く事はおろか、

立っている事もできなくなり、波立つ地面に呻き声を上げる。

そこに聞こえてきたのは、またしても「声」。

——恐ろしい

その「声」が聞こえるのは、どうやらイスラだけではなくアテイもらしく、

二人は同時に戸惑いの表情を浮かべた。

「遺跡の声」は続く。

——アレは我であって我でない

恐怖と、ほんの僅かな羨望が籠められた「声」。

——アレはきつと、我々を、そして何もかもを壊すだろう

やはり驚きの表情を浮かべたのは二人同時。

しかし、行動を起こしたのはアテイの方が早かった。

多少強引にシャルトスを消し去り、イスラへと怒鳴る。

「剣を収めて、イスラ！」

「このままだと、取り返しのつかない事になるって解るでしょう!？」  
「……………」

「今の『声』は、貴方にも聞こえた筈です!!」

「分かったよ……。」

息を吐きながら、観念した様にイスラもキルスレスを消し去る。すると、始まりと同じく、唐突に大地の揺れは収まり、

暴風源となっていたアキラの手からもヴィサイアスが姿を消した。

嵐が過ぎ去ったその場には、疲労しきり、大地に手を付いて荒い息を吐くアキラと、

アキラを心配するミュ、そして余りの出来事に呆然とする人々が残された。

全員が疲労感に打ちのめされる中、

オールドレイクがアキラを見詰め愉快そうに笑い声を上げる。

「ふははははは！天変地異さえ引き起こす威力とな？

ますます欲しくなったぞ、その魔剣。」

しかし、ニタリと晒い、すぐにでも突撃の指示を出しそうなオールドレイクに、

剣を収めたイスラが慎ましく進言する。

「とは言え、流石に限界のようです。まだ、体が慣れぬ様で——。」

「まあ、仕方あるまい。次に期待するでしょう。」

引き上げるぞ！」

意外にもあつさりど、オールドレイクはイスラの進言を受け入れる。

それが圧倒的優位に立っているという驕りからくるのか、

それとも自分の力さえあれば、どうとでもなるという自信からくる

のか、

アテイたちには思いも寄らなかつたが、

ともかくオールドレイクたちが引き上げてくれるのは願ったりだった。

余裕の笑みさえ浮かべて去っていく彼らの姿を見送り、アテイは疲れた身体に鞭打って動き出す。

戦いの結果がどうあれ、今の彼女にアキラの容態ほど大事なものはなかつたから。

## 閑話くヴィサイアスく

流れ出る赤。

肉を斬る感触。斬られる痛み。

地面に広がる赤。

溢れ出す殺意。殺される恐怖。

奪う為に、護る為に、殺し合う。

切り倒される木々は我が身。

焼き払われる森は、全て己自身。

雑草を踏み潰し、踏み潰される。

ぶつかり合い、火花を散らす冷たく硬い自分と自分。

島に存在する、ありとあらゆるモノが『自分』だった。

地上で血を流し合う者達が自分なら、

彼らが立つ大地も自分で、

それを見下ろす雲もまた自分だった。

自分は人に踏み潰される草花で、

その草花を飛び交う小さな羽虫で、

その羽虫に狙いを定めた鳥で、

鳥の羽が切り裂く風だった。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

遠くから眺めている様な、自分自身が体験している様な、  
遙か昔の出来事の様な、今現在進行している出来事の様な、  
不可思議な現象をアキラは体験していた。

今、アキラには自分が何処に居るのかも判らなかった。

上も下も判らない真つ暗な場所に居るのが判るのに、

同時に明るい太陽の照らす草原に立っているのも判る。

いや、それどころか、自分は今、島のあらゆる所に居るのが判るのだ。

「何だ、これは？」

性質の悪い夢か何か、か……？」

——いいや、夢ではない。コレは記憶だ

思わず呟いた声に、返事があった。

暗い愉悦を含んだ歪な、頭痛と共に聞こえていた「声」で。

「この「声」……ヴィサイアスか!？」

——その通りだ。「器」よ

辺りを、それこそ島中を見回しながら問いかければ、やはり歪な声が返ってくるが、

その姿、もしくは声の発信源となる様な物は何も見当たらない。

現状はさっぱり解らないが、それでも見えない相手に向かってアキラは怒鳴り返す。

「俺を「器」と呼ぶなッ!!」

俺の名前は『アキラ』! 『ヤザキ・アキラ』だ!!」

先程から見せられていた「経験」の所為か、

今現在おかれている異常な状況の所為か、

その声はまるで、自分で自分が誰なのかを確認しているかの様な不安に彩られていた。

しかし、ヴィサイアスからは冷たい声しか返って来ない。

——名など、どうでもいい。お前は「器」だ

「この——ッ!!」

瞬間、怒りに爆発したアキラが再び叫ぼうとするが、それよりも早く、ヴィサイアスの激情が迸る。

——お前は私が入るモノなのだ!

私が全てを破壊する為の道具なのだッ!

その為に、『私が喚び寄せた』ッッ!!

声に籠められた激情は、憤怒であり、悲哀であり、歓喜であり、寂莫であり、どこか祈りにも似た妄執だった。

しかし、そんな物をアキラが認める筈もなく、

どこまでも苛烈で純粹な怒りの炎が、蒼と黒の瞳を輝かせる。

「勝手な事を言うな！」

お前が喚び寄せた!? だから何だツ!!

俺が、素直にお前の言う事に従う訳がないだろうがツ!!」

燃え盛る劫火の如くアキラが言い放てば、先程までの激情が嘘の様に、

まるでブレーカーが落ちて全ての感情が消えてしまった様な、昏い空虚な声が応える。

——愚か者め。今、言つた筈だぞ

『私がお前を喚んだ』のだと

「だから、どうし——っ!?!」

最後まで言い切る事もできず、アキラは頭を抱えて蹲つた。

万力で押し潰される様な、激しい頭痛。

歯を食いしばって痛みに耐えるアキラの頭上から、

まるで、すぐ傍から見下ろしている様に、冷たい声が降りかかる。

——故に、お前には制約が課せられる

流れ出る赤。

肉を斬る感触。斬られる痛み。

地面に広がる赤。

溢れ出す殺意。殺される恐怖。

先程と同じ「経験」が、アキラを襲う。

まるで自分が自分でなくなる様な恐怖、そして苦痛。

「くっ！またコレか——っ。」

この幻はお前の仕事か、ヴィサイアス!!」

——幻ではない。記憶だと言つた

痛みに呻きながらアキラが吼えれば、あくまで淡々とヴィサイアスが応える。

自分が何を言つても、まるで気に留めないヴィサイアスに、アキラが低く唸るように尋ねる。

「記憶、だど？」

——そうだ

かつて存在し、現在存在する、この島の総ての記憶  
共界線（クリプス）の記憶

そして、私の記憶

詠うように、誇るように、大切な物を語るように、ヴィサイアスが告げる。

「そんな物を俺に見せて、どうするつもりだ!？」

——壊すのだ

「な、に……う？」

暗い昏い愉悦を含んだ、恍惚の声。

冷たく凍えた、切り裂かれそうな声。

歪んで溶けて、元の形も判らなくなった狂気の声。

その声に、アキラが凍りつく。

それがまた可笑しいとでも言う様に、ヴィサイアスが饒舌に喋り出す。

——お前は私で満たされ、私はお前に満ちた

そして、その手には鍵もある

ならば、お前は必要ない

器”さえ有ればいい

「ふざけるな！」

勝手に喚び寄せておいて、要らなくなったから壊す!？」

そんな勝手な話があるかツ!!」

再び激昂してアキラが怒鳴れば、逆にヴィサイアスからは冷え冷えとした声が返ってくる。

——だが、お前は力を願った

全てを破壊する、私の力を

そして自ら鍵を手にしたのではないか

「つ!!……俺は、ただ護りたかっただけだ!」

もはや泣き声に近いアキラの叫び。

仲間たちを護りたかった。

護る為には力が必要だった。

しかし手に入った力は、自分を、仲間を傷付ける力だった。



それが悔しくて、我慢できなくて、アキラは叫んだ。  
その叫びに応える様に、声“が舞い降りる。

——そう、僕は護りたかった  
ヴィサイアスとは明らかに違う、柔らかい“人”の声だった。  
声と共に、真つ暗な闇の中でアキラの傍に光が灯る。

「アンタは……う？」

——たとえば、この身がどうなろうと

光は次第に人型となり、やがて明確に一人の人を形作る。

「ハイ、ネル……ハインル・コープス？」

優しい面立ちをした青年。

それは確かに、アルディラに画像を見せて貰った、

アテイとともに話をした、ハインルと同じ姿をしていた。

彼はアキラに答える事無く、一人呟き続ける。

——大切な人達を護りたかった。たとえば……

ハインルの、決意に満ちた柔らかい声に不穏な色が混じる。

それは明らかに歪んだ感情。

——たとえば、このココロがどうなろうと

「……やめろ。」

先程まで声を届けていたヴィサイアスと、同じ歪み。

——タトエ狂気が、コノ身ヲ支配シヨウトモ

「やめろ！」

聞きたくないとばかりにアキラが叫ぶが、その制止にも止まらず、  
それは緩やかに広がっていく。

——全テノ痛ミト悲シミ、ソシテ憎悪ニ心ヲ浸シ

「やめろッ!!」

それは——

——僕自身が狂気ト成り果テヨウト

「やめろ——ッ!!!」

狂気。

——皆ヲ護ル

## 喚び声

ゆらゆらと闇の中を漂っている。

光も届かない深い海の底を流されている様な、  
星一つ無い暗い夜空に浮いている様な、

不思議な感覚。

ここは、何処だろう？

俺は、どうしてこんな所に居るんだろう？

「…………痛ッ!？」

今の状況について考えた瞬間、頭の中に直接ガラス片を叩き込まれた様な激痛が走る。

どうして、と考えれば更に痛みが激しくなる。

耐え難い痛みの中、どうやら現状について考えると痛みが生じるらしいと悟り、

できるだけ何も考えない様にする。

次第に遠退いていく痛みを感じながら、ぼんやりとした考えが浮かぶ。

ここが何処だっていいじゃないか。

どうしてここに居るのかも、大した問題じゃない。

ここは暗く静かで落ち着くし、漂う様なこの感覚も悪くない。

それなら、このままで良い。

何も考えず、ゆったりとしたこの闇を享受しよう。

……………。

……………。

……………おかしいな？

何か、忘れている気がする。

大切な大切な、何か。

ズキンッ

くっ…………、また頭が…………。

この事も考えちやダメなのか？

遠退いていた痛みがぶり返してくるのを感じながらも、考えるのを止められない。

だけど……、でもっ——！

忘れちやダメだ!!

ズキンッ!

俺にとって、何よりも愛しくて、何物にも換え難い、

大切な、大切な、何か。

アレは……………。

痛みでぼんやりとした頭のままに、必死で考える。

すると突然ココで無い場所の映像が、まるでテレビの様に映し出される。

そこは木材でできた部屋で、大きなテーブルが一つ置いてある。

そのテーブルを囲み、見覚えの有る五人の男女と一匹の猫が座っていた。

どうやら会議をしている様で、皆は一様に真剣な表情をしている。

五人の内の、金髪の男が声を荒げる。

「だから、そんな事あいつらに要求できる筈無いだろう!!」

相手がどんなにゲスで、情け容赦のいらぬ野郎どもでも、

アテイは本気で叩きのめせやしねえ!

アキラは剣を喚んじまったら、アキラじゃなくなっちまう!!

解り切ってる事だろうがよ!?!」

アレは、カイル／アニキ／俺／海賊……………?

一人の対象に複数の認識が浮かび上がる。

アレはカイルだ。

だけど、アニキでもあって、自分自身でもあって、人間の海賊だ。混乱の中、金髪の少女の声に意識が移る。

「アニキ、声が大き過ぎるってば!?!」

ソノラ／妹／アタシ……………。

また、訳の判らない認識。

少女の隣の男性が喋る声に、また意識が移る。

「でも、そうしなきゃ叩き潰されるのはアタシたちなのよ。」

スカーレル／ご意見番／幼馴染／アタシ……。

くそっ！頭がおかしくなりそうだ。

……いや、頭がおかしいからコンナモノを見ているのか？

「封印の剣という名の強大な抑止力によつて、今まで我々は有利な立場でいられました。」

しかし、同じ力を持つ『紅の暴君』をイスラが用い始めた事によつて……、

その図式は、もはや通用しなくなつてしまつてしまつています。」

ヤード／召喚士／客分／私……。

もう、うんざりだ。見たくない。

こんなモノを見続けていたら、『俺』が消えてしまう。

それなら、さつきまでの闇の方がマシだ。

そう思った途端、今まで見えていた映像が歪み、薄れ始める。

「アタシたちが束になったところで、まずあのボウヤには敵わない……。」

立ち向かえるのは、同じ力の持ち主であるセンセとアキラだけなのよ。

アキラが戦えないんじや、彼女に頼るしかないわ。」

「それは、そうだけど……でも——つ、それじゃ先生が可哀想過ぎるよ。」

あんなに、戦う事が嫌いなのに……。」

「……畜生がッ!!」

俺に一切気付く事無く続けられていた会話が、次第に遠退いていく。

辺りに闇が戻ってくるのに安堵を感じながらも、

さつきまであんなに見るのが嫌だった映像に、心残りを感ずる。

もう人の形も判らなくなった映像が、弾けて消える。

最後に“紅”が見えた気がした。



揺ら揺らと、緩々と、心地良い闇に沈む。

何も考えず、何も思い出さず、ただ沈んでいく。

どれ位の時間が過ぎたんだろう？

数分の様な気がするし、何年も経った気もする。

このままで良いのかな？

このままが良いのかな？

ココは心地良いけど真っ暗だ。

だから、落ち着く。

でも、昏い闇の中、沈んでいくその先は？

底に着けば判るかな？

ソコに行ってもいいのかな？

沈むって事は、ソツチが下なんだろう。

でも、じゃあ上には何があるのかな？

……。

……。

……誰の、声？

『強い力は、どんなものでも打ち負かす事ができるけれど、

想いを込めた言葉の持つ力は、そうやって打ち負かされたものを、

より強く蘇らせる事ができるって。』

……誰の、声だっけ？

あれ、は……あれは、紅い――。

『だったら……私は、言葉の力を、想いの力を……信じたいな。

打ち負かす力じゃなく、解り合う為の力で守りたいって思うの。

一人でも多くの人の、優しい笑顔を……。』

ああ……、アテイだ。

懐かしい。

まるで何年も会ってなかったみたいだ。

でも、まだ何も終わってない。

イスラの事も、無色の事も、俺の事も。  
アテイはまだ戦ってる。  
なら、俺も行かなくちゃ。  
アテイの所へ。



深い森の一角。  
拓けた場所にソレは『在った』。  
今、その場所で一人の男が立ち尽くしている。  
彼の背後には、何人もの部下が護衛として付き従っているが、  
その存在など意に介することも無く、彼は無防備にソレに歩み寄  
る。

「バカな……。」

始祖達の造りし「召喚の門」が——破壊されるとはッ!?」  
いつも尊大な色を帯びていたオルドレイクの声が、驚愕に塗り替え  
られていた。

何故なら、彼の求める物が一つ失われていたのだから。  
はぐれたちの島の中ほど、森の中にかつて建っていた「門」。  
オルドレイクは遺跡の確保を剣の奪回より優先する事にし、  
手始めに「召喚の門」を調べに来ていた。  
しかし、もはや「門」は無く、在るのはただ瓦礫の山ばかり。

「一体何故、このような事に……?」

「ッ!これは!」

瓦礫へと近付いたオルドレイクはある事に気付く。  
それは、「門」を斜めに奔る一つの直線。  
まるで一太刀で斬られた様な、その断面。

「ふ、ふふふ。面白い。」

何かは判らんが、この島にはまだまだ調べねばならない事があるよ



ろうとしているようだ。

でも、暗殺者たちは数多くの飛び道具を持っていて、みんなは苦戦を強いられている。

「ツ!!?危ない、ミュ!!」

銃口の一つがミュを狙っていて、思わず駆け寄ろうとし

ゴガツ!!

「——っツ!!」

壁の様な物に頭を強打した。

だけど、そんな事に構ってる場合じゃない。

痛みにチカチカする目を必死に凝らして戦場を見れば、

撃たれる寸前で気付いたミュが身を翻して銃弾を避け、ソノラがそ

の射手を撃ち倒していた。

ほっと安堵の息を吐きながら、目の前の光景に手を伸ばす。

掌に感じるのは、冷たく固い壁の感触。

「くそツ!!何なんだよ、コレは!!?」

悪態を吐きながら、俺は見えない壁を叩く。

小揺るぎもしないソレを、忌々しげに睨み付ける。

こんな所で……指を啜えて見てるしかないのか!?

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△

「は、ははは——っ、

何だよ……やれば、こんなにもできるんじゃないか?

虫も殺せない様な顔して、やっぱり君も僕と何も変わらない。

自分の望みの為に、他人を傷付けられる人間だったってワケだ。」

キルストレスに掴まり、ボロボロになった体で、尚も毒づくイスラ。

対するアティは微塵も動揺を見せず、剣をイスラに向ける。

「もう、挑発したって無駄ですよ……。」

「!？」



「貴方の言う通り、今の私は目的の為なら、手段を選ばないつもりです……。」

それが判つたらなら、すぐに剣を捨てて降服して下さい。」

「く——ッ！」

なめるなあアッ!!」

冷たく投降を促す言葉に、イスラは屈辱に顔を歪めて飛び掛る。

その刹那、澄んだ音共に碧の光がアティを包み、その手にシャルトスが現れる。

そして

「——無駄ですッ!!」

「ぐはっ！」

言葉と共に放たれた魔力でイスラは吹き飛ばされ、遂にはその手からキルスレスも姿を消してしまふ。

誰の目から見ても、地に這うイスラにはもう戦う力は残っていない。

「今のは手加減しました。次は、本気ですよ。」

再び冷たく投降を促すアティ。

地に這つたままイスラはアティを睨み付け、そして気付いた。

シャルトスの罅に。

「……認めるよ。勝つたのは君だ。」

だけど、君には僕からこの剣を取り上げる事は、絶対にできない。」

しかし、イスラは勝機に気付きながらも、行動に移そうとしなかった。

薄つすらと笑みを浮かべ、ただ上半身だけ起こし、アティへと話しかける。

「知ってる筈だよ？」

継承者を殺さない限り、この剣の活動は停止しない……。」

そして、僕を殺せるのは、同じ力を持つ君だけだって事も。」

その笑みは今までの人の神経を逆撫でする様な物ではなく、どこか諦めを含んだ儂い笑顔。

「皆の笑顔を守るんだろ？」

「なら、僕を殺してこの剣を奪いなよ？」

「——っ。」

まるで憑き物が落ちた様に穏やかに、イスラは告げる。

「さあ。」

「うああああアアアアアああああアアアアアッ!!」

叫びと共にシャルトスを振り上げるアテイの姿を見上げ、イスラは静かに目を閉じた。

(ああ……これで、やっと……僕は——)

ガシャン

「……!」

硬い音をさせて、シャルトスが地面に落ちた。

「ダメ——っ。」

やっぱり、私にはできないよっ。

貴方を殺せない……。

力づくで終わらせるなんて、私はやっぱり認めたくない……。

「バカだよ……。どうして、君は——ッ!」

顔を伏せて泣くアテイに、イスラは労わる様な、傷付いた様な瞳を向ける。

しかし、次の瞬間。

イスラは険しい目付きになり、飛び上がる。

そして、キルスレスを喚び出した。

「ウオオオオオッ!!」

「——っ!」

カシヤアアアアン!!

正確に罅を突かれ、シャルトスが砕け散る。

「あ……。」

「形成、逆転だね。」

「あ……う？ああ、あ——っ!」

「アアあああああっ!」



……もつとも、お前の仲間を私が助けるとは限らんがな  
絶望的な提案に、アキラは静かに顔を上げる。

「……いいだろう。俺はお前を受け入れよう。」

——ほう

純粹に驚嘆の声を上げる彼に、アキラは毅然と告げる。

「お前は人々の、召喚獣たちの、世界の生んだ闇。

そして、それは俺の中にも在る。

ならばお前を恐れる必要は無い。

お前は、俺なのだから。」

アキラは見た。

いいや、経験した。

かつての、今の戦争を。

彼が生まれるまでの全ての憎しみと悲しみを。

だから、もう恐れない。

——ならば、私を喚ぶがいい

「ああ。今こそ、俺の意思でお前を喚ぼう。

其は守護から生まれた狂気。

其は護る為に存在する常夜の暗黒。

其は平和を望むヒトから生まれた心の闇。

其の身は世界を源に

狂気で溶かし

狂気で叩き

狂気で冷し

研ぎ澄まされた破壊の刃。

流れ出る魔力は暗黒となり

奏でし歌は人々の嘆きと成り変る。

狂気で鍛えし刃は守護の願いを忘れ

全てを破壊へと導ゆく。

我が喚び声に応えよ。『闇の狂皇ヴィサイアス』。」



イスラは驚きに目を見張る。

目の前、空間の歪みから、黒い禍々しい剣が、昏い炎の文様に包まれた腕が、

闇を切り取った様な髪が、現れる。

黒の頑丈そうなブーツ。

黒いジーンズ。

そして、黒のタンクトップ。

全身黒尽くめの服の中、袖なしのベストだけが唯一、メイトルパの碧をしていた。

見覚えのある剣。

見覚えのある服装。

見覚えのある顔。

しかし、決定的に違う、身に纏う黒い闇。

戦慄する。

先日の圧倒的な魔力の暴風を思い出し。

恐怖する。

以前向けられた彼の殺意を思い出し。

紅き剣を握り締め、その身を震わせるイスラの前に、瞼を閉じて双眸を隠したまま、

彼は、『アカツキ アキラ』は、戦場に現れた。



アキラ!?

驚きの余り、自分の目えが見開かれるのが解る。

絶壁の頂上に、紅毛あかげを護る様に現れた人影。

間違いや無い。

ウチが見間違う訳あらへん。

何で……何でアキラがこんなトコに居んねん!?

今は『りぺあせんたー』で寝とるハズやのに——ツ!

この前倒れてから、いつこも目え覚ませへんかったのにツ!

それに……それに、アレはツ!!

あの剣は——!?

まさか、またアイツが!

あのクソツタレが!!

アキラの身体を乗っ取ったんかツ!?

尻尾が、髪の毛が、ううん、それだけやない。

全身の毛がウチの心に反応してザワザワと逆立ってる。

もしそうやったら——許さへん!!

今すぐに飛んでいって、あのクソ剣、ぶっ壊したる!!!

そう思っつて、グツと足に力を込めて飛び上がるうとした時、  
アキ

ラッが目えを開いた。

そうや、間違いない。

アレはアキラの瞳や。

色は黒やけど、アイツの奈落の底みたいな闇色やない。

いつか見た、夜の空みたいいな穏やかな黒。



アキラは、ゆっくりと目を開く。

まるで、暗い所から急に明るい所へと出て来た様に、

始めは薄っすらと、そして次にしつかりと、目を開く。

そして、ゆっくりと息を吸って、吐く。

まるで、深い海の底から浮かび上がって来た様に、鼻から吸って、口から吐く。

アキラの一挙動に、一動作に、イスラの身体が小刻みに揺れる。いつ襲い掛かってくるのか、いつ斬りつけて来るのか、その恐怖が、過剰反応となって現れる。紅い瞳が不安に揺れる。

そして……そして、アキラは「後ろを振り向いた」。

目の前に、イスラが居るにも関わらず。

キルスレスがその手に握られているにも関わらず。まるで、己の前には何の脅威も、危険も、存在しないと言う様に。振り向き、しゃがみ、未だに泣く様に、呻く様に、声を漏らすアテイを見詰める。

黒の瞳に限りない慈しみを込めて。

「アテイ……。」

「うう……。あああああ。」

アキラは、そっとアテイの名前を呼ぶが、

今のアテイから返ってくるのは、意味を成さない呻きだけ。

それを聞いて、アキラは痛ましげにアテイを見詰め、そっとアテイの頭を抱き寄せる。

「ごめん。……ごめん、アテイ。」

俺がもつと強ければ、俺がもう少し早く此処に来てれば、

キミを護れていたのに……。」

アテイを抱き締めたままの、アキラの懺悔にも似た謝罪。

いつも優しい笑顔を浮かべていた綺麗な顔を深い悲しみで歪め、アキラは強くアテイを抱きしめる。

その事に、初めてアテイが反応を返した。

零れ続けた声が止み、戸惑いに瞳を揺らす。

そして、まるで迷子が親を見つけた時の様に、

安心できる場所を見つけた幼子の様に、安らぎに目を閉じる。

ほんの、ほんの一時だけ二人は抱き合ったまま互いに寄り添って、しかし、その静寂を振り切る様に、決意の籠った声でアキラが語りかける。

「アテイ……。」

俺、アテイに言いたい事が、ずっとずっとと言いたかった事があるんだ。

でも、今はまだ言わない。

……待ってる。

アテイが元気になるのを、ずっと待ってるよ。

俺の言いたかった事、アテイに伝える為に。

だから……だからさ、早く元気になってくれよ。」

それを告げると、それだけを告げると、アキラは決然と立ち上がる。

アテイを背に、毅然と前を向く。

敵を倒す為に。

大切な人を、大切な人達を護る為に。

少しでも、自分の望む未来を手に入れる為に。

それは正に「道を切り拓く者」の姿。

「ファルゼン！」

アキラの前方、敵の攻撃を防ぐ盾になる為に、冥界の騎士が立ちはだかる。

「ヤツファ！」

アキラの右側、攻撃を補助する爪として、ユクレス村の護人が並び立つ。

「キュウマー！」

アキラの左側、死角を無くす眼として、風雷の郷の護人が控える。

「アルディラー！」

アキラの後方、戦況を分析して支援する頭脳として、ラトリクスの護人が静止する。

まるで召喚された様に、四人はアキラの声に応えた。

その四人に、アキラは「頼み」を口にする。

召喚の「命令」とは違う、仲間としての「願い」。

「アテイを連れて下がってくれ。」

そんなアキラに、四人は不安そうに、いや、心配そうに声をかける。

「アキラ……？」

「お前さん、アキラ……だよな？」



「アキラ、よね？」

「本当に……アキラ殿、ですか？」

ファルゼンの、ヤツファアの、アルディラの、そしてキュウマの、期待を込めた問いかけに、アキラが安心させるように微笑み、応える。

「ああ、俺だよ。」

アイツじゃ……ヴィサイアスじゃ、ない。」

その言葉に、その微笑みに、四人が心の底から安堵する。

今までの絶望的な状況も、これからの見通しの無い不安も、全てが綺麗に洗い流される。

そんな頼もしいアキラの微笑みに、自然と四人の顔にも笑みが浮かぶ。

だから自然とアキラの「願い」を聞き入れた。

アテイを護りつつ後方へと下がる。

それを見届けてから、アキラは己の唯一の名を喚んだ。

溢れんばかりの信頼と、限りない慈愛を籠めて。

「ミュ。」

反応は間を開けず。

返答も一言。

「遅い。」

いつの間に現れたのか、アキラの左隣に少女が一人。

純白の髪を靡かせ、金の瞳を鋭く光らせる。

その表情には明らかに不満だと書いてある。

恐らく、護衛獣である自分が最後に呼ばれたのが気に入らないのだろう。

そんなミュに、アキラは一つ苦笑を零す。

「ごめん。今度、埋め合わせはするから。」

ミュには邪魔が入らないようにして欲しいんだ。」

ミュはその言葉に訝しげな表情をして、白い耳をクルクル動かす。

その耳がピタリ、とある方向で止まる。

ふん、と詰まらなそうに言ってから、アキラたちから離れる。

了解した、と言う事だろう。

そして、アキラはたった一人と対峙する。

「……イスラ。」

いつもと違う低い声。

「イスラ。」

自分の中に在る、荒れ狂う激しい感情。

「イイイイスウラアアアアアアアツツ!!!」

アキラが吼えた。



「クノン、手当てを！」

「かしこまりました！」

下まで着いた所で、アルディラの指示によりクノンが応急手当を始める。

特に傷らしい傷というのは負っていないので、

瞳孔の収縮や、脈拍の変化、意識の有無をさつと確認する。

その結果、クノンは顔を「顰めた」。

最近、感情らしい感情を出し始めたクノンだが、

やはりこの反応は、皆が危機感を抱くには十分だった。

「俺の背におぶさされ！早くッ!!」

焦りを滲ませながらも、カイルは素早く行動に移る。

その背にアテイを乗せつつも、ウィルの目からは涙が零れ続ける。

「せんせ——っ、せんせえ……。」

「しつかりしなさい！貴方まで泣いててどうするの！」

「さあ！急いでここから……!!」

スカーレルがウィルを叱咤し、ソノラがその手を引いて撤退しようとした当にその時。

彼らの前に強大な壁が立ち塞がった。

「……。」

「オールドレイク……セルボルト……。」

かつての師、そして現在の敵。

オールドレイクの名を、ヤードが愕然と呟いた。

現状では彼に太刀打ちできる者は、魔剣の所持者であるアテイかアキラのみ。

余りにも過酷な状況に、皆が絶望の二文字を思い浮かべる。

しかし。

「邪魔をするなら、誰であろうと切り捨てるのみ！」

「この身が朽ちても邪魔はさせません!!」

そんな雰囲気を作り出す間に、ミスミとファリエルが躍り出る。

薙刀と大剣をオールドレイクに向け、毅然と向かい合う姿からは、

『護る』という意思を感じさせる。

「吼えるな……。」

しかし、オルドレイクはまるで関心がない様に、ちらりと一行を一瞥しただけで、すぐに視線を逸らした。

「壊れたガラクタに、もう興味など無い。」

「な!？」

「——っ。」

続いて吐き捨てられた言葉に、スバルとミスミが驚きと怒りを表す。

しかし、そんな二人ですらどうでもいいと言う様に、オルドレイクはイスラを、イスラだけを睨みつける。

「どういうつもりだ？」

「同志イスラよ。」

「……。」

オルドレイクは怒りを滲ませながらイスラに問いかけるが、

イスラはアキラと向き合ったまま、視線を向ける事すらしない。

その事に、更に苛立ちを募らせながらも、オルドレイクは続ける。

「奪回すべき剣を破壊してしまうとは、

今までの功績だけではこの失態、見逃す訳にはいかぬぞ……。」

「五月蠅い！」

今はそれ所じやないんだよ!!」

しかし、叱責の言葉を告げていた筈のオルドレイクが、逆に激しい怒りをぶつけられる。

予想外の反応に、一瞬オルドレイクが呆気に取られた様にぽつりと返す。

「……何だと?」

「その通り。よく解ってるじゃないか、イスラ?」

しかし、それに返答したのはイスラではなく、アキラ。

アキラは口の端だけでイスラに不敵に晒い掛け、その後にチラリとオルドレイクに視線を向ける。

「だけど、やっぱり外野には黙ってて貰わないとな?」

「ミュー!そいつをこっちに近付けない様にしててくれ。」

「任せとき！」

「こんなオツサン、ウチ一人で十分や！」

アキラからのお願いに、ミュが嬉しそうに、楽しそうに、オルドレイクの前に立ちはだかる。

その不敵な態度に、不遜な態度に、遂にオルドレイクの眉が寄せられ、顔が朱に染まる。

「こ、のっ——無礼者め等がツツ!!」

「殺せ!!ここに居る者共を皆殺しにしろツ!!」

「「「シヤアアアアツ!」」」

オルドレイクの自棄気味の命令に、紅き手袋の暗殺者達が奇声を上げて押し寄せる。

その数は、明らかにミュの様な少女一人に何とかできる数ではない。

しかし、そんな物は一向に気にした風も無く、ミュは不敵に笑ってみせる。

「はっ!やれるもんならやってみい!!」



「お前の願い、叶えてやるよ。」

「……何だつて?」

互いに魔剣を構え、静かに向かい合っていたアキラとイスラ。不意にアキラがイスラに声をかけた。

告げられた内容に、イスラは戸惑いと困惑を見せる。

そんなイスラの様子に、ふっと笑みを浮かべながら、アキラは核心とも言うべき部分を告げる。

「死にたいんだろう?お前。」

「っ!!」

「どうして、ソレを!?!」

驚愕と共に、半ば叫ぶ様に問い返すイスラ。

アキラから返ってきた答えは、場違いな程に優しい物だった。

「解るさ。お前を視ていれば。」

その優しさに、いつの間にかイスラは剣を降ろしていた。

まるで剣の、命を奪う物の重さに耐え切れなかった様に。

しかしイスラは、グツと奥歯を噛み締め表情を引き締め、

再びキルストレスをアキラへと突き付けて問いかける。

「……そうだとしても、君に、僕が殺せるのかい？」

あのお人好しの先生の仲間の君に！」

どこか覚悟の様な悲壮な願いを感じさせるイスラに、アキラは自然体で答えた。

何の気負いも無く、当然の事を答える様にあっさりど。

「殺せる。」

その為の武器も、此処に在る。」

「……黒い魔剣、か。」

目の前に掲げられたヴィサイアスを見て、イスラは目を細め、溜息を吐く様に呟く。

そして、目を閉じて俯いた後、屹然と顔を上げると、再び狂笑の仮面を被り叫びを上げる。

「——いいよ。」

殺し合おうよ!!アキラ!!!」

「今、楽にしてやるよ。イスラ。」



黒い刃と紅い刃が噛み合う度に、火花とはまた違った魔力光が飛び散る。

それはやはりそれぞれの刃と同じ色で、時に黒く、時に紅く二人の姿を染め上げた。

「数合、いや数十合だろうか？」

アキラとイスラが切り結び始めてから幾度も光を散らした魔剣同士のぶつかりも、

ついに終わりを迎えた。

そして話は冒頭の時へと戻る。

「ぐツ!？」

……あ、ははは。ホントに、殺してくれるんだね。」

その胸から背にかけてをヴィサイアスに貫かれながらも、イスラは笑みを見せる。

アキラはイスラを右手で刺したまま、左手でイスラの肩を抱き寄せる。

行われた行為とは真逆に、とても優しくアキラが囁く。

「ああ。お前は死ぬ。」

……だけど、安心しろ。

俺は、お前の願いをちゃんと解ってる。」

「……………」

「俺は、お前を忘れないよ。」

お前を、殺した事を忘れない。」

「ツ!!」

静かにアキラの言葉を聞いていたイスラが、動揺に揺れる。

本当に——本当に、自分の望みを理解してくれていた喜びに。

「お前は、俺が初めて殺した人。」

俺の罪。

そして、 “友達” だ。」

「ツツ!!」

はは、ホント……君たちって、どこまでもお人好しだね。」

まさか、まだ自分の事を “友” と呼んでくれるとは。

驚きと共に、先程の喜びを超える歓喜に、イスラの頬を涙が伝う。

「だから、安心して眠れ。」

「うん、そうだね。」

今度こそ、ゆっくり、眠れそうだ。」



友人の腕に抱かれ、安らかな表情を浮かべながら、イスラは静かに目を閉じる。

その手からは音もなくキルスレスが消えていく。

力なくもたれ掛るイスラを、優しく穏やかに見詰めながら、アキラは別れの言葉を告げた。

「お休み、イスラ。」

## 救い

無機質な白い病室で、弟の暖かな手を握りながら思い出す。  
背から這い出る黒い剣。

力なく倒れてゆくイスラ。

それを見下ろしている、黒い双眸。

彼ならば、アキラならば、何とかしてくれと何の根拠も無く思っていた自分は、

その光景を見ても何が起きたのか解らず呆然としていた。

遅れてやってきた理解は、私に悲鳴を上げさせた。

普段からは考えられない様な弱々しくも甲高い声でイスラの名を呼びながら、

私はイスラへと駆け寄る。

傍目も気にせず涙を零し、その身体を抱き起こしながら必死に呼びかける私に、

優しい声が降り注いだ。

「大丈夫。

イスラなら生きてるよ、アズリア。」

その声に、いつものアキラの優しい声に、私は、はっと顔を上げる。

するとそこには、黒くなってしまうているが、以前と同じ優しい光を宿していた双眸で、

以前と同じ優しく微笑んでいるアキラの姿があった。

回想に沈んでいた意識を再び、眠り続けるイスラへと向ける。

「……魔剣は心の刃。

だから身体を傷付けずに、心だけを、そして憑依したモノだけを、斬る事ができる。

アキラはそう言っていた。

事実、お前はこうして生きている。」

私は、そっとイスラの胸の上に手を置いた。

そこに、静かに、しかし確かに鼓動する胸を感じ、安堵に涙が滲む。「お前は、もう、自由なんだぞ。イスラ。」

長い間お前を苦しめた憑依したモノも、歪んだ願いもなくなった。だからお前は、これから自分の意思で走り回り、自分の思い通りに生きていく事ができる。」

不意に私の瞳から、涙が一粒零れる。

弟の今までの不運を嘆いてか、これからの幸福を祈ってか、

それは私自身にも解らなかつたが、優しさという物から来ているのは間違いないだろう。

何故なら、私は微笑を浮かべているのだから。

「イスラ。」

アキラから伝言を預かつてるんだ。

『このバカイスラ!!本気で俺が“友達”を殺すと思ったのか!?

見くびんな!俺は“友達”は見捨てない!!

例えお前が嫌だつて言つても、無理矢理助けてやる!

それから色んなトコを連れ回してやる!

だからツ……だから、早く目を覚ませよ。待つてるから。』

なあ、イスラ?良い友達ができたな?

私も待つてるから、早く目を覚ましてくれ……。』

海賊達から借り受けた船の一室で、潮騒を耳に、潮風を肌を受けながら、

穏やかに眠り続ける弟の目覚めを私は待ち続ける。



海賊船の食堂で、一様に沈んだ顔で黙り込んでいる面々。

それぞれの視線の先は、テーブルの上の物に固定されている。

一見するだけで判る、ガラクタ。

誰が見ても判る、何の役にも立たないだろうと。

碧色の欠片。

砕け散った、シャルトス。

しかしソレは、あの戦いでミュを始めとする護人達に行く手を阻まれていたオールドレイクが、

イスラが倒されたのを見て退却していったその時に、ウィルが拾い集めていた剣の欠片。

そして、アテイの心の欠片。

「……しっかし、集めたはいいいけどよ。どうすんるだ、コレ？」

皆の心情を代表する様に、カイルが溜息を吐く。

しかし、当然の事ながら誰からも答えもない。

集めようと提案したウィルとて、明確な対策があって提案した訳ではないのだ。

「……ただ、僕はどうしてもコレを取り戻したかっただけです。

だって封印の剣は持ち主の心の剣なんでしょう？」

それが折れたから、先生はあんな風になった……。

それなら折れた剣を修復できれば、先生の心だって治せる筈だと思っただけです。」

ウィルの下を向きながらの独白に、

スカーレル、ソノラ、ヤードが、眉を寄せ、あるいは溜息を吐きながら続く。

「——とは言っても、ねえ。」

「肝心の修復ができないんじゃないや……」

「……どうしようもありません。」

結局、堂々巡りに陥ってしまうカイルたち。

その様子を扉の外から聞いている人物が居た。

それは、心を居られた筈の、部屋に引き籠もっている筈の、話の渦中の人。

アテイだった。

何故、アテイがそこに居たのか？

それは、咽が渴いたからかもしれないし、陽の光や風に誘われてかもしれない。

もしかしたら、誰かを捜してかもしれない。  
ただ何となく、という事もあるだろう。

しかし、今はそんな事は問題ではない。

アテイが皆の話を、想いを聞いてしまった事が問題だった。

アテイは、皆が自分を心配してくれているという喜びと共に、

また戦わなければならぬのかという恐怖を感じていた。

砕けた心のままに、ちぐはぐな思考のままに。

そして、

アテイは、

ソコから逃げた。

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△

走る。走る。走る。

何処に向かっているのかも判らないままに。

何を求めているのかも解らないままに。

ただ、アテイは森の中を走っていた。

いつも身に付けている白い帽子も、白いマントもなく、

紅い髪を振り乱しながら、木々の間を、落ち葉の上を、彷徨う様に

走っていた。

時に木の根に足を取られながら、枝に行く手を遮られながら、それでも走り続けた。

何かから逃げ出す様に、何かを追い求める様に。

そして、遂に、辿り着いた。

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△

私がそこに着いた時、目に飛び込んで来たのは一枚の絵画。あの人が、アキラさんが、水晶に囲まれたその場所で、まるで厳かな絵画の様に一人佇んでいました。

ただ、木漏れ日を見上げているその姿が、まるで泣いている様で、まるで懺悔している様で、祈りを捧げている様で、近付いてはいけないように思えました。

でも、

何が哀しいのか、

何を悔いているのか、

何に祈っているのか、

それが知りたくて、アキラさんの事が少しでも知りたくて、

私は今の自分の状況も忘れて、話しかけてしまいました。

「——アキラ、さん。」

「アテイ?どうしたんだ、こんな所で?」

今は安静にしてなきゃいけないんじゃないやなかったのか?」

神聖な物を汚してしまいそうで、躊躇いながら声をかけた私に、

アキラさんはいつもの様に優しい笑顔で応えてくれます。

それはただの日常だった筈なのに、今はとても遠くにある物の様で、

掛け替えも無く大切な物の様で、嬉しくて、ただ嬉しくて、

気が付けば、さつきまで考えていた事も忘れてアキラさんに抱きつ

いていました。

「アキラさん!アキラさん!!アキラさん!!」

子供の様に泣きじやくり、アキラさんの胸に縋り付いて、

まるでそれが奇跡を起こす呪文であるかのように、アキラさんの名前

を呼び続ける私に、

アキラさんは驚きながらも、優しく抱きしめてくれました。

「大丈夫。大丈夫だよ、アテイ。」

ここには怖い物は何も無い。

ここにはアテイを傷付ける物は何も無い。

俺が傍に居るよ。

怖い物からも、痛い物からも、俺が護るから。

俺が、アテイを、護るから。

だから、大丈夫。」

優しい声で囁きながら、軽く背中を叩いてくれるアキラさん。

むずがる子供をあやす様なその仕草に、凄く安心して、

私はアキラさんの腕の中で、何処よりも安全な、何よりも暖かな、誰よりも愛しい人の腕の中で、

静かに泣き続けました。

小波さざなみだった心が落ち着くまで甘えられるだけ甘えて、

触れられるだけ触れて、泣けるだけ泣きました。

そうしてやっと涙が止まり、今の状況を考える余裕が出てきた所で、

私は凍りついた様に動けなくなっていました。

あ、あわわわ!?!

どどど、どうしよう!?

わた、私、私ったらアキラさんにくくくつ!?

私はさつきとは違う動揺で、慌て始めてしまいました。

その変化を感じ取ったのか、アキラさんが私の名前を呼びました。

「アテイ?」

「はっ!あ、ああああの、あのゴメンなさいッ!!」

咄嗟に謝って、腕を突き出す様にしてアキラさんから離れます。

って、こんなことしたらアキラさんに失礼なんじゃ!?

嫌がつてるなんて誤解されたらどうしたら!?!

でも、だ、抱き締められたままなんて、そんな!?

混乱に更に拍車が掛かってしまい、

もう、何をどうしたら良いのか判らなくなった私の耳に、笑い声が届きます。

「ぶ、くくく。」

「はえ……?」

「あははは……ごめんごめん。」

でも、いつも通りのアテイで安心した。」

そう言つて、にっこりと嬉しそうに笑うアキラさんは、

この光の差す水晶の広場と相まって、とても綺麗で見惚れてしまいました。

それに、アキラさんの笑顔はいつも綺麗ですけど、今見せてくれる笑顔は、

まるで小さな子供がする様な純粋な物で、私まで思わず笑顔になつてしまいます。

……笑顔？

あれ、私どうして

「———どうして、私は……私の心は、壊れちゃった筈なのに……？」  
さつきから泣いて、慌てて、笑つて……。

まるで何事も無かつたの様に反応する私の心。

どうしてと、呆然と呟く私に、アキラさんが優しい声で応えてくれます。

「アティ。心は、人の心は傷付き易くて脆い物だけど、  
それでも、強くしなやかに出来ているから、

傷付いても、壊れても、必ず立ち直る事ができるから。

だから、きつとアティはここに居るんだよ。」

「———でもっ！私の剣は、シャルトスは、壊されてしまったのに……。」

あんなに……あんなに痛くて苦しかったのに？」

「そうだね。心が折れてしまうのは、とても辛くて苦しくて……。」

絶望は深い闇に落ち行く様で、二度と立ち直れない気がするけど、  
でも、それでも……心は、例え折れても、壊れても、無くなつてしまつた訳ではないから、

深い闇の底にも光は届くから、きつと人は立ち上がれるんだと思う。  
う。」

「……アキラさん。」

あの時を、剣を折られた瞬間を思い出して、

思わず反発してしまつた私に、アキラさんは悲しそうな顔を見せました。



もしかしたら、アキラさんにも似た様な経験があったのかも……。  
だけど、続けられた言葉は暖かく、力強い物で、すとん、と自分の  
中に入ってきました。

「それに、ね？一人で駄目でも、二人なら大丈夫。

アテイが傷付いて倒れたら、俺が助け起こしてあげる。

闇の中に居るなら、照らしてあげるよ。

そうしたら、きっとアテイは立ち上がってくれる。

前より強くなって立ち上がってくれるって、俺は信じてる。」

ふわり、と微笑んで励ましてくれるアキラさんの言葉に、

心が、壊れてしまった筈の、私の心が震えます。

「ツ!!アキラ、さん……。」

そうですよね。

『想いを籠めた言葉は、打ち負かされたものを、より強く蘇らせてくれる。』

自分の言った言葉でした。

なら、ちゃんとやってみせないと!

私、先生ですもの!」

「よし…その意気だ!」

頑張ろう、アテイ!!一緒に!」

「はい!」

差し出された手をしっかりと握り、精一杯の笑顔で応えます。

ありがとうございます、アキラさん。

貴方の言葉、私の心に届きました。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

深い深い森の中。

水晶が生い茂る一角で、青年は一人佇む。

静かに木漏れ日を見上げているその姿は、

まるで泣いている様で、  
まるで懺悔している様で、  
祈りを捧げている様で、  
誰も近付けない、聖なる一枚絵。

哀しみの溢れる瞳を揺らさずに、ただ葉の間から漏れる光を見詰  
め、彼は唇だけを動かした。

「すまない。」

……すまない。

……すまない。

あんた達を傷つけた。お前達に傷つけさせてしまった。  
テメエ達に喚ばれたのに護れなかった。

そなた達を喚んだのに還してやれなかった。

君達を殺してしまった。貴殿達に殺されてしまった。

貴方達を残してしまった。俺達だけが残ってしまった。

すまない。

ゴメンなさい。

申し訳ありません。」

彼の口から出て来たのは、謝罪の言葉。

しかしその内容は支離滅裂で、

その声は、一つの口から出た筈なのに、別人が同時に喋った様にぶ  
れていた。

青年は誰も聞く事の無い懺悔を続ける。

「すまない。」

壮年の男性の声で、

「ゴメンなさい。」

少年とも少女とも判らぬ、幼子の声で、

「申し訳ありません。」

涼やかな女性の声で。

銀の髪も、蒼と黒の瞳も、間違いなくアキラのモノだというのに、  
今、そこに居る青年は、アキラだと言い切る事ができない。

もし呼ぶとするなら、  
“彼”と言うしかない。

“彼”の独白は続く。

しかし、今度は悲哀から一転した激情を込めて。

「憎いー」

……憎い!!

……憎い!!!

刃を向けてくる奴らが!

仲間を傷つけるお前らが!

好き勝手に喚び出すテメエらが!

苦労して喚んだのに役に立たないそなたらが!

君達を殺した奴らが!

我らを殺した貴様らが!

のうのと生きているお前らが!

皆が居ないのに生きている俺達が!

憎い!

ムカつく!!

腹立たしい!!!

“彼”の口から溢れ出るのは、憎悪の言葉。

そしてその声はやはり、一つの口から出た筈なのに、別人が同時に喋った様にぶれている。

先程と違うのは、まるで地の底で煮え滾る溶岩の様な熱さ。

殺意を、憎悪を、怨嗟を、滴る悪意をこめられた言葉。

ギラギラと暗く光る瞳。

しかし、それも束の間。

ブレーカーが落ちる様に、急に“彼”から全ての激情が消え去る。

噴火する火山の様な悪口は途絶え、

瞳からはあらゆる光が消え、虚ろな穴だけが覗いていた。

ゆつくりと瞼が閉じられ、穴が塞がっていく。

そして、深く、長く、息を吸い、吐く。

開かれる瞼から現れたのは、決意の光。

しっかりと“前”を見据えたその蒼と黒の瞳は、間違いなくアキラ

の物。

先程までの冷たい悲哀や、焼かれる様な憎悪はなく、その瞳には、悲しみや怒りを飲み込み、それでも『前』へ進もうとする意志があった。

「すまない。」

皆の悲しみも、怒りも、寂しさも、恨みも、

全部……全部、解ってる。この身に刻んでる。

でも、それでも……俺はこの世界で、皆と生きていくよ。

この世界が、そんなに優しいモノじゃないって事も、

全ての生き物が、誰も彼も綺麗な心じゃないって事も、

よく、解ってる。

俺自身だって、この身の内に黒々としたモノを抱えてる。

でも、それでも……

俺は、この醜くも美しい世界で、劣悪で善良な皆と、一緒に生きていくよ。」

哀しいのだろう、悔いているのだろう、

怒っているのだろう、憎んでいるのだろう。

だが、それすらも乗り越えて、アキラは微笑んでみせた。

その姿はきつと、どんな巨匠にも描けぬ美。

過去にこの島で起きた全てを視て、全てを経験して、全てを感じた上で生み出された決意は、

自分の胸の中にある。

だから、アキラは願いを捧げた。

神にでも、何にでもなく、ただ、全てが少しだけ優しくなればいと。

そんな彼に声をかけるものが一人。

「——アキラ、さん。」

「アティ？どうしたんだ、こんな所で？」

今は安静にしてなきゃいけないんじゃないやなかったのか？」

心の壊れた筈の彼女を癒し、自身の中に燃える決意を、彼女にも燃え移らせて。

「よし…その意気だ！

頑張ろう、アテイ!!一緒に！」

「はい！」

彼らは手を取り合って歩き出す。

共に生きる為に。

## 再び立ち上がる

アキラとアテイが手を取り合い、森を抜けてくる。

まるで、その森自体が二人の迷いその物だった様に、

森から出てきた二人は迷いを振り切つてすつきりとした、そして力強い笑顔を見せている。

しかしそんな二人を出迎えたのは仲間達の暖かい声ではなく、敵の剣士の威圧する様な声だった。

「捜して回る手間が省けたわ……」

砕けたとはいえ、魔剣は魔剣。使い道もあろう。

さあ、大人しくそれを渡して貰おうか。」

海賊船の前で、傲然と言い放つウイゼル。

その前には布に包まれたシャルトスの欠片を抱き締め、キツと相手を睨み返すウイルが居た。

傍らには唸り声を上げるテコと、冷ややかな瞳をしたミュも居る。

ウイルたちは崖下からシャルトスを拾い集めてきたらしく、

随分と草臥れた格好をしていたが、威勢だけは失っていないかった。

「貴方に渡す位だったら、捨てた方がマシだね！」

「そや、大体ヒトが苦労して集めたモンを横から搔つ攫おうやなんて、虫が良すぎるんやないか？」

今にも飛び掛る勢いで言い切つたウイルとミュに、

ウイゼルが無言のまま刀に手をかけようとした時、

小さな二人を背に隠す様にアテイとアキラが割つて入った。

「ウイルくん。どいてください。」

「ミュも、ご苦労様。」

「先生!!? 兄さんも!!」

「アキラ!!」

「ほう……」

突如として現れた二人に喜びの声を上げるウイルとミュ。

そして、二人の顔を見て感嘆の声を漏らすウイゼル。  
アティは、ちらりと後ろを見遣り、微笑んで見せると屹然とウイゼルを見据える。

「これは、貴方達が好きにしているいい物じゃ、ありません。」  
言い放ち、ショートソードを手取る。

何の変哲も無い、ただのショートソードを。  
それに倣う様に、アキラも不敵に笑いながら刀に手をかける。  
こちららも魔剣を喚び出すつもりはないようだ。

嘗められていると感じたのか、ウイゼルはぎろりと眼光を鋭くして  
問いかける。

「その様な剣で、俺を止められると思うておるのか？」

「この我が居合いの技を。」

「それは、分かりません……。」

でも私は、もう気持ち曲げたりしません！」

凄まじい威圧をかけてくるウイゼルを前に、アティは自分の気持ちを、  
決意を、言い切った。

凛々しい顔付きで、口元に笑みを浮かべてみせるその姿は、  
まるで隣に立つ誰かの様で、当の本人は変な所が似てきたものだ、  
と苦笑する。

まあ、その事に若干一名の娘がむむつ、と眉を寄せていたが。  
対してウイゼルは、ふっ、と笑い刀から手を離す。

「敗北を経て、漸く武器と心を重ねるに至ったか……。」

「え……？」

完全に戦闘態勢を解除したウイゼルに、アティは驚きの声を上げる  
が、

ウイゼルは全く気にする事もなく、更に笑みを深めた。

「面白い……。」

久しぶりに、見たいと思える素材に出会う事ができた。」

「——何を、企んでいるんですか？」

突然の態度の変化に、ウイルが睨みを効かせる。  
アキラとミユも隣で怪訝な顔をしてウイゼルを見やる。

しかし、老剣士はまるで気にした風も無く、平然と言い放った。

「その剣を修復してやっても良い。」

そう言っておるのだ。」

「!?」

「へえ……。」

皆がウイゼルの申し出に驚く中、アキラだけが面白そうにウイゼルを眺める。

そこで当然、アテイから疑問の声が上がる。

「で、でも!? 貴方は無色の派閥の一員じゃ……?」

「使い手の意思を体現する最強の武器を、この手で作り上げる。」

俺が望むモノは、それのみだ。

志を同じくして無色の徒になった訳では無い。」

アテイの疑問に答えるウイゼルは懽然としており、不満を隠そうともしていない。

どうやら無色の派閥の者達と一緒にされるのは、お気に召さなかったらしい。

更にウイゼルの独白は続く。

「オールドレイクの狂気。」

それを武器に込める為に、俺は行動を共にしてきた。

しかし、同時に見たくなかったのだ。

狂気に立ち向かおうと足掻き続けるお前の意思が、それに勝てるのか否かを、な……。」

ぴたり、とアテイを見据えて、ウイゼルは面白そうに笑う。

その物言いが気に入らなかつたのか、その表情が気に入らなかつたのか、

ウイゼルが皮肉る様に尋ねる。

「興味本位って事ですか?」

そう言っつてウイゼルを睨み付けるウイゼルを見て、

唐突に教育的指導の使命感に燃えた訳でもないだろうが、

アキラがウイセルの頭をぽんつと叩き、嗜める。

「こくら、ウイセル。」



そんな言い方ばかりしていると、ビジュミみたいな大人になるぞ？」  
「えう!？」

アキラの例えが余程嫌だったのか、奇声を上げるウィル。傍で見ているとほのぼのする様なやり取りだったが、

ウィゼルはその漫才の様な掛け合いをする二人は無視する事にしたらしく、

アテイとの話を続ける。

「信じるも、信じないも、お前の自由だ。

だが、敢えて言おう。

力無き意思では、意思無き力は止められはせぬ、と。」

「——っ。」

「さあ、どうする?」

その言葉が確信を得て居るが故に返答に詰まるアテイに、ウィゼルはが急かす様に問いかけてくる。

数瞬、視線を彷徨させたアテイはどうするかを決めたらしく、一度頷く様に頭を動かしたが、ふと隣に居るアキラに話を振ってきた。

「アキラさん……どう思いますか?」

「いいんじゃない?」

俺達にとつてはメリット——あく、利点が多いし。

あつちに有利になる事なんて、魔剣の構造が判る位だろうし。

いや、キルストレスでそれも調べ終わってるか。

となると、ホント魔剣を打つ練習ができる位じゃないか?」

随分あつさりと答えを返され、アテイとウィルは軽く驚いていたが、

ミュは腕を組んでうんうんと頷き同意を示す。

対するウィゼルは、その内容に苦笑を浮かべた。

「ふん、随分と手厳しいな。」

「そりゃアンタには、随分とこっ酷くやられたからね。」

以前斬り結んだ時の事を言っているのか、アキラがにやりと笑って返せば、

ウイゼルも同じ笑みを返してくる。

「抜かせ。その後には辺り一帯薙ぎ払ったのは誰だ。」

「あははは。それを言われるとなあ。」

「恥ずかしげに頬を染め、頭の後ろを搔くアキラ。」

まるで友達同士の様なその会話に、何か思う所があったのか、

アキラはふと手を顎に当てて考え込む。

「うくん……、結構アンタは話せる人なんだ。」

それなら、一つアドバイス——じゃない、助言しとこうかな？」

「助言？」

突然会話の流れを変えてきたアキラに、ウイゼルが怪訝な顔で聞き返す。

対するアキラは一步ウイゼルへと踏み出した。

態とか、それとも無意識にか、それは判らないが、

しかし確実に、アキラはアテイ達から表情が見えなくなる位置に立った。

そして、蒼と黒の瞳を凍て付かせ、口の端だけで笑みを浮かべると、甘く優しく、怖気を誘う言葉を口した。

「ああ。とても役立つ助言を、な。」

ウイゼル・カリバーン——引き際を、見誤るなよ？」

「ッ!!」

ウイゼルは見た。

アレの瞳は『今すぐ全てを壊したい』と悲鳴を上げていた。

ウイゼルは聞いた。

アレの、相手を気遣う振りをした脅迫を。

「俺は……思い違いをしていたのかもしれない。」

コレに比べれば、オールドレイクの狂気など、ただの子供の我侭だ。」

ウイゼルの背には戦慄が走り、米神には冷たい汗が流れる。

恐怖が老剣士の体を絡め取り、手も足もぴくりとも動かない。

しかし、その恐怖を取り除くかの様に優しい女性の声が届いた。

「私は、貴方を信じます……。」

どうか、この剣の修復をお願いします。」

「先生っ!？」

ウイゼルが黙り込んだのを、会話が途切れたと判断したアテイの声だった。

アテイはアキラに倣う様に一步前に進み出て、ぴたりとウイゼルと目を合わせて告げた。

その内容にウイルが驚くが、アテイの意思は変わらない。

「この人の言う通りよ。」

気持ちだけで戦っても、勝てる保証は無い。

負けたくないの。

護りたいものがあって、信じたいものがある。

それがはつきり解った今だから。

もう、負けたくない。

曖昧に笑って、自分を誤魔化したくない。」

その声を聞いて、やっと金縛りの様な状態から解放されたウイゼル。

そして、続けて語られたアテイの想いを、じっと瞳を見詰めながら聞いて、

ふう……と安堵の息を吐く事ができた。

世界にあんな狂気が在ったとしても、光は失われないのだと。

それとともに、尚更アテイの剣を鍛えてみたくなる。

「良い目だ……。」

ならば、この俺もその輝きに応えられるだけの腕を振るって見せようぞ。」

「お願いします。」

ウイゼルの力強い承諾に、アテイもぺこりと頭を下げて応えた。

「せやけど、どうやって修復するんや?」

「こない辺鄙な島やったら、鍛冶場も道具もあらへんやろ?」

「んん? そう言えばそうだな。」

これだけ盛り上げといて、『此処じゃ出来ないから一度島を出る』なんて言うなよ?」

漸く纏まった魔剣修復の話に、今まで黙って話を聞いていたミュが



「ウチは知らん。なーんも知らんでえ。」

呆然とそのやり取りを眺めていたアテイとアキラの横で、  
ミユは大きな耳をぱたりと伏せてしゃがみ込み、口を両手で隠して、

見ざる言わざる聞かざるを實行していた。

どうやら、以前言われたメイメイの言い付けを守るつもりらしい。  
数分ほどして工房の確認が終わったのか、ウイゼルが店先に戻って来る。

そしてアテイの前に立つと、重々しく告げた。

「俺がこれから打つ剣は、今までの物とは似て異なる代物だ。

遺跡の意思ではなく、お前の意思を核として、この剣は力を振るう。

お前の心の強さがそのまま剣の力へと転じるのだ。」

「私の心の強さ……。」

噛み締める様にアテイが呟けば、ウイゼルが一つ頷いて返し、説明を続ける。

「確かにお前は迷いを振り切つてのけた。

しかし、それだけではまだ十分ではない。

確たる物を捜せ。

お前がこの剣へと籠めるべき物を。

それが魂となつて初めて、新たな剣は完成するだろう。

俺はただ、その手伝いをするだけだ。」

「(剣の魂……籠めるべき物……。)

私の中の、確たる物……。それは、きつと——。」

確かめる様に何度も反芻するアテイ。

そして前を見据えるその瞳には、眩いばかりの光があった。

「——その様子じゃ、どうやら捜し物はもう見付かつてるようね。

なら、会つてらつしやいな。貴方が今、思い描いたその人に……。  
きつと、その人が貴方を導いてくれるわ。」

「はいっー。」

メイメイの予言めいた言葉に元気良く返事をし、アテイは隣りへと視線を注いだ。



る。」

目を見開き、真剣な面持ちで、アテイはアキラの言葉に聞き入る。自分の目指す物を、想い人が理解してくれている。

その事が嬉しくて、アテイは両手で口元を押さえながらも、瞳に涙を浮かぶのを堪える事ができなかった。

そんなアテイを見て、アキラは涙を止める様にそつと頬に触れ、優しく微笑みかける。

「それはきつと、悲しい事だ。

結局、最後には力が全てだと、認めてしまうみたいで。

だから、アテイには今のままでいて欲しい。

皆の笑顔を守る為に頑張る、そのままのアテイで。」

アキラの笑顔に、そしてアキラの手の温もりに優しさを感じ、涙で頬を濡らしたまま、アテイは綺麗な笑顔を浮かべる。

「ありがとうございます。」

私、自分が忘れていた物が何か、解った気がします！

頑張りましたよ。

もう一度、皆が笑顔になれる様に。」

(やつと……、解った気がする……)

私が、望んでいた物。

本当に護りたかった物が、何だったのか、が。

それは、正しい答えじゃないのかもしれない。

独りよがりのワガママと、何も変わらないのかもしれない……。

だけど、今、これだけは、はつきりと言い切れる。

私の答えは、これしかないんだって!!

笑われても、拒まれても、それでも……それが私なんだもの。(

アテイは笑顔のまま、アキラの胸にそつと寄り添い、その鼓動に身を任せた。

そして、アテイを包む様に優しくアキラの腕が背中に回される。

今、この時は、二人だけ。

この静かな世界に、互いだけを感じていた。



やがてアティは真っ赤な顔でアキラの顔を下から見上げると、  
あたふたしながら大きな声で宣言した。

「それで、ですね。あのーえつと……その、

私——私はっ！ずつと……貴方の、アキラさんの傍に居たいんです！」

赤い顔のまま、何とかそれだけ告げた後、アティは表情を隠すようにアキラの胸に額を当てる。

「……アキラさんの事が、好きだから。」

そして消え入るような声で、伝えられた想い。

アキラは無言で、アティの背中に回っていた腕に力を込めて、抱き締めた。

まるで二人の間の隙間を無くそうとする様に、まるで一つになろうとする様に。

そして、アティの耳に囁く。

「好き、だけ？」

「え？」

悪戯を思い付いた子供の様な無邪気な顔で尋ねてくるアキラに、アティは戸惑い、瞳を揺らす。

そんなアティが可愛くて堪らないという様に、アキラは更に囁く。

「俺はアティの事、愛してるよ。」

「っっっ!!／／／」

ボンツと顔から湯気が出る位に顔を赤く染め、アティはまたあたふたと慌て始める。

そのまましばらく、アキラの腕の中で恥ずかしさにじたばたと身悶えし、

「うっつ」と涙目のままアキラにしがみつく。

「——私も、愛してます。」







同じ様に眩いばかりの決意に満ちた顔で頷き返す。

「口にする程簡単ではない事は承知の上ですけどね？」

「ふふっ、だからとて、ここに居る誰もが引く気など無いのであろう？」

「そうですとも！」

ヤードがいつになく不敵に笑って見せれば、ミスミが艶やかに笑って問いかける。

マルルウですら、小さな体を精一杯使って好戦的な表情を見せている。

そこに集う皆が笑顔だった。

明るい未来を掴み取るのだと意気を上げていた。

誰一人として止まる事など考えていなかった。

故に、彼らは踏み出した。

戦場へと。

「よおし———そんなじゃ、皆！気合入れて行こうぜ！！」

「！！おう！！！！」

## 撤退と終戦

溢れんばかりの木漏れ日を受け、辺りの魔水晶が煌めきを返す中、静かに向き合う俺とアテイ。

俺達の傍には人影は無く、木の葉のさざめく音だけが響いている。アテイはそつと自分の胸に手を当てて、胸の内を語りだした。

それは、自分の不甲斐無さに対する後悔と、強大な敵に対する恐怖、頼れる人が傍に居ない事からくる不安と焦り。

自嘲する様に苦笑いを浮かべるアテイは、今にも泣き出しそうに見える。

女の子が泣いているのを見て入れられなくて、

友達が泣いているのを見て入れられなくて、

アテイが泣いているのを見て入れられなくて、

泣き出しそうなアテイに引き寄せられる様に一歩近寄り、

アテイを護る様に、アテイの心を護る様に、言葉を紡ぎ出した。

アテイは今まで、人の気持ちを大切にしながら進んできたんだろう？

その為に、ずっと頑張ってきたんだろう？

だから、アテイは間違ってたんじゃない。

イスラには負けてしまったかもしれないけど、

アテイの積み上げてきた物は無くなりはしなかったんだって。

俺の言葉に目を見開き、次いで喜びに頬を染めて、

アテイは両手で口元を押さえながら瞳に涙を浮かべた。

ああ、結局泣かしちゃったか。

そう思い、涙を止める為にアテイの頬にそつと触れ、優しく微笑みかける。

「アテイには今のままでいて欲しい。」

皆の笑顔を守る為に頑張る、そのままのアテイで。」

その言葉のおかげか、アテイは笑顔を見せてくれた。

頬はまだ、涙で濡れたままだけど、それはとても——とても綺麗

な笑顔だった。

「ありがとうございます。」

私、自分が忘れていた物が何か、解った気がします！  
頑張りましょう。

もう一度、皆が笑顔になれる様に。」

笑顔のまま俺の胸にそっと寄り添い、アティは身を任せてくれる。  
触れ合うアティの体は柔らかく、そして暖かで、髪からは日向の匂いがした。

訳も解らずただ愛しくて、包む様に優しくアティの背中に腕を回す。

今、この時は、二人だけ。

この静かな世界に、互いだけを感じていた――。



――んだけど、やっぱりそう上手くいく筈もなく、二人を遮る様に声が掛けられる。

「アキラ。あいつら動き始めたで。」

内容は事務的なのに、聞くだけで相手が不機嫌だと解る少女の声で、

独特な関西弁のイントネーション。

振り向いた先には案の定、不機嫌なミュが居て、金の瞳を鋭く光らせて俺を睨んでいた。

「そうか。ありがとうございます。」

……ところで、どうして俺を睨んでるのかな？？」

「……いつまでクツついとするつもりなんや？」

冷たい視線と共に言われた言葉で俺は今の状況を思い出し、慌ててアティと離れる。

アティも人に見られていたのが恥ずかしかったのか、顔を真っ赤に

している。

……ちよつと残念そうに見えたのは、きつと気のせいだろう。

「えつとーあの、これはだな——っ!!」

しどろもどろに言い訳しようとするが、ミュはプイっとな顔を背け、森の方へとさくさく進んでいく。

その小さな背中が見えなくなる前に、俺は急いで後を追いかけた。

「まっ……待ってくれよ、ミュー!」



アキラがミュに連れられて来たのは、集いの泉。

そこには見慣れた顔が集まっており、今まさに勇ましく出陣する所だった。

しかし、二人は影からその様子を見送るだけで、姿を現さない。

そして皆が居なくなってから、やつと影から出てくると、二人は顔を見合わせた。

「行っちゃったな。」

「行きよったな。」

やれやれといった感じで呟くアキラに、ミュは腕を組んでフンと鼻を鳴らして応える。

「偶には痛い目見えさせたらええんや。」

それに、正義の味方ゆうんは、遅れて登場するモンやる?」

「いや、俺は正義の味方じゃないけど……。」

まあ、いいか。危なくなったら助けよう。」

やはりアキラ以外の人間に対しては投げやりなミュ。

それに対して、アキラも気軽に応える。

二人ともがその調子なので、結局二人はカイル達に合流する事なく、  
姿を隠したまま後をつけて行く事になった。



そして舞台は遺跡へと移る。

かつて無色の派閥の召喚士たちが遺した遺跡。

その内部、拓けた場所に陣を敷いている者達が居た。

「最深部へ向けての探索準備、全て完了いたしました。」

「ご苦労でした。追って、支持を待ちなさい。」

「は……。」

淡々と報告を行うヘイゼルに対し、ツエリーもまた感情を込めずに返す。

冷たい仕事だけの関係。

それがここでは普通であり、不変であった。

故に、オルドレイクも二人の遣り取りには反応もせず、遺跡の調査報告書と周囲を見比べていた。

「流石は始祖達の築きあげた施設だけの事はあるな。」

構造が複雑で、中枢を掌握するにも苦労させられるわ。

ぐ——ッ！」

「大丈夫ですか！あなた!？」

やはり、あの召喚獣から受けた傷が塞がるまで待った方がよろしいのでは？」

突然胸を押さえて呻き声をあげるオルドレイクに、ツエリーヌが駆け寄る。

どうやら前回の戦闘で負傷したらしく、

オルドレイクの服の下からは、巻かれた包帯が見え隠れしている。

「……忌々しいッ！あの様な低位の召喚獣如きに手傷を負わされるとはッ!!」

しかし、休んでいる訳にもいくまい。

魔剣を利用する事が不可能となった以上、私が直接手を下すしかない

いのだ。

あの召喚獣共よりも先に、な？」

「それにしても、この様な時にウイゼル殿はどこへ……。」

苛々と吐き捨てる様に怒声を漏らし、それでも尚、研究を続けようとする夫に、

ツエリーヌは不安げに、戦闘面では頼りになる剣客の姿を探す。

しかし、この遺跡に入ってからと同様に、彼の姿は見つからない。

「所詮、奴は客分だ。」

干渉せぬ事を条件に、神剣の匠としての技を振るうだけの存在。」

「で、ですが!？」

「それに、奴は義理堅い。時が来れば、黙っていても駆けつけようて。」

「——っ。」

「先に進むぞ。」

無駄な時間をかけるのは、最小限にしたいものだからな。」

妻である自分にすら向けられた事の無い、オールドレイクからの信頼。

それが客分でしかないウイゼルに寄せられているという事実には、

ツエリーヌは少なからず衝撃を受けた。

今まで夫を支えてきたのは自分であるという自負があり、

普通とは違うかもしれないが、夫婦という絆があると信じていたモノが揺らぐ。

そんな妻に気付かずに、否、気付こうともせずに、オールドレイクは遺跡の奥へと進んでいく。

きりきりと悔しさに歯を噛みしめながら、ツエリーヌが夫の後を追いつつ始めた時、

彼らは二人の前に立ちほだかる様に姿を現した。

「そう言うなって、おっさん。」

もう少しゆっくりしてけや！」

言いつつ両の拳をガツンツと打ち合わせる金髪の男。

ヘイゼルとその部下達が素早くオールドレイクとツエリーヌの前に出て壁となるも、





当然風も吹く筈が無いのだが、召喚の名残なのか、はたまた隙間風がここまでしぶとく残ったのか、オールドレイクの長い髪がゆらりと揺れる。

「これで、終わりか？」

物憂げに、溜息すら吐きそうな様子で、戦いの残滓すら感じさせずオールドレイクが問いかける。

「グムウウ——ッ。」

「ちくしょおつ。」

ファルゼンの、そしてヤツファの悔しげな声だけが応えとして返ってくる。

疲弊し、傷付いた体。

皆、倒れてこそいけないものの、これ以上の戦闘には耐えられそうにない。

「正面から激突すれば、こうなる事は解っていた筈でしょうに。」

「まして、戦術の一つすら用意もしていないなんて……ね。」

ツエリーヌの、そしてヘイゼルの言葉には憐みさえ籠められていた。

確かに彼らは傷付き、敗れ去ろうとしている。

満足に動かす事もできない身体を見ればそれは明らかで、

誰もが彼らの敗北を予期するに違いない。

「そうね……でも——。」

だが、それでもスカーレルは、

「それでも、勝負に出なくちゃいけない時だつて、あるのよ。」

アルデイラは、立ち上がって見せた。

彼女達の瞳には未だ力強い光が宿り、最早勝ち負けさえ超えた所で戦っているのだと語っていた。

その思いに応える様に、仲間達も再び己の武器を握りしめる。

「その通りです。」

「わらわ達に悔いる気持ちは無い。」

まして、このまま終わるつもりなど、な。」

クノンがアルデイラの横に立って告げれば、ミスミは笑顔すら浮か

べて見せる。

「そうですよっ。」

「まだ、終わりなんかじゃありませんよう！」

「おいらだって——っ、まだ戦えるっ！」

マルルウやスバルの様な子供でさえ、涙一つ見せない。

「これしきの痛みなど、あの方達に比べれば如何程の——っ。」

「ええ、そうですとも！」

ならば、大人として情けない姿など見せられないと額から流れる血を拭い、

キユウマが忍刀を構え、ヤードも荒い息を吹き飛ばす様に声を上げた。

彼らの姿は勇ましく、彼らの言葉は頼もしい力さえ感じさせる。

だが、それでも目の前の脅威にとつてそれは、負け犬の遠吠えにも等しい物に過ぎなかった。

「まだ、続けるのですか。無駄な努力を……。」

「勝手にムダって決めつけんなあッ！」

「我々の魂の輝きは、まだ失われてはいません。」

溜息と共に告げられるツエリーヌの降伏勧告にソノラが喰ってかかれれば、

フレイズが降伏など在于り得ないと突っぱねた。

その命すらかけるといふ姿勢に、オールドレイクが眉を顰める。

「解せんな……。」

そこまでして、お前達は何故刃向かおうとする？

馬鹿正直に痛みと向き合わなくとも、形だけでも恭順の意を示せば、

いくらでも命を長らえる事は可能であろうに。」

オールドレイクは心底不思議そうに彼らを見やる。

かつて己の前に立ち塞がり敗れていった者達の様に、己に下った者達の様に、

圧倒的な力の差を見せつけければ、彼らも命乞いをすると考えていた。

敗北を認め、無様な姿を晒すと、考えていた。

しかし彼らは、諦めなかった。

命乞いをしなかった。

無様な姿を見せなかった。

今もまた一人、オールドレイクの前で立ち上がる者が居る。

「簡単な事だぜ……、おっさんよ……。」

それじゃ腹の底から笑えなくなるからさ。

少なくとも……先生は、笑えねえな。」

「ぬ……う？」

口の端を流れる血をグローブで拭いながら、カイルは笑って見せた。

体中が悲鳴を上げていようとも、足に力が入らず震えようとも、

カイルはオールドレイクの前から一步も引かず、向き合った。

「あいつが笑うとな、何かよ、俺らまで釣られちまうのさ。」

逃げ出したくなる様な時でも、過去の重さに潰れて喘いでいてもな、

あいつの笑顔は、それをチャラにしてくれるんだよ。

だから絶対に、壊させる訳にはいかねえよ。

テメエら如きにツ！踏みにじらせる訳にやあ、いかねえんだよおオオオツ!!」

「ぬう——ツ!？」

ギユツと音が鳴る程に握り締めた拳を振りかぶり、カイルはなげなしの力を振り絞って、

オールドレイクへと踏み込んでいく。

既にぼろぼろの相手がまだ攻撃できるとは思わなかったのか、それとも前回の戦闘で負った『火傷』が動きを鈍らせたのか、

回避が遅れ、オールドレイクへとカイルの拳が迫る。

しかし、その拳が届く瞬間。

「むウウンツ!!」

「ガはツ!？」

カイルは突如として現れた老剣士に弾き飛ばされる。

そのままゴロリと足元に転がされるが、オールドレイクは最早カイルには見向きもせず、

現れた老剣士に向かってにやりと笑った。

「遅いぞ、ウイゼル?」

「俺には、俺の都合があるのでな……。」

「まあ、よからう。」

肝心な所に間に合ってくれたのだから、な!

無愛想に返すウイゼルに気を悪くする事も無く、

オールドレイクは尊大な態度を崩さずにカイルへと歩み寄る。

そしてその足を持ち上げ、カイルへと振り落とした。

しかし、カイルがその足に踏みしだかれる事は、あり得ない。

「おおっとー!危ない危ない。」

何故なら彼には、彼らには、頼れる仲間が居るのだから。

「アキラっ!」

ソノラの驚きの声に笑って応える一人の男。

カイルを抱え、オールドレイクの足元から救い出したのは、

銀の髪に一房の黒、蒼と黒の瞳に、腕から頬に伝う黒い炎の文様を

持つ男。

その傍に控えるのは白髪、金瞳の少女の姿をした狐火の巫女。

カイル達が無謀な戦いに挑もうと思つた理由の一つ。

その理由である彼が、アキラが、いつもの様に笑ってソコに立っていた。

「よお、ソノラ。」

なぐにやつてんだ、こんなトコで?

それも、お・れ・を・除け者にして。」

「そ、ソレはその……何て言うか、あの……ねえ?」

場所も、状況も、目の前に居る敵すらも気にせず、アキラはソノラに詰め寄った。

いつも通りに、普段通りに、いたって気軽に。

だから、ソノラも一瞬忘れてしまった。

場所の事も、状況も、敵の事すらも。

そして慌てて言い訳をしようとして、結局意味が解らない事を口走ってしまう。

慌ててアチコチに視線を走らせ、最後には誤魔化し笑いを浮かべて、

できるだけ可愛らしく見せようと首を傾げて見せるソノラに満足したのか、

アキラはにんまりと笑う。

「——なんてな！嘘だよ、ウ・ソ。

ちよつとからかっただけだよ。

見てたよ、ずつと。

お前達は何を想い。誰の為に戦ってくれてたのか。

ちゃんと解ってる。

……ありがとな。」

そう言つて見せる微笑みは、先程とは違う笑顔。

柔らかく、優しい、包み込むような笑顔。

感謝と、喜びで、少し照れくさそうに頬を赤くした顔で、

それでもはつきりと笑つてみせるアキラ。

笑顔の向けられた先には当然ソノラが、そして仲間達が居た。

顔を真っ赤にしてうろたえる者、

満足そうに笑みを浮かべる者、

嬉しそうに笑い返す者、

皆がそれぞれに反応を見せるが、共通していた物が一つ。

それは、自分の想いが伝わった事に対する喜び。

仲間同士が確かな繋がりを感ずる喜びの一幕。

しかし、そんな温かな場の雰囲気は台無しにする者が居た。

「黒の魔剣所持者か……。丁度いい。

はぐれども諸共、永遠の眠りにつくがいい!!」

ニヤリとオールドレイクの浮かべた表情は、傲岸不遜。

自分の召喚術で、魔剣を、魔剣を持った者を、倒せると信じ切つて

いる表情だった。

セリフと共に放たれる召喚術は正しくSランクの大召喚術で、

オールドレイクが自信を持つのも肯ける。

たった二人の人間を殺すには明らかに威力過多なソレが、アキラとカイルに迫る。

「アキラッ!!アニキいいっ!!」

大気を切り裂き、大地を削る。

伝わって来る余波だけでも、その威力の大きさが解る暴力の塊。

しかし、ソノラの叫びさえも掻き消してしまうソレの前に、立ちはだかる影があった。

「させないっ!!」

パキイイインと、澄んだ音をたてて相殺されるオールドレイクの召喚術。

打ち破ったのは白と紅を身に纏った一人の女性。

彼女はその細い腕で、決して大きくないその体で、迫りくる脅威から二人を守り切ってみせた。

そして、ゆっくりと振り向いて見せたのは、朗らかな笑顔。

「ごめんね、みんな。遅くなって。」

「ば、バカ野郎ッ!!」

アキラだけじゃなく、何で先生までこんなトコにしゃしゃり出て来るんだよッ!」

「あ、酷い。そういう言い方は無いんじゃないですか?」

せっかく助けたと言うのに、カイルから返って来たのは怒鳴り声。

その言葉にアティは可愛い顔をぷくつと膨らませる。

如何にも『私怒ってます』という顔をしているアティに、カイルはたじたじになり後ずさる。

しかし、初めから冗談だったのかアティは怒り顔をすっと消すと、

誰が見ても心が温まる様な柔らかな笑顔を浮かべた。

「それに、そんなの間かなくたって解ってますよね?」

「ここが、私の居場所だからですよ……。」

何があっても失いたくない、本当に大切な場所。

だから、守るんです!」

アティの決意を秘めたその笑顔に、仲間達の誰もが再び笑顔を浮か

べた。

それはまさに、先程のカイルの叫びの通りで、周りの仲間達を見渡したアキラは心の底からの喜びを感じていた。自分の守りたい素晴らしい物が、そこには確かに在った。だからこそ、オールドレイクが発した次の言葉にはカチンときた。「く、くくくつ。」

今更一人二人増えた所で、どうなると言うのだ？  
ましてや片方は負け犬でないか。」

「はっ！今さつき自分の召喚術を破られた奴が言えるのかよ？

大体、アティはまだ全力を見せた訳じゃない。

見せてやろう、アティ！」

「はい!!!」

アキラの呼びかけに応えて、アティの身体から光が迸る。

蒼い輝きと共に抜き放たれたのは、魔剣。

その色は以前までの碧ではなく、かと言って紅でも黒でもない澄んだ蒼。  
それは、今まで見たどの魔剣とも違う、アティだけの魔剣。

銘なを——

『果てしなき蒼、ウイスタリアス』。

あれは、先生だけの新しい剣なんです！」

誇らし気に告げるウイルの声に応える様に、更にウイスタリアスを蒼く輝かせながら、

アティはオールドレイクに切っ先を向ける。

「悲しみも、憎しみも、もうこれ以上繰り返さない。

この剣にかけて、断ち切ってみせます!!」

その身から発せられる魔力も凄まじいが、

何よりもその瞳が、表情が、気迫が、オールドレイクを圧倒する。

「オールドレイク。」

私は貴方を絶対に止めて見せます!!」

「くつ、おのれええええええええええ!!!」





「馬鹿な……。」

たかが一人二人の人間が加わっただけで、

死にかけていた連中がどうしてこれ程の反撃をしてのけるというのだ……？

理解できぬ。

——ツぐ、ぐううっ!!」

「あなた、しっかり!」

大地に膝を突き、苦悶の表情を浮かべるオールドレイクに、

ツエリーヌが駆け寄り回復の召喚術をかける。

しかしダメージが大き過ぎるのか、一向にオールドレイクの顔色は良くなならない。

故に、ウイゼルは二人を庇う様に立つと、撤退を推奨した。

「潮時だ、オールドレイク。」

「ウイゼル……。」

「貴様の恐怖は娘の光の前では些かが悪く、貴様の狂気はあ奴の闇の前では兎戯にも等しい。」

ここで退かねば、命が無いぞ。」

敗走。

今まで負けた事が無かった訳では無いが、

それでも無色の派閥の当主になってからは一度も無かった事態。

その屈辱に、憎悪に、オールドレイクの顔が更に歪む。

ツエリーヌも怒りに満ちた表情でウイゼルの睨み付ける。

「——ッ、元はと言えば、貴方が魔剣の修復などしたからではありませんか!」

「だがその見返りに、あの剣の構造はほぼ理解する事が出来た。」

「っ!!」

ウイゼルの飄々とした切り返しに夫妻は目を見張る。



「やっぱ一番はあたしでしょ！バンバン撃ちまくったし！」

「いやいや、一番の活躍となれば、攻めに守りに奮闘したわらわであるう？」

「マルルウも頑張りましたですよ。」

「……私も、救護を。」

わらわらとアキラとアテイの周りに集まってくるソノラ、ミスミ、マルルウ、クノン。

それぞれが自分の戦果を主張する中、更にその周りを囲む様に人が集まってくる。

「何にせよ、まずは帰ってメシだな！」

「お、酒も忘れんなよ？」

カイルが豪快に宣言すれば、それに乗る様にヤツファアが声を上げる。

そんな二人を暑苦しそうに眺めながら、アルディラは服の裾に付いた土埃を払う。

「その前に、私としてはシャワーよね。」

「では、さっぱりしてから久々に宴会といきましょうか。」

「良いですね！」

アルディラの要望にキュウマが賛成すれば、フアリエルも鎧姿から少女に戻りもろ手を挙げる。

騒ぎの中心に居る二人はと言えば、アキラは若干苦笑しながら、

アテイは満面の笑みを浮かべながら仲間達を見ていた。

「やれやれ、皆元気だな？」

「ふふ、良いじゃないですか。私も皆で食べるご飯は好きですし。

そうと決まれば大急ぎで帰っちゃいましょう！」

「「「おおくく!!」」」

アテイの音頭で皆がぞろぞろと移動を開始し始める。

今回の戦いについて振り返る者、

早くも宴会の料理について騒ぐ者、

これからの暮らしについて胸を膨らませる者、

皆が皆、思い思いに語りながら歩く中、テコが岩陰のモノに気付く。

「みや？」

「ん……何や？何か見つけたんか？」

「ッ！コイツは——。」

足を止めて岩陰を覗きこむテコに、ミユも足を止めて近づく。

ソコに居た者に気付き、ミユは目を丸くし、次いで鋭く尖らせた。

剣呑な雰囲気にかイルやスカーレル、ヤツファが近寄って来る。

「こいつ！暗殺者達を指揮してた……。」

『茨の君』ヘイゼル。

組織じゃ、その名で呼ばれてたコよ。」

「ご同輩って事か？」

「まあ、ね。」

どこか暗い表情で頷くスカーレルにかキラが気付いて足を止めれば、

他の仲間達も何事かと集まって来る。

そして傷付き横たわるヘイゼルに、複雑な表情を浮かべる。

敵、ではあるが、怪我をしている者を前にして。

皆が動けずにいる中、アキラとアテイがヘイゼルの傍に足をつく。

「良かった……生きてる。」

「だけど——。」

「足が折れてますね……。」

それに、他にもあちこち傷ついて……。」

ざっと容態を確認し、アキラはほっと息を吐くが、不意に表情が曇る。

隣のアテイも同じく心配そうな表情で、ヘイゼルの怪我の状態を調べる。

一番大きな怪我は足の骨折で、脛の部分がくの字に曲がってしまっている。

他にも大小切り傷、擦り傷があちこちにあり、

この分では見えない所の打撲も相当な数がありそうだ。

今は意識を失っている様だが、例え意識があつたとしても歩けはしないだろう。

「多分、それが原因で置き去りにされたのでしょね。」

「そんな、酷い……。」

「無色ではこれが当然なんですよ、ソノラ。」

ヤードがヘイゼルがここに居る理由を推測すると、ソノラの表情が悲しみに彩られる。

吐き捨てる様にヤードが告げるが、それは何の慰めにもならず重い空気が辺りにたち込める。

その空気を払拭する様にアルデイラがクノンに問いかける。

「息は、まだあるのよね？」

「はい。今ならまだ手当が間に合うと思います。」

はつきりと言い切ったクノンの言葉に後押しされる様に、アキラとアテイが揃って声を出す。

「あの（さ）……！」

二人の様子に周りに居た者達は皆笑いだす。

ああ、やっぱりと。

「言わなくたって解ってますよ？」

「今さらゴタゴタ文句をつける奴はいねえよ。」

「ええ、その通りです。」

ウイルにカイル、そしてキュウマが笑いながら告げれば、二人は頬を赤くして照れ笑いを浮かべる。

仲間達が自分の事を解ってくれるのは嬉しいが、そんなに解り易い性格だと思ふと気恥ずかしい。

しかし、そんな自分達だからこそ皆が集まってくれるのだと思ふと、誇らしくもある。

だから、二人はやはり笑顔で告げる。

「ありがとう、皆。」

## 閑話く。パツフエルく

戦いから一夜明け、騒ぎに騒いだ宴会の余韻も抜けた頃、アキラとアティは連れ立ってリペアセンターへと訪れていた。

「それで、彼女の様子はどうですか？」

「外傷についての処置は全て完了しました。」

後は、体力の回復を待つだけです。

しかし——。」

容態を尋ねるアティにクノンが答える。

治療は上手くいった様だったが、最後に言い淀むクノンに心配顔になる二人。

「何か、あったのか？」

「意識が回復して以来、患者が一言も口を開こうとしないのです。」

治療を拒んだり、抵抗する訳ではないのですが、本当に無反応そのもので……。

まるで……人形そのものなのです。

かつての、私の様に。」

問いかけたアキラに、クノンは暗い顔で告げる。

そんなクノンをアキラが放っておける筈も無く、すつと腕を伸ばすと、

ナースキャップが崩れない様に気をつけながら、ゆつくりと頭を撫でる。

「……だったら、大丈夫だろう？」

こうしてクノンは心を持ってたんだから。

時間はかかるかもしれないけど、きっと彼女だって大丈夫さ。」

「アキラさま……。」

微笑むアキラと、潤んだ瞳でアキラを見上げるクノン。

まるでそこには二人だけしか居ないかの様な空間が出来上がる。

「——ほん。」

しかし、そこにはもう一人居る訳で、二人だけの時間はそう長く続かない。

どこか気まずそうに咳払いするアティに、二人はハッと我に返る。「あ、あのその……そうです！」

怪我の回復は、本人の治りたいという欲求に左右されるものです！

ですからっ！」

「解ってますって。」

その為に、私たちが面会に来たんですもの。

きちんと事情を説明して、彼女の不安を消して見せますよ。」

頬を赤くしたまま早口で告げるクノンに、苦笑するアティ。

それからいつものように人好きのする笑顔になると、胸を張ってヘイゼルの事を請け負う。

「よろしくお願いします。」

誰よりも信じている2人に向けて、クノンは深々と頭を下げた。



コンコンと病室のドアをノックするが、待てど暮らせど返事は無く、

仕方なく二人は返事無しで部屋へと入っていく。

ベットの上には当然ヘイゼルが横たわっていて、黙って天井を見つめていた。

「お邪魔しますね?」

「……………」

二人が入って来ても、アティが声をかけても、ヘイゼルは反応を返さない。

「(本当に、クノンの言った通り。)

傷の具合はどう?

まだ、痛むところとかありませんか?」

「……………」

「何か、欲しい物とかは無いかな？」

果物とか、本とか、頼まれれば持つて来るよ？」

「……………」

アテイの問いかけにも、アキラの問いかけにも、

ヘイゼルは天井を見詰めたまま何も答えようとしない。

「まいりましたね……………」

「(ああ、どうしようか?)」

文字通り無反応なヘイゼルに、アテイとアキラが目を見合わせる。

器用にも声を出さずに相談する二人に、突然声が掛けられる。

「捕虜。」

「え?」

その声は待ちに待ったヘイゼルからの物だったが、その内容は余りにも物騒だった。

「捕虜なんでしょう? 私は。」

淡々と問いかけるヘイゼル。

その瞳は相変わらず茫洋として、二人を見てはいない。

「回りくどい事はキライなの……………」

聞きたい事があるのなら、さつさと済ませたらいいじゃない?

拷問でもクスリでも好きに使えばいいわ。

慣れっこだし……………」

「そんな!? 私達はそんな事は——っ!」

冷たい口調と、非道な内容。

そして、それを当然と受け止めるヘイゼルに、思わずアテイが声を上げる。

しかし、返ってくるのはやはり冷たい答え。

「人質にするつもりなら無駄な考えよ。」

私達は消耗品。

欠ければ別の誰かが補充されるだけ。

死に損ねた駒を惜しむなんて、ありっこないんだから……………」

諦めと言う名の色が塗り込められた言葉を投げかけ、ヘイゼルは目



を閉じる。

言うことは他には無いという様に。

沈黙が訪れた部屋に、ぱん、と聞いただけで痛くなる様な音が響いた。

「アキラさん!？」

「——どういうつもり？」

驚くアティを余所に、叩かれたヘイゼルは冷たい眼差しでアキラを見遣る。

視線の先のアキラは、蒼と黒の瞳の光を強くして、ヘイゼルを見つめ返す。

「消耗品だなんて……駒だなんて言わないでくれ。

君は今、ここで生きているじゃないか。

君は今も、涙も流せずに泣いているじゃないか。」

ベットに横たわるヘイゼルの横に手を付いて、アキラは彼女を見下ろしながら語りかける。

「君は前に泣き方を知らないって言ったけど、そんな筈は無いんだ。

……だって、人は泣きながら生まれてくるんだから。

だから君は、泣き方を知らないんじゃないかと、忘れていただけなんだよ。」

何を言われているのかわからない。

そんな風に呆然としているヘイゼルに、アキラは鋭い眼差しを向ける。

自分の心が揺るがない様に。

「だから思い出させてあげるよ。」

そう言っつて、アキラは再び手を翳し、ヘイゼルの頬を叩いた。

親が子供を叱る様に。

限らない想いを込めて。

何度も、何度も、繰り返して頬を叩く。

しかし、その音は次第に弱くなり、最後にはただ撫でるだけになっていた。

ぽつり、とヘイゼルが声を出す。

「……どうして、貴方が泣いてるのよ。」

「君が、可哀想で——。」

「ど——。」

同情なんていらないわ。

ヘイゼルがそう言おうとした瞬間。

「君が生きていてくれて、嬉しくて。」

「……。」

続けられたアキラの言葉に、ヘイゼルは言いかけた言葉を飲み込んだ。

かけられた言葉が余りにも優しくて。

そんな優しさを、自分に向けてくれる人が居るなんて、思いもしなくて。

驚きに見開かれたヘイゼルの瞳は、すぐに動揺に揺れ、

そしてアキラの蒼と黒の瞳に捕まった。

その色違いの瞳は、どこまでも真剣な色合いで、

本当に自分の事を想ってくれているのだと、そう思えた。

その途端、ヘイゼルの瞳から一滴の涙が零れ落ち、頬を伝い、細い顎の先からぼたりと落ちた。

「ああ、やっと泣いたね。」



涙を流すヘイゼルが落ち着くまで、今まで我慢していた涙を流し尽くして満足するまで、

アキラもアテイも、静かにヘイゼルを見守っていた。

やがてヘイゼルは落ち着いたのか、目元を手で拭うと、真っ赤な目のままでぼつりと呟いた。

「……でも怪我が治った所で、今さら組織に戻る事はできないわ。

裏切り者の烙印を押されて処分されるだけでしょうね。」

「どうして、組織に拘るんです？」

戻ろうとしなければ、他にいくらでも選択肢なんて——。」  
相変わらず悲観的なヘイゼルに、アティが必死な顔で話しかける。  
しかし、それもヘイゼルの言葉に切って捨てられる。

「それしか、他に世界を知らないから。」

余りの言葉に、アティは、そしてアキラも息を呑む。

「物心ついた時には、ナイフを持って人の殺し方を教わってた。  
標的に見立てた人形の急所を上手く突きさせたら、褒めてもらえて。」

その時だけもらえる甘いキャンディーが楽しみだったわ。」  
語られるヘイゼルの過去。

再び虚ろな瞳になり、淡々と話すヘイゼル。

その内容は暗く、重い。

「心より先に、身体から大人になって……、気付いた時には、もう組織の部品になってたわ。」

「ヘイゼル……。」

諦観の籠ったヘイゼルの呟きに、思わずアキラは名前を呼んだ。  
彼女の消えてしまいそうな雰囲気、名前を呼ぶ事で確かな物にしたかった。

しかし、それすらもヘイゼルによつて否定される。

「その名前も、本当のものじゃないわ。」

素性が割れない様に組織が考えた物よ。

私という存在を形作る物は全て、組織から与えられた物ばかり。  
選択肢なんて無いの。

今までも、そして……これからも。」

「そんな事!?!」

「——そんな事無いなんて簡単に否定させない!!」  
ヘイゼルの言葉が悲しくて、アティが否定の言葉を叫ぼうとした。  
しかし、今まで力無く話していたヘイゼルが、初めて見せる激情でその否定を否定する。

「私は『毒蛇』の様に強かにはなれない。」

追手の影に怯えてまで、檻から飛び出す勇氣は無い……。

囚われのままでも、生きる場所があれば、それで良かったのよ。」  
続く言葉からは再び力が失われていたが、それでもやはりそこには  
劇場が込められてた。

何故なら、絞り出すように告げた時、確かにヘイゼルの瞳には涙が  
滲んでいたから。

つい先ほど取り戻した涙を、見せていたから。

だから、アキラはできるだけ優しく声をかけた。

「……君はもう、檻の中に帰る事は出来なくなっただらろう？」

「……。」

答えないヘイゼルに、アテイも微笑みながら声を掛ける。

「だったら、それ以外の生き方を見つければ無いかないですか？」

「そんな方法……。」

二人の優しさに、二人の言葉にヘイゼルは瞳を揺らす。

自分の現状と、突然もたらされた提案に、動揺が隠せない。

アキラが再び問いかける。

「君が檻に留まる事にした理由は何だった？」

「生きる為だろ？」

「っ！」

言葉に詰まるヘイゼルに、アテイも限りない優しさを込めて語りか  
ける。

「私には想像する事しか出来ないうすけど、

それはきつと、辛い日々だった筈です。

でも、そんな世界で貴方は今日まで生きて来られたんだから、

檻の外でだつて強く生きられると思います。

きつと……。」

「無責任な事……言わないで……。」

二人の言葉に動揺が収まらず、反射の様に否定の言葉が口から漏れ  
る。

「そうかも知れない。

だけど、言った以上はしっかりと責任は取って見せる。」

その為に必要な事があれば、俺達も一緒に考えよう。  
だから、諦めてしまう事だけは、しないでくれ。」

「私達からの、お願いです……。」  
「……。」

それすらも優しく包み込む様な二人の言葉に、ヘイゼルは揺れる瞳を閉じた。

どうすればいいのか分からない。

どうしたらいいのかも、分らない。

そんなヘイゼルの瞳を開かせたのは、やはり二人の優しい言葉。

「まずは、簡単な事から始めよう?」

「簡単な——事?」

アキラの声に問い返すヘイゼル。

そのヘイゼルに、アキラは無邪気な笑顔で元気に話しかける。

「そう。友達付き合いの第一歩。

自己紹介だ!」

『自己紹介』。

突然告げられたその言葉は、ヘイゼルにとって馴染みの無い物で、また、この場でそんな事を言われるとは思わず、目を大きく見開いて驚きを表す。

しかし、そんなヘイゼルを置いて、二人は話を続けていく。

「いいですね。じゃ、私から。」

私の名前はアティ。

この島で先生をやらせてもらってます。

よろしくお願いしますね。」

にっこりと笑顔で告げるアティ。

「んじゃ、次は俺だな。」

俺はヤザキ・アキラ。

名も無き世界からの召喚獣で、この島の居候。

よろしくな?」

ほにやつと笑いながら告げるアキラ。

「……わ、たし——私の名前は……。」



しかし、パツフェルは重傷で満足に動く事も出来ない。  
アキラは、何かパツフェルを運ぶ良い方法が無いかと考え込む。  
その様子にパツフェルは深く溜息を吐いた。  
やはり、自分はそういう運命なのか、と。

「私を置いて行つて。」

足手まといになる気は無いの。」

出会う前と同じ、暗く諦観の籠った声で告げるパツフェル。  
しかし、そんな言葉は力強い二人の声にかき消される。

「友達を見捨てたりなんかしない（しません）！」

「あなた達……。」

決して諦めたりしない。

信念を瞳に宿し、アキラとアテイがパツフェルを見つめる。  
その言葉に、その瞳に、パツフェルは言葉を詰まらせた。

先程と同じ様に、涙が溢れそうだった。

しかしそんな雰囲気と状況を打破したのは、元気な関西弁。

「それやつたら大丈夫や！」

強力な助っ人を連れてきたからな！

聞いて驚きやく。

なんとツ！龍ひ——ふぎや!？」

ノリノリで助っ人を紹介しようとしたミユの頭がポカリと叩かれ  
る。

そして眩きと共に苦笑しながら現れたのは。

「懲りない子ねえ。」

「メイメイ（さん）!？」

「は〜い、二人とも。」

元気だった〜？」

叩かれた頭を押さええてうずくまるミユを完全にスルーして、  
にこやかに笑いながらアキラとアテイに手を振るメイメイ。

「話は聞かせて貰ったわ。」

そっちの人の事なら任せてちょうだい。

絶対安全な所にまで届けてあげるから。」

そしてチラリとパツフェルへと視線を向けると、笑顔のままパツフェルの身の安全を請け負う。

しかし、初めて会った相手に警戒したのか、それともまた遠慮が働いたのか、

パツフェルは眉を顰めて拒絶しようとする。

「勝手に決めないで。」

私はあなた達の邪魔になる気は――。」

「邪魔なんかじゃない。」

「――っ。」

パツフェルが最後まで言い切る前に、再びアキラが否定する。先程と同じ真剣な瞳。

その瞳にパツフェルが何も言えなくなり口をつぐむと、

アテイが優しくパツフェルに微笑みかける。

「私達は友達です。」

そして友達なら助けるのが当然です。」

胸を張って自信満々に告げるアテイに、パツフェルの頬が紅く染まる。

どうやら『友達』という言葉に照れているらしい。

その様子を微笑ましく見ていたアキラが、何か思いついたのかポムと手を打ち合わせる。

そして、にんまりと笑うとパツフェルに話しかけた。

「それに考えようによっては、これは好都合かもしれないぞ？」

こんな異変があつたら、パツフェルが生き残ってるなんて無色の奴らも考えないだろうし、

追手無しで新しい人生を始められるんじゃないか？」

「いいですね、それ。」

パツフェルさん、是非やり直してください。

最初からは大変かもしれないですけど、少なくとももう、あなたを縛りつける物は、ここから先はありません。

だから、幸せになってください。」

「……あなた達。」



アキラとアティに勧められて、パツフェルは戸惑いで視線を彷徨わせる。

本当に、そんな事が可能なのか？

本当に、そんなに幸せになっていいのだろうか？

自分は今までたくさんの人命を奪ってきた。

確かにやりたくてやった訳では無いが、それでもそれは消しようの無い事実だ。

だからこそ、悩む。迷う。

しかし、目の前に居る初めての友達は、心から自分の事を案じてくれている。

なら——それなら、その救いの手を取ってもいいのではないか。

そしてパツフェルは、小さく二人に向かって頷いた。

「よっしゃ！話は決まったな！

それやったら、りゅ——やない、メイメイ様お願いします！」

パツフェルが頷いた瞬間、今まで蹲って成り行きを窺っていたミユが飛び上がり、

小さな体を全部使ってペこりとお辞儀する。

その姿にふふっと笑い、メイメイが大きな胸を叩いて引き受ける。

「任せてちょうだいな！」

平和になつたら、また皆で楽しいお酒を飲みましょうね？」

そう言つてアキラとアティに笑いかけるメイメイに、二人も笑つて返す。

「あ、いいですね！楽しみにしてます。」

「その時は秘蔵の酒を持って来いよ、メイメイ？」

「ほな行くでー!!」

それぞれに言葉を残して部屋を後にしようとする三人に声が掛かる。

「——ちよつと待つて！」

ベットから起き上がり声を上げるパツフェル。

折れた足が痛むのか、その顔は苦痛に歪んでいる。

「ダメよ!?まだ無理をしちゃ！」

メイメイが駆け寄り身体を支えるが、パツフェルは押し退ける様にして言葉を続ける。

「私は、あなた達にお礼一つさえ、まだ言っていないのに——っ！」  
掛けられる必死の声に、アキラとアテイは入り口で立ち止まり、パツフェルへと振り返る。

振り返った二人の顔は、やはり笑顔。

その笑顔のまま、アキラは告げる。

「お礼？」

お礼なんて要らないさ。

だって俺達は——」

「友達だからな（ですから）。」

そう言つて輝くばかりの笑顔を残して二人が出て行ったのが、パツフェルがこの島で最後に見た二人の姿だった。

## 戦うのは――

船室の窓からは、いつもの潮騒に混じり多くの人の気配が聞こえてくる。

不安からくる嘔きや、落ち着きなく動き回る物音、子供の泣き声。怪我をしている者も少なくなく、着のみ着のまままで逃げてきた者たちばかりだ。

誰も彼もが疲れきった顔をしており、皆が不安に押しつぶされそうな表情をしていた。

そんな避難してきた島の住人達で、今や海賊船の周りは溢れかえっていた。

亡霊を退け一定の防衛ラインを築いた事で、今の所海賊船の周りは安全を保っていた。

しかし、いつまでもその安全が保たれる訳も無く、アキラ達は船室で会議を行っていた。

この亡霊達はどうして現れたのか？

どうすれば止める事ができるのか？

答えは簡単に得られた。

以前にも似たような事があったから。

そう、遺跡の封印が解けかけているのだ。

では、誰がそんな事を？

これも簡単だ。

今現在、島に居る者の中でそんな事をするのは一人しか居ない。

オールドレイク・セルボルト。

無色の派閥の当主。

アキラとアテイに敗れた傲慢なる者。

ならば、後はどう対処するか。

話し合いは続く。



「集落の皆は無事にここまで避難できたそうです。」

ウイルの報告を受け、船室に集まっていた皆がほっと息を吐いた。

「おう、ご苦労さん。」

で、だ。……これからどうする?」

カイルがウイルに労いの言葉をかけ、ぐるりと周りに居る仲間を見渡す。

その顔はいつになく真剣で、事態が余り良くないのがアリアリと見てとれる。

問いかけられた仲間達も一様に表情が暗い。

いつも軽い調子のスカールレルも、表情を固くして意見を述べる。

「相手があの数じゃ、立て籠もるのは分が悪すぎるわね。」

「それに再封印のお陰でこの程度で済んでいるけど、封印していなかったら今頃、

島に居る全員が意識を乗っ取られていたわね。」

続けてアルデイラが更に悪い情報を告げる。

「ええ。核識は島に存在するものを、共界線クリップスを経由して自由に操れます。」

そして、それは島の外から来た人も同じです。」

「完全に封印が解けちゃえば、今度は自然そのものが襲いかかってくるぜ。」

「島そのものが変幻自在の武器であり、鉄壁の要塞です。」

続けてファリエル、ヤッフア、キュウマが情報を開示する。

内容はどれも最悪。

敵の強大だけが浮き彫りになっていく。

自分達が立ち向かおうとしている相手の力を知り、場が更に暗くなる。

皆が沈黙する中、ぽつりとアキラが告げる。

「……核識の精神は倒れた者の痛み、悲しみ、怒り、恨み、そして声なき者達の叫びを知覚していた事で崩壊してしまっている。

アレはもう怨念の集合体みたいなモノだ。」

声に込められていたのは同情、悲哀、憐憫、そして「敵」に向けられる冷たさだ。

「ふん。『狂った島の意志』ちゅーとか。

——で、どうやったらヤツつけれんねん？」

アキラの交戦意志を感じ取り、ミュがギリリと金の瞳を光らせる。普段は主であるアキラがここにこしている為それに合わせているが、

ミュはもともとミュは好戦的な性質だ。

アキラがその気になっているのなら、思う存分暴れる事ができる。にやり、と楽しげに問いかけるミュに、アルディラが答える。

「遺跡の中核。核識の間に入り込んで、直接魔剣による封印を行うしかないわね。」

唯一の作戦はとてもシンプルだ。

ダンジョンに乗り込んで、ラスボスを直接封印する。

よくあるRPGのノリそのもの。

「しかし、それはかつて無色の派閥が用いた戦法です。

当然アキラも警戒しているでしょう。」

そう、キュウマの言う通りだ。

唯一の作戦故に対策も立てられやすい。

余程の馬鹿でなければ、何かしら用意しているだろう。

「だが、それに賭けるつきやねえ———だろ？」

にやり、とヤツファ笑う。

分の悪い賭けだが、他に方法が無いのならば是非も無い。

アテイも静かに頷き賛同を示す。

そして真っ直ぐな瞳で仲間達を見渡した。

「……私は守りたい。

皆と出会ってから楽しい日々を過ごしてきた、この場所を。」



印組は少数精鋭。

封印の要であるアテイ、突破口を開く為のアキラ、ミユ、そしてそれを補助する為にアルデイラ、ファルゼン、ヤツファ、キュウマの八人。

八人は今、退路の確保も度外視して遺跡の中枢へと突貫している。そして残った防衛ライン組は、アテイ達が成功する事を祈りながら、

島の住人達を守る為に船を起点にして扇状に展開していた。

「オオオオオ……。」

「オオオオオ——ッ！」

「ウオオオオオ……。」

「ウオオオオオオオツ!!」

「召鬼・風刃ツ!!」

防衛ラインの一角、ワラワラと押し寄せる亡霊を相手にミスミが術を放つ。

「ギィアアアアツ!？」

まとめて吹き飛ばされる亡霊達。

しかし、その全てを吹き飛ばせる訳も無く、とめどなく亡霊達は打ち寄せる。

「ああ、もうッ！」

「ただ湧いて出てくるんだよ!？」

身の丈に似合わぬ大斧を振り回し、亡霊達を斬り捨てながらスバルが吐き捨てる。

斬られた亡霊は溶ける様に地面へと消えていく。

しかし、やはり押し寄せる亡霊の数は変わらない。

「そう言うなスバル。」

アキラ達が封印するまでの辛抱じゃ。

それまでは何としてもここは食い止めるぞ!!」

ミスミが槍を振り回しながらスバルの横へと並ぶ。

言い放った一瞬。

ミスミは我が子へと視線を向けた。

向けてしまった。

その隙を付いて、ミスミの死角から一体の亡霊が襲いかかる。

「っ!!? くっ、しまった!!」

「母上!?!」

気付くのが遅れミスミは防御が間に合わない。

スバルもミスミの身体が壁となり、亡霊に斧が振るえない。

そして、亡霊の持つ鏑でボロボロの剣がミスミへと迫る。

「放て!!」

「!!「応ッ!!!」!!」

「ギィアアアアアッ!?!」

合図と共に放たれた無数の矢が、次々と亡霊に突き刺さる。

「——何と。」

「いったい誰が……?」

助けられたミスミが驚きに目を見開き、傍らのスバルが矢が飛んできた方を確認する。

そこに居たのは弓を手にした鬼達だった。

いや、鬼達だけでは無い。

妖怪変化と言われる者達が列を成し、武器を構えていた。

彼らの顔に見覚えがあった。

いや、同じ郷に住む家族同然の者達ばかりだった。

彼らは海賊船の周りに避難していた筈だ。

しかし、何故と問う二人の声は湧き上がる鬨の声に掻き消される。

「風雷衆、前へ!!」

姫様達を御守りするんだ!!」

「!!「おお————!!!」!!」

掛け声と共に彼らは前進を始めた。

亡霊達に向かい、ミスミとスバルを守る様に。

そして掛け声は彼らの物だけでは終わらなかった。

少し離れた場所からも同じ叫びが聞こえてくる。

「ユクレス隊、遅れるな!!」

我等の力を見せるのだ!!」



「狭間に棲む者よ！」

我が君の命だ！妄執共を黙らせろ!!」

「久々ノ指令ダ。」

各自、機能ヲ果タセ。」

それは自信を感じさせる声だった。

それは高揚を感じさせる声だった。

それは誇りを感じさせる声だった。

それは皆、避難していた者達の闘争を告げる声だった。

そしてそれは、あつてはならない事だった。

彼らを守る為に、ミスミ達は戦っていたのだから。

「そ、そなた達……何をしておるのじゃ!？」

早よう非難を——。」

「我らは皆、アキラ様に喝を入れられたのです。」

逃げろ、と告げるミスミの声を遮り、一人の鬼が告げる。

出てきた名前に責める事も忘れ、ミスミは聞き返す。

「……アキラじゃと?」

「はい。」

あの方は危地へ赴く前に、脅え隠れているだけだった我々の所に来られたのです。

そして色違いの瞳を燃やしながら言われたのです。」

『何をしている?』

お前達は何をしているんだ?

こんな所に隠れ、震えて、どうなると言うんだ?

何も変わらない!!

何も変わりはない!!

お前達の護人は戦っているぞ!

お前達の仲間は戦っているぞ!

あの時の様に!あの大战の時の様に!!

お前達はどうするんだ!?

鍛えてきた技は何の為だ!?

その爪と牙は何の為にある!?  
その靈力ちからは何の為にある!?

何の為に生み出されたんだ!?

仲間を、家族を守る為では無かったのか!?!?  
大切な場所を、守る為では無かったのか!?!?  
ならばどうする!!

ここで蹲っていればいいのか!?

否!!断じて否だ!!!

今は戦いの時だ!

傷つくのも、傷つけるのも、嫌だろう。

だが、今は戦いの時だ!

愛しい者達を残すのは、愛しい者に残されるのは、不安だろう。

だが、今は戦いの時だ!

ならば!ならば、どうする!?!』

「あの方の言葉に、魂が震えました。

……今は、今は戦いの時です!」

「『そうだ!守る為に、戦う時だ!』」

事情を説明していた鬼が声を高らかに叫べば、周りから呼応する声  
がいくつも上がる。

「そうだ!!故郷の為に!!!」

「『今は、戦いの時だ!』」

その声は波及する。

鬼達だけに留まらず亜人達へ。

「仲間の為に!!!」

「『今は、戦いの時だ!』」

精霊達へ。

「愛しい者達の為に!」

「『今は、戦いの時だ!』」

そして機械達にまで。

「今こそ命令ヲ果タス時!!」



## ラストバトル

カチャリ、と次第に重く感じる様になってきた杖を構え直す。遺跡に突入してからここまで、どれだけの敵を倒したかしら？

アキラ達を先へと送り出してから、どれだけの敵をかき消したかしら？

倒しても倒しても沸いて出てくる亡霊達。

キリが無いのは当然。

倒した傍からまた召喚されているのだから。

けれど『向こう』にも余裕が無くなってきたのか、

亡霊達の姿形はかなりぼやけた物になってきている。

これは、輪郭の形成にまで力を割けなくなっている証拠。

そこから導き出される答えは、アキラ達が目的の場所まで辿り着いたという事。

遺跡そのものと戦っているという事に他ならない。

「——大丈夫かしら？」

思わず口をついて出たセリフに、我が事ながら赤面してしまう。

今まさに苦戦しているのは自分達だというのに、自分達より強い者の心配など余計な御世話だ。

周りの奴らに聞かれていなければいいけど——。

「大丈夫に決まっているじゃないですか。」

「あいつ等の力は、お前さんもよく識ってるだろう？」

「……三人ヲ、信ジロ。」

——しっかりと聞かれていたみたいね。

それも三人全員に。

「分かってるわよ。」

でも心配くらいしても良いじゃない。」

「はは、まさかお前さんの口からそんな台詞が出てくるとわな。」

「ヤッファア!!」

「そう怒るなよ。褒めてるんだぜ?」

「どこが褒めてるのよ!?!」

言いながら手にしていた杖を不埒者目掛けてブンブンと振り回す。  
……まあ、ケダモノに当たる訳は無いんだけど。

けど一発くらいは!

そう思っただけ振り回していた杖が、ぽんつと軽く止められてしまう。  
止められた途端、ピクリとも動かなせなくなるなんて、相変わらず  
並はずれた技量ね。

「キュウマ。貴方、ヤツファの味方をするつもり?」

「まあまあ、落ち着いて下さい。アルディラ殿。

ヤツファ殿とて悪気があってやっているのではないでしょうし。」

どうかしら?」

「……仲間ノ心配ヲスルノハ良イ事ダ。」

「そして人間を仲間だと思えるようになった事もね。」

……ファルゼン、キュウマ。

そうね。確かに変わったわね、私達。

ヤツファも、それを言いたかったのかしら?

ちらり、と視線を動かしてみる。

「——おほん!」

そ、それよりだな、俺達するのは心配じゃないだろう?」

ふふ、照れるなんて珍しい。

その顔に免じて、今回の事は帳消しにしてあげるわ。

「あら、じゃあ私達は何をすれば良いの?」

「決まってる。」

ニヤリと笑って爪を構えたヤツファが向く先に、再び亡霊達が現れる。

「あの者達を倒し、アキラ殿達の退路を——。」

「確保スル。」

キュウマが刀を構え、ファルゼンがその巨体で皆の前に立つ。

まったく……みんないつからこんな熱血になったのかしら?

でも、まあ、偶には良いかしらね。



キョトンと可愛らしい表情を浮かべるアテイに、つい笑い声が漏れる。

「くく、『分かった』って言ったんだけど、聞こえなかったのかな？」

「い、いえー聞こえてました！」

でも、てつきり反対されると……。」

しどろもどろに慌てるアテイを見て、もう一度だけクスリと笑いアテイの手を握る。

「ハインルを助けに行きたいんだらう？」

「っ!?ど、どうして……?」

「俺だって一応魔剣持ちだし。」

その辺の裏事情にはアテイより詳しいかもよ?」

「……アキラさんには敵いませんね。」

苦笑の様な、でもどこか嬉しそうな表情でアテイが溜息を吐く。

そして次の瞬間にはもう、アテイは『戦う者』の表情で告げた。

「行つてきます!」

「ああ、行つてこい!」

背中を軽く押してアテイを送り出す。

アテイは脇目も振らず、振り返る事も無く、ただ真っ直ぐに前だけを見つめて駆けて行く。

当然向かつてくるアテイに対して攻撃が飛んでくるが、ミュと共に召喚術や居合いでかき消す。

それでもアテイに届きそうな物は、アテイがウイスタリアスを喚んで突破して行く。

その眩しい背中を見つめながら、俺は俺の中の闇に声をかける。

「よお、ヴィサイアス。」

魔剣が在るのに『壊せ』って言わないのか?」

——ふん。

アレがシャルトスならば、そうしよう。

アレがキルスレスならば、そうしよう。

アレが封印の魔剣ならば、そうしよう。

恨み、辛み、憎み、復元も適わぬ程に粉々にし、完膚なきまでに

破壊し、消し去ってやろう。

だが、アレはシャルトスではない。

キルストレスではない。

封印の魔剣ではない。

ならば、どうでもいい。

あれほど魔剣を、遺跡を、ヒトを憎み、世界を恨み、全てを壊そう  
とされているくせに、

アテイの持つ魔剣を前にして、どうでもいい、と言いつ切る。

伝わってくる感覚は、無関心そのものだ。

あの灼熱の様な憎悪と、この絶対零度の無関心こそがコイツの狂  
気、なのか。

いや、今はそんな事は『どうでもいい』。

そう、今大事なのは目の前の木偶の坊をどうするか、だ。

過去の妄執。

俺の仲間を傷つける元凶。

未だに喚き散らしている目障りなコイツ――。

くく、くくく……。

いいね。

俄然楽しくなってきた。

今なら『お前』と気が合いそうだ。

だから――

「――来い、ヴィサイアス。

お前の望みを叶えよう。

俺の望みを叶えよう。

アイツを『――壊す。』」



## 終わりは穏かに

再び、目の前の手も足も無い木偶人形を見る。

顔の様な物はあるが、そこに生物的な物は感じられない。

ただデカイだけの、こちらを見下ろしている様な人形。

相変わらず不愉快だ、との感想しか出てこない。

——ならば、早々に斬り捨ててしまおう。

まるで、ずっと昔から使っていたかのように手に馴染む漆黒の魔剣に、魔力を注ぎ込む。

本来無色である筈の魔力を、自分を通し、剣に流す事で、黒く暗く闇色に染める。

ヴイサイアス

俺 の色に染まった魔力が、ゆらりと剣から立ち昇るのを確認し、

大上段に構えたヴイサイアスを振り下ろす。

放たれるのは漆黒の魔力刃。

以前、召喚の門を切り裂いた物と同じ物。

しかし、弧を描いて飛んだ魔力刃は木偶の前で何かにぶつかったのか、

甲高い音を残して消えてしまった。

『ふ、ふははははは!!!!』

その様な攻撃が届くものか!!

いいや、それ以前に造物が造物主に敵うなどと考える事が不遜!!

愚かしいにも程があるわ!』

……バリアでも張っているのか。へ——ウルサイ

なら、全範囲攻撃だ。

前後左右上下、全てを薙ぎ払ってやる。

「ミュー…合わせろ!!」

「了解や!」

ミユと二人で並び立ち、一つのサモナイト石に共に魔力を込める。

喚び出すのは天空を自在に駆ける、雄々しい鬼龍。

赤い石が魔力を吸い、更に紅く朱く染まりゆく。

赤い光が乱舞し、輝きが最高潮に達した時、俺とミュの声が重なる。

「御喚び立て申し奉る！」

天駆ける角持つもの！ 雷を統べるもの！

鬼妖怪に居わす猛き神よ！！

今、我らが呼び声に応えて来たれ！

召喚ツ！ 鬼龍ミカツチ！！」

吹き荒れる雷の乱舞。

凄まじい光の明滅と、身体を震わせる轟音。

この場の全てを焼き尽くす全方位攻撃。

……これでどうだ？

『——無駄だ！！』

無駄だ無駄だ無駄だツ！！

貴様らの様な虫けらがどう足掻いたところで、

エルゴと等しき我を傷つける事など出来はしない！！』

効果なし、か。↑——ウルサイ↓

豪雷により本来不可視のバリアが、瞬間球状の姿を見せた。

やはりバリアは全方位型らしいな。

となると、どうやって突き崩すか……。

……。

……。

……。

ん？あれは……。

無言のまま左右に視線を走らせると、部屋の隅にある柱が目に入った。

どこか生物的なその柱は、先程の雷で損傷したらしく煙を上げている。

しかし俺が見ている内に、瞬く間に再生を果たした。

……再生、という事は、アレも木偶人形の一部かそれに類するモノ。そして「再生能力を持たせなければならぬ」重要物。

部屋の反対側に目を遣れば、そこにも同じ様な柱が一つ。  
こちらは先程の雷にも全くの影響無し。

あれ程の召喚術にも影響を受けない性能という事は、逆に物理的な  
防御力は皆無に等しい筈。

対になつているといふ事は……それぞれが物理と魔力に特化して  
いる可能性が高いな。

その情報に加えて、木偶人形のアリエナイ様な鉄壁のバリア。

あの柱の一つずつがそれぞれの属性に特化していて、

それぞれにバリアを張つているとしたら……？

「やってみる価値はある、か。」

ミユ！あの隅にある柱を壊せ!!

俺はあつちをやる！」

「了解や!!」

術属性に弱い方をミユに行かせ、物理属性に弱い方には自分が走  
る。

『——ッ!?!』

小賢しい虫共め!!』

俺とミユの前に次々と現れる四色の球。

どうやらそれぞれに属性を持つているらしく、様々な攻撃を繰り出  
して来る。

俺達を柱に近づけたくないようだな。

——だが、所詮は使い捨ての雑魚。

次々と絶え間なく沸いて出てくるが、どれも相手に成りはしない。

俺の斬撃で、ミユの術で、どれもこれも形を崩して消えていく。

そして俺とミユの前には目的の柱が。

「やるぞ、ミユー！」

「応ッ!!」

1

2の

3ッッッ!!!

息を合わせた二人の剣戟と術が、柱を打ち壊す。



アテイがアキラの下に戻った時、広大な部屋の中にはぼんやりと立ちつくすアキラと、

主を心配そうに見上げるミユの姿しか無かった。

あの部屋を覆い尽くさんばかりの巨体は無く、床には瓦礫の山が築かれていた。

瓦礫が何だったのか想像するのは容易く、

だからこそ、この様な光景を作り出したアキラの力への畏怖が今更ながらに沸いてくる。

しかしアテイがアキラを恐れる事は無い。

どんなに強大な力があるとも、アキラがアキラであると解っているのだから。

一度、恐れで固まった体を震わせて、アテイは足を進めた。

流石に瓦礫を踏み越えていく様な真似は出来なかったので、

瓦礫を迂回して二人の側へと近付いて行く。

そして未だにぼんやりしたままのアキラへと声をかけた。

「アキラさん？」

「……アテイ、か。」

ハイネルは救えたのか？」

一拍の間を空けての返答。

変わらずアキラはぼんやりしたまま、その視線は宙を彷徨っている。

成る程、これはミユが心配する訳だと納得し、

アテイはアキラの意識をはっきりさせる為にも、幾分か強めに声を返す。

「はい。アキラさんのおかげです。」

「そうか。」

「——ならば、思い残す事もあるまい。」

「ここで壊れろ。」

「なッ!？」

ぴたり、と視線が合わさったと思った瞬間、振りかざされたヴィサイアス。

突然の行動に、そして重なる様に聞こえる声に、驚き戸惑うアティとミュ。

対するアキラは、まるで表情を変える事も無く、

機械的に、そして無慈悲に、ただ淡々とその黒刃を振り下ろす。

しかし、その狂刃はアティの眼前で甲高い音を立てて制止した。

黒き狂刃を受け止めたのは、不滅なる紅き魔剣。

「い、イスラ!？」

不意に現れた予想外の人物に、またも驚愕に見舞われるアティとミュ。

しかし渦中の人物はまるで気にする事も無く、

抜剣状態を示す銀の髪と紅い瞳で二人に向けてにつこりとほほ笑んだ。

「やあ、おはよう。

随分寝ちやつたみたいだけど、良い所には間に合ったかな？」

「は?…え?…何でここに——って言うか、どうしてアキラさんが!？」

混乱で何を言いたいのかわからなくなっているアティが叫ぶのきっかけに、

アキラは後ろへと下がり、距離を取った。

新手に対する様子見なのか、だらりとヴィサイアスを下ろしたまま動かない。

その隙に、ミュが身を乗り出してアキラに警戒したままイスラと対峙する。

「そんなんはどうでもええ。

ソレよりもアキラや。

きっと今回は召喚したモンと同調しすぎたんや……。

そやからアキラを起こさんと。

……今は、猫の手でも借りたいトコや。力あ貸せや、人間。」

「勿論さ。その為に、僕はここに来たんだ。」

大きな金の瞳を鋭くして言い放ったミュに、柔らかく応じるイスラ。

その確かな以前との違いに、ミュはふん？と首を傾げるが、すぐにもどうでもいいと振り切る。

次いでアテイを睨み付ける。

「アンタもやるんや、ええな？」

「う？……え？やるって何をですか？？」

「アキラを助けるんや!!」

「——っ！解りました!!」

ミュの一喝に、アテイの表情が変わる。

慌てふためく女の子から戦う者へ。

そして、その手には果てしなく蒼い魔剣が握られた。

臨戦態勢を取る三人に触発される様に、アキラもまた構えを取る。

構えは再びの大上段。

ただの打ち下ろししかできない愚直な構え。

しかし、構える当の本人には何の表情も覗えない。

不利な状況に追い込まれた時に浮かべる自棄も、

取るに足りない相手に向き合う時の絶対的な自信も。

ただ機械的に相手を破壊しようとして動いていた。

大地が陥没する程の苛烈な踏み込み。

瞬きすら置き去りにして三人の目の前に現れ、星も割れよとその刃を振り下ろした。

その黒刃を轟音と共に迎え撃つたのは、二振りの魔剣。

左右から挟み込む様に蒼と紅が黒を抑え込む。

噛み合う刃から、凄まじい魔力流が生まれ、吹き荒れる。

その嵐に抗いながら、イスラは刃越しにアキラを見る。

「——やれやれ、僕にさっさと起きろと言ったのは誰だったっけ？

キミは友達は見捨てないんだろ？」

嫌だって言っても、助けてくれるんだろ？」

色んな所に連れて行ってってくれるんだろ？」

だったら、キミが起きなくてどうするのさ!？」





そして、目の前に浮いている黒い魔剣。

——…何故、奴らは向かってくるのだ？

こんな事をして無駄だといのに。

お前が人である限り、私は、狂気は消えはしない。

ヴィサイアスの言葉に、アキラは目を瞑ったまま笑みを浮かべた。

——解ってるさ。

だけど、ハインエルが言っただら？

『誰の心にもある、他人には見せられない闇。

生きている以上、それは仕方ない…。』

人は理性でそれを押し止め、何とかやっつけていこうとする。』

ゆっくりと目を開き、目も前の剣を見据える。

——俺は、お前を抑えて生きていく。

皆もそれができると信じてくれている。

だから向かって来てくれるんだ。

何よりお前は俺の中の闇。

そして、俺自身だ。

だから、狂気を拒絶する事も、同調する事も無い。

心の闇お前は、俺の中に在れ。

右手を伸ばし、剣を取る。

そして剣を引き寄せると、そつと胸に抱いた。

ソコにあるのが当然の様に。

——…いいだろう。

今は退いてやろう。

だが、最後に勝つのは私だ。

人の一生など短いモノだ。

人の“心”の一生など短いモノだ。

お前の心がその生を終えた時、その時こそ、この体は私の物だ。

——ああ。その時は好きにすれば良い。

だから、それまではよろしくな？

淡く輝き、胸の中に沈む様に姿を消すヴィサイアスに、

目を瞑り、胸に手を当て、アキラはいつもの様に笑って見せた。

.....

返答こそしないものの、反論もしないヴィサイアスに、くすりとアキラが笑う。

すつ、と胸を一撫でし、闇の底からアキラが上を見上げる。すると、そこに、小さな光が、生まれた。導きの光が――。

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△

↳ a few years later ↳

ざざざあと打ち寄せる波の音。

さんとさんと照りつける陽の光。

遠くまで続く白い砂浜を、一人の少女が駆けていく。

今日は大好きな父の帰ってくる日だった。

優しくて綺麗な、大！大っ！大っっ！！好きな父。

勿論、母の事も好きだが、父は偶にしか帰ってこないの、

甘えられる時にたくさん甘えておかなければいけないのだ。

だから少しでも早く父を出迎える為に、彼女は全力で走っていた。

この日の為に母に仕立てて貰った白いワンピースを翻し、彼女は走り続ける。

やがてその視線の先に船の帆が見えてきた。

もう少し、あとちよつと。あそこまで行けば、父に会える。

少女が幼い顔を輝かせ、更にスピードを上げようとしたその時。

前方の岩陰から人影が現れた。

銀色の髪に一筋の黒。

蒼と黒の色違いの瞳で優しく笑う一人の男性。

「あれ？.....、迎えに来てくれたのか？」

「うんっ！お帰りなさい、パ。パッ!!」

そう言って飛びついた少女の髪の色は――。